東洋文庫 63

十王子物語

ダンディン 著
田中於菟弥
指田清剛 訳

平凡社

装幀　原　弘

目次

前編

後編

凡例

〔　〕内は補訳、（　）内は訳注

前　編

第一章　王子の誕生

ガネーシャ天（注一）に帰命す

世界を覆う傘蓋の柄（ダンダ）（となり）、

あるいは梵天（ブラフマー）（注二）の鎮座まします池の蓮の茎（ダンダ）、

さては大地という船の帆柱（ダンダ）（に翻える）

天界の恒河（ガンガー）の流れを布と見たる旗の竿（ダンダ）、

あるいは空を往く日輪の車の軸（ダンダ）（となりて）、

三界に勝利の柱（ダンダ）（をうち立てし）

三歩もて三界を踏み歩る尊き（ヴィシュヌ（注三）の）

脚（ダンダ）が

॥ अथ दशकुमारचरिते पूर्वपीठिका ॥

श्रीगणेशाय नमः ॥

ब्रह्माण्डच्छत्रदण्डः शतधृतिभवनाम्भोरुहो नालदण्डः
क्षोणीनौकूपदण्डः क्षरदमरसरित्पट्टिकाकेतुदण्डः ।
ज्योतिश्चक्राक्षदण्डस्त्रिभुवनविजयस्तम्भदण्डोऽङ्घ्रिदण्डः
5 श्रेयस्त्रैविक्रमस्ते वितरतु विबुधद्वेषिणां कालदण्डः ॥

अस्ति समस्तनगरीनिकषायमाणा शश्वदगण्यपण्यविस्तारितमणिगणादिवस्तुजातव्याख्यातरत्नाकरमाहात्म्या मगधदेशशेखरीभूता पुष्पपुरी नाम नगरी । तत्र वीरभटपटलोत्तरङ्गतुरङ्गकुञ्जरमकरभीषणसकलरिपुगणकटकजलनिधिमथनमन्दरायमाणसमुद्दण्डभुजदण्डः 10 पुरन्दरपुराङ्गणवनविहरणपरायणगीर्वाणतरुणगणिकागणजेगीयमानयातिमानया शरदिन्दुकुन्दघनसारनीहारहारमृणालमरालसुरगजनीरक्षीरगिरिशाट्टहासकैलासकाशनीकाशमूर्त्या रचितदिगन्तरालपूर्त्या कीर्त्याभितः सुरभितः स्वर्लोकशिखरोरुरुचिररत्नरत्नाकरवेलामेखलावलयितधरणीरमणीसौभाग्यभोगभाग्यवाननवरतयागदक्षिणारक्षितशिष्ट- 15 विशिष्टविद्यासंभारभासुरभूसुरनिकरो विरचितारातिसंतापेन प्रतापेन सततुलितवियन्मध्यहंसो राजहंसो नाम घनदर्पकन्दर्पसौन्दर्यसोदर्य-

1. श्रीमं वंदे N.— 7. जात॰ om. N.— 9. समुद्दण्डदोर्दण्डमण्डनः । M.— 12. परिचितदिग॰ N.— 13. मेखलायित॰ N.

1 [D. K.]

神々に仇なすものには死の警杖（ダンダ）（注四）を

汝には吉祥を与え給え

プシュパプリー（注五）の都はマガダ国随一の町で、すべての都の師表であり、大量の宝石などをはじめとし、数えきれないほど豊富な商品が満ち溢れていて、と

ほうもない大海のような大きさで知られていた。

その都にはラージャハンサと名乗る容姿端正な王がいた。〔棍棒のように〕のばした王の腕はマンダラ山[注六]のごとく、その腕で、象や馬の群がる敵の大軍も、〔例えていえば〕鮫や海豚などの怪物が棲む恐ろしい大海のように、どんな敵の怒濤でも一挙に攪乱[注七]してしまった。その名声の高いことは、秋の月か白茉莉花、樟脳、野の白露、真珠の簪、蓮の繊維、白鳥の羽毛、白象、乳汁、シヴァ神の笑うときの皓歯、雪をいただくカイラーサ山、さてはカーシャ草のように純白[注八]に輝いて、インドラ天[注九]の林苑を散歩する若い遊女（天女アプサラス）たちも歌い賛えるほどに、あまねくその名が広がっていた。

王は〔あたかも〕天界の頂き[注一〇]のように大きく、輝く宝石に満ちた大海の、波うち寄せる岸を繞らせた大地を、妻として娯しむかのように幸福であった。〔そして〕王は学徳きわだち、知識すぐれたバラモンたちには、供養や施物を絶やさずに護っていた。

敵を苦しめた王の光輝は、中天に〔浮かぶ〕白鳥[注一一]に例えられ、また非のうちどころもない端麗な王の姿は、誇り高い愛神カーマ[注一二]の兄弟かとまごうばかりであった。

王にはヴァスマティーという心やさしく、美しい女たちの中でも冠の宝石のように美しい、愛する王妃があった。〔その美しさは〕前額に一眼をもつシヴァ神[注一三]が、怒りのまなざしで愛神カーマの身を焼いた時に、恐怖をいだいたカーマが理想の女性を、と思い立ち、自分の持っている蜜蜂をつないだ弓弦[注一四]で（黒い）髪の毛を〔創り〕、愛神の友である月〔の美しさで〕蓮華をもしのぐ顔を、カーマの旗に〔描かれた〕夫婦の魚[注一五]で両つの眼を、部下の第一の勇者といわれるマラヤ山の微風[注一六]を吐息に、〔愛する女と離れて〕旅する者の心を悩ます苦痛の剣でビンバ[注一七]の実のような唇を、勝利を告げる螺貝で愛らしい咽喉を、水を満たした二つの水甕で（仲のよい）チャクラヴァーカ鳥[注一八]（の夫婦）にも似た両つの乳房を、やわら

かい蓮の〔茎の〕ような自分の弓の弦〔を模して〕両腕を、戯れに頭に飾った華鬘の蓮華のわずかに開いたつぼみをもって恒河の渦のような臍を、愛神の勝利の戦車では苦行者の精進を妨げる円かな腰を、その戦勝の二本の柱で修行者の努力を阻む芭蕉樹の幹のようにすらりと〔白い〕両腿を、千の花弁のあるカーマの蓮華の日傘で両足を、花の矢[注一九]をもってその他の身体の各部を〔それぞれ創り出したかと思われるほどであった〕。

神々の楽園にもまさる華の都プシュパプリーにあって、悦楽のつきることもない麗妃ヴァスマティーは、マガダ国の王にとっては、〔その名の〕王国さながらに御意のままであった。

その王から重要な責務をまかされた宰相には、ダルマパーラ、パドモードバヴァ、シタヴァルマンという三人があって、難事には一致協力し、知恵は神神の師をもしのぐ親友であった。シタヴァルマンにはスマティ、サティヤヴァルマンの二人、ダルマパーラには、スマントラ、スミトラ、カーマパーラの三人、パドモードバヴァにはスシュルタ、ラトノードバヴァという二人の、それぞれ男の子が生まれた。彼らのうちでサティヤヴァルマンは徳に富む性質だったので、この世の変転きわまりないことを悟り、聖地巡礼を志して他国への旅に出た。カーマパーラは遊蕩児で遊女や踊女に夢中になり、父や兄の意見も聞かずに家出してしまった。ラトノードバヴァは商才があったので遠近あちこちの海を航海した。その他の子どもたちは父の宰相らがインドラ天の客[注二〇]となったので、留まって〔宰相の職を〕継ぐことになった。

やがてある時、マガダ国の王は——王は種々の武器での戦術にすぐれていたため無数の戦役に勝利をおさめ、〔それを〕記念する鉄の鏃を王冠の縁にならべていたのだが[注二一]——新たな戦争にすっかり飢えきっていた〔隣国の〕マーラヴァ国王マーナサーラに

対して、四軍をひきいて出陣した。勇ましい雄叫びの声は大海（の咆哮）より大きく、進軍太鼓の大音響は天界の象(注二)の耳をもおどろかせ、大地はこれを支えるシェーシャ竜王の頭を苦しめるほどに凹み、意気も高らかな進軍であった。

いっぽう、戦の化身かと思われるほど豪胆なマーラヴァ国王も、無数の象群を続々と随えて現われた。たけり立つ象どもは顳顬から体汁(注三)を流して土を洗い、戦車や馬の蹄に砕かれた大地の砂塵が高く神々の通路たる天を覆うさまは、まったく新しい夫を選びに舞い降った天女アプサラス(注四)の群の衣の幕のように見えた。雷鳴にも劣らぬ太鼓の轟きは四方の空に満ちて、剣と剣、手と手と互いにうち合う両軍の大戦闘が始まった。この戦闘でマガダ国王は、全滅したマーラヴァ国王を生捕りにしたが、情をもってもう一度故国に返してやった。

その後、王には敵もなく海を繞らした（広大な国の）統治を行ないながらも、王子にめぐまれなかったので、すべての世界の唯一の主ナーラーヤナ天(注五)に絶えず祈願をした。ある夜の明け方、王妃は（ナーラーヤナのお告げとして）、「王さまから如意樹の実を受けとるがよい」という吉夢を見たが、そのとき王の待ち望んだ華のような結実（王子）が胎内に宿った。インドラ天をもしのぐ祝福を得た王は、親しい王族たちを招いて、その幸運にふさわしい（盛大な）分髪式(注六)を王妃のためにとり行なった。

あるとき、宰相やバラモンたちの居ならぶ広間で王座についている王に、門番の者が恭々しく額に手を合わせて(注七)報告した。

「王さま、恭礼を受けるにふさわしい苦行者が一人、お目通りを熱心に願って門口にお待ちしております」

王の許しがあったので、その苦行者は目の前に導かれてきた。近づくのを見るや王はそれが疑いもなく（自分の放った）間諜だと気づいたので、召使たちをすべて立ち去らせ、恭礼して宰相たちやその

（苦行者）ににっこり笑ってこう言った。

「これはこれは苦行者どの、そなたがバラモンに変装して行く先々で知られたことをお話しあれ」

諸国巡礼の威厳を具えた苦行者は合掌のうえ報告した。

「王さま、頭上に王さまの御命令を戴いてこの清浄の衣を身にまとい、マーラヴァ国の都にはいり、極秘の行動をとった末、かの王のすべての情報を探って戻りました。戦っては王さまに敗れ、自負心の強いマーナサーラは自軍の潰滅に、(注八)心中大いに面目を傷つけられました。（そこで）マハーカーラ(注九)の殿堂にまつられる慈悲深く栄光不滅のシヴァの大神を崇めましたが、神もその苦行を喜ばれてか、どんな勇士も倒してしまう恐るべき棍棒を授かったのです。自ら無敵の勇士と思いあがった彼（マーナサーラ）は、王さまと戦う準備をもう終えております。こんな次第ですから、王さま、よくよくお考えください」

その時、これを聞いて敵の行動を察知した宰相たちは、王に申し上げた。

「王さま、敵は神の加護をもってやってくるのですから、われわれは戦うに、手段も方法もありません。ただ、いまは人の行けない所（山岳の森林地帯）へ避難なさらなければいけません」

彼らはさまざまに説得しようとしたが、少なからざる自信をもっていた王は、

「そんな言い分は採用できぬ」

と斥けて、やはり戦う心算であった。マーナサーラはシヴァ天から威力のある武器を授かっているので意気ごみもすさまじく、軍備をまったく整えて出発し、苦もなくマガダ国に侵入してきた。それを耳にした宰相たちは大地の主マガダ大王をとにかく説きふせて、敵軍に侵されにくいヴィンディヤ山の森林のただ中に、多くの兵士に護らせて宮廷の女たちを隠した。けれどもラージャハンサ王は士気の高い選りぬきの勇士をまとめて、凶暴な敵を阻むべく進撃した。

両王たがいに相まみえる戦さの光景は、ものめずらしげにやってきた空行く鳥どもをも驚かせた。マガダ大王は種々さまざまの武器を使いこなす達人で、戦場の不死王と賞賛されていたにもかかわらず、マーラヴァ国王が勝利の執念から得たシヴァ天お授けの棍棒が、王に向かって投げつけられた。砥ぎすました矢を雨のように受けて、それ〔棍棒〕はさんざんに傷んではいたのだが、獣主シヴァ天の宣示にたがわず、まず戦車の御者を倒し、ついで車上の王をも失神させてしまった。手綱から放れた馬どもは傷をうけていなかったので、運よく車をひいて大森林の宮女たちの避難所に行きついた。いっぽう、勝利の女神に守られたマーラヴァ王はマガダ国に入城して、都プシュパプラを支配した。

さて〔味方の〕宰相たちはいろいろな武器の打撃をうけて倒れていたが、幸いにも生命には別条なく、夜明けの微風にあたって息をふきかえすや、王を探し求めた。しかし捜索の甲斐もなく、〔王を発見することができず、すっかり気落ちして王妃のところへ戻った。

王妃ヴァスマティーは彼らから、全軍の敗れたことや、王の見あたらないことを聞いて、悲しみの海に沈み、愛する王の死に殉ずる(注)覚悟をした。

「美しいお妃さま、王さまはお亡くなりになったとは限りません。また占星家はこう申しております。『あなたさまの胎内にある愛らしく優しい王子さまは、敵を悩ましうち砕き、全世界の覇王となられましょう』と。ですからただ今、あなたが自ら死のうとなさるのは、よろしくありません」

こう宰相やバラモンたちが努めて慰めたが、王妃は、呆然と無言で立ちつくしたままであった。

やがて夜も更けて召使たちは眠りこけ、あたりも静まりかえったころ、王妃は涯しもない嘆きの海を越えかねて、兵士らの休む場所を音もなくそっと通り抜け、近くの榕樹(注)の下に行った。

そのあたりには、前に王の〔戦車の〕馬どもが逃

走に疲れて道に迷って止まっていた。王妃は、さながら〔掌の〕死の線(注)かと思われるようにのびた、その木の一本の枝に、上衣の半分をかけて死のうと思いつめ、コーキラ鳥のように甘美な声も涙にさえぎられて、低くうめくような声で言った。

「華の矢をもつ愛の神カーマのようないとしい王さま、来世でもまたあなたは唯一人の夫であってください」

それを耳にしたマガダ国王は、照りそそぐ月光にふれて意識をとり戻し、王妃の声と確信して、繰り返しやさしく静かに呼びかけた。王妃はとまどったが〔やがて〕心は少なからぬ喜びでいっぱいになり、口もとは蓮華の開くように、眼は飢えた者のように見開いて、幾たびも声を限りに呼んではバラモンや宰相たちに王を〔さし〕示した。宰相たちは王の足に額をつけて幸運を喜びながら申し上げた。

「王さま、御者が戦死してから、馬どもが勢いよく車を森にひきいれたのです」

王は答えて、

「多くの兵を失ったあの地の戦いの最中に、シヴァの恩寵をうけたマーラヴァ王が投げた棍棒で、余は容赦なくうち倒されて意識不明となった。それから夜明けの微風で目覚めたのだ」

一族の運命を担う宰相たちは馬を用意し、王はほどなく本営に運ばれた。〔身にうけた〕矢も残らず取り除かれて、顔色は蓮華のように〔よくなり〕、傷はたちまち全快した。不運を知らぬ誇り高い王が悩みに満ちた様子だから、いたく心配した宰相たちも意見を述べたので、お妃ヴァスマティーは意を決して優しく申し上げた。

「王さま、あなたは数ある王の中でも、ご威光はひときわ高く、尊ばれておられましたのに、ただ今はヴィンディヤの森林の中にお住まいです。覇権はあたかも水に浮かぶ泡、幸運はさながらつる草模様の稲妻(注)のように瞬く間に過ぎ去り亡びるもの。事の経過はすべて宿命とお諦めください。その昔、ハリシ

ユチャンドラやラーマチャンドラ[注19]をはじめ、数えきれぬほど多くの王さまたちの威光は、インドラにもたとえられました。その大王たちさえ宿命のいたずらから悲運のとりことなり、永い歳月ののちに覇権を回復いたしました。

あなたもそのようになられましょう。何はともあれ、時（の経過）が（悪）運に結末をつけ、お苦しみを除くに違いありません。その時節到来まで――」

その後、ラージャハンサ王はすべての家来たちをつれて、願いを成就するために、苦行に名高いヴァーマデーヴァという大聖仙を訪れた。恭礼を終えてから快く招じ入れられた王は用件を伝えて、しばらくの間、安息の庵に留まった。王位（の回復）を望む月種族の主[注20]ラージャハンサ王は言葉すくなに聖者に話した。

「尊者よ、マーナサーラは強い神のお力で余を征服し、余の手に帰すべき王国の支配を奪ったのです。そこで余もまたいっさいの人々の守護者たる尊者のお慈悲にすがり、厳しい苦行を修めて敵を全滅させようと、勧誡（ニヤマ）[注21]の徳すぐれたあなたをお訪ねしたのです」

三世（過去、現在、未来）を達観する大聖仙は王に告げた。

「友よ、身も細るような苦行はご無用です。王妃ヴァスマティーの胎中なる王子誕生のうえは、あらゆる敵を亡ぼすでしょう。しばらくは静かにお待ちください」

時に空中からも、

「そは真実（まこと）なり」

との声が響いてきたので、さすがの王も尊者の言葉に従った。

やがて王妃ヴァスマティーの懐妊の日が満ちためでたい日に、吉相をすべて残らず具えた（そな）一子が誕生した。なすべき義務を知悉（ちしつ）した王は、神聖なること梵天にもひとしい王宮付きのバラモンの手で、幼い

王子を祝う生誕式（ジャータ・サンスカーラ）[注22]をとり行ない、ラージャヴァーハナという名前を授けた。

ちょうどそのころ、スマティ、スマントラ、スミトラ、スシュルタなどの宰相たちにもプラマティ、ミトラグプタ、マントラグプタ、ヴィシュルタという良い名の、昇り初める月のように輝かしい壮健な子らが生まれた。ラージャヴァーハナ王子はこれら宰相の子らを友として、わらべ遊びに興じながら育って行った。

さてある日のこと、一人の苦行者が王族の特徴（しるし）を（身に）具え、眼もと輝く可愛らしい子を王に手渡してこう語った。

「王よ、私はクシャ草[注23]と薪木をとりに森にまいりましたところ、見知らぬ若い女に出会ったのです。女は明らかに（お仕えするべき）主君を失った憐れな様子で、涙さえ浮かべておりました。

『人里はなれた森の中であなたは何故泣いているのか』

と聞きますと女は涙を指で拭き、ぽつぽつと答えました。

『賢者よ、ミティラー（ヴィデーハ国の都）の王さまは容姿は愛神カーマにもまさり、お名は神々の殿堂までも行きわたっておりました。お友達のマガダ国の王さまがお妃の分髪式（シーマンタ）の大礼をなさるので、御出席のため王子王妃ともども都プシュパプラにまいりました。しばらくご滞在の折に山神シヴァ（ギリーシャ）の加護をうけたマーラヴァ王がマガダに向かって攻め寄せたのです。ヴィデーハ国の王プラハーラヴァルマンはその地で幾たびもの名だたる両王の会戦に参加して、友を援けられましたが、軍兵は敗れ、戦勝の敵に捕われの身となりました。幸いに同情をうけて釈放され、残るわずかの手兵をひきつれて、都へ還る途中でした。森の困難な道を行くうちに優勢なシャバラ族[注24]の一団に攻められましたので、護衛の兵士に女どもを守らせて逃れたのです。私と娘とは小さな双児の王子の乳母（うば）を仰せつかっておりましたが、王

さまがあまり速く行かれたので追いきれませんでした。
　その時、それこそ忿怒の化身と思われるような一頭の虎が口を開き、私を嗅ぎつけて近づいてまいりました。驚いたあまり私はつき出た岩につまずき転んでしまったのです。私の手から離れた王子は、そこに横たわっていた牛の屍体の胸（のあたり）に落ちました。虎はあせってその屍体を曳いて行く間に、弓から放たれた矢があたって死んでしまいました。王子は髪も乱れてシャバラ族に捕えられ何処へともなくつれ去られてしまったのです。私の娘はもう一人の王子をつれていましたが行方も知れず。気を失っていた私をある羊飼いがあわれみ、小屋にいれて傷の手当をしてくれました。こうして全快してからもう一度王さまのお側に行きたいと思っておりますが、道づれもないうえに娘にも会えず、とほうにくれているのです』
　こう語りながらも女はなんと、『私はたった一人でも王さまのもとへまいります』と、その場を立ち去ってしまいました。
　私もあなたさまの親しい間柄と承るヴィデーハ国王の災難から生じた不幸を想うにつけても、王統の若芽ともいうべき王子を探しておりましたところ、とある立派なチャンディカーの祠堂（注）に行きついたのです。祠堂の内ではこの（たびの）ような勝利（注）がいつまでもつづくようにと、キラータ族が王子を女神の生贄に捧げようとして、こう言っている最中でした。
『木の枝に吊した子供を剣で――、
　それとも砂地を掘って脚を埋め、そいつを標的に
　矢の雨で――、
　さもなければ逃がしておいて若い犬どもに咬み殺させるか――』
　私は呼びかけました。
『もし、キラータの皆さん。私は勝手知らぬ恐ろしい森の中で道に迷った老バラモンですが、息子をも

の陰において道を探しに少々行きましたら、その間に子供はどこへ行ったのか、誰に攫われたのか、見回せどいなくなりました。息子に会えないまま数日がすぎました。どうしたらよいのか。どこへ行ったらよいものやら、皆さんは（その子を）見かけなかったでしょうか』
〔キラータ族のものが言うには〕
『バラモンさま、ここに一人いるが、あなたの息子だろうか。そうだったら連れて行きなされ』
　と運よくその子をくれました。私は彼らに祝福の祈りを与えて子を受けとり、冷水などの手当を施して元気を回復させ、安全な王さまのもとに運んだ次第です。このすこやかな子を父のようにお守りください」
　王は友の不幸を悲しまれたが、その子を見る喜びにいくらか（気分が）和らいで、ウパハーラヴァルマンと命名し、王子ラージャヴァーハナ同様に養育した。
　ある吉日に、王が聖地に沐浴のためパッカナ族（注）（シャバラ族）の小屋の付近の道を行く途中、比類もなく美しい子を抱きかかえた一人の女を見て不審に思って尋ねた。
「美しい女よ、あらゆる王者の相を具えた立派な容姿のその子はそなたの血統ではあるまい。誰の眼を喜ばせる子なのか（注）。そなたが手にいれた理由を話しなさい」
　シャバラ族の女は一礼して言った。
「王さま、私どもの村の近くの道を通りかかった、インドラ天にも似たミティラーの王さまから、シャバラ族の一団が持物を残らず掠奪したのですが、その時うちの亭主が奪ってきたこの子を育てているのです」
　賢い王はこの話を聞いて、あの苦行者の話したもう一人の（ミティラーの）王子だと気づいたので、ねんごろな言葉や贈りもので言い聞かせ（て子どもをゆずり受け）、アパハーラヴァルマンと名づけて、

「養育しなさい」と、王妃にまかせた。
ある日、ヴァーマデーヴァ仙の門弟でソーマデーヴァシャルマンという者が、王の前に一人の子どもを置いてこう語った。
「王さま、聖地ラーマティールタでの沐浴の帰りに、森のほとりで見知らぬ女に会いました。抱いている子供の容姿がきわだっていますので、私は丁重にこう訊ねました。
『おばあさん、あなたはどなたですか。こんな森の中で子を抱いておられるが、何かゆえあって苦労しておいでなのですか』
老女の語りますには、
『尊い隠者さま、カーラヤヴァナという島にカーラグプタと申す豪商がおりました。スヴリッターという、眼を喜ばせる美しい娘があったのですが、マガダ国の宰相の子息でラトノードバヴァという方がこの島からそこへ到着いたしました。諸国を巡った商人で、立派な資質を具えた魅力のある方でしたから（二人は）結ばれ、舅御もたくさんの立派な贈物をして敬意を表されました。時を経て夫人は身ごもったのですが、主人ラトノードバヴァはそのころ、兄弟にまた会いたいという気持がつのり、やっと舅を説得して眼もと美しい夫人と船に乗り、プシュパプラの都めざして出発されました。（ところが）船は山なす波に砕かれて大海の水に沈みました。身重のために動きも鈍い夫人のお世話を仰せつかっていた私は、両手で一枚の厚板に（夫人を）のせて、どうやら岸辺に流れついたのです。主人ラトノードバヴァは友だちとそこで海に沈んだものか、何かの手段で岸に着かれたものか、私には判りません。
今日、スヴリッター夫人はきつい陣痛に襲われ、この森の中で男の児を産みました。出産の苦しみで夫人は意識を失いましたので、木蔭の涼しい所に休め、人気もないこんな森に留まることもなりませんので、人里に通う路を探しているのです。子を抱いているのは、無力な夫人のもとに置くのはよくないと思ったからです』
ちょうどその瞬間、一頭の野生の象が現われましたので、老女は驚いて子供を放って逃げだしました。私は近くの灌木の茂みにはいってじっと見ておりました。巨象が子供をまるでひと口の若芽のように軽軽と拾いあげた時に、一頭の獅子が恐ろしい唸り声をあげて襲いかかりました。びっくり仰天した象は子供を空中に放り出し、子供は地に落ちましたが、天寿がいまだ尽きなかったものか、付近の高い木の梢にいた猿が木の実の熟したのと感違いして拾いました。ところが木の実などではなかったので、猿は太い幹の根もとに捨ててどこかへ行ってしまいました。運の強いその子はあらゆる苦痛に力強くも耐えぬいたのです。そして獅子は象を殺してどこともなく行ってしまいました。
私は灌木林から出て、輝かしいその子を木からそっと降ろし、森の中で老女を探したのですが見あたりません。そこで子供を師（ヴァーマデーヴァ）のもとに運んで報告のうえ、師の指示によって王さまのお側につれてまいりました」
王はすべての友が、同じころに、不幸の中にも幸いにめぐまれたのに驚きながらも、
「ラトノードバヴァはどうしているのだろうか」
と案じつつ、その子をプシュポードバヴァと命名し、がっかりしたり喜んだりしながら身の上を話し聞かせて、宰相スシュルタ（子の伯父）の手に委ねた。
そのあくる日、王妃ヴァスマティーは（見なれない）一人の子供を胸に抱いて王さまの前にすすみ、
「その子はどこから——」
と問われるままに語った。
「王さま、昨夜、天界の女が私の眼の前に子を一人置いて、眠っている私を呼び起こして丁重に申しますには、
『お妃さま、私はあなたの宰相ダルマパーラの子息カーマパーラの妻で、薬叉女のターラーヴァリ

ーと申し、薬叉マニバドラの娘です。薬叉王の許しをいただいて、この息子をラージャヴァーハナ王子にお仕えするようにつれてまいりました。あなたからお生まれになった王子は尊く輝く財宝のようで、大海に縁どられた大地の果てまでも支配なさる覇王となるに違いありません。愛神カーマのような〈可愛いい〉この子をお育てください』

おどろいて眼を見開いた私もていねいに会釈したのですが、眼の美しい薬叉女はその場で消えてしまいました」

ラージャハンサ王はカーマパーラが薬叉女を妻にした奇縁に驚いた様子だったが、親しい友である宰相スミトラ〈子供の伯父〉を呼びよせ、甥のアルタパーラを手渡して、事情を説明した。

その翌日、ヴァーマデーヴァ仙の庵に住む弟子の一人が華のようにやさしい男の子をつれてやってきた。それは天界に名高い愛神カーマをしのぐほど優美な容姿の子供であった。門弟は王にこう語った。

「王さま、聖地巡礼のおりに、カーヴェリー河畔に着いた私は、ある老女に出会ったのです。その女は髪の乱れた子を腰に負って泣いていますので訊ねてみました。

『老女よ、あなたは誰ですか、可愛らしいその子は誰のものですか、何の目的でこんな人気のないところへ来られましたか、悲しみの原因は――』

老女は両手で涙の滴を拭ってから、自分の苦痛の刺を除いてくれる人に出会ったかのように私を見て、悲しみの原因を語りました。

『再生族の子よ、ラージャハンサ王の宰相シタヴァルマンの末子サティヤヴァルマンは、聖地巡礼を志してこの地にまいりました。彼はあるバラモンの領地で、カーリーというバラモンの娘を妻にしましたが子供ができません。そこでその妹のガウリーという黄金のように輝く美しい女をめとって、男子をもうけました。ある時、カーリーは嫉妬して、乳母の私をだまし、幼児もろとも河へつき落としたのです。

片手で子を支え、一方の手で泳いでいますと木の枝が流れてきました。それに子を載せて流れにまかせて行くうちに、私は枝に絡んでいた黒蛇に咬まれてしまいました。頼りにした枝はここの岸に流れつきました。〈蛇〉毒の作用は恐ろしいものですから、私が死んだら、森の中では誰も〈この子を〉護る者もいないと〈思えば〉かわいそうで――』

こう言い終わった老女は猛毒の焔に身を焼かれ、地面に倒れてしまいました。あわれに思った私は呪文で毒を除こうとしましたが、その甲斐もありません。付近の草むらで薬草を探して帰ってみると彼女の生命は絶えておりました。しかたなく、老女の火葬を行なった私は心も暗く、よるべない子を抱いて、『サティヤヴァルマンの身の上を聞いたとき、彼の住むバラモンの領地の名を聞きもらし、探すこともできない。宰相の子息なら王さまが保護者である』と、こう考えつきましたので王さまのもとへこの子をつれてきた次第です」

それを聞いた王は、サティヤヴァルマンがどこでどう暮らしているのか、まったく判らないまま心安らかでなく、その子にソーマダッタという名を与えて、宰相スマティ〈子供の伯父〉に甥を授けた。彼〈宰相〉はまたまさに自分の弟が帰ったかのように思えたので、ことのほか大切にその子を養育した。

こうして集まった子供たちと、ラージャヴァーハナ王子は童あそびをしたり、いろいろな乗物に興じたりしながら、順次に結髪式・入門式などの浄法を終えた。そしていっさいの文字の書法とすべての地方の言語の勉強、六種の補助学科とともにヴェーダ聖典の学習、詩、演劇、小話、物語、口碑、すばらしい話に満ちた古譚群の通暁、法制、文法、天文、論理、哲学など。あらゆる経典への精通、カウティリヤ、カーマンダキ〈の著書〉などに関する政治処世の習熟、ヴィーナーなどのすべての楽器の練達、合唱、作詩法の習得、宝石の呪文、薬草、手品、奇術の熟達、象、馬などの獣類の

乗法の修練、各種の武器の扱い方、窃盗術（注三）、賭博などの詐術に至るまで、専門の師匠たちから残らず学習した。

元気盛りで活気にみち、怠りなく努める公子たちの一団を眺めて王は、

「余は敵に負けることはない」

と心中いとも満足であった。

注

一　ガネーシャ天　文章著作の発端、ものごとの始めにこの神の名を称える習慣がある。

二　梵天　梵天はヴィシュヌ神の臍から生えた蓮華の上にいるという。ヴィシュヌ、シヴァとともにインド教の三大神の一である。

三　ヴィシュヌ　わずか三歩で天、空、地の三界を渡り、魔王バリから主権を奪いかえしたといわれている。

四　警杖　杖、柱など種々の意味をもつダンダの語を繰りかえして、ここでは作者ダンディン（杖を持つ者）の名に関連せしめた遊戯的詩句で、恐らくのちの人が付加したと思われる。

五　プシュパプリー　華の都の意をもつが、仏典のパータリプトラ（華氏城―現在のパトナー）との地理的な一致は不明。プシュパプラともいう。

六　マンダラ山　注七を参照。

七　攪乱　乳海攪拌の神話に由来した表現。神々は魔族アスラとともに不死の霊薬アムリタ（甘露）を手に入れたいと思い、ヴィシュヌとブラフマー（梵天）の許しを得た。神々はシェーシャ竜をマンダラ山に巻きつけて攪拌棒とし、大海を攪拌して海中から甘露を得た、という神話。

八　純白　名声や栄誉は古代インドにおいては白色で表わした。笑いも白い笑いと形容する。

九　インドラ天　インドラの都は天界のアマラーヴァティーである。中には華麗なナンダナ園（歓喜園）がある。天女は賛歌をうたい、音楽舞踊をつとめる。インドラはもと武勇の神で、その都は王侯勇士の理想郷とされた。戦場に死んだ武士はインドラ天に生まれ代わると考えられ、ここでは武士階級のラージャハンサ王に因んだものである。

一〇　天界の頂き　メール山（須弥山）は神々の住む天界の頂きで、そこに梵天の美しい世界がある。多数の宝石から成るような不思議な輝きを発する。

一一　白鳥　ハンサの語には白鳥の意と太陽の意がある。王の名ラージャ・ハンサとかけてある。

一二　カーマ　愛の神カーマは中世インド文学には最も多く現われ、最も親愛な神である。われわれ人間の恋愛を支配し、端麗な美少年として描かれている。

一三　一眼をもつシヴァ神　シヴァは額に一眼を有するのでニティラークシャとも呼ばれる。ある時シヴァの苦行中にその妃パールヴァティーが美少年カーマにやさしい眼ざしをおくるのを見て嫉妬し、額の眼から火を発してカーマの身を焼き尽くして灰にした。そこでカーマはアナンガ（無肢）とも呼ばれる。

以下の長文は、爛熟期サンスクリット文学の特徴である長い合成語をあえてつづけて訳した。

一四　カーマの……弓弦で　カーマの武器としての弓は甘蔗で造られ、弦は蜂の糸、矢

は花で飾り、魚(マカラ)を描いた旗を持っている。蜂の群は黒色にたとえられる。

一五 旗に……魚 注一四参照。眼を魚の形にたとえている。

一六 マラヤ山の微風 愛神カーマは春の神であり、春の象徴たるマラヤ山の微風は、カーマの率いる軍勢の指揮者といわれる(前編第五章の冒頭参照)。春という季節は人の心中に愛を呼び起こすので、この季節をカーマ軍にたとえたのである。カーマは春軍の統帥であり、マラヤ山より吹きよせる白檀の香りゆたかな春風は最も力強い部下の一つである。マラヤ山は西ガーツ Gats 山脈の南部。

一七 ビンバ 頻婆(ビンバ)は鮮紅色の果を結ぶ植物で、その果実は古来、女の唇にたとえられる。

一八 チャクラヴァーカ鳥 鴛鴦(おしどり)。いつも夫婦が行動をともにする。水甕は結婚などの儀式に聖水を入れる容器で、ともに婦人の胸にたとえられる。

一九 花の矢 注一四参照。

二〇 インドラ天の客 インドラの都は王侯勇士の理想郷で(注九参照)、武士(クシャトリヤ)は死後、そこに生まれ代わると信じられた。したがってインドラの客となることは死を意味する。

二一 種々の武器での戦術に…… 以下この個所は合成語が錯雑している。

二二 天界の象 四方の天にそれぞれ象がいて大地を支えている。

二三 象どもは顳顬から…… 興奮状態または発情期の象は、顳顬から一種の体汁(マダ)を流すといわれる。

二四 アプサラス 天女、精女などと訳され、天界の踊女で美貌である。戦いに倒れた勇士を夫に選ぶためにやってくるともいう。また生命ある人間とも結婚できるとされていて、カーリダーサの名作「ヴィクラモールヴァシーヤ」では天女ウルヴァシーとプルーラヴァス王の恋物語が主題となっている。

二五 ナーラーヤナ天 宇宙、人類の本源の神。ヴィシュヌ天のこと。仏教の那羅延天。

二六 分髪式 シーマンタ・ウトサヴァともシーマンタ・ウンナヤナとも称される。家庭生活を営むうえでの宗教的儀式(浄法(サンスカーラ))の一つで社会的慣習となっている。はじめて妊娠した婦人の三―七ヵ月目に行なわれ、妊婦の髪を分けて梳き上げるのでこの名がある。この時妊婦は華鬘(けまん)で飾られ、梳き上げた髪は既婚者の標識になるといわれる。法典の規則により琵琶(ヴィーナー)に合わせて賛歌をうたう。現代でも一部に妊婦を花で飾る風習の残っている地方もある。

二七 額に手を合わせて 合掌(アンジャリ)と訳される。敬意を表わす動作の一つである。

二八 自軍の潰滅に この項、直訳すると「自分の軍隊の老齢(永続)を妨げられた」。

二九 マハーカーラ シヴァ神の別名。アヴァンティ国(マーラヴァ)の都ウッジャイニーにあるシヴァ神の殿堂。

三〇 死に殉ずる 夫の死に殉ずることは貞女の美徳とされた。元来「貞女」の意を有するサティーの語が「殉死」の意をももつようになったものである。未亡人が夫の荼毘の火に身を投ずる風習。ただし法的にも習慣的にも強制されたことはないようで、またインド全域にわたる風習でもなかったようである。ただこれが行なわれた時は寡婦の美挙として賞賛され、一族の名誉とされたようである。

三一　榕樹　通常ニヤグローダという。枝から下方に気根を垂れ、地にとどくとそこから根を生じて枝を支える（これの大きいものは大小数千本の気根で数町歩の面積の地を占めるという）。果実は無花果に似て赤色。

三二　死の線　手相からの譬喩。「死の線」は掌を水平に横ぎる「生命線」の上部に垂直に走るという。

三三　つる草模様の稲妻　雷光はしばしば蔓草で形容される。

三四　ハリシュチャンドラやラーマチャンドラ　ラーマチャンドラは大叙事詩「ラーマーヤナ」の主人公ラーマ王。ハリシュチャンドラは伝説的な甘蔗族の王。「シュナハ・シェーパの物語」として有名。（辻直四郎訳、世界文学大系『インド集』五四ページ以下）

三五　月種族の主　Somakulāvatansa.　王子ラージャヴァーハナを月種族の王と表現する個所もある。

三六　勧誡の徳　ニヤマは瑜伽経の教えの八支の一。三昧によって解脱すると説き、三昧に至る方法として禁制・勧誡・坐法・調息・制感・執持・静慮・三昧の八支を教える。

三七　生誕式　浄法（注三六参照）のひとつ。子供の誕生後直ちに行なわれる。浄法の種類は法典によりまちまちだが主なものは十二種である。

三八　クシャ草　茅、薄のような草。湿地に生え、水田でも培養される。インドでは古来この草を神聖なものとし、諸儀式にはこれを編んで席にし、供物を置いたり、坐ったりするのに用いた。この草を刈りとって席を作るのはバラモンの仕事の一

つである。矩尸・吉祥草・上茅などと漢訳されている。

三九　シャバラ族　山間部族の一種。狩猟に従事し、時に強盗のような行動をとる。同じく山林部族の名称としてキラータ族・プリンダ族・ピラ族などがあるが、大した区別なく山間の「蛮族」というほどの意味に用いられている。

四〇　チャンディカーの祠堂　チャンディカーはシヴァの神妃ドゥルガー女神の別名で、恐ろしい形相をしている。

四一　キラータ族　注三九参照。

四二　パッカナ族　Pakkaṇa.　注釈は山間部族としている。ウィルソンはパッカナをプッカサと同視し、旃陀羅と訳したが、いずれも不可触賤民とよばれる四姓の外のアウト・カーストである。

四三　誰の眼を喜ばせる子なのか　原文 Kasya nayanānanda.「誰の眼の喜びか」「誰の子か」の意。

四四　薬叉女　薬叉は夜叉、軽捷などといわれる半神半人の鬼類。仏典の八部衆の一。空中・地上・樹林・山谷などに住むとされる。

四五　カーヴェリー河　デカン地方の河の名。別名ジャフナヴィー（ジャフヌの妻）河という。伝説によると、ジャフヌの妻は父親の呪いによりガンジス河を分けてカーヴェリー河にされてしまった。そこでこの河をジャフナヴィーといい、またアルダ・ガンガー（半ガンジス）河ともいうと。

四六　再生族　古代バラモン教の社会では成年に達すると入門式（注三五参照）を行ない、はじめてヴェーダの学習に従う資格をうけて宗教的に再生すると考えられた。し

たがってこの式を行なうバラモン（祭僧）、クシャトリヤ（武士）、ヴァイシャ（庶民）の三階級は再生族と呼ばれた。これに反してシュードラ（奴隷）は再生の権利がなかったので一生族（エーカジャ）と呼ばれた。

四七　バラモンの領地　原文 agrahāra. バラモンに王から下賜された土地。

四八　黒蛇　カーラは黒のほかに死の意もある。

四九　火葬　Pāvaka-saṁskāra, agnisaṁskāra ともいう。浄法の一たる火葬の儀式。

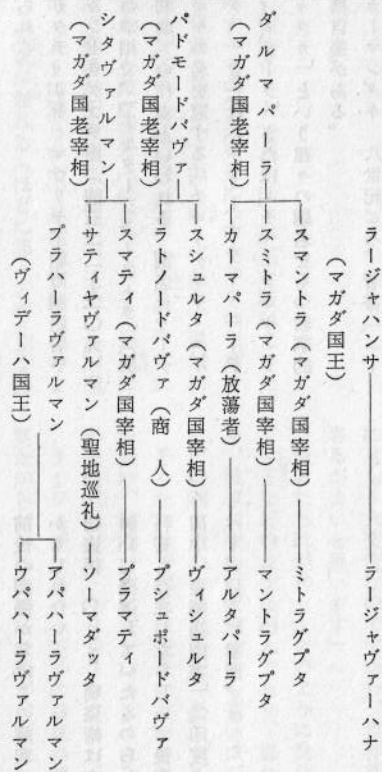
五〇　十人の子どもたちの関係は別表参照。

五一　童あそび　bālakeli. 子供の遊戯、ヴァーツヤーヤナの「カーマ・スートラ」（一・三）には、ナーガラカ（都人士）の心得として六十四芸（カラー）が挙げられ、その第六十一番目に bālakrīḍanaka が挙げられている。遊戯の種類については同書（四・三）に述べられている。

五二　結髪式　またはチャウラ。浄法（サンスカーラ）（注三六参照）の一。生後三年目に行なうのが普通。父や、理髪師でない者の手で子供の右側から始めて両側の髪を剃り、わずか剃り残して小髻を結ぶという。

五三　入門式　諸浄法のうち最も重要なものとされ、入法式・就師式ともいう。この儀式によって、はじめてその階級（カースト）の一員としての資格を与えられ、また宗教的に新生命を授けられたものと見なされる。再生（ドゥイジャ）の名はそこから出る（注四六参照）。諸経典（スートラ）によると入門の時期、衣裳・所持品など三階級それぞれ区別が定められている。

五四　六種の補助学科　Ṣaḍaṅga. ヴェーダンガ Vedāṅga ともいう。シクシャー（音韻）、カルパ（祭式）、ヴィヤーカラナ（文法）、ニルクタ（語源）、ジョーティシャ（天文）、チャンダス（韻律）。

十王子の親		十王子
ラージャハンサ（マガダ国王）		ラージャヴァーハナ
ダルマパーラ（マガダ国老宰相）	スマントラ（マガダ国宰相）	ミトラグプタ
	スミトラ（マガダ国宰相）	マントラグプタ
	カーマパーラ（放蕩者）	アルタパーラ
パドモードバヴァ（マガダ国老宰相）	スシュルタ（マガダ国宰相）	ヴィシュルタ
	ラトノードバヴァ（商　人）	プシュポードバヴァ
シタヴァルマン（マガダ国老宰相）	スマティ（マガダ国宰相）	プラマティ
	サティヤヴァルマン（聖地巡礼）	ソーマダッタ
プラハーラヴァルマン（ヴィデーハ国王）		アパハーラヴァルマン
		ウパハーラヴァルマン

十王子とその親子関係

五五　小話　ākhyānaka. 平易な散文の物語。

五六　物語　ākhyāyika. 散文の伝奇小説。注釈はバーナ（七世紀）の「カーダンバリー」、スバンドゥ（七世紀）の「ヴァーサヴァダッター」を例としてあげている。

五七　文法　Śabda. 音声、言語の意であるが、注釈に従い文法と訳した。

五八　哲学　ミーマーンサーはヴェーダーンタ派とともに正統バラモン哲学の代表とみられる。

五九　カウティリヤ　マウリヤ王朝の創始者チャンドラグプタ王（前三二一―二〇九）の宰相で、「アルターシャーストラ」（実利論）の作者といわれる。別名チャーナキヤの名を冠する「チャーナキヤ・ニーティ」または「チャーナキヤ・ニーティ・サーラ」または「チャーナキヤ・シャタカ」という種々の題名をもつ教訓的格言集がある。

六〇　カーマンダキ　八世紀ごろ。著書「ニーティ・サーラ」はカウティリヤの流れを汲む処世・政治に関する書。

六一　作詩法　Sāhitya. 作詩法、修辞学。注釈に Sāhityaṁ Śilpaṁnṛtyādikalāḥ（サーヒティヤは工芸美術、舞踊等の技芸（カラー））とあるが、恐らく原義「結合、総合」の意からこれらの技芸をすべて含める意で、前後の関係からはこの解釈のほうがよいかもしれない。

六二　窃盗術　Caurya. 窃盗術は古代インドにおいて発達していたものらしく、その教科書も存在したらしい。後編第二章参照。田中「盗賊指南書」（『印度さらさ』三三ページ以下）参照。

第二章　バラモン青年に助力のこと

ある日、聖仙ヴァーマデーヴァが王を訪ねてきた。王子たちはすべての技芸を身につけて、その気高さはいずれも華矢の神カーマかと紛うばかり、勇気は〔戦の神を〕しのぎ、戦勝旗・円蓋・電杵(注一)のめでたい手相を具えた立派な若者〔になって〕王のお側に控えていた。聖者が王の恭礼に答え、王子たちが聖仙の蓮華の〔ように清らかな〕足に、蜜蜂の群のような〔黒い〕髪束(注二)が触れる〔ほどに深々と恭礼する〕と、聖者は王子たち――いずれは敵を粉砕するに違いない彼らであるが――をかたく抱擁して、おごそかな真理の言葉で祈りを授けてから王にこう進言した。「王さま、あなたのご子息はまったく如意樹の果実のように立派な若者になりました。もはや、友の者たちと連合して、あらゆる地方の征服を始める時でしょう。ラージャヴァーハナ王子はどんな困難にももう大丈夫なのですから、世界征服の企画をなさるがよいと思います」

若者たちは愛神カーマのように快活で、しかもラーマ王(注三)などのような超人であり、怒れば敵を灰と焼き、戦車で攻めれば風よりも速いほどなので、〔常に〕勝利は意のままだった。そこで王も心が動いた。

そんなわけで、王は王子に友を与え、適切な計画を授け、時期をみて友といっしょにその地から出発させた。

ラージャヴァーハナ王子は幸運の前兆を示す鳥(注四)を見ながら、とある場所を過ぎ、ヴィンディヤの森林の中にはいって行くと、そのあたりで見知らぬ男に出会った。男は投げ槍の傷痕のある金属のように頑健な身体つきで、左の肩から右の腋下にかけた聖紐(注五)によれば、バラモンとも思えるのだが、明らかにキ

ラータ族（山間部族）の逞ましさや、荒っぽい眼光を具えていた。かれが敬意を表わしたついでにラージャヴァーハナ王子は問い質した。

「さて貴公、人は寄りつかず、野獣だけ往来するヴィンディヤのこの恐ろしい原始林の中に、あなたは何故たった一人で暮らすのか。肩にかけた聖紐はバラモン風だが、投げ槍の傷はキラータ族のしるしとみえる。いったいどうしたわけか聞きたいものだ」

男は王子の様子から、

『きっと身分ある人だろう』

と心に思ってはいたが、友の話で名前と素姓を知らされてから、身の上ばなしをこう語った。

「王子よ、森林内の一ヵ所に、ヴェーダなどの知識の学習を避けて、自分たちの階級の義務を嫌い、清浄な真理をといた法典の掟をかえりみぬ、名ばかりのバラモンたちがプリンダ族（キラータ族）の首領となって、悪事を好み、その（蛮族と同じ）食物をとって暮らしていました。中でもふしだらな性質の息子でマータンガというのがこの私だったのです。その私はキラータ族と群をなして人家を襲い、村ごとに裕福な者たちの妻や子供をさらっては縛り、財貨は残らず奪いとり、なさけ容赦もなくあばれまわっていました。

ある時、森林の中で仲間がバラモンを殺そうとするのを見た私は、憐れに思ってこう言ったものです。

『おい、バラモンは殺してはならぬものだ』

眼を赤くして怒った仲間は口ぎたなく私を罵りました。あまりの悪口に辛抱がならず、私はバラモンを護るため長い時間たたかいはしたものの、倒されたうえに生命を落としてしまいました。

それで餓鬼の都（死界）に行きますと、閻魔大王(注六)が謁見の間のまん中で、宝石をちりばめた王座に着いていて、周囲には肉体を具えた者どもが仕えているのを見たものですから、棒のように平伏いたしました。大王も私の方をご覧になると、チトラグプタという名前の宰相を呼びつけて申しました。

『宰相よ、この者は死ぬ約束にはなっておらぬ。悪事もいたしたがバラモンのために生命を落としたのだ。この機会にこやつの罪は消えて、今後は善事に精出すに違いない。（生前の）悪事のために苦罰を受けるさまを、この都で見せてから、まだもとの肉体にもどしてやるがよい』

宰相チトラグプタはあちらこちらと（案内して）まっ赤に焼けた鉄の柱に縛りつけられた者たち、大鍋に油の煮えたぎった中へ投げ込まれる者ども、棍棒で身をうち砕かれるもの、砥ぎすました鑿で切り刻まれる者などを私に見せ、参考になる知見を授けたうえで解放してくれたのです。

その時、私はもとの身体に還ったのですが、私は大森林の中でバラモンに見まもられ、傷を冷し、手当を受けて岩の上に横たわっていました。その後、しらせを受けて駆けつけた身内の者たちにわが家へ運ばれて、傷も癒りました。バラモンは私に文字を教え、さまざまな伝承の学問や教条を伝え、罪ほろぼしの因になる善行を訓し終えてから、最高智の神シヴァをまつる儀式を行ない、私の供養を受けて立ち去りました。

その時以来、私はキラータ族と交わる友・親族・家族と離れて、この世にまたとない神々の師シヴァ天を心に留めて悪業を遠ざけ、この森林にくらしているのです。

王さま、私はある秘密をあなたにお話ししたいのですが、どうぞ（こちらへ）おいでください」

こう言ってかれは（王子の）友の一団から離れて、低声で打ち明けた。

「王さま、さきごろの夜、神妃ガウリー(注七)の主人シヴァ天が夢枕に立って、眠る私をお呼びになり、慈悲ぶかい面もちで、もの静かにこう言われました。

『マータンガよ、ダンダカ林の中央を流れる河の岸に、水晶でできたシヴァの男根(注八)があり、シッダとサーディヤ(注九)とが仕えている。その西方にガウリー女神の足跡を印した石があり、石の傍にはちょうど〃宿

命の入口〃の〔象徴の〕ような洞穴が見えるのだ。洞穴の内部には創造主の勅令かとまがうばかりの銅板に記した告示がある。告示は成功を約するもので、その定めどおりに実行するなら、おまえは地底の国パーターラ[注一〇]の帝王となるだろう。今明日中には汝に力をかす王子が現われよう』

お告げにたがわずあなたが現われました。私は望みが叶って喜んでいるのです。どうかお力をかして下さい」

ラージャヴァーハナが「よろしい」と答えると、マータンガはうやうやしく一礼した。夜半になり、友の一団が熟睡している間に王子はマータンガとともに森林の中央へわけいった。

のちになって、彼ら〔王子の友たち〕は王子が見あたらなくなったため、付近一帯を探しまわったうえ、あちこちの森林内もことごとく捜索したが発見できず、すっかり気落ちしてしまったが、思い思いの地方を旅しようと決心し、再会の地を約束しあって分散した。

さてマータンガはというと、この世に二人とない〔豪勇の〕王子に護衛されているので心も軽く、シヴァ天のお告げをたよりに洞穴を確かめ、不安もなく内部にはいって銅板の告示を発見した。示された道を通って、名も知らぬ都に近い池のほとり、水禽の飛びかう美しい森にたどりつくと、告示のさまざまの指示に従い、供物をそなえて護摩（ホーマ）を行なった。ラージャヴァーハナが〔外部からの〕妨害を用心して見張っている間に、驚くべし、マータンガは薪と牛酪の燃えあがる焔の中に善徳を包むその肉体を、呪文を唱えつつ投げ出した。すると美しさは稲妻にもたとえられる、この世のものとも思われないような輝く姿に生まれ変わったのである。

そうこうする間に、大勢の侍女をつれた若い女がカラハンサ鳥の歩態（こなし）[注一一]でしずしずと現われた。たくさんの宝石の飾りを身につけた世にもまれな美女である。〔女は〕バラモン青年に輝く宝石を一つ捧げた。

彼が、

「あなたはいったい、どなたですか」

と聞くのに対して、女は郭公（カラカンタ）のような美声[注一二]で、合掌の手をゆっくり上方にあげて語った。

「優れたバラモンよ、私はアスラの王[注一三]の娘カーリンディーです。父はこの世界（冥府）の権勢のある大王でしたが、ヴィシュヌ天が勢いあまって攻め寄せたおりに、神との戦いで夜摩（ヤマ）の都の客[注一四]となりました。私が別離の悲嘆（なげき）の大海に沈んでおりますのを、とある神通力をもった苦行者があわれんで申されますのに、

『乙女よ、神々しい姿の若者があなたの夫となって全ラサータラ国（パーターラ国）を支配するでしょう』

これを聞いた後の私はまったく雨雲を待ち焦がれるチャータカ鳥[注一五]がやっと雨に会う思いで、あなたのおいでを長い間お待ち申しておりました。あなたの到来により願いの叶ったことをしらせると、宰相もよろこんでくれましたので、心は車を駆る御者のように〔はやり〕、あなたのお側（そば）にやってまいりました。この国の栄（はえ）ある統治を承諾なさり、私を妻にお迎えください」

青年マータンガもまた、ラージャヴァーハナ王子の賛成によって乙女を妻にした。天女を得てさらに高まった彼の歓喜はラサータラ国の王位につくにおよんで絶頂に達した。友人たちを欺いてきてしまった王子は再会の念がつのって、地上に帰りたいと思うようになった。マータンガは助力のお礼として、妻カーリンディーから受けた飢渇の苦を除く〔魔力をもった〕宝石を〔王子に〕贈って、いくらかの道

程を送ってくれた。わかれを告げた王子は洞穴の道を抜け出たものの、そこには友人たちも見当たらないままに、あてもなく地上の旅に出かけたのである。

　旅をつづけるうちに、ある広い公園に行きついて、ひと休みしようとした王子は、一人の男を見かけた。男は大勢の忠実な従者を従えて公園に来て妻とぶらんこに乗っていたのが、口もとは蓮華のように開き、狂喜のありさまで、こう〔叫んだ〕。

「わが王子ラージャヴァーハナよ、月種族の主、令名純白の宝よ、思いがけなくお側に来た私はまったく幸せです。いま、〔お目にかかるのは〕偉大なる眼のよろこびです」

　揺れるぶらんこから降りるや、足の動きもすばやく、いよいよ嬉しげな様子で、〔これまた〕三、四歩すすみ出た〔王子〕の両足に頭が触れる〔ほど深く〕恭礼すると、その腕〔に飾った〕マリカー華[注一六]が白く輝きゆらぎ落ちた。王子もまたこの上ない喜びに涙をたたえて、四肢の毛も逆立っている[注一七]彼をかたく抱きしめ、

「ああ、なつかしいソーマダッタよ」

と名を呼んだ。

　そうした後に、プンナーガ樹[注一八]の根方の木蔭すずしい辺りに休んで、王子は親しく問いかけた。

「友よ、これほどの長い間を、どこで、どう過ごしたのか。ただいまここへはどこから〔来たのか〕。若い夫人は誰なのか。従者が何故たくさんいるのか。聞かせてほしい」

　かれソーマダッタは絶えず王子を〔気づかって〕見まもっていたが、その懸念も消えたので、蓮華の蕾のような合掌[注一九]をして、礼儀正しく自分の過ごしてきた様子を語った。

注

一　電杵　Kuliśa. 金剛杵、三叉戟。インドラ天の持つ武器。ここでは勝利の旗、円蓋(日傘)とともに手相に表われたそのような形の線のこと。将来は王者になることを暗示する。

二　蜜蜂の群のような髪束　若者たちが聖仙に丁重な礼をするさまを表現した個所で、黒い髪束はしばしば蜂の群にたとえられる。

三　ラーマ王　叙事詩ラーマーヤナの主人公。

四　幸運の前兆を示す鳥　古く行なわれた鳥占いの一種。この文では 吉 鳥。一般に鳥が右側を飛ぶのは吉鳥とせられるが、チャータカ鳥(注一五)だけは左側という。

五　聖紐　くわしくはヤジュニョーパヴィータ。祭綬とも訳される。入門式をすませた再生族が標識として肩にかける紐。第一章注一三参照。

六　閻魔大王　後に出る夜摩と同じ。死者の王。冥界の支配者で住む所は餓鬼界。

七　神妃ガウリー　シヴァ神の妃はこのほかドゥルガー、カーリー、ウマー、パールヴァティーなどがある。

八　シヴァの男根　シヴァ信仰の一形体として、その創造力を象徴する性標リンガは大いに崇拝された。

九　シッダとサーディヤ　ともに半神でシヴァの従者。

一〇　パーターラ　伝説の七地下国の一。ただし文中では後にラサータラ国とも表現している。

一一　カラハンサ鳥の歩態　カラハンサ鳥はスワンの一種。婦人の優雅な歩きかたを表わす。

一二　郭公のような美声　カラカンタは郭公、杜鵑。婦人の美声にしばしば引用される。

一三　アスラ　闘争をこのむ鬼神である。地下や海底に住むといわれる。阿修羅。

一四　夜摩の都の客　ヤマはシャマナと同義で

閻魔王のこと。その都の客となる、とは死して冥府へ行くことの表現。

一五　チャータカ鳥　杜鵑の一種。この鳥の名は語根チャト(乞う)から生まれたとおり、常に雨を乞い求めるという。学名 Cuccu lus Melanoleucus.

一六　マリカー華　藤のように他の樹にからんで伸びる蔓延植物で、花は白く芳香をもつ。

一七　非常なよろこびを表現するにしばしば「体毛が逆立つ」という言いかたをする。

一八　プンナーガ樹　ケーサラ樹のこと。学名 Rottleria tinctoria or Mimusops elengi.

一九　蓮華の蕾のような合掌　敬意を表わす合掌の一種。

第三章　ソーマダッタ物語

「王さま、あなたの蓮華の足(注一)を探し求めて歩きつづけるうち、私はある森林のほとりで渇きに苦しみ、つる草の覆い茂る流れの水を飲みながら、見ると、そこにはきらきらと輝く宝石がありました。それを拾ってまたしばらくの道程を行きますと、陽ざしはあまりに熱く歩行も困難となりましたので、その原始林の僧院にはいりました。院内に、多数の子を抱えて、ひどく生気のない顔つきをした老バラモンのいるのを見て、私は気の毒になって尋ねました。

『どうしたのですか』

　バラモンは貧乏で色蒼ざめた顔ながら、期待の色を表わして答えました。

『貴いお方、母に先立たれたこの子供たちを種々の手をつくして養育しながら、荒れたこの地で施物を得るたびにかれらに与え、いまもってこのシヴァのお堂に住んでおります』

　私はまたこう問いかけました。

『地の神(注二)(バラモン)よ、あの野営の軍の主はどこの国の王さまだろうか。名は何と申し、いかなる理由でこの地に来たのだろうか』

　バラモンは答えました。

『貴人よ、あれはマッタカーラというラータ国(注三)の王さまです。この国の王ヴィーラケートゥの王女ヴァーマローチャナーが宝石のように、くらべようもなく美しいと聞いて、都パータリーを包囲いたしました。さすがのヴィーラケートゥ王も恐れをなし、まるで貢物のように王女をマッタカーラに捧げたのです。美女を手に入れたラータ国王は喜び勇んで、

〝婚礼はわが都で行ないたい〟

と心にきめ、自国に向かって行軍の途中で狩猟を思いたち、この森林に露営しているのです。マーナパーラという、ヴィーラケートゥ王の誇り高い宰相が、王女のお伴を委任されて、四軍を従え他の場所に宿営しておりますが、自国の王の屈辱におさまらず、心を痛めております』

　私はあわれみを催しまして、

『このバラモンは子だくさんで、学識があるのに貧困なうえ老齢である。施物を贈るにはちょうどよい』

　と思って宝石を与えました。バラモンは顔をほころばせて喜び、幾度も感謝のお祈りをして何処かへ出て行きました。旅に疲れきっていた私はその場で安らかに寝入ってしまいました。

　ところが、しばらく経つと、そのバラモンが、うしろ手に縛られ、身には鞭うたれた傷あとも生々しく、多勢の剣を佩びた兵たちに追い立てられてやって来るや、

『これが盗人です』
と、私を指し示しました。兵たちはバラモンを放免し、私が宝石を手に入れた経緯を話すのも聞かずに——私は少しも恐れはしませんでしたが——堅く縄で縛ると、牢にひきたてました。〔そして牢内にすでに〕縛られている見知らぬ者たちを指して、
『やつらもお前の仲間だろう』
といって私の両足を縛りました。どうしたらよいやらとほうにくれた私は、希望の持てない苦痛を味わって〔同囚の〕かれらに声をかけました。
『さて、屈強の衆、いったいあなた方は何が原因でこの不愉快で我慢のならない牢にはいったのか。また兵たちがあなた方を指して〔私の〕仲間だといったのは何故だろうか』
私のこんな様子をみて、かれら屈強な盗賊どもは、〔すでに〕私がバラモンから聞いていたラータ王の消息を語り、続いてこう告げました。
『貴人よ、われわれはヴィーラケートゥ王の宰相マーナパーラの下僕です。その命令によってラータ王暗殺のため、夜の間に地下道を掘り抜き、部屋に侵入したのですが、そこに王はいませんでした。がっかりしたわれわれはたくさんの財宝を奪って森林に逃れました。翌日になると、多数の王の配下が探しに来て、財宝をたくさん持っているわれわれを四方から取り囲み、厳重に縄をかけてひき立てました。品物を残らず調べたあげく、高価な宝石が一個だけ無かったものですからその宝石を取りかえそうとして、われわれをこんなに縛って閉じ込めたのです』
聞くところによると宝石は私が発見したものらしく、
『たしかにこれがあの宝石である』
と確信いたしましたので、
『それはバラモンに贈ったもので——』
と自分の苦境、素性、名前や、あなたを探し求める旅のことを話しますと、すっかり話が合って親睦をかためました。やがて夜も更けて、私はかれらの

捕縄と私自身のとを断ちきり、かれらを率いた私は、眠っている門衛たちの武器をたくさん奪い、さらに街の巡警たちが私たちのほうに向かってくるのを巧みに脅やかしてやすやすと追い散らし、マーナパーラの幕舎に着きました。宰相マーナパーラは、自分の召使たちから私の素性や誇りについての報告と、その時の武勇とを聞いて敬意を表わしました。
翌日、マッタカーラ王から派遣された幾人かのものどもがマーナパーラを訪れて、
『宰相よ、わが王の幕舎にて盗賊どもが地下道づたいにあまたの財宝を奪い去り、あなたの軍営に逃げ込んでいる。かれらを引き渡していただきたい。さもないと、ためになりませんぞ』
と暴言をはきました。それを聞くと宰相は眼をまっ赤にして怒り、
『ラータ国王とはいったい何者か。かれの友誼とはいったい何のことか。そのうえこのふびんな者どもを引き渡したとて何のとくがあろう』
となじりました。使いの者たちはマーナパーラの抗議を言葉どおりにマッタカーラ王に報告いたしました。激怒したラータ国王もまた武勇を自負しておりますから、僅かの手勢をよせ集めて戦いをしかけて来ました。マーナパーラはとうに戦う覚悟をかため、兵には武装させて待機していましたから臆することなくたち向かいました。私もまた宰相から恭々しく贈られた多数の馬と、御者つきの戦車、がんじょうな甲冑、自分にてごろな弓、そして各種の矢をつめた一対の箭筒など必要な武器で武装し、力量には自信をもって、敵の絶滅を期する宰相に従いました。
互いに殺気みなぎり、騒々しく戦う両軍をかきわけて、私は腕前の見せどころとばかり矢の雨を注ぎながら敵を攻めました。次いで馬どもの猛り立つわが戦車を敵王に向けるや、すばやく追いついてその乗車に躍りかかり、首を切って落としました。敵王が倒れ、残された兵たちが逃げ去りました時には、

各種の馬、象などをはじめ分捕りの品がたくさんありました。宰相は大いに喜び、私をさまざまな方法で賞賛いたしました。

マーナパーラの派遣した使いの者から、これらすべての消息を聞いた王さまはご満悦で、私の勇気に驚かれ、宰相や親族の承諾のもとに、吉日に大がかりな祝祭をあげて王女を私に与えられたのです。

やがて私は摂政に任ぜられ、父王に信頼されて毎日を送り、妻ヴァーマローチャナーとさまざまな幸福にひたる間も、あなたとの別離の苦痛が茨のように心を刺しておりました。そこで予言者の言葉に従い、マハーカーラにおわす尊いシヴァ天のお恵みを得ようと、あなたとの再会を期して、ただいま妻とともにここに着いたところです。崇拝者をあわれみ給うシヴァ天のお慈悲によって、私はあなたの蓮華の足に会えるという大きな喜びを授かりました」

聞きおわって、その勇気を賞賛したラージャヴァーハナは、罪もない彼（ソーマダッタ）を運命が〔誤って〕懲らしめ苦しめたのだと思い、それから自分の経過を逐次に語り聞かせた。ちょうどその時、眼前になんと、プシュポードバヴァを発見したのである。かれはとまどいながらも自分の前額が足許につくほど恭礼し、合わせた手を頭上に捧げた。王子はかたく抱擁し、眼には喜びの涙をたたえてじっと見ながら、

「友、ソーマダッタよ、プシュポードバヴァがいるぞ」

と教えた。両人は長い別離の苦痛も終わって、まためでたく互いに抱擁しあったのである。

それからまたもとの樹蔭にはいると王子はこう言った。

「友よ、私はバラモンの企てを助けたいと思っていたので、『友の諸君はいずれにしても妨害の生じた原因を悟ってくれるに違いない』と〔考えて〕あなた方の寝ている間に立ち去ってしまった。その後、目ざめてから諸君はどのように裁決したか。私の捜索に何処へ向かったか。またあなたはただ一人で何処で過ごしたのか」

合掌の手を額につけて、彼（プシュポードバヴァ）もまた礼儀正しくこう語った。

注

一 蓮華の足 原文はチャラナ・カマラ（蓮華のような御足）。またパダ・アーラヴィンダ（同意）などとある。貴人への敬語。

二 地の神 バラモンを地上の神と尊称する。

三 ラータ国 ヴァラビー地方を北ラータ国と呼ぶのに対して、マーラヴァ地方を南ラータ国とする。ともに南インドの古国。

第四章 プシュポードバヴァ物語

「王さま、きっと王さまはあのバラモンに力をかすために行かれたのだ」と友だち一同は確信いたしました。けれども王さまの行く先が確かめられませんので、めいめいがいろいろの方角に散って捜索に出かけました。

私も王さまを探して各地に旅をしておりますうち、ある日、中天にかかる太陽の日ざしに耐えられず、しばらくの間ある山の麓の樹蔭のすずしい所にはいりました。ふと気がつくと、私の前に、まひる時のためか身を縮めた亀のような形をした人影が映りましたので、上を見ると、大へんな勢いで、さほど遠くないあたりに空から一人の男が落ちてきました。

私は気の毒に思い、男を空中で受けとめて、静かに平らな地面に横たえ、高い所からの墜落で気を失っていますのを冷やして手当すると、男は目が覚めました。私は嘆きのあまり眼に涙している男に、断崖から身を投げた理由を問いただしてみました。

男は手で涙の露を拭いながら申しました。

『貴人よ、私はマガダ国の宰相パドモードバヴァの息子でラトノードバヴァと申します。貿易商としてカーラヤヴァナ島へ渡り、ある商家の娘を妻にしました。妻をつれて帰る途中、海岸からさほど遠からぬあたりで難船し、すべてが沈んでしまいました。その時、私は幸いに、どうやら岸辺にたどり着きましたが、その後は愛する妻との離別に、嘆きの海(注一)をただよいつづけました。そして、ある高徳の苦行者の予言をたよりに十六年の歳月を、とにかく過ごしてきましたのに、いまだに、不幸の対岸(注二)も見えませんので、山から身を投げたのです』

ちょうどその時、誰か女の叫び声が聞こえてきました。

『ほんとうに、それはいけません。聖者さまも仰せられるように、夫と子供にめぐり会えるこの時になって、わかれの辛抱がならずに、火に身を投げるなどとは』

こう聞くや、私はすでに内心でその男が父だと気づいていましたので、話しかけました。

『父上、あなたにお話ししたいことがたくさんありますが、あとですべてを申し上げましょう。いまは婦人の叫び声を無視するわけにまいりません。ほんのしばらくここでお待ちください』

それから私は大急ぎで、いくらかの距離を走りました。その場で私は目の前に一人の婦人を見つけました。婦人は恐ろしい焔をあげる火の中に身を投げようとして、狂気のように手を合わせていました。私はあわてて焔からひき放し、嘆く老女といっしょに父のそばに戻り、老女に言いました。

『老女よ、あなた方二人はどこから森に来ましたか。

なぜ、不幸になったのですか。お話しください』

老女は口ごもりながら申しました。

『息子よ、カーラヤヴァナ島にカーラグプタという商人がいて、その娘をスヴリッターと申しました。愛する夫ラトノードバヴァと旅するうち、船は大海に沈みました。その時、乳母の私といっしょに一枚の船板にすがって、運よく岸に着きましたが、出産時がきて、見知らぬ森の中で夫人は男の子を生みました。けれども夫人につき添って行くうちに、運わるく、野生の象に子供を奪われてしまいました。〝十六年ののちに夫と子供にめぐり会うだろう〟という苦行者の言葉を信じて、時の来る間、ある聖仙の庵にすごしましたが、対岸のない苦労(注三)に耐えられず、夫人は燃える火の中に身を供えようとしたのです』

これを聞いてその夫人がわが母だと悟りましたので、私は棒のように平伏して、自分の消息を残らず母に語りました。それから乳母の話をきいて顔をほころばせ、驚いて目を見ひらいている父に〈母を〉ひきあわせました。両親は互いに記憶をとりもどし、心の底から喜びました。そして礼儀正しくしている私を堅く抱きしめ、頭に口づけして、樹蔭にはいりました。

『ラージャハンサ王はいかが過ごしておいでだろうか』と父は問い、私は王国の滅びたこと、あなた（王子）の誕生とすべての友だちの集まったこと、あなたの世界征服の企てやマータンガ（バラモン青年）への加勢、われ

われがあなたを探している理由など、すべてを話しました。その後、両親をある聖者の庵に留めました。

ついで私は王さまの捜索がおもな目的でしたから、あらゆる企てのもとは黄金だと心に決めて、あなたのおかげで習いおぼえた魔術を使って私を助けてくれるような弟子たちを養成いたしました。そしてヴィンディヤ森林の中心にある古い都の跡に行き、四方に見張り番を立て、魔法の眼膏（注四）を使って、樹々の根本の地下に埋蔵されている各種の宝を探り出し、たくさんの道具を用いて財宝のぎっしりつまった数数の壺を掘り出して、数えきれないほどのディーナーラ貨を積み上げました。その時、近くに隊商がきて休んでいましたので、そこへ行って牛や丈夫な袋をどっさり買い求め、袋のある限りつめ込んだ財宝を、違う品物に見せかけて牛に運ばせ、静かに隊商のほうへつれて行きました。

ある商人の息子で、その頭をつとめているチャンドラパーラと親しくなり、その男といっしょにウッジャイニーの都（注五）にはいり、わが両親もその都に呼び寄せました。バンドゥパーラというチャンドラパーラの父は、あらゆる美徳を具えた人物ですが、その人の案内でマーラヴァ国王に謁見し、その許しによって私は住居をつくりました。

さて無二の親友バンドゥパーラは、私が森林地帯にあなたを探そうと企てているのを聞いて、言いました。

『あなたは果てしない大地をくまなく探すことはできません。心のわだかまりを捨てて、静かにお待ちなさい。鳥占いのよい兆しを見たら、私があなたにしらせます。それがあなたの主君に会える手がかりです』

その甘露（アムリタ）のような言葉（注六）に力づけられて、私は毎日彼の近くで暮らしました。

ある日私は、顔は月のよう、若さは全身（注七）にみなぎり、目は月光と輝き、商家の福の女神の化身かと紛うばかりの、宝石のような美女バーラチャンドリカーを見て、たちまちその魅惑に、堅い心も動揺して、花の矢をもつ〔愛神カーマの〕矢の的（注八）となってしまいました。彼女もまたもの怯じした羚羊のような目で——それはカーマの花の矢のような力（注九）をもった盗み見でした——私を見るたびに、その身はそよ風にゆらぐつる草のようにおののいたのです。好意を誘う、恋しさと羞らいの心情が身に表われた特有のまなざしで、彼女は自分の意のうちを示しました。抑えられた身のこなしから彼女の愛がはっきり判ったあとで、私は楽しい会合のてだてを考えました。

ある日、バンドゥパーラは鳥占いであなたの行方を観ようと、都のはずれの公園に私を誘い、鳥たちの話し声を聞きながら、とある樹のほとりで立ち止まりました。私は気晴らしに森の中を散歩していますと、湖のほとりで、私の唯一の希望、だが愁いに沈む様子で顔も悲しげなバーラチャンドリカーを見かけました。驚いた彼女が愛と羞らいとせつない思いをこめて見る目に魅せられて、私は幸せでいっぱいになりながらも、〔いつも〕美しくほほえんでいる彼女の蓮華のような顔に、〔いまは〕愛情すら押し潰すほどの悲しみを認めましたので、その原因を知ろうと、ゆっくり彼女に近づいて言いました。

『うるわしのひと、あなたのお顔の冴えないわけを聞かせてください』

彼女は人しれぬ隠れた場所での安心から、はにかみも怖さも忘れてとつおいつ語りました。

『優しいひとよ、マーラヴァ国のマーナサーラ王も寄る年波には勝てませず、王子のダルパサーラを都ウッジャイニーの王位につけました。その王子は七つの海を繞らす全世界の征服を望むあまり、チャンダヴァルマンとダールヴァルマンという二人の乱暴な従兄弟に国の維持をまかせて、苦行に専念するためにラージャ・ギリ（注一〇）の山へまいりました。チャンダヴァルマンが恐れるものもなく専政をしく間に、ダールヴァルマンは伯父〔マーナサーラ王〕や兄のいいつけも聞かず、ひとの妻や財産を奪うなど、かず

かずの悪事をはたらいたあげくのはて、ある日、カーマの神にも劣らぬ美しいあなたに心を寄せている
この私を見ると、生娘を犯す罪もかまわず力ずくで思いをとげようといたしました。私はそれが気がかりで心も暗くなりました』

彼女の私への溢れる愛情と、また私のせつなる望みを達するのに妨げとなる話を聞いて私は、目に涙する彼女を慰め、ダールヴァルマン殺害の策をめぐらしてから愛するひとに言いました。

『いとしいひとよ、あなたに言い寄る腹黒い男を倒す一計を案じました。あなたは次のように言って、たよりになる友だちを通じて、公衆の前で繰り返し吹聴させなさい。〃高徳の聖者がこう言われます。バーラチャンドリカーにはあるヤクシャ[注一一]が憑いている。彼女の美しい容姿に心を惹かれ、付添いの女一人だけの寝室で、ヤクシャに負けずに、鹿のように美しい目の彼女と睦み合い、アムリタの幸福[注一二]を得てめでたく出て来られるほどの大胆な男なら、チャクラヴァーカ鳥[注一三]にも劣らぬ美しい胸をもつ女をめとるがよい〃

さて、そこでダールヴァルマンがこの噂を幾度も耳にして、もし恐れをなして思いとどまるならそれでよろしい。またもし――なにしろかれは手に負えない男ですから――あなたに近づこうと名乗り出る場合には、あなたの友だちにこう言わせなさい。

〃貴人よ。ダルパサーラ王の宰相たるあなたが、このような家でそんな大胆なことをなさるのは不似合です。都の人々の立合いのもとに、蓮華のように美しい眸の彼女をあなたのお邸に案内して、お戯れなさった結果、もしあなたのお生命にお変わりがなければ、その時は彼女を妻にして胸の望みをおとげください〃

彼はこれにも応じるでしょう。あなたは彼の邸に行きなさい。私も女装してあなたのお伴をします。私は邸内の一室で、拳や膝や足ですばやくかれを打ち殺したうえで、またお伴のふりをして心も安らかに、あなたに付き添って外へ出ましょう。ですからあなたはこの計画に賛成して、恐ろしいことも羞かしいこともお忘れなさい。父母兄弟には私たち二人の溢れるほどの愛情を話して、なんとしても結婚の理由を説得なさい。私には家柄と財産と若さとが揃っていますから、おそらくあなたをもらえると思うのです。さあ、打倒ダールヴァルマンの計画を彼ら(両親兄弟)にうち明けて、その返事を私に聞かせて下さい』

彼女もまた顔はなにか蓮華のほころびる風情[注一四]で答えました。

『愛するひとよ、残酷なダールヴァルマンはあなたに殺されても当然です。彼が倒れた時に、いずれにしてもあなたの望みは叶うのです。おっしゃるとおりになさいませ。私もすべてあなたのお言葉どおりにいたしましょう』

と、彼女はなん度も私をふりかえりながらゆっくりと家に向かいました。

私はまたバンドゥパーラの傍に戻りますと、彼は鳥占いの結果判断して、三十日後に私は必ずあなた(王子)と再会すると申しました。バンドゥパーラは私をつれて彼の家に行き、それから私を家に返しました。バーラチャンドリカーは使いの女をよこし、ダールヴァルマンは私の計略の罠にかかりバーラチャンドリカーを招くことになったので、彼女はそこへ行く、とのことでした。私は宝石の足飾り[注一五]、腰帯[注一六]、手くび飾り[注一七]、腕環、耳飾り、真珠の首飾り、亜麻の上衣、化粧墨[注一八]など婦人特有の装飾を巧みにそれぞれの位置につけて美しく盛装し、愛するひとに付き添って彼(ダールヴァルマン)の邸の門口を訪ねました。門番がわれわれの着いたのを告げると彼は丁重に出迎えました。戸口の隅にすべての召使たちを遠ざけて、かれはバーラチャンドリカーと付き添う私を定められた部屋へ案内いたしました。人々は町にひろまったヤクシャの噂を確かめたい好奇心で、ダールヴァルマンの門口のあたりに集まりました。

欲情のあまり気もそぞろになっていた彼は寝台に彼女と私をつれて行きました。寝台は宝石をちりばめた黄金造りで、白鳥の羽毛で作った夜具をそなえています。彼はあいにくと夜の暗さのため、きれいに女装した私を男と見破れなかったのです。そして黄金や宝石をあしらったかずかずの高価な装身具や豪華な衣服、麝香入りの栴檀(せんだん)、樟脳を混ぜ合わせたターンブーラ(注二)、香り高い花などたくさんの品を私たちに与えて、ニムフールタ(注三)の間ににこにこしながら話しました。

やがて欲情に目がくらんだ彼は美女を抱きしめようという野心を起こしました。私は怒りに燃えて容赦せず、彼を寝台から引きずりおろし、拳や膝や足で打ち殺してしまいました。激しい格闘で乱れた装身具をもとのとおりに直してから、恐ろしさに慄える愛人をやさしくなだめて邸の中庭におりると、怯えたような金切り声で叫びました。

『あれ、ダールヴァルマンがバーラチャンドリカーに憑いた怪物ヤクシャに殺されました。急いで見にきてください』

これを聞いて集まった群衆の、涙ながら泣語り合い、ため息をする騒がしさは天までも届くほどでした。そして互いにこう語らいながらはいって来ました。

『ダールヴァルマンは、バーラチャンドリカーにはてごわいヤクシャが憑いているのを知っていたのに、欲情に目がくらんで女を手に入れようとした。それで自業自得で殺された。彼を惜しむ者があろうか』

このような騒ぎの間に、私は驚いて目を回している彼女をつれて巧みにすばやく家に帰りました。こうして数日ののち、都の人々の見まもる前で、聖仙の指示を仰いで彼女と結婚し、かねての望みどおりの幸せを思うさまたのしみました。バンドゥパーラの鳥占いが予告した今日、私は郊外に出て、幸いにあなたにお目にかかることもまた叶ったのは、目の祝典というものです」

ラージャヴァーハナは以上のような友の物語に耳を傾けたのち、心も晴れやかに自身とソーマダッタの物語を彼に話し、

「ソーマダッタよ、マハーカーラの主シヴァ天に詣でたら、直ちに妻と召使とを家に返して、あなたは〔ここへ〕来なさい」

と命じた。そしてプシュポードバヴァを従えて地上の天国アヴァンティ(ウッジャイニー)の都にはいったのである。その地でプシュポードバヴァはバンドゥパーラを始め関連ある者たちに、

「この方はわれらの王子です」

と紹介したうえで、ラージャヴァーハナに対しては種々の礼をつくさせた。また一般の人々には、

「あらゆる技芸にすぐれたバラモンです」

と披露しておき、主君に対し日々に香油を塗ること、(注三)食を饗すること、その他のことを〔家人に〕させた。

注

一　嘆きの海　悲しみを大海にたとえたもの。また前の船の沈没という海難に対比させた表現。

二　不幸の対岸　嘆きの海の終点。

三　対岸のない苦労　終点のない苦痛。

四　魔法の眼膏　これを目に塗ると秘密の財宝を見透せる、というもの。

五　ウッジャイニーの都　マーラヴァ国の首都。マガダ国の西南にあり、シヴァ神をまつる聖地。バラモンたちを「地上の神神」と呼ぶのと同じ意味から、のちにこの都を「地上の天国」と表現している。

六　甘露　アムリタは元来「死せざるもの」の意から「不滅」「神」を意味した。また不死の飲料としてソーマ酒の別名とされ阿蜜哩多、甘露などと訳された。ここでは慰めの言葉をその霊薬

アムリタにたとえたもの。

七　福の女神　原文はラクシュミーで美と福徳の女神。商家における福徳・繁栄を象徴するものとしてこの訳をとった。わが国では古く吉祥天女と訳された。

八　〔愛神カーマの〕矢の的　カーマ神の矢に射られた者は恋に陥る。ギリシャ神話の愛の神エロス（またはキューピッド）に似ている。

九　カーマの花の矢のような力　ためらいながら見るパーラチャンドリカーの視線をカーマ神の武器（花の矢）の威力にたとえた。注八参照。

一〇　ラージャ・ギリ　異本、ラージャラージャ・ギリ。カイラーサ山のこと。財宝神クベーラの住所とされる。

一一　ヤクシャ　薬叉、夜叉などと訳される鬼神である。

一二　アムリタの幸福　アムリタは注六参照。ここでは美女と密室に語り合う楽しさをアムリタ（甘露）にかけ、また鬼神ヤクシャに負けずに無事に室から出られることをアムリタ（不死）にたとえた表現。

一三　チャクラヴァーカ鳥　夫婦つねに行動を共にし、別離の悲哀には夜ごと泣くという。女性の豊かな胸の二つの円みはしばしばこの鳥の夫婦にたとえられる。鴛鴦。

一四　蓮華のほころびる風情　愁眉を開くこと。

一五　宝石の足飾り　ヌープラという。くるぶしのあたりにはめる飾り。

一六　腰帯　メーカラー。四姓のうち再生族のみが身につけられる帯紐。再生族は前篇第一章注四参照。

一七　手くび飾り　カンカナ。手頸を飾るもの。次の腕環はカタカである。

一八　化粧墨　カッジャラ。眼瞼や睫毛に用いる。

一九　ターンブーラ　胡椒科の蔓延植物でその葉を特に担歩羅と言う。刺激性の味を有し、葉に檳榔子など芳香性のものを包んで噛む清涼剤。ターンブーラは俗にベテルといい、現在は一般にパーンという。

二〇　二ムフールタ　ムフールタは時間の単位。一ムフールタは約四八分といわれるから二ムフールタは約一時間半。

二一　香油を塗ること　香油はアンジャナ、皮膚や眼に塗る軟膏。

第五章　アヴァンティスンダリー姫の結婚

春が来て、カーマの軍(注一)を率いる南の風は、マラヤ山(注二)の樹々にむらがり棲む蛇たちの吐息のように微かに、また栴檀の香気の重荷に堪えかねるかのように緩やかに、漂って来る。春はこうして、別離の心に愛の火を燃え立たせ、サハカーラ樹(注三)の若芽や花の蜜をよろこぶコーキラ鳥(注四)や密蜂の低い囁きの混声で地表をくまなく揺りおこし、誇らしげな婦人にも気まぐれ心を起こさせ、マーカンダ(注五)・シンドゥヴァーラ(注六)・紅アショーカ(注七)・キンシュカ(注八)・ティラカ(注九)の樹々には蕾をあたえ、春の神カーマの祭に備えて人々の多感な心を躍らせつつ、やって来た。

いとも快いこの時節に、アヴァンティスンダリーというマーナサーラ王（マーラヴァ国の前王）の王女は、親しい友バーラチャンドリカーや多くの都の美女たちとともに郊外のすばらしい公園に散策を思いたち、とある若いチュータ樹(注一〇)の葉蔭もすずしい砂地に、白檀粉、花、鬱金香(注一一)を混ぜた穀物、鉛丹(注一二)、竜涎香(注一三)などさまざまな香気あるものを愛神カーマに供えて楽しんだ。

ちょうどそこへ、神妃ラティー(注一四)にも似たアヴァンティスンダリー姫にひと目会いたいと、春をお供に〔やって来る〕愛神カーマさながらに、ラージャヴァーハナ王子もプシュポードバヴァをお供にして公園にやって来た。あちこちに密生するラサーラ樹(注一五)の枝はマラヤ山の南風にゆらぎ、競い生ずる若芽、花、果実の美しい眺めにコーキラ鳥(注一六)、鸚鵡、蜜蜂たちの歌声を聞きながら、みだれ咲く青蓮、黄蓮、白蓮、紅蓮、またつらなり遊ぶカラハンサ(注一七)、鶴、家鴨、チャクラヴァーカ鳥たちの若く柔らかい声の溢れる池ごとに、さざ波の清らかに光り揺れるのを眺めながら、王子は心も軽く姫の近くに進んだ。バーラチャンドリカーに、

「ご遠慮なく、どうぞこちらへ」

と手招きされ、インドラ神をもしのぐ威光を備えたラージャヴァーハナは腰の細いアヴァンティスンダリーに対面した。

王女の美しさはきわだっていた。それはまさしく愛神カーマが愛妃ラティーの面影を心に描いて、個性ある一人の女性を創造したかに見えた。というのは、おのれの池の色とりどりの蓮華の美しさで〔彼女の〕両脚を〔創り〕、林園の池に楽しげにあちこちとゆっくりつらなり歩む白鳥のさまであでやかな歩態(あゆみ)を、愛らしい箙(えびら)で両腿を、優雅なカンダリー樹(注一八)ですばらしい両腿を、勝利の戦車の両輪で豊かな臀を、華鬘(けまん)に開きそめた睡蓮の窪みをもった蕾に模して、恒河(ガンガー)の流れの渦にも似た臍を、宮殿の階段を変じて腹部の三条の襞(注一九)を、カーマの弓弦をなす蜜蜂の

つらなりの黒さに似せて腹部の細毛の列(注二〇)を、金色に輝く水甕で両つ(ふた)の乳房を、園亭のなよやかな蔓草で両腕を、勝利を告げる法螺貝の魅力で喉を、好んで耳飾りにする紅色のサハカーラ花でビンバ(注二一)の実を描いたような紅唇を、花の矢の美しさで清らかな微笑を、カーマの第一の使者たるカラカンティカー鳥(注二二)のやわらかい鳴声で音声を、香ぐわしい全軍の指揮者たるマラヤの微風で息づかいを、誇りある勝利の旗の二尾の魚の標識で両眼を、上品な弓で両眉を、無二の親友たる月から黒いしみ(注二三)を除いたような輝かしい美しさで顔を、あでやかに波うつ孔雀の尾羽で豊かな髪を、創造したかのようであったからである。そればかりでなく、これらいっさいを麝香と白檀香を蜜に混ぜあわせたものの中に浸し、そのうえ、樟脳の粉で磨きあげて創り出したかと紛うほどであった。

美の女神の化身さながらのマーラヴァ国の王女は、敬礼の返礼に恵みを垂れようとする慈悲ぶかいカーマ神の化身さながらに、王子を見て恋に陥り、あたかもそよ風にゆらぐ蔓草のように身を慄わせた。そして遊びの安らぎも消えうせて、羞らいのあまり言いようもない情緒(注二四)にとらわれた。王子も驚きと慕わしさから、

『数ある美女を創ったなかでも、このひとだけは創造主にとっても恐らく思いがけない偶然の創作にちがいない。もしそうでなければ、このような作業〔創造〕に熟達した梵天(ブラフマー)はこれにひとしい美女を、なぜ、他にも造らなかったのか』

と考えて、じっと見つめた。王女は顔を向き合わせているのも羞かしく、友だちの中に身をかくし、眉をひそめて横目づかいに王子をぬすみ見た。彼女は鹿であり、王子ラージャヴァーハナは〔これを捕える〕網である。

王子もまた王女の発する情緒と感情(注二五)のすべてを受けて、心はさながら愛神カーマの軍勢に囲まれ五本の矢の標的となったありさまであった。王女の思い

はこうであった。
『たぐいまれなこの方の魅力が、何処の都で幸運な女たちの目を喜ばせたことでしょう。みごもって分髪(注3)する婦人は多いけれど、いったいこの玉のような子を持って分髪した立派な女性はどんな方かしら。どなたのお妃かしら。ここへおいでになったのは何のためでしょう。カーマの神さまは自分の美しさをしのぐこの方に私が見とれているのをこころよからず思われてか、(「悩ますもの」という)そのお名のとおり(注4)たいへん私を苦しめます。どうすればいいのかしら。なんとしてもこの方とお近づきになりたい』
　さてパーラチャンドリカーは情緒に関する狂いのない判断により、二人の恋のありさまを知ったのであるが、友の大勢いる中で王子の身の上を残らず告げるのもよくないと思い、極くあたりさわりのない話をした。
「王女さま、あの方はあらゆる技芸に秀でておられまして、神の権化かと思われるほどなのです。神様に捧げる犠牲にも通じたバラモン青年で、宝石や呪術や薬草の知識もあり、尊敬するに足る方です。どうぞ敬意を表してくださいませ」

　こう聞いた王女は、パーラチャンドリカーの言葉が自分の願うとおりだったので、心うれしく、身はあたかも風に波立つように恋に陥ちた。そしてカーマにも劣らぬ王子にふさわしい聖座をしつらえ、女の友だちの手をかりて、香りの高い花、穀物、樟脳、ターンブーラなどさまざまの品を運ばせて敬意を表したのである。
　ラージャヴァーハナ王子もまたこう考えた。

『たしかに、かの女性は前世の妻ヤジュニャヴァティーに違いない。もしそうでなければ、彼女に対し、これ程の愛情は私の心に起こらないはずだ。苦行者の呪咀の終わった時には二人の前世の記憶も一致するだろう。とにかく、私はその当時起こった特殊なことを話して、彼女に想い出させよう』
　その時、きれいな白鳥が一羽、王女の傍に遊びにやって来た。王女の望みにより命ぜられてパーラチャンドリカーが白鳥を捕えようとするのを見て王子は『話しかけるにちょうど良い機会だ』と思った。ラージャヴァーハナは話術も巧みだったので興味ふかくこう語った。
「王女よ、むかし、シャーンバという王さまが散歩を思い立ち、愛する妻とつれだって蓮の豊かな池に行きました。そこの紅蓮のしげるあたりに白鳥の眠るのを捕えて、蓮の繊維の紐で両足を縛りました。そして妻の顔を愛情をこめて眺めながら、ゆっくりほほ笑み、頰をまるくふくらませてこう言いました。
『美しい妻よ、私に縛られたのにこの鳥は落ち着いたもので、まったく聖者のようだ。これを好きなようになさい』
　ところが白鳥はシャーンバ王を呪いました。
『王よ、われはこの蓮の群なす中で、修行に専心してこの上ない法悦に達し、しっかりと不動の境地にあった。それをあなたは王位に驕って辱しめたのである。さればこの罪により、愛妻との別離の悲しみをなめるがよい』
　シャーンバ王は顔をくもらせて、生命の主たる妻との別れのつらさに堪えがたく、棒のようにひれ伏して、ねんごろに申しました。
『聖者さま、知らずに犯したことですから、お許しください』
　苦行者の心にあわれみが起こり、王に言いました。
『王よ、この世ではあなたへの呪いが生じないようになろう。だが私の言葉はとり消すこともならぬ。あなたは次の世で、その蓮華の〔ように美しい〕目

の女性を愛して夫となる。そして私の両足を二ムフールタの間束縛したかわりに、あなたは二ヵ月の間足枷をされて、いとしい妻と別れの苦をなめる。だがその後は末ながく王として妻と幸せに暮らすがよい』

そういったうえ、その苦行者は前世を憶えている力をも二人に授けてくれました。ですから、あなたはその鳥を捕えるのをおやめなさい」

この物語を聞いた王女もまた自分の前世のできごとを想い出し、確かにこの方は私にとって生命の恋人であると思うにつけても恋しさはつのり、ほほ笑みながら言った。

「優しいひとよ、むかし、シャーンバ王はヤジュニャヴァティー妃に請われるままに、このような白鳥を捕えました。平生は分別ある方ですのに、そんなことをなさったのも夫人に対する愛情からです」

このようにして王女と王子の二人は互いに前世の名を知り、さらに互いを認めあうための記憶を語り合って、心は情熱で溢れた。

その時、マーラヴァ国の王妃が大勢の召使たちをひきつれて、娘の遊戯を監視にその場に着いた。けれどもバーラチャンドリカーは遙かかなたにそれを発見し、慌てて、かくし事が見破られないように警戒して手まねで合図し、プシュポードバヴァのつき添うラージャヴァーハナを樹のしげみに隠した。マーナサーラの王妃はしばらく留まって、王女が友だちとさまざまな遊戯に興ずるのを見て楽しんだのち、王女をつれて宮殿へ帰ろうとした。

アヴァンティスンダリー王女は母の後につき従いながら、まさしく鳥に話しかけるふうに、王子にあてて言葉を投げた。

「ラージャハンサ族(注八)のかざりよ。公園で、せっかく私のそばに来たあなたを不意に残して行きます。私は心ならずも母のお供でまいりますが、どうか心変わりをしないように」

王女は悲しげな目でいく度もふり返り、〔王子の〕顔を求めつつ王宮へ帰って行った。

宮殿で、意中の人の話の出たおり、王女は友バーラチャンドリカーからその家系や名前を聞いたので、心は愛神カーマの矢に撃たれ、乱れて、別離のつらさに月の虧(か)けた姿のように悩み衰えた。そして食事をはじめいっさいを避けて、静かな部屋の中の白檀の香液に浸した花や蕾で飾りつけた寝台の上に、蔓草のように痩せた身を横たえていた。女の友人たちは、恋の焔に焼かれてそのようなありさまになった王女を見ては心も安らかでなく、黄金の水甕になみなみと、黄檀、ウシーラ(注九)、樟脳を混合したふりかけ水や蓮の繊維で作った衣服、蓮の葉の扇など爽やかにする品をいろいろ運んでは王女の身を冷やした。けれどそのような涼気の看護も、まったく煮えたぎる油に水を注ぐようなもので、王女の身の熱をいよいよかき立てるばかりであった。

手の施しようもなくなったバーラチャンドリカーが気おちしていると、王女はわずかに目を開き、涙の雫(しずく)をたたえ、伏目がちに見て、別離の焔に焼けた唇から吐く息もかぼそく、喘ぎながら言うのだった。

「親しい友よ、カーマの神の武器は花の矢が五本、といわれますが、きっとそら言(ごと)です。この私はかぞえきれないほどの鉄の矢で射られて死にそうです。友よ、私にはお月さまさえ冥府の灼熱の火のように思われるのです。その月が海に沈むときは海の水をも干してしまいますが、海から出ると、海水はまた元のようにふくれてしまいます。(注一〇)お月さまの罪を私はどういったらいいか、それはご自分の妹の女神ラクシュミーさまの、住んでおいでになる蓮華(注一一)さえ枯らせてしまうでしょう。マラヤ山の涼風でさえ、別離の焔に燃えるこの胸にふれたら熱して溶けてしまうでしょう。開き初めた蕾をあしらったこの寝台も、ちょうど恋の焔をたばねたように身を焼きます。黄色の栴檀〔の香り〕さえ、かつて幹に絡んでいた蛇たちの牙から、たくさん毒を受けていたかのように身を苦しめるのです。ですから、冷やしてくださる

介抱はもうもう結構。カーマさまにも勝る美しい王子さまこそ、恋の熱病のお医者さまです。けれど、あの方は得られません。どうすればよいのでしょう」

　バーラチャンドリカーは、かよわい王女の恋の熱病の重いこと、すぐれた王子にたよるほか救いのないこと、を見てとって考えた。

『私は王子さまを急いでおつれしなくてはいけない。さもないとカーマ天は王女さまをあの世へ案内してしまいそうだ。公園でお二人が出会ったとき、〔カーマの〕矢は同時に〔二人を〕射ている。とすれば王子をおつれ申すはたやすいこと』

　そこで看護に手なれている女友だちにアヴァンティスンダリー姫をまかせて、王子のすまいを訪ねた。

　ラージャヴァーハナ王子は、花の矢を収めたカーマ天の箙にも似た心で、恋の火に熱せられた肢体にふれて花も凋んだ寝台に横たわっていた。そして生命の主たる恋人のことなどプシュポードバヴァと語らいながらも、〔王女の〕親友の訪れを見るや、

『バーラチャンドリカーの訪問はまったく木の根をもとめる蔓草のようだ』

　と心に感じるのであった。掌にくぼみを作った彼女の合掌は美しく、さながら前額を飾る蓮華の蕾のようであった。王子が、

「ここへおかけなさい」

　と指し示すと、ほどよく座を占めた彼女は王女アヴァンティスンダリーからの樟脳入りのターンブーラの贈りものを恭々しく捧げた。王子がそれまでの王女の安否をたずねると、彼女は礼儀正しくこう語った。

「王子さま、公園であなたにお会いして以来、王女さまはカーマ天に苦しめられ、花の寝台にあって熱もさがりません。まことに一寸法師が高い木の果実を取るに取れないありさまです。恋に盲目となり、あなたのみ胸に抱かれる悦びを一途に求めておられます。そして、ご自分で文をしたため、愛する人にこれを手渡すようにと、私にお申しつけになりまし

た」

　王子は文を手にして読んだ。

「やさしき君よ、花のごと、
　この世に非もなき君が姿を見初めてのちは、
　わが心、ただひたすらに君を恋う、
　君が心も、変りなくやさしくあれと希うのみ」

　読み終わるや、王子は敬意をこめて言った。

「女友よ、あなたは、影の〔形に添う〕ように私に仕えてくれるプシュポードバヴァの愛する妻であり、また鹿のような目も美しい王女の身から出た生命のようなものです。あなたの賢明な行動は王女にとって樹の根のまわりの水溝です。私は何ごとでもやり遂げます。あのひとは私を無情と嘆きました。鹿のような美しい目のあのひとは公園に現われて、まったく私の魂を奪っておきながら、あなたと宮殿へ帰ってしまいました。あのひと自身のほうが心やさしかったのか、ひややかだったのか、あなたはご存じでしょう。後宮へ侵入するのはむずかしいが、よいてだてを考えて明日か明後日には私は王女に会うつもりです。私の消息をこう告げて、シリーシャ(注)の花のようにかよわいあのひとの身に障りのないように、よろしく願います」

　バーラチャンドリカーは愛情のこもった王子の言葉を聞いて喜んで後宮へ帰った。

　さてラージャヴァーハナ王子は別離〔の苦悩〕を癒そうと、プシュポードバヴァを従えて愛する人に幸運の会見をしたあの公園へ歩を向けた。チャコーラ鳥(注)の〔ような美しい〕目のひとがカーマ天を礼拝した所、かのひとの足跡を印した涼しい砂地、歯なみ美しいひとの残し去った食物、マーダヴィー(注)の蔓草のしげる園亭内の花の褥などを眺めつつ、かのひとを目のあたりに見たおりの名残りのかずかずを想い起こすのであった。そして微風にゆらぐ樹々の新芽が、さながら熱情の焔のように見えるのを眺めて驚くにつけ、またコーキラ鳥、鸚鵡、蜜

蜂たちの声が、あたかも恋の囁きとも思われるのを聞くにつけても、想いはつのり、何処にも、じっと立ちどまるに堪えずに歩を進めた。

その時、一人のバラモンが現われた。薄地の織物の美しい衣服を着て、きらびやかな宝石の腕輪を飾り、頭を剃った男をつれて偶然やって来たのである。バラモンは四方に輝く光の輪にかこまれたラージャヴァーハナを認めると、祝福の言葉を捧げた。王子は恭々しく、

「あなたはどなたで、またどのような道を修めておられるのですか」

と問うと、彼は、

「私はヴィディエーシュヴァラと申す魔術師(注8)だが、王侯を慰めるため諸国の旅を続けて、ただいま、この都ウッジャイニーに着いたもの」

と答えた。そしてラージャヴァーハナをもういちど度よく見直してから、さり気なく笑って、こう訊ねた。

「この楽園にいて〈顔色の〉蒼ざめているとは、どうかなさったのかな」

一方、プシュポードバヴァは事を運ぶ助けになると見てとったので丁重にこう言った。

「よくぞおっしゃってくださいました。私たちにはまことの友ができました。まことの友には何事もお話ししなければなりません。〈実は〉マーラヴァ国の王女が春の祭を祝いにここへまいりましたが、たまたまこの王子と出会い、お互いに深く心を惹かれました。けれどもしっかりと結ばれる方法とてなく、王子はこんなありさまになってしまったのです」

ヴィディエーシュヴァラはラージャヴァーハナの恥ずかしげな顔を見て、にっこり笑ってこう言った。

「王子よ、私がお手助けするからにはあなたに不可能なことは何もありはしません。私は魔術の知識を利してマーラヴァ国王の目を眩ませ、公衆の目の前で王女の婚礼の儀式を挙げて、〈あなたを〉後宮へ入れて進ぜよう。この話はあらかじめ女のお友だち

を通じて、王女にしらせておくのがよろしかろう」

王子はヴィディエーシュヴァラの好意がうそいつわりでなく、まことの善意と判り、魔術にもすぐれているのを知って、大いに喜び、この思いがけない友をあつく敬って別れた。

こうしてラージャヴァーハナは、ヴィディエーシュヴァラのすぐれた術のおかげで、望みを遂げたも同様の気持になり、プシュポードバヴァとともに家へ帰った。そしてバーラチャンドリカーの口から愛するひとにバラモンの教えた会合のてだてをこまかくしらせたのであるが、待ち遠しさのあまり、この夜をどう過ごそうか、と考えあぐねた。

あくる日は朝も早々、ヴィディエーシュヴァラは情緒(ラサ)と感情(バーヴァ)〈を生ぜしめる〉歌や行進もたくみに、これまた同様にたくみなお供を従えて、王宮の門に出かけた。門番に身分を告げると足ばやに進み出た。門番たちが、

「魔術師だと申すものが来ております」

と報告すると、もの見だかい後宮の女たちに囲まれているマーラヴァ国王は彼を招き入れ、ヴィディエーシュヴァラは宮殿の中に通された。おごそかな祈りを捧げたのち、王から開始の承諾を得た。従者たちの打ち鳴らす楽器や、女の歌手の歌うコーキラ鳥のような魅惑的な音声の中で、孔雀の尾羽の装飾がくるくると回転し、観衆の胸は期待にふくらむころあいとなった。付き添う者たちに囲まれた魔術師は勢いよく旋回してから、一瞬の間、目を半ば閉じて止まった。すると猛毒を吐きながら、真珠の飾りのような鎌首をふくらませた蛇が列をなして現われた。その蛇王たちを禿鷹どもが嘴で捕えて空中につれ去った。ついでバラモンは〃ナラシンハ〈人獅子〉(注9)の魔王ヒラニヤカシプ引き裂きの術〃を演じ終わると、感嘆する王に言った。

「王さま、最後にはめでたいことをお見せするのがよろしいかと存じます。そこでいく久しく幸運に恵まれますよう、姿かたちも王女さまにそっくりの

女子と吉相残らず具えましたる一王子との婚礼の儀を上演いたします」

王は好奇心で、見たいと思ったのでそれも承諾した。バラモンは目的を遂げる嬉しさで顔もほころび、あらゆるものを眩惑する〔魔法の〕軟膏を両眼に塗って、あたりを眺めた。観衆が、

「これも魔術のわざだ」

と感じいって見まもるうちにラージャヴァーハナ王子は熱情に心の花も開いて、かねて約束のとおりあまたの装身具に身を飾って現われた王女と婚礼の〔習慣に従って〕聖句と誓いにより、聖火の前で結ばれたのである。儀式が終わるとバラモンは声高に叫んだ。

「魔法の衆よ、去れ」

すると、幻の人々は次々に消えていった。ラージャヴァーハナ王子もまた、かねての望みどおりに、巧妙な仕かけによって人々とともに〔消えて〕後宮にはいった。マーラヴァ国王は大へん感嘆してバラモンにたくさんの施物を授け、

「ヴィディエーシュヴァラよ、では出発なさるがよい」

と別れを告げて宮殿の奥へ引きあげた。

さて愛するひとを得たアヴァンティスンダリー姫は女の友たちに付き添われて美しい居室に向かった。

かような次第で、天運と人力によってラージャヴァーハナ王子の思いは叶ったのである。そしてやさしく趣きのある態度で徐々に鹿のような美しい目の王女の羞恥をとり除き、欲情をよびおこし、ひそかに親しみの度を深めさせると、聞かせた話をそのまま繰り返す姫の声は甘露の美酒のように彼を酔わせたので、王子は心も躍る十四の世界の珍しい話を物語った。

注

一 カーマの軍　南の風は春の訪れを告げる先ぶれであり、愛神カーマの軍隊を率いる指揮官(ナーヤカ)である。第一章注一六参照。

二 マラヤ山　第一章注一六。

三 サハカーラ　マンゴー樹。

四 コーキラ鳥　杜鵑。第二章注二三参照。

五 マーカンダ　マンゴー樹の一種。

六 シンドゥヴァーラ　灌木で花は青色。

七 紅アショーカ　無憂樹。赤い花をもつ荳科植物。

八 キンシュカ　花は赤く、アショーカと混同されることがあるという。

九 ティラカ　樹名。

一〇 チュータ樹　アームラ樹ともいう。マンゴーの一種。

一一 鬱金香　Haridrā. 漢訳、姜黄。

一二 鉛丹　cīna. 注釈は次の ambara といっしょにして cīnāmbara（シナの絹布）とよみ、sūkṣmavastra（薄い衣服）と解しているが、ここは芳香のあるものを列挙しているので不適当と考え、別に訳した。

一三 竜涎香　ambara.

一四 神妃ラティー　愛神カーマの妃。

一五 ラサーラ樹　ここではマンゴー樹を指すようである。

一六 コーキラ　注四参照。

一七 カラハンサ　鵞鳥の一種。

一八 カンダリー樹　花は白色。

一九 腹部の三条の襞　ヴァリトラヤ、またはトリヴァリー、いずれも「三本のひだ」の意。女性の腹部に三本の横襞があるのを美人のしるしとする。サンスクリット文学特有の考えかた。田中「トリヴァリーについて」（福井博士頌寿記念東洋思想論集）三七八ページ以下参照。

二〇 腹部の細毛の列　romāvali, romāvalī. 婦人の臍の上部にある細毛の列。romāli, romarāji, romarājya, romalatā, などと

もいう。辞書には妊娠の徴とあるが、ここではあてはまらない。ヒンディー語の辞書によるとこれは縦の線であるらしい。

二一 ビンバ 第一章注一七参照。

二二 カラカンティカー鳥 コーキラ鳥。

二三 黒いしみ 月の斑点を兎とみるのはインドに始まる。

二四 情緒 bhāva. 注二五参照。

二五 情緒と感情 bhāva と rasa。情緒も感情も演劇上の心的状態を表わす用語。それぞれに恋・怒・勇・憎・悲・驚・怖などに関する八種の区別がある。

二六 分裂 第一章注二六参照。

二七 そのお名のとおり カーマも種々の異名を有するが、ここでは「マンマタ」(心を悩ますもの)と表現される。

二八 ラージャハンサ族 ラージャハンサ(白鳥)はラージャヴァーハナ王子の父王の名で、白鳥と王家の名をかけている。

二九 ウシーラ 芳香ある樹根。

三〇 その月が……ふくれてしまいます 満潮、干潮をさしている。

三一 ラクシュミーさまの……蓮華 ラクシュミーは蓮華の上に住むという。

三二 シリーシャ 合歓樹と訳す。

三三 チャコーラ鳥 鷓鴣(しゃこ)。伝説に月光によって生命を支える、と。

三四 マーダヴィー つる草の一種。

三五 魔術師 Aindrajālika, Indrajāla(インドラの幻術)の魔術を知り諸国を遍歴する者。一種の催眠術師のようなものらしい。

三六 ナラシンハ(人獅子) ヴィシュヌ天の種の化身のうちの一つ。頭は獅子、からだは人の姿になったヴィシュヌが魔神の会合に出かけ、魔族ヒラニヤカシプを鋭い牙で八つ裂きにしたという神話。

後編

第一章 ラージャヴァーハナ物語

美しい王女は世界の物語を聞き終わると目をみはって感嘆し、にっこりほほ笑んでこう言った。

「愛するひとよ。あなたのおかげで、私はいま私に耳のある理由がわかりました。心の暗闇が知恵の灯で晴れたようです。今こそあなたの蓮華の足に捧げた〔敬意の〕実がみのりました。そしてあなたのこのご親切にふさわしいお礼に、私はなにをさし上げたらよろしいでしょう。それというのも、私のものとては何もなく、私のものはみなあなたのものなのですから。けれど、私の自由になるものもないわけではありません。何故と申しますのに、私の意志がなければ、サラスヴァティー(注一)とロづけをしたあなたの唇も、私に接吻なさることはできませんし、また蓮華に宿る女神(注二)(ラクシュミー)の胸に触れたあなたの胸も、私を抱擁なさることもできないのですから」

こういって王女は愛するひとの胸の上に、その豊かに円い胸を寄せたが、そのようすはまことに重い雨雲が空を覆うかのようであった。(注三) そして激情のたかまりに赤く輝く目は、カンダリー(注四)樹の蕾が咲きいでたかと紛うばかり、豊かな黒髪は蜜蜂の群のよう、〔その髪を飾る〕色とりどりの花は、影におかれた孔雀の尾羽の目のように輝いて、王女は宝石のような、また、くれないの陽の光を受けて開くカダンバ(注五)の蕾のような、いとしい王子の唇に接吻した。そしてこれをきっかけに、にわかに激情がたかまり、両人はいく度もさまざまな非常に魅惑的な行為を重ね

て、愛の結合を遂げた。
しかし激情が尽きて二人が眠りにおちた時に、蓮の繊維のより綱で足を縛られている老いた白鳥が夢に現われ、やがて二人は目覚めた。すると王子の両足は銀の鎖で縛られているではないか。それはあたかも蓮華と感違いされて、月光の綱で繋がれたかのようでもあった。(注六) 王女はそれを発見して、
「いったいこれは何事でしょう」
と、恐ろしさあまって声を限りに叫んだ。それにつれて後宮内のすべての女たちは、火焔に囲まれたか、ピシャーチャ鬼(注七)にでも襲われたかのように恐怖に震えおののきつつ、前後の見さかいもなく、秘密を守る気遣いも失ってしまい、大地に身を投げ、咽喉も裂けよと叫び、頬の下まで涙の川を流して混乱に陥った。そのうえ、騒ぎのさなかのこととて侵入をさえぎるものもなかったので、警備の番人たちが、
「なんだ、何事だ」
とはいりこんできて、王子のそのありさまを発見してしまった。けれども王子の威厳に召し捕る気勢を挫かれたので、彼らはこの事件を〔摂政〕チャンダヴァルマンに報告した。
チャンダヴァルマンは怒りに燃えてやってきた。そして焔で焼きつくさんばかりの目で見まもるうちに想い出した。
「なんと、悪女バーラチャンドリカーめは余の弟を死に追いやり、夫のプシュポードバヴァはよそものの商人の息子で音にきこえた高慢もの、こやつはその仲間じゃな。おのれの風采のよさに酔い痴れた自惚れもの、さまざまのいかさまに長けたぺてん師め、神の威光をかりて愚民を惑わす悪事のかずかず、偽りの徳の衣にかくれて内心は不逞の痴れもの、にせバラモンめ。
さてまた、そいつと乳くりあったここなアヴァンティスンダリーめ、余のごとき多くの人獅子(注八)らを軽んじて、こんな男に惚れこみおった。見ておれ、たったいま、情夫が杭に刺されて殺されるのを。ふし

だらな女、一族の面(つら)よごしめが」
こうなじりながら形相も恐ろしく、眉をしわよせ、死神(注九)もさながら、くろがねのように堅い腕で、王子の蓮華と車輪(注一〇)の手相をもった蓮のような手をつかむや、力いっぱい引き寄せた。王子は生まれつき豪勇であらゆる男らしさを具えていたが、忍耐のほかにこの運命のもたらした不運をのがれる道はないと心に決めて、
「白鳥の足どりをもつ姫よ、あの白鳥の話を忘れないで。二ヵ月の辛抱です」
こう言って、自分のいのちとも思い、また自分のためにいのちをすてようとも希う最愛の妻を慰めて、〔王子は〕敵の力に降った。
さてしらせを受けたマーラヴァ国王（退位したマーナサーラ父王）と王妃の二人は、婿の美しさに惚れこんでいたので、自分たちのいのちを絶っても、敵（摂政チャンダヴァルマン）に死を宣せられて殺されかかっている王子を救おうと気遣うのであった。けれども二人は権力を失っていたので王子の災難を救うことはできなかった。チャンダヴァルマンはいかにも執念深かったので、事の顚末を山岳の中の王といわれるクベーラ山で修業中のダルパサーラ（現王。王女の兄）に使者を立てて報告したうえ、プシュポードバヴァ一族の全財産を没収したばかりか、すぐさま彼らを牢につないだ。そしてひとを信じられない性質から、ラージャヴァーハナ王子を獅子王の仔でも扱うように木の檻に入れたまま——王子は頭髪の中に匿しもつ髻珠(注一一)の〔魔〕力で飢えや渇きなどには負けないのだが——戦慄すべき大軍をもって〔アンガ国の都〕チャンパー(注一二)を包囲した。彼はその国の王女への求婚をことわられたことから、アンガ国王を滅ぼそうと攻め寄せたのである。チャンパー城主シンハヴァルマンは勇猛まさに獅子そのものであった。自ら派遣したたくさんの使者たちの乞いに応じて、諸王の援軍が到着を急いでいたのに、その僅かの間も待ちきれず、誇りの権化さながら、雄々

しく敵にうち当たるほど短気のおさえがたい王は、城塁を破って全軍を進めてしまった。しかしシンハヴァルマン王はこの戦闘において全軍を滅ぼされ、恐るべき武器で百の負傷を受け（敵将）チャンダヴァルマン——その象から象へ跳び移る力量は人間わざを超えていた——に捕えられてしまった。しかしチャンダヴァルマンは王の娘でかよわい珠玉のようなアンバーリカーにたいへん執心していたので、王の生命を奪わなかったばかりでなく、——誰も彼の意図を測り知ることはできなかったが——王の（身体に）残っている矢を抜いたうえ、投獄した。そして星占家たちにうらなわせたうえ、こう言った。

「まさに夜の終わり（明けがた）に、王女と結婚式を行なう」

こうして儀式の準備をする間に、あのエーカピンガ山[注]に使いして戻ってきたエーナジャンガ（鹿足男）という名の急使が権力者ダルパサーラ（現王）の返事を報告した。

「ああ、愚かものよ、後宮を侵犯した男などに同情の余地はない。父王は老齢のため名誉と不名誉の判断を失われた。ふしだらな姫の味方となって何と仰せられようとも貴公（チャンダヴァルマン）は許してはならぬ。ただちにその痴漢に種々の責苦を課し、その報告をもって余の耳を安んぜよ。またふらちな姫はその弟キールティサーラとともに脚を縛って獄に投ぜよ」

これを聞いて（チャンダヴァルマンは）側近の者たちを睨みつけて言った。

「あすの朝、あの後宮を犯したけがらわしい男を王宮の門の前にひき据えよ。そして象王チャンダポータをきれいに飾りつけて、そこに連れてくるがよい。余は結婚の儀式を終えてから、あの賤しい男を象の弄みものにしてくれよう。それから象に乗って、敵の救援にやってきた多くの王たちの真近に進んでその乗りものを財宝を積んだまま分捕ってやるのだ」

そして夜の明け初めるころ、王子は宮殿の中庭に

つれ出され、その傍には番人どもが顳顬（こめかみ）から出る体液で頬を濡らした象チャンダポータを立たせた。するとその瞬間、王子の両足の銀の枷（かせ）がはずれて、新月のように輝く精女アプサラスの姿となり、右繞合掌して恭々しく言った。

「王さま、どうぞお聞きください。私はソーマラシュミ[注]の娘でスラタマンジャリーという天女でございます。あるとき私が空を飛んでおりますと、愚かものの白鳥が、蓮の花を啄（ついば）もうとしておりますので、それを止めようと私が顔を強くふりむけたはずみに、頸飾りが切れて落ちました。たまたまそれが、ヒマヴァット山の湖の浅瀬で水浴中だった大聖仙マールカンデーヤさまのお頭（つむ）に当たりまして、宝石の輝きが白髪を二倍にもしてしまいました。聖仙はたいへんお腹立ちで私に呪いをかけました。

『このいたずら女、無感覚の金属になってしまうがいい』

もう一度、お詫びいたしますと聖仙は、貴いあなた（王子）の両足に二ヵ月の間枷となって、その後（金属から）もとの姿に戻れること、それに（銀鎖となっている間も）五官の力は失わないこと、を許してくださいました。

私は重い罪のため銀の鎖に生まれ変わりましたが、それをヴィーラシェーカラというヴィディヤーダラ[注]が拾いまして、シャンカラギリ山[注]へ持ち去り、私はその所有物となったのです。彼はイクシュヴァーク族[注]の王ヴェーガヴァットの孫で、マーナサヴェーガの子でした。その後彼は（自分の）父と反目するヴァッツァ族（出身）の王子でヴィディヤーダラの王となったナラヴァーハナダッタ[注]を不快に思っておりましたので、

『あれをこらしめるのにちょうどよい』

と考えて、苦行中のダルパサーラ（マーラヴァ国現王）と同盟いたしました。そしてダルパサーラはその妹アヴァンティスンダリー姫を彼に与える約束をしたのです。

さて、月明りに空も澄みきったある夜のこと、彼は最愛の王女アヴァンティスンダリーに会いたいと思うと、欲望を抑えきれず、インドラ天の宮殿のように輝く後宮に侵入いたしました。魔法のうす衣(ぎぬ)に身を包んで姿をかくした彼は、その場で、王女があなたのおからだに身をもたせかけてうっとりとまどろみ、あなたが三界の創造と維持と破壊とにまつわる、甘露(アムリタ)のようなお話で、溢れるほどの情熱をまた取り戻そうとしているようすを見てしまったのです。彼はたいへん立腹いたしましたけれど、あなたの威厳にうたれて罰を考慮いたしますうち運命的に心を決めました。そしていとも幸せそうに互いにしっかり抱き合って眠るお二人のうち、貴いあなたの両足だけを銀鎖の私で縛ってから腹立ちまぎれに立ち去りました。ただいま、私にかけられていた呪いはとけました。ですから私は二ヵ月の間あなたにお仕えいたします。何分よろしくお願いいたします。何かご用はございませんか?」

こう言って精女が恭礼すると、王子は、

「このことをしらせて、私の生命にもひとしい姫を安心させてやって欲しい」

と命じて行かせた。

ちょうどその時に叫び声が起こった。

「やられたぞ、チャンダヴァルマンさまが殺された。シンハヴァルマンの王女アンバーリカーの手に触れようと、たくましい腕をのばしたその時に、すごい力で、あっという間にひき寄せたら両刃の短剣のひと突きだった。いかにも腕のたつ強盗だ。まだまだそれから宮殿の方角では、百人もやられたやつが屍の山、それでも悠々歩いていくぞ」

こう聞くや王子は〔番人どもを〕投げとばして猛象にまたがり、あらん限りの速さで宮殿にかけつけた。進路にいる徒歩の兵どもを荒れ狂う象で蹴ちらして宮殿の内にはいると、密雲からほとばしり出る雷鳴のような深い音声で呼びかけた。

「かかる難事をやってのけるとは人間わざとも思え

ぬ。その偉丈夫はいったい誰か。ここへきて余とともにこの象に乗るがよい。わが傍にいる限りは、諸天鬼神らと戦うとも恐れることはない」

聞くや男は大いに喜び、〕近づいて合掌し、象が身を低くするのを合図に、ためらうこともなく背に乗った。乗りこんだ男を見るが早いか王子は目をみはって喜び、

「なんとなつかしや、アパハーラヴァルマンではないか」

と、後ろから乗ってきた彼の両腕を〔自分の〕両腕下に抱えこんで、まずぴたりと身体を寄せ、それから後方へ両腕をまわして抱きかかえた。その瞬間二人はどちらからともなく抱擁をやめ、アパハーラヴァルマンは、弓・円盤・鉄棒・曲尖槍・投槍・広刃槍・棍棒・突棒などさまざまの武器を用いつつ、各種の戦法に腕自慢の敵兵たちが取り囲むのを、大地にたたき伏せた。息つく間もなく、彼はまた強力な別の軍勢が四方から攻め寄せて、あたりを包囲しているのを発見した。

すると間もなく、見知らぬ一人の男が手なみも鮮かに群がる敵に矢を雨と注ぎつつ、足指で乗っている象の耳のつけ根をはげしくこすりながら疾風のように近づいてきた。その男の肌は色白でカルニカーラ[注2]さながら、髪はクルヴィンダ草[注3]のように蒼黒く、蓮華のようにしなやかな手足、耳に達するほど〔切れ長の〕乳のような白目には、つやのよい黒目、宝石入りの短剣を腰に、絹の上衣を身にまとい、胸は広く、腰はすらりとひき締まっていた。彼はかねて知らされていたので確信をもって、

『これがあのラージャヴァーハナ王だ』

と思い、合掌恭礼ののち、アパハーラヴァルマンのほうに目を転じて報告した。

「集合した諸王の軍はあなたの指示した道を経て、アンガ国王救援に到着しました。敵軍は打ち破って追い散らし、女や子供も武器を取れるようになりました。何かほかにいたすことはございませんか」

アパハーラヴァルマンは嬉しげにこう言った。

「王さま、この忠実な男にお目通りをお許しください。この男は、姿こそあのように変ってダナミトラと名乗っておりますが、実はこの私自身だとお考えください。もしお差し支えなければ、彼をやって牢からアンガ国王を救い出させ、四散した財宝や乗りものを集めさせたうえ、われらの味方をしたクシャトリヤの軍隊とともにこちらへ戻ってまいりましたら、王さまが諸王たちとともに静かなところに休息なさっている傍に仲間入りさせてやってください」

王子もまた、

「貴公の宜しいように――」

と答え、教えられた道にしたがい、都から外へ出発した。そして恒河(ガンガー)の川波をわたる風も涼しいあたり、亜麻のように〔白く〕清らかな砂地に生えている巨大な榕樹の根かたで象から降り立った。

そして最初に降りたアパハーラヴァルマンは、すばやく恒河の砂地を自分の手でならして、象の背中のように広くし、そこに王子をここちよく坐らせた。

こうして休息する王子のもとに、ウパハーラヴァルマン、アルタパーラ、プラマティ、ミトラグプタ、マントラグプタ、ヴィシュルタたち、それにミティラー国王のプラハーラヴァルマン、カーシー国王カーマパーラ、チャンパー国王シンハヴァルマンたちがともども到着し、ダナミトラも王子の前に平伏した。王子は喜びのあまり立ち上がって、

「どうしてこのようにすべての友人たちが集まったのだろう。なんという幸せだろう」

と言ってたいへんに喜び、礼をつくす友人たちを堅く抱擁した。友人たちがカーシー国王、ミティラー国王、アンガ国王たちを紹介すると、王子は父に対するように彼らを見やった。その盟主たちが嬉しさのあまり灰色の頭髪をふるわせてはげしく抱擁すると王子は心から喜んだ。

こうして互いに親しく語り合ったのちに、王子は親友たちに請われるまま、自分の経験談とソーマダッタおよびプシュポードバヴァの物語を述べて、こんどは友人たちの物語も順次に聞かせてくれと言った。そこで彼らの中で、まずアパハーラヴァルマンが最初に語った。

注

一 サラスヴァティー　女神の名、古くは河川神であったが、後世、学問・知識の女神となる。二本の臂(うで)、あるいは八本の臂をもち琵琶を弾ずる。弁才天。ここではラージャヴァーハナをヴィシュヌ神にたとえている。

二 蓮華に宿る女神　ラクシュミーのこと。ヴィシュヌの神妃であり、また愛神カーマの母ともいわれる。蓮華を住所とし、幸福、統治の女神といわれる。吉祥天。

三 豊かに円い胸を……ようであった　パヨーダラは〝水分(パヤス)を湛えるもの〟(雨雲)と、〝乳(パヤス)を湛えるもの〟(乳房)の両義がある。

四 カンダリー樹　雨季に開花するという。

五 カダンバ　喬木の一種。雨季の六月中旬開花し、花は球形、白色または淡黄色といわれる。

六 月光の綱で……　月神の恋人は蓮華とされるところから月の一名をクムダパティ(蓮華主)ともいう。蓮華と月と銀(色)とを連関させた表現。

七 ピシャーチャ鬼　醜怪な形相で画かれる鬼の一種。

八 人獅子　プルシャシンハまたはナラシンハで〝獅子のような人〟の意。勇者、英雄を指す。

九 死神　原文カーラ(死)。擬人化されてしばしばヤマ(死界の王、閻魔)に代表される。

一〇 蓮華と車輪 この手相は未来の覇王。

一一 髻珠 Cūḍāmaṇi. 男女の髻または頭頂、冠などを飾る宝石をいう。

一二 チャンパー アンガ国の首都。その位置に関してカニンガム A. Cunningham は「西域記」にもとづいて、ガンジス河とガンダク河の合流点よりさらに下った、南岸のバーガルプル Bhāgalpur と推定した。

一三 エーカピンガ山 さきに急使を派遣したクベーラ山のこと。

一四 ソーマラシュミ ガンダルヴァ（乾闥婆）の主。ガンダルヴァは天界の楽師で半神。

一五 ヴィディヤーダラ ヒマラヤ山中に住むといわれる半神、シヴァ神の眷族で隠身の衣を用いるなどの魔術を使うといわれる。

一六 シャンカラギリ山 シャンカラはシヴァ天の異名。ギリは山の意。〃シヴァ神の山〃とはカイラーサ山のことで、財宝神クベーラも住むという山。

一七 イクシュヴァーク族 釈迦王族の祖ともいわれる伝説的な王名に由来する。日種族。

一八 ナラヴァーハナダッタ この物語は、ソーマデーヴァの「カターサリット・サーガラ」（第十四章）に詳しい。

一九 カルニカーラ 開花は春、葉は金色に輝くといわれる。

二〇 クルヴィンダ草 注によれば Kuruvinda は nīlamaṇi（黒い宝石、サファイア）または nīlaguccha（青い草）の意があり、どちらにしても蒼黒い色調を表わしている。

第二章 アパハーラヴァルマン物語

「王〔子〕さま。あなたがバラモンを助けるために、あの鬼神アスラの洞穴に降りていかれ、そして友人たちがみなあなたの捜索に出かけた時に、私も大地をさまよっておりましたが、どこからともなく、人人の群が、こういう噂をしていたのを耳にいたしました。

『大アンガ国の都チャンパーの外を流れる恒河(ガンガー)のほとりに、マリーチという大聖仙がいて、苦行の功あって、天眼〔の通力〕を具えるにいたった』

それを聞いて、私はあなたの行方を、聖仙に尋ねたいと思い、その場所にまいりました。マンゴーの若木の蔭になった庵の中に、顔色のすぐれない一人の苦行者がおりました。

私は苦行者から客としてのもてなしを受け、しばらく休んだのち、こう尋ねました。

『あの貴いマリーチ仙は何処においでしょうか。私は聖仙から、ゆえあって旅に出たままになっている友の行方を教えていただきたいと思っているのです。こう申しますのも、その大聖者は世にも不思議な智力で名高い方と教えられたからです』

苦行者は熱く長いため息をして、こう語りました。

『さような聖仙がこの庵におりました。〔マリーチ仙物語〕

ある時、その聖仙のもとに、カーママンジャリーというアンガ国の都の華と謳われる遊女が、涙の露を胸いっぱいにためて、つかつかとやって来ると、ふり乱した髪で地を払うほど恭々しく敬礼をいたしました。それと同時に、母を先頭にした親類たちが、彼女を憐れんで追って来るや、その場に次々と平伏しました。慈悲ぶかい聖者は、一同にやさしく声を

かけて慰めたのち、遊女に悩み苦しむわけを聞きました。すると遊女は、羞らうように、絶望したかのように、また崇め敬うかのように答えました。

〃聖者さま。〔この私は現世の幸福を受け容れられない者なのですが、来世の幸福を求めまして、〕あなたさまが不幸な者にお慈悲深いことで知られておりますのを幸いに、あなたさまのもとに安らぎの場所を求めてまいりました〃

すると母親は、乱れた白髪まじりの髪束で地を払い、合掌した両手をさし上げて申しました。

〃聖者さま。あなたさまの召使いであるこの娘は、私の僻ごとを申し立てておりますが、でも、その僻ごとというのが、私にとっては、自分のつとめを果たすことなのでございます。何とならば、遊女の母のつとめというのは、かようなことがらなのでございます。〔娘が〕生まれてからの〔子供の〕肢体の調整[注一]。健康、元気、色つや、知恵を増進して、身体の諸要素の均衡[注二]を正しく保持するような適当な食物による身体の養育。五歳からのちには、〔男には〕父親にさえあまり会わせないこと。誕生日や吉日のめでたい儀式を伴う祭典や、補助の科目も含めた恋愛の知識の伝授。踊り、歌、器楽、演劇、絵画、料理、香料、生花の各技芸や、あるいは書法、話法のたしなみについての正しい訓練。それに、文法、論理、占星学の教育。生計を立てていく職業[注三]の知識。遊戯の熟練。生物と無生物にわたる博奕[注四]の技術の手ほどき。信頼し得る人々から房事の秘技を熱心に実習すること。祝祭の行列などの時に、盛装させたたくさんのお供の衆を誇示すること。音楽などの催しの場合に、〔自分に〕気のある男たちを、かねて覚えたお世辞でうまく獲得すること。諸種の遊芸に通じている人たちによって、あらゆる方角に向かって名声をあげさせること。占星家たちを通じて〔彼女の〕吉相をいいふれさすこと。居候や遊蕩児、道化役者や尼僧などを利用して、都の男たちの集まる場所で〔彼女の〕容姿、徳行、遊芸、美貌、愛嬌を賞

賛させること。〔彼女が〕若い男の熱望の的となったら、できるだけ高い値段であてがうこと。自分のほうから欲情に目が眩んだ男や、あるいは女の愛らしい容姿に酔った男や、素性がよく、姿がよく、若くて金持で、精力家で、純情で、気前よく、女性にやさしく[注五]、よい技能をもち、性質の温和な一人前の男に〔彼女を〕与えること。また一人前の男でなくても、人柄がよく教養のある者ならば、いろいろな口実を設けて、たとい安い値段でも提供すること。そして〔その後で〕未成年者がガンダルヴァ婚[注六]〔で勝手にくっついた〕と言いがかりをつけて、その両親から弁償金をまきあげること。〔詐欺漢などによって〕お金がとれないときは、色仕掛けで村長[注七]や、裁判によって支払いを受けること。惚れた男に対しては、〔母は〕娘に操をたてさせること。日々の、あるいは時おりの歓楽に対する代金を支払ったうえで、男の財産が〔なお〕残っているとみたら、手をかえ品をかえて、まき上げること。代金を支払わない男や、強欲な男とは別れさせること。強欲な男が夢中になったら、娼家の主人がおだてて、その散財心を煽動すること。貧乏な男に対しては、公衆の面前で非難、嘲弄したり、娘を隠したり、恥をかかせたり、攻撃したり、無視したりして追い払うこと。将来の利、不利に関する疑いをよく考慮したうえで、利益をもたらし、不利益を近づけないような、非のうちどころもない金持たちとたびたび会わせること。

なおそのうえ、遊女は、客に接するのに、けっして夢中になってはならないし、もし本当に愛してしまった場合にも、母や祖母の意見に従うことです。それなのに、この娘は神さまの掟[注八]にそむいて、容姿だけをもとでにしている、何処からやって来たのかわかりもせぬバラモンの若者と、ひと月の間、自分のお金を使って遊び暮らし、そのために、金払いのいい大勢のお客たちは、この娘にそでにされて腹を立て、家族のものは、がっかりいたしました。そこで私が'そんなばかなことをしてはいけないよ'と

叱りますと、〔この娘は〕腹を立てて、森で暮らそうと逃げ出したのです。もしこの娘の決心が変わらなければ、私たちはみなこの場で断食して、死ぬほかはありません〃

そこで聖仙は遊女にいってきかせました。

〃娘さん、森の暮らしは苦しみの塊なのだよ。果報は、解脱か天国のどちらかで、二つのうちの初めのほうは、すぐれた知恵によって成就するものなのだが、たいがいは達せられないものだ。だが、二番目のほうは、生家の義務を果たすものなら、誰にでも得やすいのだ。だから不可能な企てをやめて、母の意見に従いなさい〃

このように同情をもって訓された遊女は興奮して、こう答えました。

〃万一、ここで貴いあなたさまのお傍に置いていただけないのでしたら、あわれな私は火神の御もとにまいります(注九)〃

しかし、聖仙はとくと考えて、遊女の母に申しました。

〃ひとまず家に帰ってしばらく待ちなさい。この華奢な娘は安楽になれているから、森の暮らしのうとましさに堪えられるものではない。その間に私が幾度も訓し、本性を悟らせて戻るようにするから〃

家族のものたちは〃仰せのとおりにいたします〃と、いって立ち去りました。

そのあとで、遊女は聖仙に深く帰依の情を表わし、洗い清めた衣服をまとい、身の飾りもひかえめに、森の若木に水を注ぎ、神に供える花束の採集につとめ、さまざまな供物をそなえ、また、シヴァ天に対して、香料、花環、薫香、燈明、舞踊、唱歌、器楽などをささげました。そして、静かな所で人生の三願(注一〇)を論じ、あるいは最高我(注一一)についての適切な論議をして、ほんの短い時日の間に聖仙の心を捉えてしまいました。

ある日、聖仙が、ひそかに〔自分に〕想いを寄せ

ているのを見て、〔彼女は〕にやりとほほ笑みながらいいました。

〃〔人生の三願のうちで〕財と愛とを徳と同列に論じる人々は、ほんとに愚かですわね〃

〃娘よ。話しなさい。そなたは、徳がどのくらい財や愛より勝れていると思うかね〃

マリーチ仙にこう促されると、彼女は羞かしそうに、ためらいながら、答えはじめました。

〃まあ、貴いあなたさまが、私のようなものに、人生三願の価値と無価値について、お尋ねになるなんて、これもまた、はした女へのごひいきの一種かもしれませんわね。ともあれ、お聞きください。なんと申しましても、徳なくしては、財も愛もあり得ません。それら（財・愛）にかかわりなく、徳は解脱の至福を生み出すもとです。そして徳は自我の内観によってのみ成就するもので、財や愛のように、その成就のために外的な手段をあまり必要といたしません。また真実を見究めることによって、堅固になっている結果、少々の財や愛に耽っても、〔徳は〕損なわれません。もし、損なわれたとしても、僅かな努力で取り戻され、その罪も消えて、偉大な幸福に達するのです。たとえていえば、天上の父（梵天）は（精女）ティローッタマーに染著し、シヴァ天は隠者の妻千人を辱かしめ、ヴィシュヌ天は一万六千人の後宮の婦人と交わり、創造主（プラジャーパティ）は自らの娘とさえ愛欲に耽りました。インドラ天は〔仙者の妻〕アハルヤーと情事を行ない(注一二)、月天は〔神々の〕師（ブリハスパティ）の寝床に上がり(注一三)、日天は牝馬を姦し、風天は〔猿の〕ケーサリン(注一四)の妻と通じました。祈禱主（ブリハスパティ）は〔兄〕ウタティヤの妻と逢曳きし、パラーシャラ仙(注一五)は漁夫の娘を凌辱し、パラーシャラ仙の息子（ヴィヤーサ）は兄の妻とねんごろになり、アトリ仙(注一六)は牝鹿と交わりました。そして神々のこのような様々の振舞いにおいては、悪魔のような乱行さえも、知恵の力によって、徳を損うには至らなかったのです。そして心が、徳によって浄められている場合に

は、あたかも、空中の塵埃と同じようにどんな汚れも、決して執着することはないのです。ですから私は財と愛の二つは徳の百分の一にも及ばないと思うのです〃

聖仙は、これを聞くと、欲情に興奮していいました。

〃魅力ある女よ。そなたの見方は正しい。真理を見究めた者の徳は、官能の享受によって損われることはない、というのだね。しかし、私は、生まれてこのかた、財と愛の事情に暗いのだ。この二つがどのような形をしているのか、どのようなものを伴って来るのか、その結果はどんなものかを知っておく必要がある〃

そこで、遊女はこう答えました。

〃財は、まず、利得と増殖と貯蓄とを本質とし、〔田畑の〕耕作、家畜の世話、商業取引、講和と戦争などを伴います。そしてその結果としては、価値ある人々への施し〔ができること〕になるのです。愛とは男女が官能に耽ったとき、その心に生ずるこの上もない快感を特徴とし、この世に生きるうえの楽しさや美しさを伴います。さらにその結果は、お互いの抱擁から生まれる最上の快楽で、それは甘い想い出や、ふくれ上った満足感のはっきりと自分でもわかる、この上もない幸せなのです。まことに、その幸せのためには、高い地位にある人々でさえ、きびしい苦行や、大きな施しや、はげしい戦争や、恐ろしい海を越えるなどのことをもあえていたします〃

こう聞くと、聖仙は、もはや運命の力にひきずられてか、彼女のずる賢さによってか、あるいは自分の判断の甘さによってか、自制心をも忘れ、遊女の色香に迷ってしまいました。こうして遊女は、愚かな男を車に乗せて、遙かな都につれて行き、立派な公道を通って自分の家に案内しました。すると、明日は愛神カーマの祭礼〔を催す〕という布告が出ました。

あくる日、聖仙は水浴し、香油を塗り、美しい華

鬘を飾って、すっかり色男気取りになり、自分の本来のつとめへの望みも忘れ果てて、ほんの一瞬でも、彼女なしでは苦痛に思うほどでした。そのような聖仙を、華やかな彼女は大通りを経て、祭の群衆のほうへつれて行きました。

林園には、百人もの若い女に囲まれた王がひかえていて、近づくと、〔王は〕にっこり笑って、こういいました。

〃美しい女よ。尊いお方といっしょに坐りなさい〃

このようにいわれた遊女は、なまめかしくお辞儀をして、ほほ笑みながら坐りました。

すると、たいへん美しい女が一人、立ち上がると合掌して、

〃王さま。私の負けでした。今日から、私は彼女の召使です〃

こういって、王に一礼しました。群衆は驚きと喜びの喚声をあげました。やがて王は、ご機嫌もうるわしく、たいへん高価な宝石の装身具や、たくさんの召使たちを遊女に与えました。彼女は、一流の遊女たちや、都のおも立った人々が群がって賞めたたえる中を、自分の家に帰ったとたんに、聖仙にこういいました。

〃貴いお方さま。このとおり〔私は〕合掌し〔お礼を申し上げ〕ます。長い間、この召使〔の私〕は、ご寵愛をうけました。もはや〔あなたは〕ご自分のおつとめにお戻りください〃

けれども、〔彼女に〕惚れきっていた聖仙は、まったく雷にでもうたれたかのように、慌てて、いいました。

〃愛する女よ、これは、いったいどうしたことか。そのような冷淡さは、どこから出てくるのか。私に対する、あなたの並々ならぬ愛情は、いったいどこへいってしまったのか〃

すると、彼女が笑って申しますには、

〃聖者さま。今日、王宮で、一人の女が私に負けたことを認めました。〔かつて〕彼女と私は争ったこ

とがあるのです。その時、彼女は、私を侮辱して、こういいました。
〝あなたは大聖仙のマリーチさまを、射とめでもしたように大きなことをおっしゃるのね〟
そこで、私は〔負けたほうが〕召使になるという賭けを誓って、そのことに専念してまいりました。そして、おかげで、私は〔今日〕目的を果たしました〟
こうして聖仙は女に捨てられ、〔自分の〕愚かな行為を後悔しつつ、むなしい思いで、〔森に〕帰りました。
そこな御仁よ。遊女にこのような扱いを受けた苦行者が、実はこの私なのだと思ってください。自分から力(りき)んで、欲情を起こしたあげく、その遊女から、きっぱり欲情を捨てるような破目においやられてしまいました。もう間もなく私には、あなたの願いをききとどける通力が甦ります。ですから〔あなたは〕しばらくの間、このアンガ国の都チャンパーに、滞在なさるがいい』
やがて太陽は、聖仙の魂から流れ出た暗黒に触れるのを恐れるかのように沈みました。そして、聖仙が払い落とした欲情は夕焼けとなって燃え、群生する蓮華も、聖仙の物語によって、煩悩を捨てたかのように花を閉じました。私は聖仙の勧めに従って、よも山の話をして、ともに夕を過ごし、聖仙の傍で一夜を明かしました。やがて東の山に、森の火事のような、また〔インドラ天の園の〕如意樹の若芽をもしのぐような紅い太陽が昇った時、私は聖仙にいとまを告げて、都に向かいました。すると路の傍に一宇のジャイナ教の僧院(註)が建っていて、その外側の人気のないところに生えている紅いアショーカの木立の中に、一人のジャイナ教の修行者の坐っているのが見えました。彼は瞑想三昧から離れて、苦労にやつれた様子でしたが、とくに、醜い者たちの中でも、みじめな顔つきに見えました。そして埃にまみ

れた顔から、胸に涙がしたたり落ちているのが認められました。
私は近づいてたずねました。
『修行者だというのに、どうして泣いておられるのですか？ お差し支えなければ、悲しみの原因をお伺いしたいものです』
彼はこう語りました。
『ご親切に、まあお聞きください。私はこのチャンパーの都に住むニディパーリタという豪商の長男で、ヴァスパーリタと申す者ですが、容貌が醜いところから、ヴィルーパカ（醜い男）という綽名で通っておりました。都には、もう一人スンダラカ（美男子）という者が住み、その名にたがわず美男で、さまざまな技芸に秀でておりましたが、財産にはあまり恵まれていませんでした。町のやくざ者たちが、その男の美貌と私の富を材料(たね)にして、甘い汁を吸おうと〔二人の間に〕争いを起こさせました。ある祭の集まりでのことでした。お互いの侮蔑がもととなって、我々二人が詰(なじ)りあうのを、おしとどめて、彼らがいいました。
〝美貌も富も、本当の男らしさの原因ではない。だが、飛切りの遊女が惚れるような若さをもった者こそ、ほんとうの男前というものだ。だから、青春の飾り、〔遊女〕カーママンジャリーに愛されたほうが勝利の旗を担うのだ〟
こう勧めるものですから、我々二人は承知して、遊女に使いを出しました。
まったく、これこそ私があの遊女に溺れるきっかけだったのです。我々二人が坐っていると、彼女は私のほうへ近づいてきて、青蓮でできたような流し目を私のからだに投げたのです。相手の男は恥ずかしさに顔を伏せました。そして私は有頂天になって、自分の財貨も家も召使も、自分の身も生命も捧げ尽くして彼女の意のままになり、果ては腰布一枚を残すほか、いっさい合財を奪い取られたあげく、彼女に捨てられ、世間のもの笑いの的になりました。私

が都の長老たちのさげすみの目に堪えられなくなって、ここのジャイナ教の僧院にまいりますと、ある修行者が、解脱の道を教えてくれました。そこで、

〃ヴェーシャ（娼家）から逃げてきたものには、このヴェーシャ（空衣）がいちばん似合っているのだ(注10)〃

と、離欲の念が強くなった私は、腰布さえも捨ててしまいました。

しかし、それから、私は塵埃にまみれ、毛髪を引き抜かれて痛い目にあい(注11)、ひどい飢渇などに苦しめられ、起居、寝食のことごとに、捕われたばかりの象のように厳しく訓練されて困りはて、もはや我慢ができなくなりました。

〃私は再生族である。それが自己のつとめをすてて、このような異端の道に堕ちてしまった。私の祖先はヴェーダの聖伝（シュルティ）と伝承（スムリティ）の道を歩んできたのに、不幸な私は、恥ずかしい空衣（裸形）の姿で、ひどく不快な僧院にいて、ハリ、ハラ、ヒラヌヤ・ガルバ(注12)をはじめとする神々への絶え間のない誹謗を聞かされているのだから、死後は地獄に堕ちるようなことになるのだ。このような、不信仰なごまかしの道などはなんの役にも立たぬ。私は信仰にかなった行ないをすべきだ〃

と、私はこのように自分の間違った行為を省み、静かなこのアショーカ樹のもとにきて、存分に涙を流していたのです』

以上を聞いた私は、憐れに思っていいました。

『まあ、辛抱して、しばらくここでお待ちなさい。その遊女が自らすすんで、あなたに財産を返すように計らいましょう。その方法はあるのです』

このように慰めますと、彼は立ち上がったので、私も立ち上がりました。私は都にはいるやいなや、人々が『あくどい金持たちが、都にはたくさんいる』と、噂しているのを聞きました。

そこで私は、〔それらの金持に〕財のはかないことを思い知らせて、本来の姿に戻らせるには、カルニースタ(注13)の示した道がよいと決心いたしました。そ

れからまた、私は賭場にはいって、博奕打ちの仲間いりをしました。彼らは、すべてで二十五種類にわたる賭博の技を心得ていて、盆蓙(ぼんござ)(注14)の上でのもの馴れた手などの捌き方や、見分けにくいいんちきのかずかず、それが原因で起こる威丈高な罵詈雑言、いのち知らずのいきりたったいがみあい、胴元と結託して、巧妙さと力と押しとで、予想どおりの目的を達するようなやり方、強い者への追従、弱い者いじめ、仲間作りの巧さ、賭博の種類を説明するさまざまな誘惑の言葉、寛大な分配、互いに交わすやかましい下卑(げび)た言葉のやりとりなどを、あれこれと眺めながら飽きることがありませんでした。

そのうち私が、ある男の無茶な賭けかたを笑いますと、その男の相手が怒って、燃えるような赤い目で私を睨みつけていいました。

『この野郎、貴様、笑いに紛らせて、〔この男に〕手のうちを教えたな。このとうしろうは放っといて、目の利くお前と勝負しよう』

胴元が承諾しましたので、私はその男とさし向かいました。そして私は一万六千ディーナーラ（金貨）を勝ち取り、その半分を、胴元と一座のものに与え、残る半分を自分で取って立ちました。するとその場に居合わせた人々から喜びにみちた賞賛の喚声があがりました。そして私は、胴元の望むままに、彼の家に行って、ご馳走にあずかりました。

そんなわけで、私が賭博をする機縁になったヴィマルダカと呼ぶその胴元は、私と肝胆相照らす仲となりました。そして彼の口から、私は都の〔人々

の〕財力や職業や性質についてすっかり聞いたうえ、シヴァ天の頸の痣のように黒い真暗闇の夜に、脛の半ばまである黒い服を着て、切れ味鋭い刀を佩び、「蛇の口」(注)〔という盗賊用の鋤〕、楽器、釘抜き、人形、魔法の粉末、魔法の燈火、測量紐、蟹の形の鉤のついた綱、龕燈、蜂のはいった箱など、さまざまな〔窃盗用の〕道具を準備して町へ出かけました。そして、ある欲の深い男の邸の壁を破って、格子窓の隙間のような細い穴から、家の内部を確かめたうえ、まるで我が家へはいるように、難なく侵入して、そこにあった高価な財宝を奪って外に出ました。

大通りは黒雲の塊が厚くたちこめたような暗闇でしたが、一瞬、稲妻のようにきらめく光が見えました。近づいてから判りましたが、それは女の装身具の輝きだったのです。女は人気のないころを見はからって、家を出て来たのですが、さながら都を護る女神が、町の泥坊にご立腹で現われ出たように思われました。

私は気の毒になって、こう尋ねました。

『もしもし、あなたは、どなたですか？　どこへ行くのですか？』

女は怖ろしさに、おどおどして答えました。

『はい、この都にクベーラダッタと申す金持の商人がおりまして、私はその娘です。父は私が生まれるとすぐに、当地のダナミトラという金持の息子に〔私を〕妻に与える約束をいたしました。けれど彼はあまりにもお人好しだったので、両親が亡くなると、お金を目あての人々の群につけこまれて、自分の財産で貧乏を買うようなことになりました。世間の人々は、彼が貧乏になったのを面白がって、ウダーラカ（好人物）という称号を奉りました。私が妙齢になったので、彼が求婚しますと、父は彼を〝一文無し〟と、いって〔私を〕与えず、別のアルタパティ（財の主）という、その名のとおり〔お金持〕の隊商の頭領に私を嫁にやろうといたしました。私は、〝その不吉なこと（結婚式）が、今日の夜明け

方に行なわれる〟と気付いたものですから、あらかじめ恋人と打ち合わせをして、家族を欺いて外へ逃れました。そして想う一途に、子供のころから通いなれた路を、彼の家めざして行く途中です。ですから、どうぞ私を行かせてください。これを差し上げますから』

こう言って、彼女はその装身具をはずすと、私にさし出すのでした。私は彼女があわれになって、いいました。

『気立てのよい娘さん、いらっしゃい。私があなたを恋人のもとへお送りしよう』

と、三歩、四歩行きかけますと、手にした燈りで、闇夜を照らしながら、大勢の巡警たちが棍棒や剣を手に、突進して来ました。それを見て慄える娘に私は声をかけました。

『心配なさらずともいい。腕にはおぼえの剣もある。だが、あなたのために、穏やかに事を運ぶとしよう。私は蛇の猛毒にやられた風をして、この場に倒れますから、あなたは巡警たちに、こういいなさい。

〝私たち二人は、今夜、この都に着きました。これは私の夫ですが、あの集会所の角で蛇に咬まれてしまいました。あなた方の中で、どなたか呪文を知っておいでになる情深い方がありましたら、夫を生きかえらせて、よるべのない私をお救いください〟』

彼女は他に手だてもないままに、恐ろしさにおどおどして、目には涙をため、慄えながらも進み出て、どうにかいわれたとおりに、やってのけました。私も蛇にやられたように見せるため、倒れておりました。

彼ら巡警たちの中でも〔解毒の〕の呪文に得意な者が、私をしらべたうえ、手の指に秘法の印契(注)を結び、呪文を唱えたり黙祷するなどいたしましたが、何の効きめもありませんでした。

『これは、まったく〔死に〕(注)咬みつかれている。何となら、身体は硬くなって黒ずんでいるし、目は閉じ、体温もなくなっているからだ。娘よ、泣いても

仕方がない。火葬は明日、我々がしてあげる。天命には誰も逆らえないのだから』

こういうと、彼らは連れだって、行ってしまいました。

そこで私は起き上がって、彼女をつれてウダーラカ（好人物）を訪ねて、告げました。

『私はさる盗賊です。あなた恋しさに急ぐ途中のこの娘さんに出会いましたが、お気の毒に思い、まさに、おつれ申しました。この装身具は彼女のものです』

と、夜目にも光るその品を、差し出しました。

ウダーラカは、それを受け取ると、恥ずかしそうな、嬉しそうな気持の入り混った興奮した様子で、いいました。

『貴いお方よ、今夜はあなたのおかげで、愛するひとを授かり、もはやいうべき言葉を奪われました。と、いいますのも、私には何と〔お礼を〕申したらよいのか判りませんから。〃あなたの行為は不思議だ〃と申したいのですが、きっとあなたご自身にとっては不思議でもなんでもないのかもしれません。〃こんなことは、いままで誰もしたことがない〃といっても、それはあなたに具わった、物ごとをはたらかす力であって、他の人たちのもっている欲望などは、あなたにはないにちがいありません。〃あなたは今日、聖者のような立派な行為を見せてくださった〃といっても、それでもあなたのなさった前生の立派な行為にくらべればふさわしくないかもしれません。〃私はいま、高貴というものの本当の姿を見た〃といっても、あなたの意向を無視しては、そんな結論はくだされません。〃あなたの善行が私という召使を買ったのだ〃と申しましても、あなたはつまらぬ物も過大に評価なさるのですから、あなたの判断を割引して考えなければなりますまい。〃恋人を送り届けてくださったお礼に、私のからだをお取りください〃といっても、この身体とて、あなたから授かったも同然で、恋人が得られなければ、私

は死を待つだけでしたから。でも、とにかく、このような具合でいかがでしょうか。私は、いまから、あなたの召使になります』

と、彼は私の足下に平伏いたしました。私は、彼をたたせ、胸に抱いて、いいました。

『友よ、いまのあなたの願いは？』

彼は答えました。

『〔彼女の〕両親が承諾しませんから、私はこの女と結婚することも、ここで彼女と暮らすこともできません。ですから、今夜のうちに、この地を離れたいと思います。でも、私なんかなんで〔そんなことがきめられま〕しょう、やはり、あなたのご命令のままにいたします』

そこで、私はいいました。

『それでよいのです。賢い人は、自分の国だ、他国だといって区別しないものです。しかし、この娘さんはたいへんかよわいことだし、森林の道は困難でしかも危険です。もし、こんな不利な状態で国を捨てるようなことをするものがあれば、それは少々、知恵と勇気が足りないものと認められます。だからこの娘さんとともに、この地で幸福に暮らしたほうがいいのです。さあ、いらっしゃい。そして彼女の家へ案内なさい』

彼はためらわずに承知して、すぐさま彼女の家に案内し、彼女を見張りにして、私たち二人はその家から、土器にいたるまでいっさいを盗み出しました。

そして、外に出て盗んだ品をとある場所に隠したあとで、立ち去ろうとするところへ、巡警たちが殺到してきました。ちょうどその時、道の端に交尾期のついた象が横たわっておりましたので、私たちは御者をひきずり降ろして乗り込みました。私は頸の周囲に巻きつけてある綱に、両足を掛けて駆り立てますと、象は立ち上がりながら落ちた御者の厚い胸を押しつけ、〔はみ出した〕つる草のような内臓を牙にひっかけて巡警たちを追い払いました。それから、私たち二人は象にアルタパティの家を壊させて

しまいました。そして、とある荒れた庭に行って、樹の枝につかまって、象から降りました。二人は家に帰り、入浴して、寝につきました。

やがて、海から円い太陽が昇りました。それは東の山の頂きに、あたかも紅玉（ルビー）の懸かるかに見え、あるいはまた〔インドラ天の庭の〕如意樹の金色の花でつくった花飾りかと紛うばかりに、赤く輝きました。私たちは、起きて顔を洗い、朝の祈りをすませてから、我々が〔昨夜起こした〕騒動で混乱した町を歩き回りました。すると、許婚の男（アルタパティ）の家と女の家から、大声が聞こえてきました。婚約者のアルタパティは〔娘の父の〕クベーラダッタを金品でとりなして、クラパーリカーとの結婚を一ヵ月のばすことになったのです。

しかし、私はもう一度、ダナミトラにそっと知恵を授けました。

『友よ、アンガ国王を訪ねて、こっそりと、このすばらしい革財布を見せて、いいなさい。

〃王さまは私をご存じと思います。私は数千万金の長者ヴァスミトラのたった一人の子ダナミトラです。その私が、お金を目当ての人たちのために無一文にされて、軽蔑されています。私が貧しくなりますと、クベーラダッタは私のために育てた娘のクラパーリカーを私にくれませんで、かえってアルタパティに与えようといたしました。そこで私は悲しさのあまり、生命を捨てようとして、都の外の荒れた森林深くわけいりました。私が咽喉に短刀を当てようといたしました時、見知らぬ蓬髪の苦行者（シヴァ教徒）が、私をおしとどめて、こう言いました。

'この無分別には何かわけがあるのですか'

私は答えました。

'貧乏と軽蔑とは姉妹の仲です。その貧乏がもとなのです'

苦行者は私を憐んで、親切にしてくれました。

'さても愚かなことよ。自殺にまさる罪はない。有能な人はおのれ自身をすてないで、立ち上がるもの

だ。財貨をつくる方法はたくさんあるが、咽喉をかき切ってしまったら、生命をとり戻す方法は、ただの一つもありはしない。それなのに、あなたはどうするつもりなのか。私は魔法を成就した。ここに、十万金を産み出す革の小袋がある。私は長い間、カーマルーパ国(注三)に住んでいて、これのおかげで世の人人の願いを叶えてやれたのだ。だが、私はもう、いまわしい老齢を迎えて、地上から天上界へ行くためにここにやってきたのだ。これを〔あなたに〕授けよう。私は別として、この財布は商人か、さもなければ高級の遊女のほかは〔お金を〕搾り出せない、ということになっている。ただし、〔財布の〕所有者が不当に得た財貨は、返還しなければいけないし、また正当に得た財貨なら、神々やバラモンたちに捧げなければならない。そうしたあとで、財布を神と同様に、清浄な場所にまつって、敬うならば、朝ごとに財布の中にお金が、いっぱいになっているだろう。それが〔財布の〕規則なのだ'

こういって、苦行者は合掌している私に革財布を渡して、とある岩の洞穴にはいって行きました。

'私はこの宝の財布のことを、王さまにお知らせしておかないと、〔安心して〕暮らせない'と、考えましたので、持参いたしました。王さまの思召しはいかがでございましょうか〃

すると、王はきっと、こう言うに違いない。

〃よろしい。余は嬉しく思う。戻って、思いのままに、それを使ってみよ〃

そうしたら、またあなたは言いなさい。

〃誰にも盗まれないように、どうぞお取り計らいください〃

これもまた、王はきっと聞きとどけるに違いない。そこで、あなたは家に戻って、いわれたとおりに、財布をおがみ、泥坊で得たお金を夜のうちに入れては、朝ごとに人々に見せびらかしなさい。そうすると、欲張りのクベーラダッタもアルタパティが藁屑(注七)のように見えて、自分から娘をつれてあなたに近づ

くでしょう。お金が自慢のアルタパティは腹を立てて訴えるでしょう。そうしたら、こちらもまた、さまざまな方法で、彼を腰布一枚になるまでにしてしまうのです。こうした方法で、我々の窃盗は、全く人々に気づかれないでしょう』

ダナミトラは喜んで、教えられたとおりに実行いたしました。ちょうどその日に、私の勧めで、ヴィマルダカ（賭博場の胴元）が、アルタパティに雇われて行き、（主人の）ウダーラカに対する敵対心を煽りました。欲の深いクベーラダッタは、アルタパティをやめにして、ダナミトラに娘を与えようと心変わりし、アルタパティは遠ざけられてしまいました。

この数日の間に、

『カーママンジャリーの妹のラーガマンジャリーという遊女が、集会所で（歌と楽器と踊りの）音楽を披露する』と評判になっていたので、町の人々は大きな興味をもって、そこに集まりました。

そこで、私も友人のダナミトラといっしょに、そこへ出かけました。彼女の舞踊が始まりますと、私の心も彼女の第二の舞台となって（踊り）ました。彼女のまなざしは、あちこちと動く蓮華の群のようで、さながら愛神カーマがすべての感情と情緒をこきまぜた力を発したかと思われるばかりに、私をはげしくいためました。そればかりでなくあたかも都を護る女神が町の窃盗をお怒りになったのかと思われるように、彼女が青蓮の花びらにも似た黒い瞳で、ちらりと見ると、それは魅惑の花の鎖さながらに、私を見動きもできないように縛るのでした。そして、彼女は輝かしい成功の裡に踊り終わると、媚びか、愛か、あるいは偶然なのか判りませんが、女の友だちにさえ気付かれないように、幾度も私に流し目の視線を投げたのです。彼女は蔓草のような眉をなまめかしくひそめ、それから私にほほ笑みかけましたが、その歯は月光のように白く光りました。そして観衆の目と心に見送られて、彼女は立ち去りました。

私は家に戻ってからも、慕る想いを払い切れず、食欲もなくなり、頭痛といつわって、唯一人、ぐったりとした身を寝台に横たえました。ダナミトラは色の道にかけてはなかなかの通人で、私を訪れて、ひそかに、こういいました。

『友よ、あなたが心を傾けたあのひとは、金持の娼家の娘なのです。私には彼女の心持がよく判ります。彼女も遠からず、愛神カーマの矢に倒れるでしょう。あなたがた二人が辛抱なされば、結ばれるのはさほど難事ではありません。けれど彼女は、まったく普通の遊女と違ってこういっています。

〝私をお金で買うことはできませんよ。すぐれた徳でお買いなさい。それに結婚しないなら、私の若さを味わうことはできませんよ〟と。そこで、姉のカーママンジャリーと母のマーダヴァセーナーとは、繰り返し王に告げたのです。〝王さま。ラーガマンジャリーはあなたの召使です。そして美しい容姿にふさわしく、気立てもよく、遊芸にもすぐれていますから、私たちの望みをかなえることができたはずなのです。それなのに私たちの大きい希望は、もう根こそぎ断たれてしまいました。あの娘は自分の家の習慣に従わず、お金に無頓着で、美徳のみを求めて、若い身を売ろうとしているのです。あの娘は身分の高い家の婦人らしく振舞いたいのです。ですから、もしあの娘が王さまのご命令で、本性に戻ってくれますならば、こんな嬉しいことはございません〟

王はその願いどおりに、やさしくいいきかせたのですが、彼女は承知しませんでした。そこで姉と母とはまた、涙ながらに王に申しました。

〝もしどこかの蛇（のような男）が、私たちの許しもなく、この娘を迷わせて誘惑した場合には、その男を盗人として罰してください〟

このような事情ですから、彼女の家族は、お金でなくては承知しません。しかし、お金を与えたら、彼女が承知しないのです。ですから何か方法を考えなくてはなりません』

そこで私は言いました。

『ここで、考慮すべきは何か。私は徳で彼女を惹きつけ、家族にはこっそりお金をやって満足させよう』

こういうわけで、遊女カーママンジャリーの使い走りをする遣手女(やりて)たちの中でも重んじられているダルマラクシカーという比丘尼(注)に、衣食などを施して、仲よくなり、その仲介で遊女と約束しました。

『あなたが、お返しとして妹のラーガマンジャリーをくれるなら、私はウダーラカから魔法の革財布を盗んで進ぜよう』

承諾した遊女に、私は約束どおりの品を与えてから、ラーガマンジャリーを徳で酔わせて、花のような手をとりました。

その夜、私は革財布が盗まれたことを話しておいて、アルタパティの召使になっている、私のスパイのヴィマルダカに命じ、他の事がらを口実に都の主だった人たちを寄せ集めさせ、耳を傾ける人々の前で、ダナミトラを口汚く罵り嚇(おど)させました。ダナミトラもやり返しました。

『あなたは、いったい他人のことで言いがかりをつけて、なんの得(とく)になるのです。私はあなたに、ほんの僅かでも損害を与えたおぼえはない』

しかし、ヴィマルダカはなおもつめ寄って、言いました。

『金で買った他人の女をわがものにしようとし、その両親までも金で惑わすとは、それこそ金持根性というものだ。それなのに、〃あなたに、どんな損害を与えたか〃とは、よくぞ言えたものだ。このヴィマルダカさまが、あの隊商の棟梁のアルタパティの片腕だとは、ご存じなかったようだ。私は主人のためなら生命も捨てる。バラモン殺し〔の極罪〕さえやってのける。私が一晩寝ずに起きていれば、お前が革財布を持っているとうぬぼれている熱病をさましてやることもできるのだぞ』

このように彼が罵っているのを、都の有力者たち

が、おしとどめて追い返しました。

こうしたあとで、ダナミトラはひどく心配そうなふりをして、この事件を王に報告し、革財布の盗難のおそれがあることをほのめかしました。そこで王はアルタパティを呼び出し、人払いをして、尋ねました。

『ヴィマルダカという者は、そなたとどのような間柄なのか』

アルタパティは愚かにも、こう答えました。

『あれは私の第一の味方です。あの男が何か……』

王はまた問いました。

『そなたは、その者をここへつれて来ることができるか』

彼は、

『もちろん、できます』

と答えて、引き退りました。しかし、自分の家や、娼家のある区域や、賭博場や、市場などを、くまなく探しても見つかりませんでした。どうしてこのうつけ者が探し出せましょう。実は、ヴィマルダカは、私の命を受けて、あなた(王子)の特徴を教えられ、その日のうちに、あなたを探すために、ウッジャイニーの都へ出発したあとでした。

とうとう、アルタパティは、さがしあぐねて、

『あの男の犯した罪は、私にもかかわってくる』

と、気がつきましたので、困惑と恐怖から、前言を〔ひるがえし、盗難を〕否定しました。そして王は、もう一度、ダナミトラに催促されて立腹し、彼〔アルタパティ〕を捕えて、鎖で縛ってしまいました。

そのころ、遊女カーママンジャリーは、革財布から、その使い方の規則に従って、〔お金を〕搾り出してみたくなりました。そこで、以前、〔彼女に〕身ぐるみ欺しとられて、ジャイナ教の乞食僧になってしまったヴィルーパカを、こっそり訪れました。そして、以前奪いとったいっさいの財貨を彼に返してやったうえ、恭々しく、いろいろと詫びて家に帰りました。これで彼は、私のおかげで、ようやくジ

ヤイナ教徒の束縛から、魂を解放され(注八)、たいそう喜んで、本来の信仰に戻りました。またカーママンジャリーのほうも、革財布から搾り出せるという見込みから、数日のうちに、残っている財貨を、のこらず〔人に〕くれてやり、あとに残ったのは炉だけになってしまいました。

　さて、ダナミトラは、私に勧められて、王に申し出ました。

『王さま。遊女のカーママンジャリーは、たいへん欲が深いものですから、世間の人々に、〃ローバマンジャリー（貪欲の花束）〃と、綽名をつけられている女です。さような女が、いまでは擂鉢(すりばち)やすりこぎ棒まで、持物を残らずなんでもかんでも人にやっております。これは、私の革財布を手にいれたのが原因と考えられます。それがあの品についてのきまりなのですから。と申しますのは、商人と遊女だけは、〔革財布からお金を〕搾り出せますが、その他の者には搾れないからです。ですから、私は確信をもって、彼女に嫌疑をかけています』

　彼女とその母親は、すぐさま王に呼ばれました。

　私はまったく困ったような顔をして、こっそりと彼女に、こういってやりました。

『ところであなた、あなたが気前よく持物を残らず施したことが知れたので、革財布を手に入れた疑いがあなたにかかったのです。アンガ国の王さまは、それを問い質(ただ)そうとして、あなたをお呼びになったのです。あなたは、きっと、重ね重ね責め質されると、しまいには仕方なく私から革財布を入手したことを白状するでしょう。そうなると、私はさまざまな罰を免れません。そして私が殺されたら、あなたの妹（私の妻）も、それこそ生きてはいないでしょう。おまけに、あなたは無一物にされたうえ、革財布はダナミトラに戻されます。だから、どうしてもこの度の不運は悪果につながっています。どんな対策をめぐらしたらよいでしょう』

　彼女と母はわっと泣きだして申しました。

『まったくそのとおりです。私たちが幼稚だったために、秘密はすっかり洩れてしまいました。それに、〔私たちが〕二度、三度、四度まで否認しても、王さまに責めたてられれば、恐らくあなたが盗んだ由来を白状しなくてはならなくなるでしょう。そして、あなたのことを申し立てたら、私たち一族はもうおしまいです。しかしまた、アルタパティの汚名はひろまっています。あの吝嗇漢と私たちとが親しい仲であることも、アンガ国の都中に知れ渡っています。ですから、あの財布は、彼（アルタパティ）が私たちにくれたものですといつわるのが、私たちの身の安全の最上策です』

　二人は、私が賛成したので、王宮に出かけました。

　そして二人は、王に問い質された時に、

『お客を裏切るのは遊女の道ではありません。何故なら、男たちは正当に稼いだお金をもって、娼家に通うものではありませんから』

と、幾度も繰り返し申し立てました。しかし王が、耳鼻を切り落とすぞ、とほのめかしましたので、怯(おび)気(け)づいた二人の狡賢い遊女の申し立てによって、あわれなアルタパティは、盗賊として捕えられました。そして王は怒って、彼に死ぬほどの笞打の罰を与えました。すると、ダナミトラは合掌して、それをおしとどめて、いいました。

『王よ、マウリヤ王朝(注九)の王は、商人たちのこのような罪に対して死刑は行ないませんでした。王さまがもしお腹立ちなら、この商人の全財産を没収して、追放なさればよろしいのです』

　これが原因となって、ダナミトラの名声は挙がり、王は喜びました。富に驕ったアルタパティも、いまはぼろ布一枚を身につけて、都中の人々の目の前で追放されました。あわれな遊女カーママンジャリーは、ダナミトラのとりなしで、情深い王からアルタパティの財産のほんの一部を与えられましたが、魔法の革財布の幻想のために全財産を失いました。そしてダナミトラはクラパーリカーと結婚いたしまし

た。さてそれで、私も念願叶って、ラーガマンジャリーの家を金貨と宝石で充たしてやりました。そして都の貪欲な金持たちの群は、〈いまは私に盗まれて、無一物となり〉私の盗んだ財を恵まれて裕福になった〈以前の〉貧乏人たちの家々を、鉢を手にして物乞いして回りました。

まことに、どんな抜けめのないものでも、運命によって書かれた筋道には逆らえないものです。といいますのは、ある日、私は痴話喧嘩のあとで、ラーガマンジャリーの機嫌をとりなそうと、やさしく酒をすすめました。私も杯を重ね、彼女の口から美酒を飲んでいるうちに、すっかり酔い潰れてしまいました。酔って乱心した時の常として、平生手なれた事がらにも、とんでもない失態を演ずるものです。なにしろ、私はしたたか酔っていましたので、このようなことをいい放ちました。

『この都じゅうの全財貨を、一夜のうちに根こそぎ盗み取って、おまえの家をそれでいっぱいにしてみせるぞ』

私は、困りぬいた妻が百遍も頭を下げたり、手を合わせて拝んだりするのも構わず、まったく狂った象が荒々しく鎖を断ち切るようにして、シュリガーリカーという乳母一人を連れ、ひとふりの剣だけを手にして、恐ろしい勢いでとび出しました。私は出くわした巡警たちに向かって、ひるむことなくまっしぐらに突込みました。彼らが『盗賊』と叫んで襲いかかって来るのを、私は腹を立てるというより、ふざけ半分に二人三人と斬り捨てるうちに、酔のまわった手から剣を落とし、赤くなった目をまわして倒れてしまいました。乳母のシュリガーリカーは、悲鳴をあげながら、急いで駆けつけましたが、私は敵の者たちに縛られてしまいました。

私は災厄に酔も覚め、すぐに正気に戻って考えました。

『ええい、私の愚かさがこの大きな災難をひき起こすもとだった。しかもダナミトラが私の親友である

ことや、ラーガマンジャリーが私の妻であることは知れ渡っている。だから二人は、きっと明日、私の罪に連なって捕われるにちがいない。だが、ここに一策がある。この方法に従えば、二人を救い、私も危機から逃れることができるかもしれない』

私は、まさに一計を案じて、シュリガーリカーにいいました。

『行ってしまえ。もうろく婆ぁ。おまえはあの欲ばりの悪女ラーガマンジャリーと、革財布に目が眩んで、私の友だちのふりをする、仇のダナミトラとを、私にとりもった碌でなしだ。私は今日こそ、あの悪人（ダナミトラ）の革財布を奪いとり、おまえの娘（ラーガマンジャリー）のすばらしい宝石を盗み取ってしまったから、もう思い残すことなく死んでもいいのだ』

並みはずれて聡明な彼女は、すぐにその意味をさとりました。そこで彼女は涙を流し、声をつまらせ、手を合わせて巡警たちの前に平伏して懇願しました。

『旦那さまがた、この男から、我々が盗まれたものを残らず発見するまで、しばらくご猶予ください』

巡警たちが、『よろしい』と、承知すると、乳母はまた私のほうに近よって、

『旦那さま。あなたの召使の、この私の唯一つの失敗をお許しください。あなたが、自分の妻となった女に言い寄った仇のダナミトラが憎いのは無理もありません。しかし召使のラーガマンジャリーが永い間、あなたに仕えたことを想ったら、彼女を許してあげなければいけません。美しさを売物にしている女にとっては、装身具が何より大事なのです。ですから、彼女の装身具を何処に隠したのか、教えてください』

こう言って、彼女は私の足もとに平伏しました。

そこで、私はいかにも憐れを催したふりをして言いました。

『どうにでもなれ。私はどうせ死の手に捕われてしまったのだから、〈いまさら〉彼女を憎んでも仕方

があるまい』

と、それについて述べる風をしながら、実は〔乳母の〕耳もとに、『これこれのことをしてくれ』と指示を与えました。彼女は〔私の〕意図を、よく汲みとって、

『ではお大事に。神さまもお恵みを。アンガ国の王さまも、あなたの男らしさを賞でて、お赦しあらんことを。それから、巡警の旦那がたも、ご同情くださいますように』

こう言って、彼女は早々に立ち去りました。そして私は巡警長の命令によって、牢に連行されました。

その翌日、カーンタカという看守長が私のところにやってきました。この男はひどく傲慢な自惚れもので、好男子をもって自ら任じ、つい先ごろ父が死んで公職を継いだものの、未熟な若さでは役にも立たぬ男でした。彼は、私に少しばかり説教を聞かせたのち、こう言いました。

『もしもお前がダナミトラの革財布を返さず、また、もしも都の衆から盗んだ財貨を返さないなら、お前は十八種の拷問のすえ、死ぬめにあうのだぞ』

しかし、私は笑いながら答えました。

『これは恐れいりました。よしんば私が、生まれてこのかた盗み取った財貨を残らず返そうとも、アルタパティの妻を盗んだ、あの口先だけの友ダナミトラの、革財布の望みだけは叶えてやりませぬ。あれを返さぬ代わりには、私は一万の拷問でも受けましょう。私はこれをきっぱり誓っておきます』

彼はこんな具合に私を宥めたり脅したりして、毎日尋問しましたが、そのうちに適当な飲食物をくれましたので、私の傷は数日で癒り、健康をとり戻しました。

さてある日、太陽がヴィシュヌ天の衣のように黄金色に輝く夕暮れ時でした。乳母のシュリガーリカーは嬉しそうな顔つきで、美しい衣服を着てやってきて、供の者を離れた所に待たせ、私に近寄っていいました。

『旦那さま。おめでとうございます。あなたのすばらしい計略がうまくいきました。私はあなたのおっしゃるとおりに、ダナミトラを訪ねて申しました。

〃私はいま、遊女との交際に起こりがちなこととして、酒の上の失敗で捕われています。あなたは心配せずに、すぐに王にこう告げてください。

'王さま、あなたさまのありがたいお取り計らいによりまして、以前、アルタパティに盗まれた私の革財布は戻ってまいりました。しかし、ラーガマンジャリーには博徒の夫があり、その男はさまざまな技芸や、詩文に通じ、世情にも明るいので、私と親しくしておりました。そのような間柄から、私は彼の妻にも、毎日衣服や装身具をはじめ、さまざまな贈物をしたりいたしました。すると、その男は心が卑しいので、疑いを起こしました。そして彼は腹を立てて、あの魔法の革財布と、彼女の宝石箱を盗みました。そして、さらに盗みをはたらこうとして、うろうろ歩いているうちに、巡警たちに捕われました。そして、その不運なおりに、〔妻に対する〕以前の愛情を想い出した彼は、自分のあとを泣いて追ってきたラーガマンジャリーの乳母に、その箱の隠し場所を教えました。ですから、もし彼をなんとかうまく扱えば、私の革財布をも出すかも知れませんし、王さまの思召しで、彼を許していただけるのではないかと思います'

あなたが、王にこのように願い出れば、王は私の生命を奪わぬばかりか、私を説得して、あなたの革財布を返させようとするでしょう。そうすれば、我我にとって万事都合がいいのです〃と。

このように〔私からあなたの伝言を〕伝えられた彼〔ダナミトラ〕は、あなたの力量を信じきっていますから、何の心配もせずに、言われたとおり実行いたしました。

いっぽう、私がラーガマンジャリーに、あなたからの証拠をみせましたら、彼女はすっかり私を信用して、希望するもの（金品）をくれましたので、私

は〔その金品を用いて〕あなたのおっしゃるとおりの方法で、アンバーリカー王女の乳母のマーンガリカーと親しくなりました。その乳母を利用して、私はラーガマンジャリーとアンバーリカー王女とを親しく交際させるようにいたしました。そして、〔王女に〕毎日、新たな贈物をし、そのたびに、奇しい話や楽しい話を聞かせたすえ、私も王女のたいへんなお気にいりになりました。

ある日、王女が宮殿の露台に出ている時、私は彼女の耳に飾られた青蓮の花を、きちんとついているにも拘らず、〝落ちそうになっています〟と言って着け直しながら、わざとしくじったふりをして落としました。私はそれを拾って、つがっている鳩を嚇して追い払うようなふりをして、笑いながら〔その時〕何かの用件で後宮に近い中庭にはいってきた〔看守長の〕カーンタカのほうへ投げました。すると、彼はすっかり有頂天になって、ちょっと上を見上げてほほ笑みました。王女は私のしぐさがおかしくて笑ったのですが、彼のほうは、私がうまくそう思わせるようにやったものですから、王女の嬉しそうな表情を、まさしく彼に対する愛の表われと思いこんだのです。そして愚かな男は、引き絞った愛神カーマの弓の、毒を塗りたてた矢に射抜かれて、心が乱れ、辛うじてその場を立ち去っていきました。

夜になると、私は香り高いターンブーラや、一対の絹の衣裳や、いくらかの装身具を籠に詰め、王女の印章のついた指環で封をして、〔王女さまから〕友達のラーガマンジャリーへの贈物ということにして、一人の少女に持たせ、それをカーンタカの家へ届けるために出かけました。彼は深い恋の海に沈んでいましたので、私を見ると、まさに〔救いの〕船かとばかりに喜びました。そして私は、王女が平素とはうって変わって、さまざまの想いに打ちひしがれている様子を語りますと、愚かな彼はたいへんな喜びようでした。そして翌日、私は彼に望まれましたので、〝あなたの愛する人からのものです〟と言

って、私の口で噛んで、吐き出したターンブーラや、使い残りの香油や、飾りの役に立たなくなった花や、汚れた衣裳を持ってゆきました。そして、彼から王女へといって受け取った品を、私はひそかに捨ててしまいました。

こんな工合に私は彼の恋情をかき立てておいて、内密に話しかけました。

〝旦那さま。あなたの身に具わる吉相は、きっと狂いがありません。何となら、私の近隣の、ある占星師が申しました。

'この王国はカーンタカの手に帰するだろう。あの仁の相は、これこれだ'

これを裏書きするように、王女さまはあなたを想っています。そして王さまには王女のほかに、お子さまがありません。ですから王さまはあなたと王女が睦じくなったことを耳にして、たとえご立腹なさっても、王女さまはあなたなしには生きていないであろうと恐れるあまりに、あなたを殺すことはないでしょう。いいえ、それどころか、あなたに太子の位を継がせるでしょう。このように事は運ぶのです。どうです。やってごらんになりますか。あなたがもし後宮へはいる方法をご存じなければ、牢の壁から林園の塀までの間の三ヴィヤーマ（約六尋）を、誰か熟練した盗賊に掘らせて、地下道を作らせなさい。あなたが林園に忍び込んだ後は、私たちが保証いたします。召使たちは王女さまにたいへん忠実ですから、秘密を洩らすことはありません〟

看守長は答えました。

〝ご婦人よ、いいことを教えてくださった。ある盗賊が一人いるのです。掘ることにかけてはサガラ王の王子たち（注三）とも紛うほどです。あれにやらせれば、たちまちこの仕事はできてしまう〟

私は聞きました。

〝それは誰のことですか。あなたは、なぜその男を利用しないのですか〟

すると、彼は〝あのダナミトラの革財布を盗んだ

男だ〃と言って、あなたのことを私に話しました。

〈そこで私は、彼にこう教えました〉

〃もしそうなら、こうなさい。あなたは、こういってその男と約束するのです。

'もし、お前が言われたとおりに仕事をやり遂げたら、私はさまざまな手段を講じて、お前を自由の身にしてやろう'

そして、仕事をやり遂げたら、もう一度鎖につないでしまって、こういって、王さまに報告なさい。

'この盗賊は、さまざまな手段を用いて扱ってみましたが、とても大胆不敵な奴で、ひどく反抗し、どうしてもあの革財布のありかを白状いたしません'

そのあとで、あなたは種々な拷問にかけてあの男を責め殺してしまえばいいのです。こうすれば目的は達せられ、また秘密も洩れることはありません〃

このように申しますと、彼は大喜びで賛成して、私にあなたを説得せよ、と命じて、外で待っているのです。これから先〈の計画〉は、あなたがよろしくお考えください』

そこで、私は喜んで〈乳母に〉言いました。

『私はほんの少ししか言わないのに、あなたは、たいへんたくさんの計略をめぐらしてくれた。彼をつれてきてもらいたい』

こうして、案内されてはいって来たカーンタカは私の釈放を約し、私は彼の秘密を洩らさないことを誓いました。

私は鎖を解かれて、入浴や食事をし、香油を塗り、その後、まっくら闇の牢の壁ぎわから取りかかり、盗賊用の鋤(注三)を用いて、地下道を掘りました。そして私は考えたのです。

『彼はたしかに〈私を〉殺す気でありながら、私の釈放を誓ったのだ。だから〈私が先に〉彼を殺しても裏切りの罪にはならないはずだ』

私は外部に出るや、彼が鎖で縛ろうとして手をのばすところを、足で胸を蹴り、倒れたところを曲刀で、首を切り落としました。そして私は、乳母のシ

ユリガーリカーにいいました。

『友よ、王女の御殿の入口は何処か教えてください。この大骨折りを無駄にするわけにはいかない。後宮から、何かを盗んで帰ろう』

私は御殿の配置を教わると、後宮に忍び込みました。宝石で飾ったたくさんの燭台の燈にあかあかと照らされて、さまざまな遊戯に疲れて眠っている侍女たちに囲まれた王女を、私は見ました。眠る獅子の姿に彫った象牙の脚に宝石をあしらい、白鳥の羽毛の枕と褥で被い、その縁とりに花を散らした寝台の上に、王女は安らかに眠っていました。右足の踵の下に、左足の甲の先をいれ、美しい踝(くるぶし)を少しばかり外側に向け、踁(ふくらはぎ)を互いにぴったりと着け、可愛らしい両膝をすこし曲げ、腿をわずかにずらしていました。蔓草のような一方の腕をふんわりと腰の上に置いて垂らし、他方の腕は曲げて蕾のような掌が頰の下におかれていました。臀の円みはすんなりとして、絹の下着がぴったりと身につき、胴は細く引きしまり、固い胸の蕾のような乳房は微かな息づかいの始まる度に揺れ動き、わずかに傾けた頸には純金の糸に通した紅玉の首飾りが見え、下側になった耳の飾りはなかば隠れ、上を向いた耳につけた宝石の耳飾りは、彼女がゆるく結わえたために、解けたゆたかな髪に紅い輝きをそえていました。かすかに開いた唇から洩れて見える赤さも(注)、彼女の輝く美しさのために際立っては見えず、頰の下におかれた花のような手は、かくれて見えない耳飾りの代わりをしているように見え、上を向いた鏡のような頰の上には、寝台の天蓋から垂れ下った、木の葉型の飾りの影が映って、つけぼくろ(注)のように見えました。青蓮のような目を閉じ、長い旗のような眉はじっと動かず、白檀の粉で描いた前額(ひたい)の標識(注)は流れる汗の滴で溶け、月のような顔には蔓草のように髪がくねり、からだの片側は純白の掛布にほとんど沈み、〈昼の間の〉長い娯しい遊戯に疲れて、さながら秋の雲の膝に憩う稲妻のように、じっと安らかに眠っ

ていました。

ひと目見ただけで、私は情熱に燃え、はげしい欲望にふるえました。盗むための私でしたのに、かえって私は魂を奪われてしまいました。私はどうすべきかに迷って、一瞬、そこに立ちつくしました。そして心に思いました。

『もし、私がこの美しい目の王女を手にいれられないなら、春の友（愛神カーマ）は私が生きながらえるのを許さないだろう。だがいきなり私が手を触れたら、無邪気な彼女は、きっと驚きの声を立て、私の望みを断ってしまうだろう。そして私は殺されるのだ。だが、まてよ、こうすればいい』

私は釘にかかっていた、樹脂を塗った〔画〕板を取り、宝石箱から絵筆をとり出し、王女の寝すがたそのままに、その傍に私がひざまずいている画を描きました。そして次のような、詩句を書き添えました。

両手を合わせて　この下僕（しもべ）は
君にこのことを乞い願う。
〃互いの愛にみち足りて
我とともに眠り給え、
ゆめゆめ独り寝し給うな〃

そして、私は黄金の籠から、香りの高いターンブーラの葉に檳榔子の実を巻いたものや、樟脳の小片やパーリジャータ(注10)〔香水〕を、〔とり出して〕嚙むと、その赤い汁で、白壁に、ひと番（つが）いのチャクラヴァーカ鳥を描きました。それから私は、〔王女と自分の〕指環を交換すると、後ろ髪をひかれる思いで外へ出ました。

私は地下道づたいに牢に戻って、日ごろ、親しくしていた都の住人のシンハゴーシャというすぐれた男に、

『私は憐れなカーンタカを殺した。だからあなたはそのことを密告して、自由を得なさい』

と教えて、乳母のシュリガーリカーとつれだって外に出ました。

公道に出るや、私は巡警たちに出会って、つかまってしまいました。そこで思うのに、

『私はつかまらずに、すばやく逃げられるが、そうすれば可哀そうにこの乳母は捕われるだろう。だから、いまの場合はこうすればいいのだ』

私は巡警たちのほうへすばやく走りより、両肘を背中にまわして、後向きに立つと、こういいました。

『私がもし盗賊ならば捕えるもよし。それがあなた方の役目だ。だが、この婆さんは〔捕えては〕いけない』

ところが、乳母は、とっさの間に私の意向を察しましたので、彼らに近寄って、一礼すると、申しました。

『皆さん、これは私の息子です。風天（瘋癲）病(注11)で長らく治療中でしたが、昨日はほとんど平常に戻ったように見えましたので、私は安心して息子の檻禁を解き、入浴や、塗油をさせたのち、新しい衣服の一揃いを着せ、牛乳のお粥をとらせて、今日は、気ままに寝起きさせておきました。ところが夜半になりますと、またこの子は発狂いたしまして、〃おれはカーンタカを殺して、王女とねるんだ〃と口ばしって、たいへんな勢いで、公道にとび出しました。私は息子がこんなありさまになったので、いままで追いかけてきたのです。どうぞ、お願いです。この子を縛って、私にお返しください』

こういって、乳母が泣き叫んでいます間に、私は毒づきました。

『老ぼれ婆ぁ。誰が風天さまを縛りつけておけるものか。こんな鴉ども（巡警たち）に、おれさまのようなガルダ鳥(注12)が捕まるものか。ばかばかしい』

といって、私は逃げ出しました。巡警たちは乳母に申しました。

『こんな気ちがいを正気だと思って放っておくお前のほうが狂人だ。誰があんな男を捕えるものか』

こうさんざんに叱られて、乳母は泣きながら、私を追いました。そして私は、〔遊女の〕ラーガマンジャリーの家に戻り、長い間の別れを悲しんでいた彼女を、さまざまに慰めて、その夜の残りを過ごしました。そして朝になってから、私はウダーラカにも再会しました。

それから、私は聖者マリーチ仙を訪れました。聖仙は遊女との忌わしい苦痛から立ち直り、苦行の功成って、再び天眼通をとり戻していました。そして、私は聖仙から、このようなあなたとの再会の予言をうけたのです。また〔同囚の〕シンハゴーシャは〔看守長〕カーンタカの罪状を告げて、王のお賞めにあずかり、その〔カーンタカの〕公職を継ぎました。そのうえ、彼はもう一度、私を牢の地下道づたいに、王女の宮殿へ入れてくれました。そして、王女は乳母のシュリガーリカーの話によって、〔私に〕好意を抱いていましたので、私と睦じく結ばれました。

そのころ、〔マーラヴァ国摂政の〕チャンダヴァルマンは、王女への求婚を〔アンガ国王〕シンハヴァルマンに拒まれて、立腹のすえ、都を包囲しました。アンガ国王は短気でしたから、援軍が間近にやって来ているのも待ちきれず、自ら城塁から打って出て、敵軍に突進しました。はげしい戦闘の最中に、シンハヴァルマン王は、優勢な敵に甲冑を打ち破られて傷を負い、力ずくで捕われてしまいました。〔敵将〕チャンダヴァルマンはアンバーリカー王女を乱暴にひっ捕えて、無理に結婚するため、自分の宿所へつれ去りました。そして彼は、

『結婚式は夜の終わり（明朝）に』

と宣言して、結婚式のために、婚姻のめでたい紐[注]を編みました。

私もダナミトラの家で、〔同じように〕その結婚式のために、めでたい紐を用意したうえ、ダナミトラにこういってやりました。

『友よ。アンガ国王救援のため、王たちが近くまで来ています。あなたは都の有力者たちを集めて、ひそかに先導して来なさい。あなたが到着した時には、敵の首がなで切りにされているのを見るでしょう』

彼はそのとおりにする、と約束しました。私は短刀をふところに忍ばせ、祝福の呪文を唱えるバラモンたちとともに、その命数もわずかな男〔チャンダヴァルマン〕の宿所にはいりこみました。そこは祝典のために混雑し、婚礼の道具がいっぱい置かれ、人々が出たりはいったりしていました。〔ちょうどその時〕バラモンたちが聖火の前で、アタルヴァ・ヴェーダの儀式に従って、王女の花の手を、〔チャンダヴァルマンに〕与えるところでした。彼が、その手を把ろうとして腕をのばした時に、私はその長い腕を摑んで引きよせると、短刀で胸を刺しました。騒ぎ立つ他の幾人かのものをも、私は閻魔王の国〔冥土〕へ送り込みました。

それから、かき擾(みだ)され、荒された建物の中を進んで行きますと、目を大きく開いて、慄えている王女を発見しました。私は彼女の抱擁の悦びを味わうために、彼女を寝室へ運びました。私が、湧き出た雲から発する雷鳴のような、あなたの深い声を聞く喜びに接しましたのは、ちょうどその時だったのです」

ラージャヴァーハナ王子は、この物語を聞き終わると、にっこりほほ笑んで、こう言った。

「まことに、貴公の大胆な行動は、カルニースタ〔盗賊指南書の著者〕[注]をも、しのぐものである」

次いで、王子は、ウパハーラヴァルマンに向かって、言葉をかけた。

「さて、こんどは貴公の番である」

注

一　肢体の調整　油を肢体に塗ったり、マッサージをすること。

二　身体の諸要素の均衡　doṣa. 粘液 śleṣman, 胆汁 pitta, 風 vāyu の三要素が身体にあ

り、これが均衡を失うと病気になる。

三 生物と無生物にわたる博奕 sajivanirjivadyūta. 生物の博奕とは、例えば、闘鶏のようなもので、無生物は、賽や将棋のようなものである。

四 房事の秘技 abhyantara-kalā. 秘技、媚態術の類。

五 女性にやさしく 女性礼賛家、dākṣinya, 英語の gallantry.

六 ガンダルヴァ婚 gandharva-vivāha, または、gandharva-samāgama. 両親の許可なく、結婚の儀式を行なわずに男女が結合することをいう。

七 村長 Svāmin. 主人の意、注(Bhūṣaṇā)によれば Svāmin は村長の意で、裁判は町の裁判（パンチャーヤット）を意味するという。

八 神さま プラジャーパティ、生主と訳す。創造神。

九 火神の御もとにまいります 火中に投身自殺をする意。

一〇 人生の三願 tri-varga. 三大願、三要件の意。
㈠徳または法 dharma. 主として、宗教的なつとめをいう。
㈡財または処世理財 artha.
㈢愛または性愛 kāma.
古来インドにおいては、右の三要件を正しく知って人生に処するのを理想とした。

一一 最高我 adhyātma, アートマン（我）を第一とする哲学的な「真実在」の認識。

一二 インドラ天はアハルヤーと情事を行ない
アハルヤー Ahalyā は天女アプサラスの一人。ガウタマ仙 Gautama の妻。インドラ天はガウタマ仙の不在中に、仙者の妻アハルヤーと通じようとしたが、発見された。インドラ天は、この罪により、身に千の女陰のしるしをつけられたが、後にこれを千の目に変えた、と伝えられる。

一三 月天は〔神々の〕師の寝床に上がり Śaśāṅkasya gurutalpagamanam, シャシャーンカ（兎を印とするもの、即ち月神チャンドラ）は神々の師ブリハスパティの妻ターラーと通じて子供を生ませた。

一四 ケーサリン Kesarin. 猿の名。大叙事詩「ラーマーヤナ」で活躍する猿の英雄ハヌマットの父。

一五 パラーシャラ仙 Parāśara. 広博仙人 Vyāsa の父。

一六 アトリ仙 七大仙人の一人。

一七 ジャイナ教の僧院 Kṣapanaka-vihāra. クシャパナカは乞食僧、とくに裸形の空衣派のジャイナ僧。Padacañdrikā の注は、仏教僧としている。

一八 ヴェーシャ（娼家）から…… 娼家は veśa. veṣa には外見、衣服などの意があるが、ジャイナ教の空衣派の僧は、空気を衣とするといって褌もしない全裸の姿であるから、ここは裸形の姿をいう。

一九 毛髪を引き抜かれて…… ジャイナ教徒は極端な苦行を修し、空衣派の僧は身体の毛髪をすべて抜き去る。

二〇 ハリ、ハラ、ヒラヌヤ・ガルバ ハリ Hari はヴィシュヌ天。ハラ Hara はシヴァ天。この二神は、しばしば続けて、ハリ、ハラと呼ばれる。ヒラヌヤ・ガルバ Hiraṇyagarbha（金胎）は創造神。いずれもヒンドゥー教の神であるから、ジャイナ教徒が誹謗する。

二一 カルニースタ Karṇisuta. 盗賊に関する教科書ともいうべき書 Steyaśāstra の

著者として知られる。しかし、この書は現存していない。注釈は Karṇisuta, Mūladeva, Mūlabhadra, Karāṅkura, Karaṭaka などの名を挙げ、これらの名前が同一人であるという。田中「盗賊指南書」(『印度さらさ』三三ページ以下)参照。

二一 盆蓙 akṣabhūmi. 注釈に「賭場」「賭博者の坐る格子縞の布」「賽を投げる場所」など諸説がある。ヘルテルは Spieltuch と訳し、インドでは賭博をする台板の代りに布を使う、といっている。

二二 「蛇の口」 phaṇimukha. 恐らくその形状から名づけられたものであろう。インド人の家は土または石でできているから、侵入するには孔を穿たねばならず、それに使用する一種の鍬である。

楽器 kākali. 低くやわらかい音を発し、侵入にあたり、家人が目覚めているかどうかを確かめるもの。

釘抜き saṁdaṁśaka.「嚙みあわす」の意で、釘抜きのようなものと思われる。

人形 puruṣa-śīrṣaka. 木製の「人の首」の人形。破った穴から差し入れて、内部の反応を確かめる道具。

魔法の粉末 yoga-cūrṇa. 眼に塗ると、姿がかくれるという。呪術、魔法の類に属する粉末。羅什訳『竜樹菩薩伝』に竜樹が青薬一丸を眼瞼に塗る陰身の術を会得し、宮中の美人を犯した、という話がある。

魔法の燈火 yoga-vartikā. これも呪術的なもので、すべてのものを見得る力があるとされる。注(Bhuṣaṇa)によれば、この燈火の光で壁の中にいる蛇が出てきて、家人を面食らわせるのだという。

測量紐 māna-sūtra. 測量に用いる紐。また毒蛇や害虫に咬まれた時の止血用にも役立つ。

蟹の形の鉤のついた綱 karkaṭaka-rajju. 綱の先端に蟹の形をした鉤のついた道具。塀や城塁など、高所へ登るに用いる。

蜂のはいった箱 bhramara-karaṇḍaka. 蜂や蛾をいれた箱で、これらの虫をとばせて、室内の燈火を消してしまうもの。

二四 印契 mudrā. 印相、密印とも訳され、手指で種々の型を表わす呪い(まじない)。

二五 死 Kāla. 蛇の意も有し、その両方の意にかけている。

二六 カーマルーパ国 Kāmarūpa. 現今のベンガル州の東北部、アッサムの西部にあたる。

二七 藁屑 triṇa. 価値のないもの、の意。

二八 比丘尼 Śākyabhikṣukī. 仏教の比丘尼。男女間の仲介役をしていたらしい。

二九 ジャイナ教徒の束縛から…… nirgantha. 無繋また離繋と訳される。「世俗の繋縛を捨て去ったもの」の意で、ジャイナ教、または仏教のこと、また裸行のジナ僧または仏教徒のことをいう。

三〇 マウリヤ王朝 Maurya. 孔雀王朝。BC三二三年のころに、チャンドラグプタ Candragupta が興し、アショーカ(阿育王)に至って全インドを統一した。

三一 サガラ王の王子たち サガラ王 Sagara は、アヨーディヤー Ayodhyā の王で、その王子は六万人といわれた。恒河に関する伝説の一で、ある時、王が馬祠の祭を行なおうとすると、生贄の馬をインドラ天が盗んでしまった。六万人の王子は捜索のために諸国を巡り、また大地を深く掘り下げて地中をさがした、という。

三二　盗賊用の鍬　uragāsya.　盗賊用または軍用にもなる地下道を掘る用具、前に出たPhaṇi-mukha と同じく「蛇の口」の意。注三一参照。

三三　唇から……赤さも　ターンブーラ（ベテル）を嚙んで歯も真紅に染まっている様子をいう。

三四　つけぼくろ　viśeṣaka.　tilaka ともいい、一般にカーストや宗派を表わすため、白檀などで前額に描かれる印をいう。化粧のため頬にも描いたものらしく、中国の粧靨とよぶものに当たるであろう。木の葉の形のつけぼくろ。現代のビューティ・スポット。

三五　前額の標識　tilaka.　注三四参照。

三六　パーリジャータ　pārijāta.　香遍樹ともいい、花は雑色で香りがよく、蕾は食用に供される。注によれば、芳香のあるkhadira（アカシヤの一種）から作った香水。

三七　風天病　vāyu-grasta は「風にとりつかれた者」の意で、精神病の一種のようである。気が狂っているという意。瘋癲を風天と訳したのは、後に devo Mātariśvā（風神）という語が出てくるからである。

三八　ガルダ鳥　Śauṅgeya.　注釈は鷹または鷲の意にとっているが、鳥の王 Garuḍa の名として訳した。

三九　めでたい紐　kautuka.　結婚式に当たり、聖火の周囲を七歩ずつで三周し終わった新郎新婦が、この紐を首に懸けて、二人の衣服を結び合う。これをサプタ・パディー Sapta-padī（七歩式）といって、結婚に関する諸儀式のうちでも、最も重視される。すぐ後で、同じものを maṅgala-pratisara（めでたい紐）といっている。

四〇　（盗賊指南書の著者）　注三一参照。

第三章　ウパハーラヴァルマン物語

ウパハーラヴァルマンもまた、ほほ笑んで、会釈すると、語り始めた。

「私も旅をしながら、ある日、ヴィデーハ国[注一]に着きました。ミティラーの都の手前に、おりよく小さなお堂がありましたので、休息のため、私は中にはいり、ある年老いた修行尼から、洗足の水をもらって、しばらくの間、露台でひと休みしました。けれども、彼女は私を見るやいなや、何故か、とめどもなく涙を流していました。私は聞き質してみました。

『母よ、どうなさったのですか。理由を聞かせてください』

彼女は悲しげに、こう述べました。

『あなたは、この都ミティラーの王が、プラハーラヴァルマンさまであることを、ご存じでしょう。王さまは、マガダ国のラージャハンサ王とはたいそう親しい仲でした。また二人の王のお妃であるヴァスマティー妃とプリヤンヴァダー妃との間柄も、まさしくバラとシャンヴァラ[注二]そのままの、稀にみる親しさでした。ところで、プリヤンヴァダー妃は、初の懐妊を喜ぶ親友のヴァスマティー妃に会うため、夫とともに、華の都プシュパプラへまいりました。

ちょうどその時、マガダ国王とマーラヴァ国王との大戦が起こりました。その〔敗戦の〕あとで、マガダ国王の行方はまったく判らなくなってしまいました。でも〔都を訪問中の〕ミティラーの王さまは、辛うじてマーラヴァ国王に生命だけは助けられて、故国に帰る途中、すでに自分の国は王の長兄サンハーラヴァルマンの息子ヴィカタヴァルマンを始めとする兄弟（甥）たちに、占領されてしまった、と聞

きました。そこで、王さまは甥（妹の子）にあたるスフマ国王から軍兵の一部を借り受けようと思って、深い森林にはいっていきましたが、そこで山林の蕃族たちに全財産を奪われてしまいました。

　そして私は、〔王さまの二子のうち〕幼い王子を抱いていましたので、蕃族たちの注ぐ雨のような矢を避けて、道づれもないままに、森林の奥深くはいっていきました。私はそのあたりで、〔襲いかかってきた〕虎の爪にかかって倒れ、王子は手から放れて、赤い牛の屍体の胸に落ちました。虎は、その牛の屍体を引きずっていこうとした瞬間、弓から放たれた矢にあたって死に、王子はビール族〔山間の蕃族〕の少年たちに攫われていきました。私は気を失って倒れていましたところ、ある羊飼の男に拾われ、その男の小屋で傷の手当を受けて癒りました。そこで私は王さまのおそばにいきたいと思いながらも、〔一人だけでは〕それもならず、困っていますと、私の娘が、ひとりの青年とつれだって、そこへやって来ました。娘はたいそう泣きました。ようやく泣きやんでから娘は、〔王の〕一行が離散した時に、自分がお守りしていた〔もう一人の〕王子が、キラータ族〔山間の蕃族〕につれ去られたこと、そして娘は、傷を森に住む男に手当してもらったこと、そのあとで、その男に結婚をせまられましたが、そのような賤民との交わりを恐れて、言葉も荒く拒んだこと、我慢のならなくなった男が、人気もないところで娘の首を刎ねようとした時に、偶然にも、その青年に発見されて男は殺され、娘は青年と結婚したこと、を語りました。青年は問われるままに、自分はミティラーの王の従者の一人で、ふとした理由から、遅ればせに〔王の〕跡を追う者である〔と、答えました〕。そこで私は青年といっしょに王さまのもとへまいりました。プリヤンヴァダー妃は、王子の消息を聞くと、たいへんお悲しみでした。

　そして王さまは、不法な甥と長い間戦ったすえ、辛抱しかねて、もう一度はげしい戦いをいどみ、武

運つたなく囚われの身となり、お妃も牢に入れられました。私はこの老齢のこととて、生計も立ちませず、〔世を〕捨てて乞食尼となりました。しかし可哀そうな私の娘は、〔王位を奪った〕ヴィカタヴァルマン王のお妃のカルパスンダリーのもとに奉公いたしました。もし二人の王子さまが、無事に育っておいでなら、歳月も経っていますことゆえ、ちょうど、あなたほどの年ごろになっておられるはず、そればかりか、お二人がいれば、王さまが血縁の者たちに、してやられることもなかったでしょう』

　こういって、老女は涙にくれました。

　私も彼女の話を聞き終わると、大いに涙を流して、ひそかにいいました。

『お年寄よ。そういう事情なら、安心しなさい。あなたは、たしかに王子の養育を一人の苦行者に頼んだのですね。その苦行者が、王子をひき受けて育ててくれました。話せば長い話です。ほかでもない、私がその王子なのです。ヴィカタヴァルマンになんとかして近づくことさえできれば、私は彼を殺せます。だが彼には、たくさんの弟たちがあり、その弟たちにはこの都や国の人々が協力するでしょう。しかし、この都において誰一人として、私の素姓を知る者はいないのです。両親でさえ、私を知らないのだから、まして他の人々にとってはなおさらです。そこで私は、この目的を果たすために、手段をめぐらしましょう』

　老女は泣きながら私を抱きしめて、幾度も幾度も頭に接吻しました。そして〔感きわまった〕彼女は、胸に乳を滲ませながら、もどかしそうに申しました。

『よくぞ、ご無事にて、めでたいことです。やっと幸運がめぐってきました。いまこそ、父王プラハーラヴァルマンさまはヴィデーハ国をとり戻した〔も同然です〕。それと申しますのも、あなたさまが長く逞しい腕で、はてしない悲しみの海を、王さまが渡り切ることができるように、ここへ来てくださっ

たからです。ああ、プリヤンヴァダー妃も、お幸せです』

このうえもなく喜んだ彼女は、私が入浴や食事や、その他のことをする手伝いをしてくれました。その夜、私は堂内の藁ぶとんに横たわって考えました。

『この仕事は詭計を用いなくては遂げられない。そして詭計の源は女である。だから私は、後宮のようすを老女から聞き出して、それをいとぐちにして何か策を考えよう』

私がそのようなことを考えている間に、夜はあたかも太陽神の馬の鼻息の荒さに吹きはらわれたかのように消え、太陽がさながら〔夜の間〕海の胎内にいたために鈍くなってしまったかのように、弱々しく輝いて、海から昇りました。私は起き上がって、朝のお祈りを終えたのち、老女にいいました。

『母よ。あなたは、下劣なヴィカタヴァルマンの後宮の事情に通じていますか』

こう、いい終わらないうちに、見知らぬ女が、私の目の前に現われました。老女はそれを見るや、嬉し涙にむせんで、声をかけました。

『まあ、プシュカーリカー、娘じゃないの。ごらん、王子さまだよ。私は森の中で、この王子さまを無慈悲にも見棄ててしまったのに、また私のところへ戻ってきてくださったのだよ』

娘はあまりの嬉しさに、長い間泣いたり、語ったりしたすえに、気分も落ち着き、後宮のようすを話すよう、母に促されて申しました。

『王子さま。カーマルーパ国のカリンダヴァルマン王の王女カルパスンダリーさまは、さまざまな技芸に、また美しい容姿に、天女アプサラスをも凌ぐほどで、夫のヴィカタヴァルマン王をまったく手の中におさめておられます。ですから王さまは〔後宮〕にたくさんの女がいても、彼女だけを愛しています』

私は彼女に、いいました。

『あなたは私からの薫香類や花束を持って、〔カルパスンダリー妃を〕訪ね、彼（ヴィカタヴァルマン）の怪しからぬ背徳などを非難して、彼女の夫に対する憎しみを煽りなさい。そしてまた、立派な夫をもって〔幸福に〕暮らしたヴァーサヴァダッター妃[注三]などの物語をして、彼女にそんな男と結婚したことを後悔させなさい。そして、後宮内での彼のないしょの浮気をなんとかして探りだして告げ口をし、彼女の嫉妬心をかき立てなさい』

それから、私は乳母（老女）にいいました。

『あなたも同じように、ほかのことはさておいて、そのお妃に近づき、そこに起こるどのような事がらも、毎日私に報告しなさい。そして我々の行動がうまくいったら、あなたの娘さんは、私のいったとおりに、影の〔形に添う〕ように、カルパスンダリー妃から離れないようにしなさい』

そして彼女たち二人は、そのとおりに事を運びました。

数日の後に、乳母が知らせてきました。

『わが子よ。お妃は、自分自身を憐れと思し召して、マーダヴィーの蔓草がピチュマルダ樹[注四]にすがっているかのようなありさまになりました。こんどは、何をいたしましょう』

私はそこで、自画像を描いて、いいました。

『あなたは、これをお妃のところに持っていきなさい。お妃は絵をよく見てから、きっと〝こんな容姿のすぐれた方がいるのかしら〟というにちがいありません。そうしたら、あなたは答えるのです。〝もし、いるとしたらどうなさいます〟そのあとの、お妃の答えたことを、あなたは私にしらせてください』

乳母は、

『おっしゃるとおりにいたします』

と、王宮に行き、帰ってくると、ひそかに私に報告しました。

『わが子よ。お妃はあの絵をまるで酔ったようにごらんになっていましたが、やがて驚きいぶかりながら、

〃この世の人とも思えません。愛の神カーマさまさえ、これほど美しくはありません。この絵は、まことにすばらしい。私は国中で、このような絵を描ける人を知りません。この絵はいったい誰が描いたものですか〃

と、いいました。

私は笑って申しました。

〃お妃さま。たしかに、あなたのおっしゃるとおり、カーマの神さまでも、これほど美しくはありません。でも、海にかこまれたこの世界は広大ですから、どこかに、このような美しい方が、運命の命ずるままに、生まれてもいいはずです。そして、また、このように美しくて、美しさにふさわしく、技芸も、性質も、教養も、知識もすぐれ、若くてしかも素姓もいい誰かが、近いところにいるとすれば、そういう人は何を手にいれるでしょう〃

お妃は、いいました。

〃私は、どう答えたらいいのでしょう。からだも心も、生命も――。いいえ、それらのすべてを合わせて〔捧げて〕も、まだ不足で、ねうちがありません。ですからその方は、何も手にいれることができないでしょう。もし、これが嘘いつわりでないのでしたら、あなたは私の目の願いをみたして、その方に会えるように取り計らってください〃

私はお妃の想いを、なおもつのらせるため、こういいました。

〃そのような王子さまが、姿をかえて旅をしています。王子さまは春の祭の時に、さながらカーマ天のお妃と紛うあなたさまが、侍女たちをつれて林園を歩いていらっしゃるのを、偶然見かけました。そして王子さまはカーマ天の矢の的となり、私にすがりました。私はあなたがたお二人の、まれにみる美しさや、その他さまざまの長所が、まったくお似合だと思いましたので、〔王子が〕整えた花環や華鬘や香油など〔を捧げて〕長い間、あなたにお仕えしてまいりました。そして私は王子がみずから描いた自

画像を持参いたしまして、あなたに彼の想いを伝えようといたしました。あの方は人並みはずれて精力と才智にすぐれていますから、あなたの心に決めたことは、何ひとつ不可能なことはありません。私は今日にも、その方をお見せいたしましょう。逢曳きの場所をおっしゃってください〃

妃はしばらく考えたあとで、またいいました。

〃母よ。もはや、これはかくすべきでありませんから、話します。私の父とプラハーラヴァルマン王〔アンガ国王〕とは、たいへん親しい間柄でした。そして私の母のマーナヴァティーとプリヤンヴァダー妃〔アンガ国王妃〕との間もたいそう親しかったのです。この二人の妃の間には、まだ子供の生まれない前から、まさしくこのような約束がかわされていました。

'私たち二人のうち、どちらかが男の子を持ったなら、その男の子に、女の子を生んだほうが、その女の子を与えましょう'

しかし父は、私が生まれたのにも拘らず、〔プリヤンヴァダー妃の王子は死んでしまった〕と、思いましたので、私を切望していたヴィカタヴァルマンに与えました。これも天命のしわざです。そして彼は狂暴な性で、〔彼の〕叔父〔にあたるプラハーラヴァルマン王〕に対して奸計を企らみ、容姿は醜く、愛情のいたわりにも未熟で、技芸や、詩文や、演劇などに暗く、英雄気どりで、自慢をこととし、嘘を吐き、卑しい仲間と交わります。ですから、私はこのような夫が気にいりませんし、ことに最近はそうなのです。つい先ごろも、あの林園で、私の親しいプシュカーリカーが傍にいるのにもかかわらず、身のほどもわきまえず、私を恋仇と思って、私に嫉妬しているラマヤンティカーという彼の舞姫(注五)を、私がわが子のように育てた小さなチャンパカの木(注六)〔の花〕を自分の手で摘んで、飾ってやりました。そして、そこで私と娯しんで、そこを離れたばかりの、チトラクータ〔という築山〕の中にある園亭の、宝石を

鏤めた寝台で、彼女といっしょに娯しんだのです。あの男は、私と性格が合わないばかりか、私を無視さえし始めたのです。あんな人のことを、どうして私が面倒をみられるでしょう。私にとっては、もう来世の恐怖も現世の苦痛で消えはてました。心がカーマ天の矢の簇となった（恋にめざめた）女にとって、好きでもない男と長い間くらすのを強いられることは、まことに耐えがたい苦しみです。あなたは今日、私をその方と、林園の中のマーダヴィーの蔓草のしげる園亭で会わせてください。あなたの話を聞いただけで、私の心はすっかり惹かれました。お金はたくさんあります。私はこのお金を使って、その方を〔ヴィカタヴァルマンの〕代わりに王の地位につかせ、そうなったら、私は一生その方に仕えて暮らします〃

私もこれに同感して、戻ってまいりました。このあとは、王子さまがよくよくご判断のほどを――』

それから私は、乳母から後宮の入口、番人のいる所、林園の中の〔園亭の〕場所を聞きました。やがて、夕日はさながら日没の山の頂きにつきあたって血を流したように赤々と燃え、そして西方の海に沈みますと、その太陽の炭から生じた煙かと紛うばかりに、夕闇が空一面に拡がりました。そして群星を率いる月は、師匠の妻を奪った（注七）〔自らの前歴を〕誇り顔に、まさに人妻を犯そうとしている私を、先輩顔をして導くかのように、昇りました。そして白蓮のように白いカルパスンダリー妃の顔に似て、ほほ笑みつつ、はげしい情熱をこめて私を見下し眺める月の面に、愛神カーマが世界を支配しようと、燃えるような輝きを点火した時、私はてごろな寝床を整えて身を横たえ、心に思いました。

『この行動はもはや、成就したにひとしい。だが人妻と通じる罪によって、徳は損われるだろう。しかし、財と愛の二つが得られる場合には、聖典の祖述者もそれを許している。のみならず、私は捕われた両親を救う手段として、それを侵すのであるから罪

は消滅して、かえって幾分かの徳を加えるだろう。しかしラージャヴァーハナ王〔子〕や友人たちが、これを聞いたら、何というだろう』

私はそんなことを考えているうちに、眠ってしまいました。

すると、夢に象の鼻をもった〔ガネーシャ（注八）〕神が現われて、お告げがありました。

『よしよし。ウパハーラヴァルマン、迷うことはない。汝は余の分身であり、あの美しい妃はシヴァ天の髪にいつも戯れる〔恒河（ガンガー）の〕女神の流れ（注九）である。ある時、余は、恒河〔女神〕の水をひどくかき乱した。すると彼女は、水をかき乱されるのに堪えられず、余を呪咀した。〃立ち去ってください。そして人間になってしまうがいい〃と。

余も彼女を呪った。

〃ここ〔天国〕でも娼婦（注一〇）だったように、お前は〔地上にあっても〕多くの人間たちの共有物になれ〃と。しかし彼女の哀願を容れて余はいった。〃では一人だけ別の男のものになれ。その後は余が人間としての一生お前と愛の悦びをともにしよう〃と。されば〔余の分身である〕汝は、このことを行ない、〔彼女の夫となるのを〕ためらうことはない』

こうして、私は喜びにみたされて目覚めましたので、その日は、恋人との逢曳のことを夢みながら一日を過ごしました。

あくる日、姿なきカーマ天は、ただひたすらに、〔愛の〕矢を雨のように私に注ぎました。やがて燃える夕日の海が干（ひ）あがって、暗黒の泥土が拡がりました。私は泥色の衣服に帯をかたく締め、手には剣と用意の道具をかくし持ち、乳母の教えてくれた地点を想い出しながら、王宮の掘割の水を湛えたあたりに行きました。さて堀に近い乳母の住いの扉の前に、あらかじめプシュカーリカーが置いた竹棒を拾うと、私はそれを堀に突き立てて柵を越えました。〔城門に〕登ってから、城門の頂上に連なる階段を伝って、地面に降りました。私はそれからヴァクラ

樹の並木に沿って進み、〔さらに〕チャンパカ樹の道に沿って少し歩くと、北の方角から、もの寂しく鳴くチャクラヴァーカ鳥のひと番の声が聞こえました。そこからさらに、北に向かってパータラー(注一)樹の道を経て、手探りでそれとわかる宮殿の内側の大きい漆喰壁に沿って、およそ弓の射程の道のりを進み、それから東に向かって、ピンディー樹やバーンディーラ樹に両側を覆われた砂の道をいくらか歩き、南に向かってはしっているマンゴー樹の小径にはいっていきました。

私はこうして、手燭の蓋をわずかに開けた明りで、マーダヴィーの蔓草の茂った、宝石の長椅子を中に設けた園亭を見つけました。そして中にはいると、その片側に休憩室があり、壁面には花盛りのクランタ(注二)草が茂り、地面まで垂れ下ったアショーカ樹の枝で作った扉は、開き初めた花や若く柔らかい蕾で紅く映えていました。私はその扉を開けて中へはいりました。室内には花を敷きつめた寝台や、情熱を燃え立たせるかずかずのものを盛った蓮の葉の皿や、象牙の扇や、香ぐわしい液を充たした器が備えてありました。私が腰をおろして、しばし休む間も、妙なる芳香が漂っていました。

やがて、ゆっくりと静かな足音が聞こえて来ました。私はそれを聞くと、逢曳の場所を出て、アショーカ樹の幹の傍に身をかくしました。眉目うるわしい妃は、興奮を抑えながら、静かに近づいて来ましたが、私の姿が見えないので、恋に焦がれた白鳥

のように声を慄わせて、つぶやきました。

『私は、きっと瞞されたのです。もう生きるすべもありません。ああ、わが心よ、なぜおまえは、不可能を可能と思いこんだのでしょう。そしてそれが成就しないからといって、どうしてそんなに想い患うのでしょう。貴いカーマの神さま、私はあなたにどんな罪を作ったのでしょうか、あなたは私の身を、このように焦がしながら、まだ灰にはなさいません』

そこで私は、手燭の蓋を開けて、姿を現わしていいました。

『妃よ。あなたはカーマ天に対して、まったく大きな罪を犯したのです。というのは、あなたはその美しい姿で、カーマの神の全身であるラティー妃を凌ぎ、その弧を描いた眉で、彼の弓を侮り、その輝く黒髪で、彼の蜂をつらねたような弓弦を、あなたの視線で彼の矢を、その唇の輝きで彼のマハーラジャナ（紅藍花）の色をした旗布を、いとも香ぐわしい吐息で彼の最も親しい友のマラヤ山のそよ風を、魅惑的な饒舌でコーキラ鳥の歌声を、しなやかな両腕で彼の花で作った旗の柄を、二つの乳房で彼の世界征覇への出発のために満たされた一対の水瓶を、あなたの丸い臍で彼が戯れ遊ぶ池を、豊かな臀部で彼の戦車〔の両輪〕を、ふっくらした両腿で彼の宝石を鏤めた宮殿を支える二本の柱を、そのほんのりと紅い足の裏で彼の耳に戯れる飾りの花の蕾を、それぞれみんな凌ぎ見くだすありさまです。ですから、カーマ天があなたを苦しめ悩ますのも当然です。しかし、罪のない私までも、ひどく悩ますのは、彼（カーマ天）の罪です。ですから、美しい妃よ、あなたは、恋という毒蛇に咬まれた傷を癒すことのできる、あなたの流し目で私の生命を救ってください』

こういって私は、美しい妃を抱擁しました。私が彼女と愛の怡楽にひたると、彼女は燃え上がる情熱に、美しい目を大きく見開きました。興奮がおさま

ると、彼女はやや赤らんだ目を上に向け、頬には汗の滴のすじをまばらにのこし、思わずわけのわからぬ言葉でやさしくうめき、紅をさした歯と爪で私〔のからだ〕に痕をつけ、四肢は悩んででもいるかのようにぐったりしました。彼女のこの〔満足した〕ようすを見ると、私も、もはや心もからだも抑制をすてて、彼女と同じ状態に没入しました。やがて私たちは抱擁をゆるめ、そのまましばらくの間、まるで古い友だち同志のようにしんみりと、愛の戯れの終わりをたのしみました。さて、別れの時がやってきましたので、私は熱い深いため息を吐き、悲しげな面持で妃をそっと抱擁すると、彼女も力なく腕をのばしやさしく接吻しました。

　彼女は目に涙をいっぱい湛え、両手を頭の上で組んでいいました。

『わが主よ、あなたが行っておしまいになったら、私の生命も絶えるのだと思ってください。私もつれて行ってください。さもなければ、あなたの召使のこの私は、なんの役にも立たなくなってしまいます』

　私は答えました。

『聞きわけのない妃よ。心ある男であって、愛する婦人にやさしくしない者があるでしょうか。もしあなたが、私を変わりなく愛するつもりなら、ためらわずに、私の意見に従ってください。まず、王に、私によく似た肖像画を見せて、こういうのです。

〃なんとこの絵の人は男性美の極みではありませんか〃

　彼は、そうだ、と答えるでしょう。そうしたら、あなたはまたいうのです。

〃それでは、〔お話しします。〕ここに諸国を旅して、確信をもつに至った一人の女苦行者がいて、私はその人を母のように思っています。その母が、この絵姿を私に見せて、

〝このような呪術があります。あなたは断食をして、月の変わり目の日(注三)の夜、人気のない場所で、祭官たちが供物を捧げて立ち去ったあとの聖火の中に、百

本の白檀の薪と、百のアグルの香木(注四)と、手に数杯の樟脳と、たくさんの絹の衣服を捧げるのです。すると、あなたはこの絵のような姿に変身します。そこであなたは鐘を鳴らしてあなたの夫をよぶのです。彼はすべての秘密をあなたに語り、目を閉じてあなたを抱くのです。するとあなたの姿は彼に移り、あなたはまた元のあなたの姿に戻ります。もし、あなたと、あなたの夫が望むなら、この行法を行なわなくてはなりません！

　と、いうのです。ですから、あなたがこの絵のような容姿を望むなら、友人たちや、宰相たちや、弟たちや、また都や地方の主だった人たちと相談なさったうえ、彼らの承諾を得て、事を運んでください〃

　こういえば、彼はきっと承知するでしょう。そこで、この林園の十字路のところで、祭官(注五)が儀軌に従って、殺した獣を生贄として、火に投げいれた時、私はその煙に紛れて侵入し、この園亭の中で、待ちましょう。夜になったら、あなたはいたずらっぽく笑いながら、ヴィカタヴァルマン王の耳に、こう囁くのです。

〃あなたは恩知らずの悪者ですわね。私の好意から、あなたが人々の目を奪うような美しい姿に変わったら、きっと私の恋仇の側女たちのご機嫌とりをなさるでしょう。私は自分の破滅のために鬼神(ヴェーターラ)〔の呪術〕を用いたくはありません〃

　こういわれて、王があなたに答えたことを、私にこの隠れ家で、しらせてください。すると私は次の行動の判断をし易くなります。林園内の私の足跡は、乳母のプシュカーリカーに掃き消させてください』

　妃は『はい』と、まるで聖典の教えを聞くかのように、恭々しく答えて、去り難そうに、後宮へ帰りました。私も侵入の道を〔逆に〕たどって、外部へ出ると、わが家へ戻りました。

　さて、恋に陶酔した妃は、いわれたとおりに、事を運び、そして愚かな王はすっかり彼女のいうとおりに同意しました。不思議なこの行事の噂は国中の

人々にひろがりました。
『きっと、ヴィカタヴァルマン王は、妃の呪法の力によって、王にふさわしい美しさに変わるだろう』
『それは、たしかに詐欺だ。そんなにすばらしいことはあるはずがない』
『気狂いの沙汰ではないか』
『王の正妃が、後宮の林園の中で、それをやるのだ』
『創造主にひとしい知恵者の宰相たちさえ、賛成したのだ』
『もし、うまくいったら、それこそ空前のできごとだ』
『まったく、宝石（の魔力）や、呪文や、薬草の力では考え及ばぬ不思議なことだ』
と、人々の噂がひろまる間に、月の変わり目の日がやって来ました。夜も更けたころ、後宮の林園に、シヴァ天の頸のように黒々とした煙が立ち昇りました。そして、牛乳、牛酪、酸乳(注10)、胡麻、白芥子、油脂、獣の肉と血を聖火に投じた臭気が、風に乗って、そのあたり一帯に漂いました。そして、にわかに煙が静止した時、私は宮殿の林園にはいりました。

妃は象のような（ゆったりした）足どりで、やって来ました。そして私を抱擁すると、ほほ笑みながら申しました。
『ぺてん師さま。あなたの希望はかないました。獣(注11)（ヴィカタヴァルマン王）の用意も整いました。私は彼を誘うため、あなたに教えられた計略のとおりに、申しました。
〝浮気な方よ。私はあなたを美しくしたくはありません。何故というに、あなたが、それほど美しくなれば、天女たちでさえあなたを追い回すでしょうし、人間界の女たちはなおさらです。あなたのような、生まれつき情けをしらない浮気者は、蜜蜂のように、あちらこちらへとび歩くでしょう〟

すると、彼は私の足下に平伏して、申しました。
〝美しい妃よ。私のかずかずの悪事を、許してくれ。私は今後、他の女には心も向けない。さあ、急いで

行事を始めてくれ〟

そこで、私はこのように婚礼衣裳を着けて、あなたのところへまいりました。もうすでに私は恋の火の前で、愛神カーマを司祭として、あなたに身を委ねた妻ですが、もう一度、この聖火を証人として、私の魂を捧げます』

そして、妃は足のつま先を、私の足の甲に乗せて、背のびをすると、二つの腕をつる草のように私の首に絡ませ、柔らかい花びらのような指を組み合わせ、蓮華のような顔の上に、なまめかしく私の顔をひきよせ、目を大きく開いて、幾度も接吻いたしました。

そこで、私は妃に、
『私がすべてをやり遂げて、出て来るまでこのクランタ草の叢の中で、お待ちなさい』

と、いってそこをはなれ、その護摩の火のところへ行き、アショーカ樹の枝に懸かった鐘を鳴らしました。鐘の音は、さながら、かの王を呼ぶ死神の使者のようでした。私は進み出て、アグル香（伽羅）や白檀などを、火に投じました。

王は指定された場所へやって来ました。そして、疑わしそうに、いくらか不安をいだいて、ためらうようすで、立ちどまりましたので、（妃になりすました）私は、王にいいました。
『尊い聖火の前で、もう一度私に真実を告げてください。もしあなたが、このような（美しい）姿に変わっても、後宮の女と戯れないならば、私はあなたに、この姿を移しましょう』

彼は、『これはたしかに妃だ、間違いはない』と、心から信用して、誓いをたてようとしました。

私はほほ笑んで、さらにいいました。
『誓うまでもないことです。人間界の女性の中で、私よりすぐれた者がいましょうか。もしあなたが、天女と暮らしたいなら、お好きなようになさい。でも（その前に）あなたのかずかずの秘密を告白なさい。それを話し終わったら、あなたの姿は消えるでしょう』

彼は告白しました。

『私の叔父プラハーラヴァルマンは捕えて投獄してあるが、叔父を毒物で殺して〃あれは不治の病い[注10]であった〃と、発表しようと思っている。これは宰相たちと謀って、決定した。

私はプンドラ国[注11]を攻め落とすために、弟のヴィシャーラヴァルマンに軍兵を与えようと思っている。

それから、都の有力者のパーンチャーリカとパリトラータという隊商の長が、私に、ヤヴァナ（ギリシア）人のカナティという男から、すべての大地にも値するような（高価な）金剛石が安く手にはいると、こっそり教えてくれた。

また、私の親しい、村の長老で地方長官のシャタハリは、代官のアナンタシーラが悪い奴で、嘘つきで、高慢だから、民衆の怒りを利用して、殺してしまいたいと私にいい、私が指揮官たちにその計画を遂行するように命令を下すことに賛成している。以上が最近、私の計画した秘密である』

私はそれを聞いて、

『なんじの寿命は終わった。自業自得の運命をうけよ』

と叫んで、彼を短刀で二つに裂き、牛酪の燃える火に投げこみました。そして、彼は灰となりました。

さて婦人にありがちなこととして、愛する妃は少々気分が乱れていましたので、私はこれを慰め、蕾のように柔らかい妃の手をとって、部屋に行き、妃の承諾のもとに、後宮のすべての侍女たちを呼び集めて、挨拶しました。びっくりしている宮女たちの中で、私はしばらく気晴らしに時を過ごしたのち、女たちの一団を退かせました。それから私は寝台の上で、ぴったり合わせた彼女の両腿を、私の腿におしつけ、両腕でしっかりと抱きしめて、悦びを味わっているうちに、夜はたちまち過ぎましたが、私は（その間に）彼女の口から王宮のしきたりを聞き知りました。

夜が明けると、私は入浴し、朝の祈りをすませ、

宰相たちに会って、宣言しました。

『皆のもの。余は姿とともに、性格も一変した。よって、毒殺の予定の叔父を釈放して、再び王位につかしめる。我々一同は、叔父に対して、父に対すると同様の忠誠を尽くさねばならぬ。父を殺すほどの重い罪はないからである』

また、私は（従）弟のヴィシャーラヴァルマンを呼び寄せて、いい渡しました。

『親友よ。プンドラの国民は、いま食糧に窮している。彼らは困苦と惑乱に迫られれば、われわれの肥沃な土地を襲うかもしれない。そこで、貴公は、彼らの播種を妨げ、作物の収穫を荒らす機会があったら、進撃しなさい。いまは進んで攻める必要はない』

また、私は都の有力者二人をよんでいいました。

『私は、不当に安い価格で、非常に高価な品物を買うことはせぬ。法を守るために、金剛石は、相応の価格で買いなさい』

その次に、私は地方長官のシャタハリを呼び出して、申し渡しました。

『アナンタシーラはプラハーラヴァルマン王の徒党であるとの理由で、殺されようとしたが、余の叔父が王となったいまは、彼を殺す理由はない。なんじは彼を憎んではならぬ』

彼ら一同は、私がすべてのことを心得ているのを知って、

『まさしく、これはあの王である』

と、確信を深めたり、また驚嘆したりして、私と妃をほめ讃え、あるいは呪術の威力を吹聴しながら、私の両親を牢から解き放ち、王国を彼らの手に戻しました。そして私は乳母を通じて、ひそかにこれらの行動のいっさいを父母にしらせますと、両親は歓喜の絶頂に達し、私はその足下に平伏いたしました。そして両親は、私を皇太子の位につけました。

こうして心もおちついてみると、私は、改めてあなた（ラージャヴァーハナ）とお別れした不幸に心がくもりました。ところが、私の父の友シンハヴァ

ルマン王から便りがあって、チャンダヴァルマンがチャンパーの都を攻めていると知りましたので、『敵を撃ち、友を援けるのは二つの義務である』と思いまして、強大な、そして機動力に富んだ軍を率いて、進軍いたしました。そして、あなたの輝くおみ足を拝することができまして、こんな嬉しいことはありません」

以上の物語を聞いて、ラージャヴァーハナ王子は、ほほ笑んでいった。

「見よ、巧みな策略を用いた姦通によって、尊敬する両親を牢の苦難から救い、さらに、奸敵を殺害し、王国を回復して、同時に〔人生三願の中の〕財と徳とを成就したのである。智者の手に委ねられたことで、成就しないことがあろうか」

そして王子は、愛情にみちた、ゆっくりした目でアルタパーラの顔を見て、声をかけた。

「貴公自身の物語を」

指名された彼もまた、合掌して語った。

注

一 ヴィデーハ国 Videha. 中インドの古い国名。東に位置するので、プールヴァ・ヴィデーハともいわれた。首都はミティラー Mithila.

二 バラとシャンヴァラ ともに鬼神アスラ属。この両鬼神の話は明らかでない。ここは「二人のお妃の仲は、バラとシャンバラの妻たちそのままの……」とも解せられる。

三 ヴァーサヴァダッター妃 ヴァッツァ国王ウダヤナの妃。その物語は叙事詩や戯曲の題材として扱われ、有名である。

四 ピチュマルダ樹 Picumarda. 俗に、Nimbtree. マーダヴィーは蔓草であるから自立し得ないで、大樹に絡んで成長する。

五 彼の舞姫 ātmanāṭikīyā（自分の舞姫）、「私の舞姫」の意にもとれる。

六 チャンパカの木 高大な樹で、黄色の花を開き、芳香を有する。ここではCampakalatāyāḥ（チャンパカの蔓で）となっているが、注釈 alpacampaka により「小木」と訳した。

七 師匠の妻を奪った 月は神々の師ブリハスパティ神の妃ターラーを奪った。

八 ガネーシャ 知恵と除障の神。シヴァ神と神妃パールヴァティーの子。鼓腹象鼻の神。前編第一章注一参照。

九 〔恒河の〕女神の流れ ガンガー河は天界では銀河として流れ、シヴァ神の頭上に流下してのち、ヒマーラヤ山に流れ下った。ガンガー女神は天界の娼婦（アプサラス）ともいわれる。

一〇 娼婦 注九参照。

一一 パータラー樹 紫色の花を春に開く。

一二 クランタ草 Kuraṇṭa. 黄色の鶏頭。

一三 月の変わり目の日 Parvan. 一ヵ月に〔二〕回または四回の月の周期的変化の日。すなわち満月、新月、半ヵ月中の第八日および第二十四日。

一四 アグルの香木 Aguru. 伽羅（きゃら）。別名を沈（水）香。

一五 祭官 ātharvaṇika.「アタルヴァ・ヴェーダ」派に属する祭官。

一六 牛乳 kṣīra. 漢訳 乳味。牛酪 ājya. グリタ ghrita ともいう。漢訳 熟酥味。酸乳 dadhi. 漢訳 酪味。

一七 獣 paśu. ヴィカタヴァルマン王のことと、ウパハーラヴァルマンの指示によって行なわれる祭儀に供える生贄の獣のこ

と、両方を指している。

一八 不治の病い ajirṇadoṣa. 医書によると嘔吐、下痢を伴う消化不良あるいはコレラともいう。

一九 プンドラ国 首都はプンドラ・ヴァルダナ Puṇḍravardhana. 位置に関しては、恒河々岸のガウダ Gauḍa など数説がある。

第四章 アルタパーラ物語

「王子よ。私もまた友人たちと同じく、大海の波の花環に縁どられた大地を旅する間に、ある日、カーシー国(注一)の都ヴァーラーナシーにたどり着きました。そして、尊いマニカルニカー池の宝石(マニ)のように清らかな水に沐浴し、シヴァ天に礼拝をして、右旋の礼(注二)をとって歩いていますと、腕は鉄の棒のように太く、腰帯をかたく締めて、絶え間ない涙に目を赤くした一人の男を見かけました。私はこう感じました。

『これは屈強そうな男だが、目には涙を流して、なにか無謀なことを企てているようだ。おそらく、彼は誰かしら親しい人の災難によって、生きる希望も失うほどの苦境にたたされたのだろう。私になにか

手助けができるかどうか、聞いてみよう』

私はその男に近づいて、ききました。

『もしもし、あなたの様子は無鉄砲なことを、思わせるに十分ですが、お差し支えなければ、悲しむわけを聞かせてください』

彼は敬意をこめて、私を見ると、

『まことに困ったことです。お聞きください』

と、申しまして、とあるカラヴィーラ樹(夾竹桃)の根もとに、私といっしょに腰をおろし、こう物語りました。

〈プールナバドラ物語〉

『貴い仁よ。私は東方の〈遊牧民の〉村長の子で、プールナバドラと申します。父は骨を折って育ててくれましたが、私は天命のままに、盗賊稼業にはいりました。ところで、私はこのカーシーの都の、とあるヴァイシャ(商、工などの庶民階級)の家に盗みにはいりましたのを発見され、つかまって、縛られてしまいました。そして、私が死刑を宣告されますと、城門の高い塔に上って下を見下ろしていた、カーマパーラという宰相の命令により、ムリティユ・ヴィジャヤ(死の勝利)という名の狂暴な象が、人々の囃したてる中を、頸につけた鈴も音もひときわ高く、大きな鼻を高々とまるめて、縛られている私をめがけて、突進してきました。私は恐れもせずに立ち向かって威嚇し、象が牙で突こうと頭を下げた時に、手枷の板の穴にはめられたままの両腕で、力いっぱい二つの牙の間を打ちすえますと、象はまったく恐れいった様子で、後ろを向いて逃げだしました。怒った御者は言葉も荒く、鉤と足で〈象を〉蹴って、向きをたて直しました。けれど私は、前にも倍する勢いで怒り狂い、嚇し、なぐりつけますと、象はまた向きを変えて、逃げました。私はなお〈象を〉追って、どなりたてますと、御者はいきりたって、

〝畜生め死んでしまえ。このろくでなしの象め〟

と、叫んで、とがった鉤で、なんべんも、象の目

の端を打ったあげく、ようやく〔象を〕私のほうへ向かわせました。すると、また私はどなりつけました。

〃消えうせろ。この虫けら象め。もっと気のきいた象をつれてこい。そうしたら私は、ほんのしばらくの間、お慰みをつとめてから、運命の道（死の旅路）に従ってやる〃

たけり狂う私を見た象は、御者がきびしく命令するのも聞かずに、逃げ去りました。宰相は、私を呼び寄せて、言いました。

〃天晴れな男よ。あれは、「死の勝利」といって、まったく死神と紛うほどの人殺し好きな象だ。おまえは、そんな象をすら、あのように扱った。そこで、おまえは罪ぶかい職業をやめて、余に仕え、まともな生活をしてはどうか？〃

私が、

〃はい。そのように致します〃

と、答えますと、それ以来宰相は私を友人のように扱ってくれました。

ある時、信頼された私がたずねますと、宰相は身の上ばなしを、こう語りました。

〃華の都クスマプラのリプンジャヤ王の宰相にダルマパーラという、聖典に明るい賢者がいました。その子のスミトラという者は、父と同じく聡明な資質を具えていました。私はスミトラの異母弟なのです。彼は節度を重んずる男でしたから、娼家遊びに耽っている私をたしなめました。しかし、放蕩のやめら

れない私は、そこを去って、勝手気儘に諸国をわたり歩くうちに、このヴァーラーナシーの都の園林にまいりました。するとそこで、カーシー国の王チャンダシンハのカーンティマティーという王女が、シヴァ天を崇めようとやって来て、友達たちと毬遊びを楽しんでいるのに、出会いました。私は苦心の末に、王女と親しくなり、王女の御殿で、こっそりと暮らすうちに、彼女は身ごもって、一人の男子を産みました。侍女たちは、秘密の洩れるのを恐れて、

〝流産です〟

と、口実をもうけて、園林の丘に、その子を捨てました。シャバラ（蛮族）の女が、それを屍体置場へ持っていきましたが、夜半になって帰る途中の公道で、巡警たちに捕えられ、おどされますと、きびしい罰を恐れて、秘密をほとんど残らず洩らしてしまいました。私はシャバラ女に告げられたため、夜、園林の丘の岩屋の中で、安心して眠っているところを、王命によって、縄をかけられ、屍体置場に引きたてられるや、チャンダーラ(註三)のふりあげた刀で殺されそうになりました。しかし、縄目が解けたのも運命の力でしょう、私は刀を奪い取り、チャンダーラや、他の数人を切り伏せて、逃れました。

隠れ家を失った私は森林をさまよいましたが、ある日、天女のように美しい娘が侍女を従えて、私に近づいて来ました。彼女は蕾のような両手を頭上で合掌し、髪を顔に垂らしてお辞儀をしてから、私といっしょに森の榕樹の涼しい木蔭に腰をおろしました。

〝あなたは、いったい誰方（どなた）ですか。何処から来たのですか。私に親切にしてくださるには、何か理由があるのですか〟

と、私が熱心に聞きますと、彼女は蜜のように甘い言葉の雨を注ぎました。

〝貴い方よ。私は薬叉の王マニバドラの娘ターラーヴァリーと申します。ある時、私はアガスティア仙の妻のローパームドラーさまに挨拶に行って、マラ

ヤ山から帰る途中、ヴァーラーナシーの都の屍体置場のあたりで、幼児が一人、泣いているのを見つけました。拾ってみると、異常な愛著を感じましたので、つれ帰って両親に見せましたら、父はその子をクベーラ天(注四)のもとへ連れていきました。すると、私はクベーラ天に呼ばれて、きかれました。

―そちは、この子に対して、どのような感情を抱いたか―

私は答えました。

―この子に対する愛情は、まことに実の子に対すると同じです―

すると、クベーラ天は、

―あわれであるが、そちは真実を述べた―

と、仰せられて、その子に関するとても長い物語を、聞かせてくださいました。

さて私はこのように、〔クベーラ天の話を〕記憶しております。あなたは確かに〔前々世にて〕シャウナカであり、〔前世にて〕シュードラカであり、〔この世で〕カーマパーラなのです。この三人は同じあなた〔の生まれ代わり〕です。〔あなたの、それぞれの世における第一夫人として〕バンドゥマティーもヴィナヤヴァティーもカーンティマティーもまた同じ人です。〔同じく、第二夫人として〕ヴェーディマティーとヤクシャダーシーとソーマデーヴィーとが同一の人です。〔第三夫人として〕ハンサーヴァリーやシューラセーナーやスローチャナーもそれです。〔第四夫人の〕ナンディニーとランガパターカーとインドラセーナーも同じく、別々の人ではありません。実にあなたが〔前々世に〕シャウナカでした時、聖火の前で結婚したのが、ゴーパカニヤーです。それが〔前世にて〕アールヤダーシーと生まれ、この世において、ターラーヴァリーと申す、この私となりました(注五)。

そして、あの子はあなたがシュードラカ〔前世〕であり、私がアールヤダーシーだった時に生まれたのです。〔当時の第一夫人の〕ヴィナヤヴァティー

の意識の底に残っていた〔過去の〕愛情によって、その子は育てられました。けれども、この世ではカーンティマティー妃が、ヴィナヤヴァティーにあたるのです。

このように、たくさんの死が繰り返されましたが、宿命の趣くところ、あの子は私の手に戻りました。でも、クベーラ天のお指図で、あの子を、森林で苦労な暮らしをなさっているラージャハンサ王のお妃のヴァスマティーさまに、お渡しいたしました。これも、行く末は覇王とおなり遊ばすはずのラージャヴァーハナ王子に、お仕えさせるためでございます。

そして、私は両親たちの許しを受けまして、運命のめぐりあわせで死の口から脱したあなたの蓮華の足のみもとに、お仕えするために、やってまいりました〟

こう聞くと、私は幾度かの〔過去の〕生涯において、妻であった彼女を、繰り返して抱擁し、嬉し涙で顔を濡らしながら、優しい言葉でいたわりました。

そのあとで、私は彼女の神通力によって現われ出た大宮殿の中で、日ごと夜ごとに、この世のものとも思われないほど、楽しく暮らしましたが、二、三日すぎると、愛する妻にいいました。

〝愛する妻よ、私の生命を奪おうとしたチャンダシンハ王に復讐して、仇討ちを遂げたいと思うのだが〟

彼女は笑って、申しました。

〝愛する人よ。おいでください。私はあなたをカーンティマティーさまに会わせてさし上げましょう〟

夜半に、私は王の寝室へつれて行かれました。私は寝台の枕元にあった剣をとって、王を起こし、慄えあがった王に、いいました。

〝私はあなたの婿です。あなたの許しなく、王女と馴れあってしまいました。そのような不届きなことを忘れていただこうという、すなおな心持からやって来ました〟

王はひどく怯え、私の前に平伏していいました。

〃余はまったく愚かであった。そなたが厚い情から、余の娘と睦まじくしていたものを、そなたを殺すことを命じた。今日から以後は、娘のカーンティマティーも、この王国も、余の生命も、そなたにまかせる〃

あくる日、王はすべての家臣を集め、その面前で、定めの儀式にしたがって、私に王女の手をとらせ（結婚させ）ました。そして、ターラーヴァリーはカーンティマティーに、彼女の子供の物語や、ソーマデーヴィーや、スローチャナーや、インドラセーナーの前世の物語をいたしました。こうして、私は宰相たちに命令する立場（摂政）と太子の地位とを得て、大勢の美しい女たちとともに暮らしました〃

こうして、宰相は私のような者にさえ、情ぶかく、すべての人々にとって、唯一人の味方でした。王が鼓腸病（注六）にかかって、天国に赴いた時、宰相の妻の兄にあたるチャンダゴーシャ王子も、大勢の女に情をかけすぎて腎虚になり、父王より先に冥土へ旅だっておりましたので、宰相はおよそ五歳になるシンハゴーシャという幼い王子を、王位につけました。そして聖典の教えに従って、王子を正しく養育しました。その王も、今は血気の青年となりましたが、中傷好きな悪い宰相たちが、王の歓心を買うために、手をかえ品をかえて、申しました。

〃まったく、あの蛇（のような宰相）は、無理強いに、あなたさまの姉上をつかまえて、征服したのです。そればかりか、眠っている（父）王さまを殺そうとして、剣をふり上げました。王さまは、その瞬間に目覚めて、こわさのあまり、王女さまを（彼に）与えたのです。それに、あの男は、あなたの兄上のチャンダゴーシャ王子を毒殺したあげく、あなたさまをさえ、〃この子供も無能なやつだ〃と、心に侮っておりますが、いまのところ、都の人々の信頼を失わぬために、知らぬ顔をしておるのです。しかし、あの恩知らずの男は、遠からずあなたさまをきっと殺すでしょう。ですから、あの宰相は死神の都に追

いやってしまうのが、よろしいのです〃

王はこのように、いれ知恵されましたが、薬叉女（ターラーヴァリー）の神通力を恐れて、宰相を害することができませんでした。

ちょうどその日に、（前）王の第一王妃だったスラクシャナー妃は、カーンティマティー（宰相の第一夫人）の様子がただならぬのをみて、やさしく尋ねました。

〃王女よ、この私に嘘いつわりは言えないはずです。いったい、このごろ、あなたの蓮華の顔がすぐれないのは何故ですか、話してください〃

彼女は答えました。

〃愛する妃よ、あなたは私がいままでに、なにひとつ、いつわりを申したことのないのを、おぼえていてくださいますわね。私の友達であり、また夫を同じゅういたしますターラーヴァリーがすこし機嫌をそこねました。夫が彼女と二人だけの時に、（誤って）私の名を呼びましたのがきっかけで、頭を下げて詫びる私たちの好意に耳をかさず、彼女は妻同士（の私）に嫉妬いたしまして、出ていってしまいました。私たちの夫は、すっかり気を落としてしまいました。それ以来、私は心が晴れないのです〃

この話の要点を、スラクシャナー（太后）は愛する王にしらせました。そこで、こわいもののなくなった王は、宰相が愛妻に家出された別離の悲しみに、全身血の気もなく、蒼白となり、懸命に堪えながらも、目は溢れる涙に曇り、言葉は熱い吐息に干上ったかのようになって、やっとの思いで王宮内の為すべき職務にたずさわっているのをみて、かねて諜し合わせておいた者たちに捕えさせて、牢に入れました。そして王は、宰相の目を抉りとって、殺すであろうと、いたる所に、彼の罪を触れさせました。それ以来、私はここで、たった一人で涙を流し、あの情ぶかい主人の前で、生命を捨てようと、腰帯をかたく締めて（支度をして）いるのです』

私はこのように父の不運を聞き終わると、涙を浮

かべて、プールナバドラに言いました。
『善き友よ。何を隠しましょう。薬叉女ターラーヴァリーからヴァスマティー妃の手もとにあずけられ、ラージャヴァーハナ王子に仕えたその子が、この私です。私は武器をふりかざす敵の千人をさえ殺して、父を救うことができます。しかし、もし混乱のさなかに、誰かが父の身に短刀を突きさすようなことがあれば、私の努力も灰の中へ供物を投げいれるように〔無駄に〕なってしまうでしょう』
　私が、こう言い終わらないうちに、大きな毒蛇が壁の穴から首を出しました。私は呪文と薬草の力を利して蛇を捕えると、プールナバドラに言いました。
『友よ。我々の目的は達せられます。私は人に気づかれないように、群衆の中にはいって、偶然落ちてきたようにみせて、蛇を父に投げつけ、咬ませますが、死んで横たわっていると、人々が感違いする程度に毒を抑えたいと思います。しかし、あなたは私の母が安心するように、こう報告しなさい。
〃森にお住まいのヴァスマティー妃に、薬叉女から手渡されたあなたのご子息が、戻ってまいりました。私が父上のありさまを、おしらせしましたが、彼は智略に富んでいますから、これこれしかじかの行動をするでしょう。あなたさまは安心して、王に使者をやって、こういうのです。
‚親類でも親類でないものでも、悪いものを懲らすのは王族のつとめです。また善悪を問わず、夫の趣くところに殉ずるのは妻のつとめです。ですから、私は積み重ねた薪の火に、夫とともに登ります。女にふさわしい[注七]行為（殉死）をお許しください’
　こう言われると、王は必ず許すでしょう。そうしたら、あなたは夫の身柄を、家へ運び、幕をめぐらした、人気のない部屋のダルバ草を敷いた寝床に横たえ、あなた自身は夫の死に殉ずる女にふさわしい装束を身にまとって、その側にいるのです。そして、私が外庭にまいりましたら、あなたは私を中にいれてください。私は父の意識を回復させて、快方に向

かうように努めましょう〃』
　彼は、『承知した』、と大いに喜んで、すぐさま立ち去りました。
　私は布告どおりの場所の、よく繁ったチンチャー樹（豆科の喬木）の大ぶりな枝に登り、隠れて、待っていました。群衆も続々と高い所に登って、口々に取沙汰をしていました。間もなく、大勢の人々が喚声を挙げて、ついて来る中に、私の父がまったく盗賊のように、うしろ手に縛られ、私のま近に立ちどまると、チャンダーラは声も高々と、三度、宣言しました。
『これなる宰相カーマパーラは王位を窺い、主君チャンダシンハ王や、皇太子チャンダゴーシャ王子を、ひそかに毒殺したのである。のみならず、〔現〕王のシンハゴーシャも十分に成長した、とばかりに、王に逆心をいだき、大臣のシヴァナーガやストゥーナや、アンガーラヴァルシャたちをひそかに呼び集めて、王を殺そうと謀ったが、彼らは王に忠誠であったから、宰相の秘密はあばかれたのである。そこで、王位を狙ったこのバラモンに、盲目の闇を科するという判決が下ったので、目の玉をくり抜くために、ここに連行したのである。これに限らず、他の者といえども、もし反逆をおこなうならば、王はその者にもまた正しい刑を科するであろう』
　これを聞いて、群衆が騒然となった時に、私は怒って鎌首をふくらませた毒蛇を、父の身体めがけて投げつけました。そして、私はびっくり仰天した風に、〔樹から〕とび下りると、群衆に紛れて、すばやく呪文をとなえて毒を制し、いらだった蛇に咬まれた父の、生命を守りました。父はほとんど死んだようになって、地に倒れました。
　私は叫びました。
『これが本当なのだ。王さまを侮る者に天罰が降ったのは、まさに天命である。王さまは彼の両眼をなくそうとしたのに、天は生命までも奪ってしまった』

すると、ある者たちは同感し、他の者たちは、私の言葉を咎めました。毒蛇はチャンダーラにも嚙みつき、人々が恐れて道を開けたので逃げ去りました。

さて、母はプールナバドラから、事情をしらされておりましたので、災難に会っても取り乱すこともなく、家人を従えてやって来ると、父の頭を膝に支え、王に〈使者を出して〉願い出ました。

『この、私の夫の、王様に対する罪の有無は天だけが知っております。私が判断するのは無益でございます。けれど、私が夫を見殺しにすれば、あなたの王家一族の不名誉となりましょう。ですから、私が夫といっしょに、火葬の薪に登るのを、お許し下さい』

これを聞いた王は喜んで、返辞をよこしました。

『王族にふさわしい儀式をおこなうがよい。余の姉の夫は、儀礼に準じた、威儀ある最後の儀式をうけるがよい』

そして、チャンダーラが、私のあらゆる呪法の努力も甲斐なく、死んでしまいますと、王は『カーマパーラも嚙まれて死んだ』と思って、自分の心の広いことを示すために、父を私の家に運ぶのを許しました。父は運ばれて、人気のない一室の、ダルバ草の寝床に横たえられました。いっぽう、母は死装束の身支度をして、悲しげに女の友人たちに暇を告げ、いく度も、家の守護神に礼拝し、召使たちの嘆くのを制して、ただ一人で父の眠る所へ行きました。その場で母は、すでにプールナバドラに導かれてそこにはいった私が、ヴァイナテーヤ(注八)〈ガルダ鳥〉になって解毒をすませ、〈生き返った〉父を発見しました。

喜び極まった母は涙にむせんで、夫の足下に平伏しました。そして母は、胸に乳を滲ませて、私をいく度も抱きしめ、嬉し涙にどもりながら申しました。

『息子よ。罪深い私は、生まれるとすぐ、あなたを見捨てましたのに、何故あなたは私に、これほどまでに尽くしてくれるのでしょう。それにしても、あ

なたの父は無実の罪でしたが、もはや死の口からつれ戻されました。ターラーヴァリーはひどい女です。〈前世の〉事情をクベーラ天から聞き知っていましたのに、あなたを私に渡さず、ヴァスマティー妃に手渡しました。とはいえ、彼女の行為は〈結果として〉よかったのです。何故かというに、私のような徳の薄いものにとって、甘露のようなあなたの饒舌(おしゃべり)の声を聞く幸福は、得られなかったでしょうから。ここへ来て、私を抱いておくれ』

そして、やせ衰えた母は、いく度も私の頭に口づけをしたり、膝にひき寄せたり、また、ターラーヴァリーの恨みごとを言ったり、涙で私を濡らしたりしながら、一瞬の間に、別人のように〈元気に〉なりました。

父はまさしく地獄から天国へ移ったと同様に、禍は転じて福となり、プールナバドラから、細大洩らさぬ経過の報告を受け、諸天の王者(インドラ天)にもまさる幸福を味わいました。そして私は、自分の友の事件(ラージャヴァーハナ王子捜索のこと)を、かいつまんで語りますと、両親は喜びのうちにも驚きを示しましたが、私はこう申しました。

『私たちは、今後どういたしましょうか。お言いつけください』

父は申しました。

『息子よ、われわれのこの邸はたいへん広大な塀に囲まれ、武器も無尽蔵にあるし、防禦は堅固で侵され難い。それに、私が恩義をかけた多数の家臣がいる。また、より多くの民衆たちが私の不幸を不愉快に思っている。数千人の勇士や、その友人や妻子もいる。だから、われわれは、数日の間、ここにふみ留まって、国内に義憤の高まるのを待とう。というのは、われわれが、怒って起(た)った者たちを誘って味方にひきいれ、また父祖の代から〈王家を〉仇とする者たちを煽動して、暴虐な王を滅ぼすためにである』

私は『どのような苦労も覚悟のうえです』といって、父に同意しました。

私たちが、このように戦の準備をしていますと、

そのしらせを受けた王は、さすがに後悔はしましたが、同時に対戦の用意をいたしました。しかし、敵軍は日ごとに、戦いに敗れました。かような情況の下に、私はプールナバドラから、敵王の寝室の位置を聞きましたので、さっそく邸の塀の端から蛇首型の鋤で地下道を掘り始めました。すると、私は地上の天国とも紛う、美女の大勢群がる所へ行きあたりました。美女たちは私を見て、不安におののきました。中でも一人の乙女の、新月にも似た美しさは、ラサータラ国（伝説の地底の国）の闇をも払うかと紛うばかり、大地の女神の化身か、アスラ鬼をこらしめるために天降ったシヴァ天の妃か、パーターラ国（地底国）に来た、花の弓をもつ、尊いカーマ天の妃かと紛い、あるいは、悪王たちの目を避けるために、王者の輝き[注九]が大地の凹みに逃れたのか、まさしく磨きあげた黄金のように、清く輝いていました。彼女は私に見つめられて、あたかもマラヤ山の南風にそよぐ白檀の若枝のように、慄え戦きました。

そして、このような美女の群の中に、〔白い〕花をつけたカーシャ草の茎のような白髪の老女が、進み出て私の足下に平伏し、恐る恐る申しました。

『他に身をかくす所とてないこの女人たちに、どうぞ保護という施しを、お授けください。あなたさまは、悪鬼ダーナヴァと戦うために、ラサータラ国（地底国）においで遊ばした神のお子でしょうか。どなたさまかを、お聞かせください。また、どのような理由があって、おいでになりましたか』

私は答えました。

『美しい方々よ、あなたがたは心配なさるには及びません。私はすぐれたバラモンのカーマパーラと、その妻のカーンティマティー王女との間に生まれたアルタパーラという者です。ある目的があって、自分の邸から王宮へ地下道を掘り、ここまで来ると、あなたがたに出会ったのです。あなたがたこそ、いったい何者ですか。何故このような所で暮らすのですか』

問われて、老女は合掌して語りました。

『王子よ。私たちは幸運でした。この目であなたのご無事な姿を拝んだからです。お聞きください。あなたさまの〔母方の〕祖父のチャンダシンハ王と、リーラーヴァティー妃との間には、チャンダゴーシャ王子とカーンティマティー王女とがありました。けれども、チャンダゴーシャ太子は、あまりにも女たちに情をかけすぎたため、腎虚[注一〇]にて、アーチャーラヴァティー妃の、ご懐妊中に他界なさいました。そして、お妃は、ここにおいでのマニカルニカーという王女を産み、そのうえ、お産の苦しみに生命を落とされて、夫のあとを追われました。チャンダシンハ王は内密に、私を呼びよせて、命じられました。〝リッディマティーよ、この〔孫〕娘には、めでたい相がある。余はこの子が育ったら、マーラヴァ国の王子ダルパサーラに与えようと思う。しかし、余は〔娘の〕カーンティマティーのことがあって以来、娘たちをひと前に出すことが不安になった。ところで余は、敵の侵略に備えて作らせた人工の岩山の下に、さまざまな部屋と劇場をもち、たくさんの生活物資を蓄えた大きな部屋を作らせてあるが、そちはその地下室で、この子を育ててもらいたい。ここには、必要なあらゆる品物が、百年でも使いきれないほど用意してあるのだ〟

こう仰せられて、ご自分の寝室の壁にある指二本の厚さと一キシュク幅（約六フィート）の扉を、押し上げて、私たちを中に入れました。私たちは、ここに暮らして、もはや十二年になります。この王女さまも、子供から娘に成長いたしました。そして、王さまは、もう私たちのことをお忘れになったのです。たしかに、王女のお祖父さまは、この王女をダルパサーラさまにあげるおつもりだったのです、ところが、まだこの王女は胎内におられたのですが、〔逝去された〕アーチャーラヴァティー妃との賭ごとに勝たれましたので、王女をあなたさまのお妃に

と、約束されたのです。そのような次第でございますから、王子さま、どうしたらよいのかお考えください』

私は、もう一度、老女に、言いました。

『私はいま、王宮において、一事を成し遂げて戻って来てから、あなたがたを、宜しいようにとり計らいましょう』

こうして、私は真夜中に、〔彼女らが〕燈火で照らしてくれた地下室の通路づたいに進み、その指二本の厚さの扉を押し開いて、寝室に侵入し、安心しきって眠っているシンハゴーシャ王を、生け捕りにしました。そして、私はちょうどガルダ鳥に捕えられた竜のように慄える王を奪い去って、壁穴の通路を戻って、婦人たちの所へ行きました。それから、私は王をわが家へ連れ帰りますと、両足を鉄の鎖で縛られ、首をうなだれ、顔は汚れ、眼は涙に充血している王を、両親にだけ見せました。また私は地下室の話をも両親に報告いたしました。両親は非常に喜び、王が品性下劣であるのを知っておりますので、牢に入れて監禁したのち、法にかなった儀式を催して、私に王女の手を把らせました。そして、王のいなくなった国は、私たちの手に帰しました。母は王の釈放を勧めましたが、〔そうすると民衆の〕暴動の恐れがありましたので、王は釈放されませんでした。私たちが、このような情勢にありましたころに、

『アンガ国のシンハヴァルマン王は、あなたさまと堅い友好で結ばれているのだ』

と、考えまして、そちらへ軍を進めました。そして、私は貴いあなたさまの足下に、ご親切を受けたのです。シンハゴーシャも、いまではすべての過失を悔い改めて、あなたの足下にお仕えするでしょう』

こう、物語を終えて、アルタパーラは合掌礼拝した。ラージャヴァーハナ王子は、

「貴公は、なみなみならぬ勇気と、少なからぬ智謀をもっていました。彼（シンハゴーシャ）を自由放免にして、ここへつれてくるがよい」

と、言って、ついで、プラマティを見ながら、やさしく、ほほ笑んで、命じた。

「さて、貴公の物語を始めなさい」

彼もまた、一礼して、物語った。

注

一 カーシー国 Kāśī. 中インドの国名。首都のヴァーラーナシーは現今のヴェラナシ Varanasi または Benares 市である。恒河の支流ヴァラナ Varaṇa 河とアシ Asi 河の中間にあったので、この名が生まれたという。

二 右旋の礼 Pradakṣiṇa. 相手に右側を向ける礼拝の形式。右繞ともいう。

三 チャンダーラ Caṇḍāla. 栴陀羅。四姓の外の最賤民 (out-caste) であって、マヌ法典等によると、罪人の死刑の執行はこの種の者の業とされている。

四 クベーラ天 Alakaśvara (アラカーの都の主)。富の神で、薬叉たちの主。Hara-

	前々世	前世	現世
	シャウナカ	シュードラカ	カーマパーラ
第一夫人	パンドゥマティー	ヴィナヤヴァティー	カーンティマティー
第二夫人	ヴェーディマティー	ヤクシャダーシー	ソーマデーヴィー
第三夫人	ハンサーヴァリー	シューラセーナー	スローチャナー
第四夫人	ナンディニー	ランガパターカー	インドラセーナー
第五夫人	ゴーパカニャー	アールヤダーシー	ターラーヴァリー

注五 カーマパーラと五人の妻

sakha（ハラ即ちシヴァ天の友）ともよばれる。

五　別表参照。ただし、異本により名前に異同がある。シュードラカの第二夫人ヤクシャダーシーをアールヤダーシーとしているテクストもあるが、第五夫人と同名となる。シャウナカの第五夫人ゴーパカニヤーは、個有名詞か「牛飼の娘」か明らかでない。

六　鼓腹病　Alasaka. 胃腸間のガスの鬱積により、腹部の膨張する病気。

七　女にふさわしい　yuvatijanānukūla. 若い女にふさわしい。異本 abhijanānurūpa 貴族にふさわしい。妻が夫の死に殉ずる習慣を Satī という。

八　ヴァイナテーヤ　Vainateya. カシュヤパ仙の妻ヴィナターの子、即ちガルダ鳥のこと。ガルダ鳥は古くから蛇の敵とされ、蛇毒を解くといわれる。蛇毒を制する呪法に迦楼羅法（ガルダ呪法）というのが、伝わっている。

九　王者の輝き　rājalakṣmī. 王の幸運、繁栄を女性化したもの。

10　腎虚　rājayakṣman.「王の病い」の意、注釈は kṣayaroga（衰弱病、肺病）と記している。

第五章　プラマティ物語

「王子よ、私はあなたを探し求めて、さまざまな地方を旅する間に、ヴィンディヤ山の中腹の雲をつき破って立つ樹々の下に来ると、ちょうど太陽が〈樹樹を〉飾る花のように、西の空の端に傾きましたので、池水に沐浴し、お祈りをいたしました。やがて、暗闇が谷間から山の上方まで及んできますと、私はもう先へ進めなくなりましたので、地面の平らな所に、木の葉を敷いて寝床をつくり、さて眠ろうと、頭上に合掌して、祈りました。

『森の樹に宿る神さま、恐ろしいチャクラチャーラ鬼[注一]どもの危害から、私をお守りください。シヴァ天の頸のように黒い暗闇が漂い、たちこめる大森林の中に、ただひとり眠るこの私のために』

左の腕を枕にして、横になると、私は一瞬ののちに、とてもこの世のものとも思えぬ幸福な肌ざわりを身体に感じ、五官は喜び、気分はすぐれ、体毛は逆立ち、右の腕が慄えました[注二]。

『それにしても、これはどうしたことか』

と、思って、私はゆっくりと目を開けてみますと、上方に、月の光のように清浄な布の天蓋がかかり、左のほうに目をやると、漆喰壁の傍に、婦人たちがさまざまな敷物の上に、安らかに寝ているのがみえました。右のほうには、一人の美女がいて、薄絹の衣服は胸から外れ、甘露（アムリタ）の泡のような純白の寝台に身を横たえた様子は、最初の野猪[注三]（ヴィシュヌ神の化身）の牙の輝く網にかかった大地の女神さながら、乳海を思わせる、絹の上衣は肩からすべり落ち、恐怖と不安に気を失ったかと紛う姿でした。そして、花の蕾の唇は〈呼吸のたびに〉動いて宝石のように光り、吐く息の香気は蓮華の顔に漂い、愛神カーマ

を焼きつくした時の、怒れるシヴァ天の目から出た焔の名残りが燃えているかと思われる美しさでした。そのうえ、青蓮のような目は閉ざされて蜜蜂の眠る蓮華もさながら、〔インドラ天の〕ナンダナ林苑の如意樹の宝石の蔓が、興奮した象のアイラーヴァタによってひき千切られて、投げすてられたかのようでした。

　私は考えてみました。

『あの大森林は、いったい何処へ消えてしまったのだろうか、卵の上半部のような円蓋を型どった、戦の神スカンダ[注四]の三叉の槍のように高く聳える宮殿は、何処から現われたのだろうか。また、あの森林で、私が木の枝で作った寝床は何処へいってしまったのか。この月の光を集めたように輝く、白鳥の羽毛をいれたドゥクーラ布の寝台は何処から現われたのか。そして、銀色の月の光をより合わせた綱で吊ったぶらんこから墜ちて失神した天女のように、安らかに眠っている美女の群は、いったい何者だろうか。それにこちらの、女神のような蓮華の手をして、秋の月のように清らかな布に被われた寝台に眠っている美女は誰なのか。いや、天界の女性ではあるまい。というのは、彼女はいとも柔らかい月の光を浴びた蓮華のように目を閉じ、その頬には、茎の裂け目から滴り落ちる樹液に濡れた、熟した白いチュータ樹（マンゴー樹）の実のような汗の滴が、筋をなして流れているし、激しい暑気と、若さに燃える情熱のため、胸に塗った化粧が変色しているし、衣服も使っただけの汚れを呈しているからである[注五]。すると、まさしく彼女は人間であり、しかもまだ清らかな乙女である。何故かというに、彼女の四肢はふっくらとふくらんでいるけれどもひき締まり、肌の色は潤いがあってしかも蒼白であり、口は赤すぎず、いまだ愛の〔接吻の〕痛みも知らぬげで、唇は珊瑚のように輝き、頬はこれまたほどよく赤みを帯びてふくらみすぎず、チャンパカの蕾と紛うばかり、愛神カーマの矢面に立つ怖れもなく、安らかに眠り、胸に拡

がる二つの乳房の尖端も未だきつく圧されて変形していないからである。そして、私の心は節度を越すことはないが、〔彼女に〕惹かれている。もし私がこのうえ、情欲にまかせて、手を触れたり、抱擁したりすれば、彼女は目を覚まして叫ぶだろう。とはいえ、私は抱擁しなければ、眠れまい。ままよ、なりゆきに任せよう』

　私はそっと、彼女に手を触れてみて、何かしら情熱と後ろめたさを感じたまま、眠ったふりをして身を横たえました。

　彼女もまた、少しばかり慄えると、左脇の体毛が逆立って、〔吉兆に〕快さを覚え、ゆっくりとあくびをし始め、曲げていた身体をのばし、眠り足りぬ、かすんだ美しい両眼の端を赤らめて、睫毛の先をふるわせながら、目を開こうといたしました。そして、何か不思議な愛神カーマの力によって、いぶかしさと、喜びと、情熱と、不安と、楽しさとが、羞恥心の中にいり混った気分になり、声を立てて侍女たちを呼び起こそうといたしましたが、それも恋心に負けておしとどめ、体には驚きと不安のために玉のような汗が流れました。それから彼女はゆっくりと静かに目を細めて、じっと私の身体を見つめると、上半身を起こしましたが、臆病そうに、また横になりました。私の心は欲望に満ち溢れていたのですが、何故か、眠りに襲われました。私はもう一度、不快な肌ざわりに目覚めました。そして目覚めてみると、そこには大森林があり、樹の根もとの平地があり、また木の葉の寝床がありました。夜が明け初め、私は心の中で思いました。

『これは、いったい、夢なのか、迷いなのか、アスラの仕業か、神の業か、それとも幻力か。ままよ、なるようになれ。私はこの真相を知るまでは野宿をやめないぞ。そして、生命のある限り、ここの神の前でがんばるぞ』

　このように心に決めて、私はそこに留まりました。すると、一人の見知らぬ女が現われて、近づいて

来ました。その痩せた身体は、まったく日に照らされて枯れたクヴァラヤ（睡蓮）の花のようでしたし、息づかいも苦しそうに、衣服はよごれ、吐く息の熱気のため赤味を失い、艶もなく干からびた唇は、別離の〔苦悩の〕焔から、くすぶった灰色の煙を吐いているようでしたし、両眼は涙も涸れて血だけが残ったように赤く、良家の子女が結ぶように、豊かな髪を一本の鎖のように編んでたらし、黒い絹の〔ぼろ〕布を胸衣としてまとった、そのようすは、まことに貞女〔を標榜する〕もので、やせ衰えているとはいえ、身にそなわる神々しさは、〔天性の〕美しさを失ってはおりませんでした。

彼女は、平伏した私を、非常な喜びに慄える二本の、蔓草のような腕で立たせると、わが子のように抱きしめ、頭に口づけし、胸には深い愛情を表わす乳を流し、冷たい涙に咽喉をつまらせ、懐かしさに声もどもりながら語りました。

『可愛い子よ。マガダ国の王妃ヴァスマティーさまが、もし、

〃〔薬叉王〕マニバドラの娘〔のターラーヴァリー〕は幼いアルタパーラを、私に手渡して、クベーラ天から伺い知った〔自分の〕夫や、息子や、女友達たちの物語をして、消え去りました〃

と、お話しになったとすれば、その〔薬叉王の〕娘が、この私で、あなたの母なのです。ダルマパーラの子であり、またスミトラの弟であるあなたの父のカーマパーラのもとから、私はいわれなく立腹して、家出をし、一人寂しく後悔しておりますと、夢に、ある羅刹鬼の姿をした男が現われて、私を呪咀いたしました。

〃チャンディカー（シヴァ神妃）の命により、私は一年の間、あなたにのりうつる。家出の苦痛〔を嘗めさせる〕ために〃

話している間に私は悪鬼にのりうつられて、目を覚ましました。その一年が過ぎ去るのは、千年の長さの思いでした。昨夜、私は、

〃シュラーヴァスティーの都（注六）に、神々の中の神、三眼をもつシヴァ天の祭礼の集まりがある。私はそこに行って、あらゆる方面から集まってくる親族たちに会い、私の呪咀もめでたく解けることとて、夫のもとに戻りましょう〃

と、考えて出発した時に、あなたがやって来て、

〃ここに棲む神さまは、私をお守りください〃

と、祈って眠りました。私はその時まだ、苦しい呪咀の解けない前でしたから、あなたが誰であるかを、見わけられませんでした。とはいえ、

〃全く人気のないこの大森林の中に、頼って来た者を見捨てて、立ち去るのは、よくないことだ〃

と、思って、あなたを眠っているまま運びました。

そして、あの神殿の近くまで行って、また考えました。

〃こんな子供をつれて、集まりに行けようか〃

ところで私はシュラーヴァスティー国王の、その名にたがわず高徳なダルマヴァルダナ（徳増王）の王女ナヴァマーリカーさまが、暑い季節のこととて、後宮の露台の快い床に、柔らかく幅の広い褥を敷いて、眠っているのを見かけて、思いつきました。

〃幸い、王女は眠り、侍女たちも熟睡している。私がつとめを終えて、戻って来るまで、ここに、暫らく、この子を寝かせておきましょう〃

私はそこに、あなたを眠らせて、集まりに出かけました。そして、私は祭礼の賑わいの眺めを楽しみ、親族たちに会えて喜び、自分の悪かった行為を顧み

て不安になり、シヴァ天に礼拝をすませ、私を心にかけてくださる神妃アンビカーさまにも敬礼をいたしました。すると、神妃はにっこり笑って、仰せられました。

〃いいのです。もう恐れることはありません。夫の傍へ行きなさい。呪いは終わりました〃

と、お恵みを授けてくださいました。

すると、私はすぐに神通力をとり戻しまして、帰って来るや、あなたを見て、気づきました。

〃なんと、これは、わが子アルタパーラの生命にもひとしい友だちのプラマティではないか(注七)。私は愚かにも、知らずに無関心に過ごした。それにしても、この若者はあの王女に心惹かれ、王女は若者に恋している。若い二人は眠りにおちいり、羞らいと内気なために、お互いの心をうち明けなかった。私は〔夫のもとへ〕行かなければならぬ。王女は恋におちているから、侍女たちや、女の友達にも話さず、秘密を守るだろう。この若者をつれて来た以上、私はもう一度〔二人が〕会う機会を作るてだてを講じよう〃

こう考えると、私は神通力で、あなたを眠らせ、この木の葉の寝床へ運びました。ことの真相はこうなのです。そして、私はあなたの父の足下に、詫びて帰ろうと思います』

合掌する私を、彼女は幾度も抱きしめ、頭を撫で、両頬に接吻したうえ、愛情ゆえに心も空に立ち去りました。私は五本の矢をもつ神カーマの力にひかれて、シュラーヴァスティーの都に向かいました。

その道すがら、商人たちの集まる大きな市場にさしかかると、闘鶏が催されて、たいへんな騒ぎでした。私はその場へ行くと、にやりと笑ってしまいました。すると、私の傍に坐っていた道楽者ふうに見える老人が、静かに、笑った理由を問い質しました。私は答えますのに、

『西側の一派の人たちは、何故ヴァラーカ(鶴)種の鶏を、深い考えもなく、〔東側の〕優勢な派のナーリケーラ(椰子の実)種の力のすぐれた野生の鶏に対して、放つのでしょうか』

老人もそれを知っていて、

『知らずに騒いでいる馬鹿者たちに構わず、あなたは黙って、お坐りなさい』

と、ターンブーラをとり出して、私に手渡し、さまざまな話をしながら、しばらく時を過ごしました。

さて、闘鶏が始まりますと、まったくすさまじい争いとなり、二羽の鶏の羽音は獅子の吼えるように聞こえました。そして、西側の囲いから出た鶏は負けました。老人は自分の賭けた鶏の勝を喜び、年齢の差にもかかわらず、私と親密になり、その日、私は彼の家に招かれて、入浴や食事のもてなしを受けました。あくる日、彼はシュラーヴァスティーの都へ行く私を、〔途中まで〕見送り、

『ことの起こった時には、私を想い出すのですよ』

と、親切に告げて、戻っていきました。

シュラーヴァスティーの都に近づくと、私は旅に疲れて、林苑の蔓草のしげった園亭の中に眠りました。そして、白鳥の声に目が覚めて、起き上ると、一人の婦人が両足の踝(くるぶし)の飾りの音をたてながら、ゆっくり私のほうへ進んで来るのが見えました。婦人は近づくと、手にした一枚の絵の中の、私に似た人物と、私とを交互に眺めて、いぶかったり、考えこんだり、喜んだりして、立ちどまりました。

私は絵の中の私に似た人物と、彼女のいわくありそうなまなざしから推しはかって、声をかけました。

『この美しい林園の楽しい場所では、すべての人々が平等ではありませんか。お疲れでしょうから、腰をおろしてはいかがですか』

彼女は、ほほ笑んで、

『ご親切に、ありがとうございます』

といって、坐りました。私たち二人は互いに、よもやまの話をいたしました。すると、彼女は私の話から察して、

『あなたは他国の方で、お身体は旅に疲れているよ

うに、お見うけいたします。もし今日、お差し支えなければ、私の好意をお受けになって、私の家でお休みください』
　と、勧めました。
『美しい婦人よ。それも悪くありません。たいへん結構です』
　と、私は答えて、その方角に道をとり、彼女の家にまいりました。その家で、私は入浴や食事など、王さまのような扱いを受けて、心地よく坐りますと、彼女はひそかに聞きました。
『高貴な方よ。他国の旅をなさる間に、どんなことがありましたか、何か、あなたが驚くようなできごとがありましたか』
　私は思いあたりました。
『ここに希望の手掛りがある。王女の大勢の侍女の中で、彼女には、たしかに見憶えがある。そして、この絵には、あの高く聳えて白く輝く宮殿の露台がある。それに、秋の雲の塊のような白い寝台がある。のみならず、その傍に目を閉じて眠っているのは私に似た人物である。恐らく、王女もまた愛神カーマによって恋におちいり、その狂おしい熱病の苦痛に堪えかねて、ようすの変わり果てた理由を侍女たちに、しつこく問い質され、その返辞の代わりに、この絵を上手に描いたのだろう。そして、この侍女は〔絵の人物に〕容姿の似ているのをいぶかって、私に尋ねてみたのだろう。私はこと細かに話して、彼女のためらいを、取り除こう』
　こう、決心して私は申しました。
『美しい婦人よ。その絵をお渡し下さい』
　彼女は急いで、私に手渡しました。私は絵をとって、恋の情熱に悩み、美しく眠っている恋人（王女）を描き添えて、語りました。
『私は大森林の中に寝たのですが、このような婦人が、かような男の傍に現われました。恐らく、これは夢だったのでしょう』
　彼女は非常に喜んで、なおも尋ねましたので、私はすべてを打ち明けて、話しました。そして、彼女は、私ゆえの王女の心境〔の変化〕を語りました。
それを聞いて、私はいいました。
『もし、王女が私に好意をもっておいでになるのなら、数日お待ちください。私は後宮内にあって、見とがめられずに、暮らす方法を考えてまいります』
　ようやく彼女に言い聞かせて、私はまたもとの市場に戻って、道楽老人に会いました。
　老人はあわてて私を休憩させると、入浴や食事をとらせたのち、内密に尋ねました。
『こんなに早く戻ってくるとは、いったい、どうなさいましたか』
　私は答えて、いいました。
『まあ、お聞きください。シュラーヴァスティーという都があります。そこに、第二のダルマプトラ[注八]と誉れの高いダルマヴァルダナという王がいます。その王女にナヴァマーリカーという、うら若い姫がいて、その美しさは愛神カーマの生命にもひとしいシュリー（美の女神）をも凌ぎ、優美な若いマリカー華（茉莉花）のような美女なのです。私は偶然に出会ったのですが、王女の流し目の視線は、まったくカーマ天の恋の矢を、たて続けに射るように、私の感じ易い身体に注がれました。
〃このような矢を取り除くことのできる賢い医者は、ダヌヴァンタリ[注九]にもひとしいあなたのほかにはありません〃
　と、思って、私は戻りました。ですから、〔私の〕案に力をかしてください。私は女の衣裳を着て、あなたの娘になりすましたいのです。そして、あなたは私をつれて、ダルマヴァルダナ王が王座についている前に進み出て、こういうのです。
〃これは私の一人娘です。生まれた時に、母は亡くなりました。私は父となり、母ともなって育てました。さてここに、家柄もよく、婿にしたいと思う、賢い若者がいましたが、処世理財（人生三願の中の財）を学ぶに適したウッジャイニー国の都アヴンテ

ィへまいりました。私はその若者に娘を与える約束をいたしましたので、他の者にはやりたくありません。ところで、娘は成長いたしましたのに、若者は戻りません。私は〔若者を〕つれ戻して、娘の手を把らせ（結婚させて）、娘を任せたうえ、隠棲したいのです。もはや娘は子供ではなく、まして母がおりませんので、保護するのは困難です。そこで私はこの世の〔すべての人々の〕母であり父であり、また不幸な臣下の保護者である王さまのもとに参上いたしました。学識はあっても身寄りのないこの私を臣下の列にお加え下さって、もし王さまらしく、お扱い下さるなら、私が婿をつれ戻るまで、この娘をあなたさまの腕の樹蔭に、無事に過ごせますよう、お留め置きください〃

　こう、願い出ると、王はきっと、私を王女の傍で暮らさせるでしょう。けれども、あなたが退出した後、パールグナ[注10]の季節（寒季）が来て、月がウッタラ・パールグニー[注11]（翼宿）に宿ると、後宮の婦人たちの聖地巡拝の行事がおこなわれます。あなたは、その神聖な沐浴の地の東に向かって、牛の鳴声の間隔（約三マイル）を過ぎると、蘆の生いしげった地帯の中央に、戦の神カールッティケーヤの祠堂がありますから、その中に、汚れていない一揃いの衣服を持参して、待っていてください。その時まで、私は何の心配もなく、王女と暮らしたうえ、その祭礼の行事の時に、恒河（ガンガー）の沐浴を楽しみながら、後宮の婦人たちが、楽しさに紛れている隙に、水に潜って、あなたの近くまで来て、浮き上がります。そして、私はあなたの持参した衣服に着替え、女の衣裳を捨てて、あなたの婿養子になりすまして、ついて行きます。

　しかし、王女はその時に、私を探したあげく、発見できませんから、

〃彼女なしには、食べる楽しみもありません〃

と、泣き悲しみながら、自分の部屋に閉じこもるでしょう。召使たちは困って、がやがや騒ぎ、女の

友だちも嘆き、都の人々もがっかりし、王が宰相たちを集めて相談するころに、あなたは謁見の間に出向いて、私を〔傍に〕立たせて、こう言うのです。

〃王さま。この私の婿養子は王さまの尊敬を賜るに足る人物です。と申しますのは、彼は四種の聖典（四ヴェーダ）を識り、六種の補助学に明るく、六十四芸（都人士の身だしなみ）に達し、殊に象、戦車、馬に乗る術を能くし、弓、投擲、棍棒の戦において並ぶ者なく、古史と伝承に通じ、詩文や演劇や小説をよく書き、奥義書とともに処世理財の書を究め、他人の功績を羨まず、友人たちに信頼され、才能があって、気前がよく、もの憶えがよくて、自惚れもありません。欠点はほんの僅かもなく、円満な徳を具えております。私ごときバラモン風情にとって、彼はもったいない身内です。もし、王さまがお許しくださるなら、私は娘を彼に引き渡して、老人にふさわしい最後の隠棲にはいりたいと思います〃

　これを聞くと、王は困って顔色を変え、宰相たちとともに、無常などを説き聞かせて、あなたを慰めようとするでしょう。あなたは彼らに耳をかさず、声を限りに嘆き悲しんで、とめどない涙に咽喉をつまらせ、一本の薪に火を点けて、王宮の門口に薪を山と積み、その上に登るのです。そうするや否や、王は宰相をひきつれて、あなたに平伏し、望みどおりの財貨をあなたに与え、私に王女をくれるでしょう。そして、王は私の能力に満足して、すべての権限をゆずり与えるでしょう。もし、あなたが賛成なら、このような案に力をかしてください』

　と、言いますと、粋人の中の粋人パーンチャーラシャルマン老人は、私の言ったとおり、度々のごまかしを実行して、手ぬかりなくやり遂げました。そして、私の願いは僅かの間にかないました。そこで、私はまさしく、〔蜜蜂が花を得た〕ように、ナヴァマーリカー王女を手にいれました。

〔その後〕私はシンハヴァルマン王の救援と、友達の指定した地へ行くこととの、二つの目的をもって、

全軍をひきいて、チャンパーの都に到着いたしますと、天のお恵みから、王子さまに再会の幸運を授かりました」

　このようなプラマティの物語を聞いた王子は、目を細めて笑ったが、

「貴公の行動はまことに抜群ですばらしいが、しかも話はまことに楽しかった。これは賢者たちの採る道である。さて、今度は貴公が登場しなさい」

と、ミトラグプタのほうを見た。

注

一　チャクラチャーラ鬼 Cakracāra（輪になって行くもの）、人に危害を及ぼすと信じられた鬼神の類。

二　古来インドでは、男子の右腕が痙攣するのは吉兆とされ、女子はこれに反して左腕がよいとされる。

三　最初の野猪 ādivarāha. ヴィシュヌ神の十六権化の一。ヴィシュヌは野猪となって、水中に没した大地をその牙にかけて引き上げた。

四　戦の神スカンダ Skanda. シヴァの子といわれ、韋駄天と訳される。

五　女神は瞬きをせず、汗をかかず、化粧は乾かず、衣服は汚れない。

六　シュラーヴァスティーの都 Śrāvastī. 都の名を国号とした。舎衛城で名高い。

七　アルタパーラは前世において、ターラーヴァリーの息子であった（前章参照）。

八　ダルマプトラ Dharmaputra.「正義の子」の意で、叙事詩「マハーバーラタ」に、正義の神ダルマの子として述べられているユディシュティラ Yudhiṣṭhira 王のこと。

九　ダヌヴァンタリ Dhanvantari. 乳海攪拌の神話に出てくる神々の医師の名。

10　パールグナ Phālguṇa は孟春と訳され、陰暦十二月十六日から翌年一月十五日に至る期間で、インドの最寒期にあたる。

11　ウッタラ・パールグニー Uttaraphālguṇī. 月の運行に関する二十八宿の第十に当たり、翼宿（西方）ともいう。

第六章　ミトラグプタ物語

　ミトラグプタは物語った。

「王（子）よ。私も友人たちと同じく、旅を続けて、スフマ国の都ダーマリプターに近づきますと、林苑において、大きな祭礼の集まりに出会いました。その場の、とあるアティムクタカ[注一]の蔓草のはびこる叢の中に、見知らぬ若者がヴィーナー（琵琶）を奏でて、気晴らしをしておりました。

『友よ。これは、いったい何の祭だろうか、何のために催されているのだろうか、それに、あなたは何故、祭礼を避けて、ひとり寂しく琵琶を友とするのか』

と、私が尋ねますと、彼は答えました。

『貰い人よ。スフマ国のトゥンガダヌヴァン王には、子供がありませんでした。王は、ヴィンディヤ山に住むドゥルガー女神（シヴァ神の妃）が山に帰るのを忘れて住みついてしまったここの神殿に平伏して、熱心に二人の子供を〔授けて下さるように〕祈りました。すると、女神が夢に現われて、告げました。

〃男子一人と女子一人とが生まれるであろう。だが、王位を継ぐのは王女の夫となる者であって、王子はその下に従わねばならない。王女は七歳から結婚式にいたるまでの間、よい夫に恵まれるよう、毎月のクリッティカー（昴宿）の日に、手毬の舞踊を催して、われを祀りなさい。さすれば、彼女の望む夫が得られるであろう。また、その祭礼は手毬祭と命名しなさい〃

その後まもなく、王の最愛の妃メーディニーは一人の王子に恵まれ、また一人の王女を産みました。〔成長した〕そのカンドゥカヴァティー（手毬の女）と名付けられる王女が、今日、手毬の遊戯を行なって、女神ドゥルガーを祀ることになっています。王女の友だちであり、義妹でもあるチャンドラセーナーという女性は、私の恋人なのですが、最近、王子のビーマダヌヴァンに言い寄られています。ですから、私は愛神カーマの矢に悩んで、ただ一人ヴィーナーのやさしい調べに慰めを求めて、坐っているのです』

ちょうどその時、足の踝飾りの音をたてて、見知らぬ女性がやって来ました。彼女の近づいて来るのを見るなり、若者は目を見はって立ち上がり、そして、彼女は若者にすがりつきました。若者は傍に坐って、〔私に〕言いました。

『彼女は私の生命も同然です。彼女と離れているのは、火に焼かれるように、つらい思いです。私の生命（恋人）を奪い取ろうとする王子は、私の熱を奪って殺す死も同然です。しかし、〔相手は〕王子ですから、私は危害を加えるわけにはまいりません。ですから私は、彼女に見納めをさせて、この生命を

捨てるよりほかはないのです』

しかし、彼女は顔を涙にぬらして、答えました。

『夫〔と慕うひと〕よ。私のために早まってはなりません。あなたは隊商の頭梁のアルタダーサの子に生まれ、両親からコーシャダーサ（財宝の下僕）という名をもらいましたが、私に執心のあまり、敵方からヴェーシャダーサ（遊女の下僕）という綽名で呼ばれて評判になりました。もし、あなたが死んで、私が生き残ったら、人々は〃娼婦は無情なものだ〃と、噂するでしょう。ですから、いま私を、あなたの望む国へつれていって下さい』

すると、彼は私のほうを向いて話しかけました。

『友よ。あなたのご覧になった国々のうち、どこがよく栄え、地味が肥え、善人の多い所でしょうか』

私はにっこり笑って、彼に言いました。

『友よ。海に囲まれた大地は広大です。善人の住む国はあちらにもこちらにもあって、際限がありません。ですが、あなたがた二人が、ここで幸せに暮らせるような手段を、もし、私が考え出せない場合には、その時こそ私がご案内しましょう』

そう言っている間に、踝を飾る宝石の音が響いてきました。彼女はあわてて、

『王女さまです。カンドゥカヴァティー王女が手毬の遊戯をなさって、ドゥルガー女神を祀るために、お着きになったのです。この手毬祭はどなたも自由に見られます。目の保養においでくださいませ。私は王女さまのお傍へまいります』

と、言って立ち去りましたので、私たち二人も跡を追いました。

私はまず、宝石をちりばめた舞台に立つ王女の赤い唇に見とれました。すると、たちまち彼女はもう私の心の中に立っていました。私ばかりでなく、他の人々にとっても、〔彼女がどんな風にしてそんなに早く私の心の中にはいってきたのか〕空間〔の通り路〕が見えませんでした。私は驚嘆して、こう思うのでした。

『いったい彼女は美の女神ラクシュミーなのだろうか。いや、いや、そうではない。女神は手に蓮華を持っているのだが、彼女の場合は、手そのものが蓮華である。女神はそのむかし、原初の人[注二]（ヴィシュヌ天）あるいはまた古代の王たちの愛をうけた。けれど彼女は、まだ一点の汚れもない乙女である』

全身非のうちどころもない王女は、その時、手の甲を下にして蕾のような指先を床につけ、青蓮のような黒髪をなびかせて、女神（ドゥルガー）をふし拝み、まさしく怒れるカーマ天の目と紛う赤い毬を手にとりました。そして、楽しそうに〔手毬を〕地に落とし、ゆるやかに跳ね返ってくるのを、拇指を僅かに曲げ、しなやかな指をのばし、花のような掌で打ち、次には手の甲で打ち上げたのちに、ちょうど蜜蜂が花をたたえて、その周囲を飛ぶかのように、いきいきと動く目で追いながら、毬を空中に受けとめました。ついで彼女は〔毬を〕早く、遅く、またはその中間の速度で打ちながら、前に進み、後ろに退き、チュールナパダ[注三]のしぐさをいたしました。そして、毬の動きが鈍れば容赦なく打ち上げ、反対に早くなれば打ち方をゆるめました。また左右の手を交互に用いて、横に打ったり、まっすぐに打ったりいたしますと、毬はまったく鳥のように見えました。毬が高く上って横に外れると、ギータマールガ（歌の道、十歩で回る）のしぐさをしながら、元に戻しました。このような、王女の快い演技に時がたつ間、観衆が舞台に心を奪われて、賞賛する叫びや、囁きが絶えず起こりました。私が信頼するコーシャダーサの肩に凭れて、一瞬ごとに高まる情熱に、頬の生毛を立て、じっと王女を見つめていると、彼女は、はじめて知った恋心から、毬の行方を追いながら、蔓草の眉をいたずらっぽく曲げて私に流し目を送りました。彼女の息吹きによって慄える唇から洩れる光は、香ぐわしい蓮華のような口を求めて群がる蜜蜂を、その光で作った小枝でうち払うかのようでした。そして、毬を追ってすばやく回りながら、彼女

は、じっと見つめる私の目ざしを羞らって、ぐるぐる回る毬が、花籠のように見える中に身を隠すように見えました。彼女がパンチャビンドゥ（五滴打ち）のしぐさをいたしますと、まるでカーマの五本の矢が同時に射られるのを、禦ごうとでもする風情でした。そして彼女がゴームートリカー（牛歩踊り）のしぐさで、稲妻のような屈折した足どりをいたしますと、はげしい情熱の乱れが表われましたし、足を動かすたびに、宝石の装身具が拍子を合わせて鳴り、作り笑いに赤い唇は濡れ、豊かな髪束の肩に垂れ下がるのをもとに戻しました。腰帯の宝石飾りが一時に鳴るのも快く、まろやかに盛り上がった幅の広い腰に懸かる衣服の揺れるのも美しく、蔓草の〔ようにしなやかな〕腕を曲げたり伸ばしたりして毬を打つのも魅力がありました。彼女が腕をやって、揺れるのを遮りますと、髪の毛は腰まで達しました。花弁型の黄金の耳飾りが落ちかかると、遊戯にさまたげのない速さでつけ直し、手や足を用いて、繰り返し打つ毬は内側に外側に跳ねました。彼女が立ち上がったり、身を屈めたりするたびに、首飾りは見えつ隠れつして、絶え間なく上下に揺れました。花のような耳に煽られた風により、頬の麝香の化粧の乾いたのも、暑さのための汗に濡れて崩れ、一方の手は、胸の隆起から衣服のすべり落ちかかるのを留めるのに忙しく、彼女は身を屈め、立ち上がり、目を閉じ、開き、立ちどまり、動いて、遊戯に興じました。手毬を地にうちつけたり、空中にうち上げる遊戯とはいえ、一個ならず数個の毬をも用いて、王女は私たちに、すばらしい遊戯を見せました。

それから王女はチャンドラセーナーや、親しい女の友達といっしょに遊戯をして、時を過ごし、終わりに女神を礼拝いたしました。私の心はまったく忠実な召使のように、王女にかしずき、彼女はまさしく、睡蓮の花の矢のような横目づかいの視線を、私に投げかけながら、さり気なく満月のような顔を幾度となく振り向けて、私のほうへ戻るべきか、去る

べきかに迷う風情で、友だちとつれだって、後宮へ帰っていきました。

　こうして私は恋に心も落ち着かず、コーシャダーサとともに彼の家に戻りましたが、彼は私を歓待して、入浴や、食事などをとらせました。夜になると、チャンドラセーナーがひそかにやってまいりまして、私に平伏したあとで、恋しい夫〔と慕うコーシャダーサ〕の肩に、自分の肩をそっと触れて、私の傍に坐りました。コーシャダーサは嬉しそうに、いいました。

『きれ長の目の女よ。私は生命のある限りこのようにして、あなたの愛を受けていたいものだ』

　しかし、私は笑って、声をかけました。

『友よ。何を望むことがありますか。ここに一つの塗り薬があります。これを彼女の目に塗って近づくと、王子にとっては彼女がまさしく牝猿に見えるのです。そうすれば王子は彼女を棄て、また諦めるでしょう』

　すると、彼女は笑って、私に申しました。

『あなたさまの召使である私は、あなたさまから、人の姿を牝猿に変えるという、ありがたい思召しをいただきましたが、それはもう結構でございます。実は、もうすでに別の方法で、私たち二人の願いはかなうのです。たしかに今日の手毬祭の時に、王女さまは愛神カーマにまさるあなたの美しいお姿に思いを寄せられまして、カーマ天の怒りに触れたように悩んでおられます。私は王女さまのその心持を知っておりますので、それを母に、母は王女の母君の王妃に、お妃は王さまに報告なさるでしょう。ことの次第をお聞きになった王さまは、あなたさまに王女のお手をとらせるでしょう。そして、王子はあなたさまに従う立場になりましょう。何故なら、それが女神の定めた掟でございますから。それに、あなたさまが国を支配なさるようになれば、ビーマダヌヴァン王子も、あなたさまの意にさからって、今後私を悩ますことはできません。ですから、三、四日

の間、お待ちください』

　彼女は恋人（コーシャダーサ）を抱きしめて、やがて帰っていきました。彼女はそういいましたものの、私とコーシャダーサはやはり心配で、あれこれと考えているうちに、どうやら夜が明けました。

　夜が明けると、私は朝のお勤めをすませて、恋人との想い出のある、その美しい林苑へまいりました。すると、ちょうどそこに、王子（ビーマダヌヴァン）が来合わせて、少しも横柄ではなく、好意をもって、さまざまに語りあい、私といっしょにしばらくの時を過ごしました。そして、彼は私を王宮へ案内して、自分と変わりなく、入浴や、食事や、寝台などを提供して、もてなしました。ところが、私が寝台に横たわって、恋しい王女を抱擁する幸せを夢みている間に、王子は棍棒のような腕の大勢の男たちに命じて、私を縛りあげました。突然、目を覚まされた私にむかって、王子は言いました。

『愚か者よ。悪賢い女チャンドラセーナーの話が窓枠の隙間から洩れるのを、彼女の行動監視のために私の雇った佝僂の女が盗み聞いてしまったのだ。お前は、憐れな王女カンドゥカヴァティーに慕われて、私を召使の地位におとしいれようとした。〔そうすれば〕私はお前の意に逆らえなくなり、チャンドラセーナーをコーシャダーサに与えなくてはならなくなるのだ』

　彼は傍に控えた従者を見て、命じました。

『この男を海に投げこめ』

従者はまるで王国を授かったかのように、大喜びをして、

『王〔子〕さま、ご命令のとおりに』

と答えて、そのとおりに実行いたしました。私はすがりつくものもなく、両腕を使って、〔海中を〕あちらこちら泳ぎ回るうちに、幸いにも、一枚の木片をつかまえて、それに胸をつけ、一日中、そしてその夜がまったく過ぎ去るまで漂いました。明けがたに、私は一隻の船を発見しました。その船にはヤヴ

ァナ人（ギリシャ人）が乗っていて、彼らは私を引き上げると、ラーメーシュという名の船長に報告しました。
『鉄の鎖で縛られたこの見知らぬ男を海中から拾いました。この男は一時に千本の葡萄の木にさえ、難なく水を注げそうです』
ちょうどその時、見なれぬ軍船がたくさんの小舟を従えて、攻め寄せて来ました。ヤヴァナ人たちが恐れをなしている間に、（軍船は）非常な速度で、まるで犬が豚を追うように、私たちの船をとり囲みました。そして、戦が始まりました。ヤヴァナ人たちは負け戦になりました。私は戦い疲れて諦めている彼らに、声をかけました。
『私の鉄枷をはずしてください。この私があなたがたの敵を打ち破ります』
彼らがいわれたとおりにいたしますと、恐ろしい唸りを立てる弓を用いて、私は敵兵たちに矢の雨を注ぎ、身体を粉砕してしまいました。
兵士らを全滅された敵船に、われわれの船を近づけて、跳び移った私は従者もいなくなった船長にとびかかり、生け捕りにしました。ところがなんと、それはビーマダヌヴァン（王子）でした。私と知るや、彼はひどく恥じいって、申しました。
『貴公。運命の動きは判らないものです』
海商たちは、私を縛っていた鎖で、彼（王子）を堅く縛ると、心からの歓声をあげて、私を尊敬いたしました。
しかし、船は逆風に煽られて、遠く流され、とある島にぴったりと着きました。そこで、私たちは、飲み水や、薪や、球根や、果実を積みこむため、深く（海中に）落ちこんだ岩礁に上陸しました。島にはまた、大きな岩山が聳えていました。
『ああ、なんとすばらしい山の傾斜だろう。山裾の硫黄分を含んだ土はさらに美しく、谷川の冷たい水の上には、青や赤の蓮華の花から落ちた花汁の雫の玉が、月のように浮かび、周囲の美しい森の木々に

は色とりどりの花が群がっている』
と、飽かずに眺めているうちに、私は見るだけでは不満になって、見つからないように山頂に登りますと、真紅な石の階段に赤く照り映え、蓮華が粉をまいたように咲き乱れている池にたどりつきました。
そして、私は池に沐浴したあとで、甘露のように美味な蓮の茎を抜きとって食べ、白い睡蓮の花を肩にかけました。すると、突然、岸にいた恐ろしい形相の羅刹鬼が私に襲いかかって、
『お前は何者か、何処から来たのか』
と、怒鳴りました。私は恐れずに答えました。
『貴人よ。私は再生族（バラモン）です。敵の手から海中へ、海からヤヴァナ人の船へ、ヤヴァナ船からこのすばらしい岩だらけの山にやって来て、この池に休息しました。何分よろしく』
すると、鬼は言いました。
『もし、お前が私の質問に答えなければ、お前を食い殺すぞ』
私は答えました。
『よろしい、では質問なさい』
そこで、私たちの間に、アーリヤー調の詩句で、問答がとりかわされました。
『冷酷なものは何』『それは女心』
『家長を悦ばすものは』『妻の徳』
『恋とは何』『それは気紛れ』
『困難を成就させるものは』『それは機知。ドゥーミニー、ゴーミニー、ニンバヴァティー、ニタンバヴァティーの話が、その証拠である』
すると、鬼は促しました。
『話せ。それはどういうことか』
そこで、私は物語りました。（第一話　ドゥーミニー物語[注四]）
『トリガルタという国がありました。その国に極めて富裕な三人兄弟の家長がいて、ダナカとダーニヤカとダニヤカと申しました。彼らの生存中に、インドラ天は十二年の間、雨を降らしませんでした。穀

物や植物は水分を失って萎え、森の樹木は果実をつけず、雲は水を持たず、河には水が流れず、池は泥土のみ残し、泉は涸れ、球根や果実は乏しくなり、談笑はやみ、祝祭は途絶え、盗賊の群ははびこり、人々は互いに食い殺し合い、鶴のように白い人間の頭蓋骨があちこちに転がり、痩せ細った鴉の群が飛び交い、多くの都や、町や、村や、山の部落は荒れ果てました。

その〔三人の〕家長たちは、蓄えた穀物を悉く使いきった末に、牝山羊や、恐ろしい野牛の群や、たくさんの牛や、下女や、下男や、〔自分たちの〕子供や、長兄次兄のそれぞれの妻を順次に食い尽くしてしまいましたので、末弟の妻のドゥーミニーを、明日は食べようと、決めました。

さて、末の弟のダニヤカは自分の愛する妻を食うにしのびず、その夜の間に、妻をつれて逃れ、彼女が道に疲れると、背に負って、森の奥深くはいりました。彼は、飢え渇く妻に自分の血と肉を与えて、運ぶ途すがら、見知らぬ男が足も手も、耳も鼻も切り落とされて、地面に悶えているのに出会いました。心のやさしい彼は、その男をも肩に負って運び、球根や、野生の獣の豊富な所に来ると、苦心の末に木の葉の小屋を作って、長い間そこに住みつきました。そして、彼は傷ついたその男にも、イングディーの実の油や、胡麻油や、肉や野菜などを与えて、自分とわけへだてなく養い、手当てをしましたので、男は十分にからだも回復しました。ある日のこと、ダニヤカが鹿を追って出かけた留守に、妻のドゥーミニーはその男に欲情を抱いて、楽しもうといたしました。そして、男が拒んだにもかかわらず、彼女は思いをとげました。夫が戻って来て水を求めますと、

〃自分で井戸からお飲みなさい。私は頭痛がするわ〃

と、言って、綱のついた手桶を投げ与え、井戸の水を汲み上げている夫の背後に走りよって、井戸の中に突き落としました。

彼女は不具の男を肩にかついで、国から国へ旅を続ける間に、夫に誠実な妻、という評判をとり、さまざまの品物を贈られました。そしてついに、彼女はアヴァンティ国の王のお情けで、住む家をいただき、たいへん豊かに暮らせるようになりました。さていっぽう、夫のダニヤカは、偶然にも水を飲みに来た隊商たちに発見されて救われ、いまはアヴァンティ国の都を乞食して、うろついておりましたが、彼女はそれを見つけると、

〃あの男は私の夫を不具にした悪人です〃

と、訴え出ましたので、何も知らない王はその善人に対して、極刑を命じました。

ダニヤカは、うしろ手に縛られて刑場にひきたてられました。余命いくばくもないのに、彼は少しも気を落とさず、刑吏に向かって申し立てました。

〃もし、私が不具にしたと思われているその男が、私を悪人であると言い張るならば、私は甘んじて刑罰を受けます〃

刑吏は、〃差し支えない〃といって、彼を不具の男にひき会わせて、問い質しますと、正直な不具の男は涙にむせんで平伏し、ダニヤカの善行と、不貞の妻の悪事をありのままに述べました。怒った王は、悪女の顔をめちゃめちゃにしたうえ、犬たちの餌食にしてしまいました。そして、ダニヤカはお賞めにあずかりました。ですから、私は言うのです。〃冷酷とは、女心なり〃と』

それから先を問われるままに、私はゴーミニーの物語をいたしました。

〔第二話　ゴーミニー物語〕

『ドラヴィダ国[注五]にカーンチーという都がありました。その都の商業組合長の息子に、千万長者のシャクティマーラという者がいました。彼はおよそ十八歳になったころに、こう考えました。

〃つれ添う妻を持たない者や、釣合いのとれぬ妻を持つ者は、どちらも幸福とはいえない。そこで、私はどのようにしたら、よい妻にめぐり会えるだろう

か〃

こう思った彼は、他人まかせに結婚した者が、偶然に、うまくいっているのには目もくれず、易者を名乗って、衣服の裾に一プラスタ（穀物の量目の単位）の米を結びつけ、諸国の旅に出かけました。娘をもつ親たちは、〃これは易者である〃と、〔思って〕快く娘を彼に見せました。めでたい相を具え、同じ身分の娘を見るたびに、彼は言いました。

〃よい娘よ。あなたはこの一プラスタの米で私のために、おいしい食事を作れますか〃

彼は笑われたり、断わられたりしながら、家から家へと、たずね歩きました。

ある日、彼はシビ国のカーヴェリー河の南岸の町で、両親に先立たれ、莫大な家産もほとんど傾き、身の飾りも粗末な、憐れな娘を、乳母が見せるのに出会いました。彼は娘をじっと見て、考えました。

〃まことに、この娘の四肢は、すべて太すぎず、細すぎず、短かすぎず、長すぎることなく、ほどよく、清らかである。指や掌は血色よく、麦粒や、魚の形や、蓮華や、水瓶などのめでたい手相をたくさん具えている。足の踝の関節は平らで、肉づきがよく血管が外に見えない。脛は均斉がとれ、丸みをもっている。膝はよく肥えた腿にかくされたようで目立たない。臀は釣合いよく割れ、二つの輪のような円味の上の凹みも美しい。深く沈んだ臍のあたりは僅かに窪んで美しく、三条の襞が腹部を飾っている。二つの乳房は胸を埋めつくして、裾がひろく、先端が高く聳えている。掌はたくさんの財宝や、穀物や、子供に恵まれるめでたい相を具え、爪の先はなだらかに高まって宝石のように美しい。指はすなおに伸びて、ほどよく丸く赤味がある。弧を画く肩には蔓草のようにしなやかな腕の関節が窪んでいて、ほっそりとした頸すじは法螺貝のように丸く美しい。ふくらみをもった赤い唇は、まんなかではっきりと分かれ、顎は狭からず愛嬌があり、頬は丸くてしかも引き締まり、間合いの狭すぎない蔓草のような眉は

撓んで、漆黒に輝き、鼻は咲ききらぬ胡麻の花さながら、きれ長の目は黒（瞳）と白と赤（眦）の三つの部分に美しく映え、動きも静かに深味があり、額は半月の形で品がよく、黒髪は房々として碧玉のようにみごとで、両耳は凋んだ蓮の茎を二重に折りたたんだように懸かって美しく、豊かな髪の毛は浪うちすぎることなく、毛の先も赤からず、長くのびて、一本ごとに生来の漆黒に光って、かぐわしい。

彼女はこのような容姿であるから、〔心もそれに相応しく〕道をふみ外すことのない人柄であろう。それに、私の心は彼女に惹かれている。だから、私は彼女を試してから、結婚しよう。何故なら、よく吟味せずに行動する者にとっては、後悔の絶え間がないから〃

彼はやさしく見まもって、尋ねました。

〃よい娘よ。この一プラスタの米を用いて、私に、おいしい食事が作れますか〃

すると、彼女は召使の老婆のほうへ、意味ありげに目をやりました。そして、彼の手から一プラスタの米を受けとると、家の戸口の縁先の一ヵ所をよく洗い掃き清め、彼の足を洗って、座をすすめました。彼女はその香米を搗いて程よく日に乾かし、堅くて平らな地面の上で幾度もひっくり返して、蓮の茎の裏で静かにさすりながら、米粒から籾殻を分けました。そして、乳母に言いました。

〃乳母よ。この籾殻は装身具を磨くのにむいていますから、金細工の職人に売って、その代金の数カーキニー（小銭の単位）で、とても堅くて、湿りすぎず、乾きすぎていない数枚の板と、手ごろな鍋一つと、皿二枚を買い求めてください〃

乳母が命じられたとおりにして戻りますと、娘はその米を、〔底が〕深すぎず、平たく開いたカクバ樹の臼に入れ、長くて重い、先端に鉄の環をはめ、中ほど〔の握り目〕が細くなっている、丈夫なカディラ樹の杵を使って、腕を美しく上下に動かし、時時、指で〔米を〕とり出してみて搗き終わり、篩に

かけて芒(のぎ)などをとり除き、米粒をよく水で洗い、まず竈〔の神〕に恭しく捧げたのち、煮えたぎる五倍の湯の中へ入れました。米粒の中味がやわらかくなって、はじけ、花の蕾のような状態になりますと、とろ火にして、鍋に蓋を当てて粥汁を絞り出しました。そして、匙をさし込んで、ゆるやかにかき混ぜ、米が一様に煮えた時に、鍋をおろして、逆さに置きました。燃え尽きていない残り火に水をかけて消し、冷えて黒い木炭になったのを、それを必要とする人たちに送り届けさせました。

〃この木炭を売った代金のカーキニー貨で、野菜や、牛酪や、酸乳や、胡麻油やアーマラカの実とチンチャー（羅望子(タマリンド)）の実を買えるだけ買ってきなさい〃

乳母がそのとおりにして戻りますと、彼女は二、三種の副食物を調え、以前に絞っておいた粥汁を、湿った砂の上に置いて〔冷やした〕新しい皿に入れ、静かに団扇の風でさまして、塩気を加え、炭火に香をいぶして芳香を添え、さらに細かく砕いたアーマラカの実に蓮華の芳香を添えたのち、乳母にいわせて、彼を入浴させせました。乳母は続いて入浴をすませると、彼に胡麻油とアーマラカの粉を香料として捧げましたので、彼は順序よく入浴を終えました。それから彼は、打ち水をし、掃き清められた、漆喰で固めた床の上の板敷に坐り、家の中庭の淡い緑色のカダリー樹（芭蕉）の葉を三分の一に切りとって、その上に載せられた二枚の湿り気のある皿に手を添えて、待ちました。娘は最初に粥汁を運びました。彼は飲みほすと、旅の疲れも消えて、全身爽快になりました。次に娘は柄杓(ひしゃく)に二杯の粥を出し、少々の牛酪とスープと副食物とを捧げました。続いて、三種の香料(注六)を加えた酸乳と、冷えて香りのよい粥汁を添えて、残りの粥を差し出しました。

彼は、満腹して、全部は食べられませんでした。そこで彼は飲み物を求めました。すると、娘は新しい黄金の水瓶にいっぱいの、アグル香を薫じ、新鮮なパータラー（青桐）の花と、開花した蓮の香りを

つけた水を注ぎました。彼は皿を口に迎えて、その雪のような水を飲みますと、冷えた水滴に睫は驚き、注ぐ水の音に耳は喜び、快い感触に頬はこわばって、生毛が逆立ち、よい香りのために鼻孔は蕾の開花するように拡がり、味覚はその旨さにうっとりといたしました。彼が頭をふると、娘は気づいて、別の器に嗽ぎの水をさし出しました。そして、老婆が残り物をとり片づけたあとで、彼は緑色の牛糞を塗り固めた床に、自分の上衣の古くなった襤褸を敷いて、暫しの間、身を横たえました。このようにして、彼は心から満足しましたので、儀礼に従って、結婚式を行ない、娘を家につれ帰りました。

彼は家に戻ったのちに、彼女がいるのにもかかわらず、ある遊女を妻にしました。彼女はしかし、その遊女にさえ、親友と同じように仕えました。また夫に対しても、神に対するように、怠りなく仕えました。彼女はいっさいの家事をとり行ない、召使たちは温情の化身のような彼女に、心から従いました。ついに夫はその美徳に心を打たれて、すべての家事を彼女に任せ、身も、生命も、ひたすら彼女に捧げて、人生の三願を成就いたしました。

そこで、私は言うのです。〃家長を悦ばすものは、妻の徳〃と』

鬼神に催促されて、私は次に、ニンバヴァティーの物語をいたしました。

〔第三話　ニンバヴァティー物語〕

『サウラーシュトラ国(注七)にヴァラビーという都がありました。そこに、クベーラ天（財宝の神）にもひとしい財産家のグリハグプタという船長がいて、その娘をラトナヴァティーと申しました。娘はマドゥマティーの都からやって来た隊商の頭梁の息子のバラバドラという若者と結婚いたしました。けれども、彼は新婚の〔夜の〕喜びを、花嫁にすげなく拒まれるや、少なからぬ憎しみを抱くようになって、二度と妻を顧みようとしませんでした。そして、友人たちが家を訪ねて慰めても、恥かしさから耳をかさず

に、避けました。それ以来、親族や召使たちは、

〝彼女はラトナヴァティー（宝石のような女）ではなくて、ニンバヴァティー（ニンバの実のように苦い女）だ〟

と、渾名するようになりました。

　しばらく日時がたって、彼女は後悔しながら、

〝私はどうしたら、いいのかしら〟

と、思案にくれておりますと、〔以前に〕乳母であった老修道尼が、供え花の残りを手にして、やってくるのが見えました。彼女は老尼の前で、さめざめと泣きました。尼もまた涙ぐんで、あれこれと慰めた末に、悲しむ訳を尋ねましたので、彼女は羞らいながらも、ことが重大でしたから、辛い思いで、語りました。

〝母よ。なんといったらいいのでしょう。まことに、不幸に生きるのは死ぬにひとしゅうございます。まして、素姓正しい女にとっては、なおさらです。彼と私の仲がそれなのです。姑をはじめ、親類縁者たちさえ、私をひややかな目で見るのです。彼が私を見直すようになってほしいのです。さもなければ、私はたったいま、無用なこの生命を捨てるつもりです。けれど、私が死んでしまうまでは、秘密を守って下さい〟

　こう言うと、彼女は平伏いたしました。

　老尼は彼女を立ち上がらせると、涙ながらに、言いました。

〝よい子よ。早まってはなりません。私があなたのおっしゃるとおりに動きます。あなたにお仕えする限り、私は他人に仕えはいたしません。もしも、あなたの望みが全く絶えた時には、私の教えに従って、来世の幸福のために修行なさい。あなたのように美しく、お人柄もよくて、家柄もよい生まれの方が、夫に忌み嫌われるとは、思いがけないことですし、これも前世の業の結果なのでしょう。あなたは知恵にすぐれていらっしゃるのですから、もし何か、夫の憎しみをとり除く方法があれば、話してごらんなさい〟

　彼女はしばらくうつむいて、考えていましたが、長い、熱い溜息をして、申しました。

〝貴い尼よ。夫は妻にとっては、唯一の神でございます。素姓の正しい女にとってはなおさらです。ですから、夫にお仕えするには、何かと手段を尽くすべきでございましょう。私たちの隣家に商人がおります。素姓もよく、裕福で、王さまとも親しくしておりますから、都のすべての人々の中でも、きわだっております。その娘がカナカヴァティーといって、私に生き写しの上に、親しい間柄なのです。私はその娘といっしょに、その邸の露台の上に出て、お揃いの装身具を身につけて、遊びます。ですから、あなたは夫に、私の母の依頼です、と話して、とにかく夫をその邸へつれて来て下さい。あなたがたが近づいたなら、私は遊戯に夢中になったふりをして、手毬を下へ落とします。そしたら、あなたは手毬をつかんで彼に手渡して、こう言うのです。

〝息子よ。あの婦人はあなたの妻の親友のカナカヴァティーといって、商業組合長のニディパティダッタの娘です。彼女は、妻のラトナヴァティーに対するあなたの態度を、あまりに酷いと非難して、あなたを移り気の薄情ものと、言っております。そんな敵の所有物ですから、この手毬を彼女にお返しなさい〟

　こう言われると、彼はきっと上を見て、合掌して敬意を表わしている私を、彼女と見違えて、もう一度、あなたに促された末に、心ひかれる思いをして、投げ返すでしょう。それを、いとぐちにして、親しくなりましたら、あなたは彼の恋心を煽って、彼が私をつれて他国へ駆け落ちの約束をするように仕向けて下さい〟

　老尼は大いに喜んで、賛成し、そのとおりに実行いたしました。

　老尼に瞞された夫のバラバドラは彼女を〝これはカナカヴァティーである〟と、思いこんでおります

ので、高価な宝石や装身具に身を飾った彼女の手をとって、暗い夜の間に家出をいたしました。けれど、老修道尼はこんな噂を弘めました。

〃バラバドラが昨日、私に、

'私は愚かにも、他愛ない理由から、妻のラトナヴァティーを顧みず、妻の両親を侮辱し、友人たちに耳をかしませんでした。ですから、ご縁のあるこの地に暮らすのは恥ずかしいのです'

といいました。そこで、彼は妻をつれて、立ち去ったに違いありません。まもなく、すべてが、はっきりいたしましょう〃

親族や縁者たちも、このように聞きましたので、体裁をとりつくろうための捜索をするにとどめました。

そして、バラバドラは旅の道すがら、一人の下女を雇い入れ、旅の糧食や、家財道具などを運ばせて、ケータカプラーの町へいきました。バラバドラは商才がありましたから、極めて少ない資本で、大きい富を作り、町の有力な人物になりました。召使たちも富への憧れから、大勢集まりました。その後、彼は最初の下女に向かって、

〃お前は仕事を怠け、物を見つけ次第に盗み、言葉も乱暴だ〃

と、きつく叱って、打ち据えました。下女は腹立ちまぎれに、信頼されていたころに聞いた夫人の身上話の一部を、言いふらしました。

その話を欲の深い警備長が聞き、町の長老たちに、

〃バラバドラはニディパティダッタの娘カナカヴァティーを盗み去って、われわれの町に住んでいる悪人です。私は彼の全財産を没収しますから、みなさん、ご承知下さい〃

と、強く主張いたしました。

バラバドラはびっくりいたしましたが、妻のラトナヴァティーに、こう言われました。

〃恐れることはありません。あなたは、こう言えばよろしいのです。

'あの女はニディパティダッタの娘のカナカヴァティーではない。ヴァラビーの都に住むグリハグプタの娘のラトナヴァティーであって、両親の許しを得て、公けに結婚したのである。もし、皆さんが信じないなら、彼女の親族に使者を遣るがいい'

バラバドラはこのように釈明して、商業組合の保護を受けて、暮らしておりましたが、その間に、長老たちから手紙のしらせがあったものですから、グリハグプタがケータカプラーの町へやって来て、婿と娘を見ると、大喜びで国へ帰りました。バラバドラはこれを見ても、まだラトナヴァティーをカナカヴァティーと思い込んでいましたので、このうえもなく彼女を愛しました。

そこで、私は言うのです。〃恋とは気紛れ〃と』

すると、鬼神は直ちに、ニタンバヴァティーの話を求めましたので、私は語りました。

（第四話　ニタンバヴァティー物語）

『シューラセーナ(注八)国にマトゥラーという都がありました。そこのある家に一人の息子がおりまして、さまざまな技芸に熱心なばかりか、遊女たちに夢中になり、友達のためには自分の腕力の限りをつくして、喧嘩をすることも度々でしたから、乱暴者たちの間に、

〃あれはカラハカンタカ（喧嘩好き）だ〃

と呼ばれて、知れ渡っておりました。

ある日のこと、彼は他国から来た画家が手にもつ一枚の絵を見ました。絵の中に描かれた見知らぬ若い女を、ひと目見るなり、カラハカンタカは恋に陥りました。彼は画家にいいました。

〃よい人よ。この絵はとても不釣合いに見えます。良家の生まれにしては稀な美人です。それなのに、控えめにうつむくようすはそれ（良家の生まれ）を物語っていますし、顔は色白く、身体はあまり慰みものになっておらず、目は誇りを湛えています。しかも、夫が旅行のために不在でもない証拠に、辮髪などのしるしが見あたりません。また、右側のこの

わしています。あなたの腕前が非常にすぐれているので、この女はありのままに描き出されたのに違いありません〃

画家は彼をたいへん賞めて、いいました。

〃それは事実です。この女性はアヴァンティ国のウッジャイニーの都に住むアナンタキールッティという隊商の頭梁の妻で、臀の大きい、名前もニタンバヴァティー（腰の豊かな女）という女です。私は夫人の美しさに感じいって、これを描いたのです〃

彼は心もそわそわして、すぐさま、彼女を見に、ウッジャイニーの都へ向かいました。彼は易占家になりすまして、施物を乞うふりをして、彼女の家にはいり、夫人に会いました。

彼女を見たのち、彼の恋心はいよいよ募るばかりでしたので、外に出るや、都の長老たちに願い出て、屍体捨場の番人の職につきました。彼はそこで屍を覆う布などを手に入れ、アルハンティカーという、ある尼にそれを贈り〔買収し〕ました。彼はその尼にニタンバヴァティー夫人を招かせましたが、夫人は怒って断わりました。

そして、尼は、良家の夫人に、婦徳を犯させるのは困難であると、彼に告げましたが、彼はひそかに尼に命じました。

〃もう一度、隊商の頭梁の夫人に会って、こっそりといいなさい。

〝輪廻転生の世をむなしいものと悟って、深く修行に専念し、解脱を求めている私のような尼が、良家の夫人を堕落させると、お思いになりますか。とはいえ、私は、あなたが稀にみる天女のような美貌と富と若い精力に溢れておいでなので、―他の浮気女のように、たやすく心を動かすか、どうか―と思って、試みたのですが、このように汚れのないあなたの心に、満足いたしました。ですから、いま、〔子のない〕あなたに子を授けたいと思います。あなたの夫は悪霊に憑かれているので、黄疸にかかり、不

能なのです。その障りをとり除かなければ子供を持つのは無理なのです。そこで、こうなさい。あなた一人だけで、庭の木立の所へ来て、私が案内して来る、ある呪術家の手に、黙って足を乗せ、呪文をとなえてもらうのです。そして、すねて怒ったふりをして、夫の胸を蹴るのです。そうすると、彼は丈夫な子を授かるのに相応しい精力を身に具えます。彼はそうなりますと、あなたを女王さまのように大切にするでしょう。ためらうことはありません〟

夫人は、こう聞いて、きっと同意するでしょう。あなたは夜になったら、庭の木立のあたりに私を案内し、夫人もそこへ連れて来なさい。頼みます〃

尼はそれを承諾いたしました。彼は大喜びで、夜になると、庭の木立に行き、尼の力添えでやって来たニタンバヴァティー夫人の足に触わるふりをして、黄金の踝の飾りを片方だけ外し、短刀で脚に僅かに傷をつけ、すばやく逃れました。夫人は非常に驚いて、自分の愚かさを悔みながらも、老尼をとり殺さんばかりでしたが、傷を家の池水で洗い、布で縛って、残る一方の踝飾りをとり外し、病気を装って、三、四日の間、ただ一人寝室に閉じ籠りました。

彼は意地わるく、〔奪った〕踝飾りを、夫のアナンタキールッティの前に持っていき、

〃売り物です〃

と、さし出しました。それを見て、彼女の夫は、

〃これは私の妻の踝飾りだ。あなたは、どうして、これを手にいれましたか〃

と、問い質しましたが、答えがありませんので、なおもしつこく尋ねますと、彼は、

〃商業組合の人たちの前で、答えましょう〃

と、いうだけでした。そこで、その夫は自分の妻に、

〃お前の足の踝飾りを、ひと揃い出しなさい〃

といいました。彼女は羞恥と不安な心で、

〃昨夜、私は気晴らしに、庭の木立を歩きますと、片方の踝飾りが弛んで落ちました。そして、探して

も見あたりませんでした。残る一方がこれです〃

　と言って、一つだけを見せました。

　その夫は、このような答を聞いて、商業組合へ出かけました。そして、悪漢（カラハカンタカ）につめよりましたが、悪漢は丁重に答えました。

〃みなさんも、ご承知のとおり、私はあなたがたの命を受けて、屍体捨場の監視人として、生活しております。それにつけても、

〃欲の深い盗人たちが、私の目をかすめて、夜の間に、屍体を焼き払おうとする〃

　と、気がかりでしたから、毎晩、焼場の傍に寝ておりました。先日のこと、半ば焼けた屍体を懸命に引きずっている女の黒い影を発見いたしました。女は欲のために恐怖を忘れておりました。私は女を捕えるはずみに、女の腿に短刀のきり傷をほんの少しつくりました。すると、足から踝飾りが外れ落ちる隙に、女はすばやく逃げ去りました。これが踝飾りの由来です。あとの処置は、みなさんが、ご判断下さい〃

　都の人々はよくよく考えた末に、彼女は鬼女なのだと思いました。彼女は夫に捨てられて、たいへん悲しみ、夜になって、屍体捨場へやって来ると、首をくくって、死のうといたしましたが、悪漢にひきとめられました。彼はなだめるように、いいました。

〃美しい夫人よ。私は美しいあなたに夢中になり、さまざまな手段をとって、手にいれようといたしました。修道尼を通じて、誘っても果たせませんでしたので、このような手段に訴えました。私は生命のある限り、あなたを人並み以上に幸福にいたします。あなたなしにいられないこの私を、どうぞ許して下さい〃

　彼は幾度となく彼女の足下に平伏し、百のやさしい言葉をかけますと、彼女は他に頼るところもありませんので、彼に従いました。

　そこで私は言うのです。〃困難を成就させるものは機知〃と』

　鬼神は聞き終わって、私に敬意を表わしました。その瞬間に、プンナーガ樹(注九)のいまだ開ききらない蕾ほどの大きさの真珠がたくさん、水滴に混って、空中から降って来ました。なにごとかと見上げると、ある羅刹鬼が、身悶えする女を攫って行くのが見えました。私には空を飛ぶ力も、武器もありませんでしたから、

『何故あの鬼神は、嫌がる女を、無理やりに奪い去るのだろうか』

　と、思い患うばかりでした。すると、私の味方の鬼は、

『とまれ、とまれ、悪ものめ、何処へ攫って行くか』

　と叫んで、飛び上がるや、その鬼を追いました。鬼は怒って、顧みるいとまもなく、女を放しましたので、女が如意樹の花のように、空中から落ちて来ましたのを、私は両腕をのばして、受けとめました。私は彼女を受けとめたまま、地におろさずに、支えておりますと、彼女は目を閉じて、私の身に触れる快感に、体毛を逆立てました。

　そうする間にも、両鬼は山頂の木立を引きぬいたり、拳や足を用いて戦ったりして、両方とも死んでしまいました。その後、私はいとも柔い池の畔の砂地に、花を摘み集めて一面に敷いた上に、（彼女を横たえて）介抱しながら、見ると、それは私の生命の恋人カンドゥカヴァティー王女でした。そして、介抱される彼女も、横目づかいに私であることが判ると、悲しげに泣いて、申しました。

『私の夫よ。あの手毬祭の時に、私はあなたを見て、恋に陥ち、その後、女のお友達のチャンドラセーナーから、あなたの噂を聞いて、慰められておりました。私の悪い兄のビーマダヌヴァンから、あなたが本当に海に投げこまれたと聞き、友達や召使たちの目を盗んで、生命を断とうと思いつめて、ただ一人林苑にまいりました。すると、そこに、姿を自在に変えられる悪い鬼神がいて、私を求めました。私

は恐ろしさのあまり、鬼の望みを拒みましたが、鬼は慄える私をつかんで飛び去りました。そして、ここが、ちょうど終点になりました。天命によりまして、夫〔と慕う〕のあなたの手に落ちたのは幸運でございました』

こう聞き終わった私は彼女をつれて山を下り、船に乗り移りました。〔纜を〕解かれた船は戻りの風に乗って、ダーマリプターの都（スフマ国の首都）に向かいました。私たちはたやすく、船を下りましたが、都の人々が涙ながらに語るのを耳にしました。『スフマ国のトゥンガダヌヴァン老王は、王女と王子を失ったうえは、他に子もなく、お妃とつれだって、清浄な恒河の岸で、断食によって生命を断つため、ご出発になった。忠誠な長老たちは別の王を欲せず、王と行動をともにしようとしている』

そこで、私は王に事件の報告をして、王女と王子の二人を返しますと、ダーマリプターの王は喜び、私を婿にして、王子を私に従わせました。私の命令により、チャンドラセーナーは命びろいをして、放免され、コーシャダーサに与えられました。そして、その後、私はシンハヴァルマン王の救援のために、そこから軍を進めてまいりまして、王子のあなたさまと再会の幸運に恵まれました」

〔ラージャヴァーハナ〕王子は聞き終わって、「これは不思議な運命である。貴公はあらゆる事態に処するに、非凡な人の行動をとった」

と唇に微笑を浮かべて、嬉しそうに目を見はって、マントラグプタを眺めた。マントラグプタは蓮華のような手を口もとに当てて、その珠玉のような唇を、美しい恋人の情熱の接吻に傷つき喘ぐように、唇音を混えずに[注四]、物語ったのである。

注

一　アティムクタカ　Atimuktaka. 苣藤子または胡麻と訳される。草の形は大麻に似て、葉は青く、花は赤い。

二　原初の人　プラータナ・プマン Purātana-pumān. ヴィシュヌ神のこと。古くは梵天がいっさいの人を生じたとされたが、後世になって、ヴィシュヌ天（またはその権化の一であるナーラーヤナ天）を人類の始祖とした。ラクシュミーはヴィシュヌの妃であり、美あるいは幸福の女神であると同時に、支配の女神であるから、昔の諸王の妃とみなされる。

三　チュールナパダ　Cūrṇapada（花粉の拍子）。『球戯書』（カンドゥカ・タントラ）によれば、「毬を強くあるいは弱く投げて、しかも規則正しく往復させる遊び」という。

四　この話は『パンチャタントラ』（五・八）にもあり、『カターサリットサーガラ』（一〇・六五）の話も終末の部分が違うだけである。これに似た悪妻の話は、『カターサリットサーガラ』（一〇・六一）にもあり、これは『今昔物語集』（本朝篇、第二九巻、二十三話）とよく似ている。芥川竜之介の『藪の中』は、この今昔物語集の話から採ったものである。cf. C. H. Tawrey—N.M. Penzer, The Ocean of Story, vol. V, p. 153, note.

五　ドラヴィダ国　Draviḍa. 南インドの古国名であるが、現代のどこにあたるかは、詳らかでない。首都はカーンチー Kāñcī.

六　三種の香料　肉桂、カルダモン（しょうずくの実）、肉豆蔻の種子。

七　サウラーシュトラ国　Saurāṣṭra. 西インドの古国名。アラビア海に臨むグジャラート Gujarāt 半島がそれに当たるといわれる。首都はヴァラビー Valabhī.

八　シューラセーナー国　Śūrasena. 中イン

ドの古国名。現今のマットラー市 Muttrāのやや南に当たるあたりが首都のマドゥラ Madhura とされ、インド最古の都市の一つである。

九 プンナーガ樹 Punnāga. 別名をケーサラ Kesara ともいい、花は白く香りがよい。

10 唇音を混えずに 唇音 (labials) とは、p. ph, b, bh, m, である。次章の主人公のマントラグプタは唇の外傷により、これらの音及び u, ū, o, au を用いずに、物語を進める。詩論家ダンディンの面目躍如たる技巧を示している。これらの詩的技巧に関してはダンディンの「カーヴィヤーダルシャ」三・八三以下参照。

第七章 マントラグプタ物語

「王者の中の王のみ子よ。私もまた、山の洞窟にはいった王子さまの行方を探しながら、ある日、カリンガ国(注一)に着きました。カリンガ国の都からほど遠からぬ、とある焼場の森の木の下に、木の若芽を平らに敷いて、私は身を横たえると、目を閉じてまどろみました。

髪の毛の束のような暗闇の中に、羅刹鬼が往来し、霧が漂い、人々は自分の家に閉じこもり、寒さの身に沁みる真夜中になりますと、ぎっしり繁った木の枝の間から、ぶつぶつ言う声が聞こえてきて、瞼を閉じて眠るのを妨げました。

『何故あの悪らつな魔法使いは、楽しくすごしたい

時刻に、用をいいつけてこき使うのだろう。飽くことのない彼の欲望に、われわれは閉口しているのだ。誰かとても力のある者が、あのいまいましい魔法使いをやっつけてくれるといいのだが』

と、困りぬいた男女二人の召使(の羅刹鬼)が臆病そうに叫ぶ声でした。

これを耳にした私は、

『魔法使いとはいったい何者だろうか。それに、どのような魔法なのだろうか。男女二人の召使は何をしようとしているのか』

と、好奇心から召使たちの行く方角を追いました。すると、僅か離れた所に、人骨のかけらのきらきら光る飾りを身につけ、薪を燃してつくった灰を身体に塗り、稲妻のように髪を編んだ奇怪な人物が立っていました。森林の暗黒を食い尽くす羅刹鬼のように見える焚火の焔は、食物(薪)をのみ込んで、躍っていました。その男は左の手を動かして、絶え間なく胡麻や白芥子などを折ったり、くだいたりしていました。男の召使はその前に立ちどまって、合掌し、

『何をいたしましょう。おいいつけください』

१२० ॥ दशकुमारचरितम् ॥

॥ अथ सप्तम उच्छ्वासः ॥

राजाधिराजनन्दन नगरन्ध्रगतस्य ते गतिं ज्ञास्यन्नहं च गतस्तदा
कलिङ्गान्। कलिङ्गनगरस्य च नात्यासन्नसंस्थितजनदाहस्थानसंसक्तस्य
कस्यचित्कान्तारधरणिजस्यास्तीर्णसरसकिसलयसंस्तरे तले निषद्य
निद्रालीढदृष्टिरशयिषि। गलति च कालरात्रिशिखण्डजालकान्धकारे
5 चरितरक्षसि क्षरितनीहारे निजनिलयनिलीननिःशेषजने नितान्तशीते
निशीथे घनतरसालशाखान्तरालनिर्ह्रादि नेत्रनिमिषिनीं निद्रां निगृह्ण-
त्कर्णदेशं गतं कथं खलेनानेन दग्धसिद्धेन रिरंसाकाले निर्देशं
दित्सता जन एष रागेणानर्गलेनार्दित इत्थं खिलीकृतः। क्रिये-
तास्याणकनरेन्द्रस्य केनचिदनन्तशक्तिना सिद्धयन्तराय इति
10 किंकरस्य किंकर्याश्चानिकातरं रटितं। तदाकर्ण्य क एष सिद्धः का च
सिद्धिः किं चानेन किंकरेण करिष्यत इति दिदृक्षाक्रान्तहृदयः किंकर-
गतया दिशा किंचिदन्तरं गतस्तरलतरनरास्थिशकलरचितालंकार-
कान्तकायं दहनदग्धकाष्ठनिष्ठाङ्गाररजःकृताङ्गरागं तरलतडिल्लता-
कारजटाधरं हिरण्यरेतस्यरण्यचक्रान्धकारराक्षसे क्षणक्षणगृहीतनाने-
15 न्धनग्रासचञ्चदर्चिषि दक्षिणेतरेण करेण तिलसिद्धार्थकादीनि निरन्तर-
चटचटायितानि किरन्तं कंचिदद्राक्षं। तस्याग्रे स कृताञ्जलिः किंकरः
किं करणीयं दीयतां निदेश इत्यतिष्ठत्। आदिष्टश्च तेनायमतिनिकृ-
ष्टाशयेन। गच्छ कलिङ्गराजस्य कर्दनस्य कन्यकां कनकलेखां कन्या-
गृहाद्विहानयेति। स च तथाकार्षीत्। ततश्च तां त्रासेनालघीयसा
20 बाष्पजर्जरेण च कण्ठेन रणरणिकागृहीतेन च हृदयेन हा तात हा जननीति
क्रन्दन्तीं कीर्णग्लानशेखरस्रजि शीर्णनद्धे शिरसिजानां संचये निगृ-

1. नगरन्ध्रं B.—B. omits च.—2. W. omits च.—3. °किसलये संस्तरे तले A. C. omits संस्तरे.—5. निशान्तशीते A.—6. घनतरशाखिशाखा° C. W.—°अंतराले C. also M.—°निर्ह्रादि A. °निर्ह्रादिनि B. C.—7. रागेणानर्गलेन A. C.—8. —रागेणानैर्गलेनार्दित B. रागेणानर्गलेनानर्गलेन C.—9. अस्थानकनरेंद्रस्य C.—सिद्ध्यंतराय A.-13. W. omits तरल.-15. °ग्रासात् B.—16. C. omits स.- किंकरः किंकरी च B. C.-17. C. omits किं करणीयं-अयं तेनातिकृष्टाशयेन W.-18. कन्यां W.—19. एनां W.—अलघीयस्या बाष्पजर्जरेण A. अलघीयसा सास्रं—20. रणरणक° C.

と、いいました。たちの悪い魔法使いは召使に命じました。

『カリンガ国王のカルダナの宮殿へ行って、カナカレーカー王女をさらって来い』

男の召使は命じられたとおりにいたしました。

魔法使いは、王女が非常な恐怖に咽喉を涙につまらせ、心も切(せつ)なく、父よ、母よ、と泣き叫ぶのを、花の凋んだ頭の飾りを取って捨て、髪の飾り紐を引き裂き、豊かな髪の毛をひっとらえ、石で砥ぎすました短刀を片手に王女の首を切ろうといたしました。私はとっさに彼の手から刀を奪いとり、その刀で彼の辮髪の頭を切りおとし、付近に立っているサーラの老樹(注二)の幹の口を開いた洞に、さし込んで置きました。見ていた羅刹鬼〔の召使〕は苦役から解放されましたので、大いに喜んで申しました。

『貴いお方よ。このひどい奴が苦しめるので、私はいつも眠れませんでした。彼は私たちをおどしたり、慄えあがらせたりして、とてもできそうもないことを命じました。ですから、いまあなたが、鴉のようなこの男を、さまざまな地獄の苦を受けさせるため、太陽神の息子（閻魔王）の都へ追いやったのは、測り知れぬ徳をもった正義の行ないです。私たちはこのように慈悲ぶかく、限りない光明であるあなたの命令に従いたいと思います。何なりとおいいつけください。〔早くしないと〕時が過ぎてしまいます』

こういって、男は私にお辞儀をしました。そこで、私は言いました。

『友よ。私のこのような些細な行為に、少なからぬ感謝を表わすのは善人のとる道であると思います。もし、あなたが厭わないならば、あの魔法使いの残酷な扱いを受けて、非常に苦しめられている、このしなやかでかぼそい婦人を自由にして、宮殿へつれ戻してください。私が心に望むことは、そのほかに何もありません』

すると、彼女はこれを聞いて、黒い瞳を動かし、僅か斜めにこちらを向いて〔私を〕見つめましたが、

それはちょうど、耳の後ろにつけた青蓮華を私のほうに向けたように見えました。そして、愛神カーマの弓さながらに美しい眉を嬉しげに曲げると、それは前額を舞台にして舞姫が踊るかのようでした。また赤味のさした頰の生毛(うぶ)は逆立ち、慕わしさとも恥ずかしさともつかず、蓮華の顔をかしげて、足の爪先で大地をまさぐりましたが、その爪は月光のように輝いていました。そして、蕾のような口から漏れる吐息によって、嬉し涙の露に濡れた胸の白檀の粉を乾かし、ラティー妃の夫（愛神カーマ）の恋の矢のように、すばやく私の胸を貫き、月光にも似た白い歯なみを踊らせて〔ほほ笑みつつ〕、コーキラ鳥と紛う低い美しい声で、申しました。

『貴い方よ、私は死の手から救われたその時から、愛の嵐にふるえ、お慕いする心の波に揺られておりましたが、何故あなたは私を愛の海に溺れさせたのでしょうか。どうぞ私をあなたの蓮華のような足についたほんの僅かな塵とお思いくださいませ。もしも、私をあわれと思し召すなら、私以外のものは、あなたにかしずかせないようにお願いいたします。それに、あなたが後宮にはいって、その秘密が漏れるのをご心配ならば、それもご無用です。と申しますのは、私の友達や、召使たちはたいへん私に好意をもっていて、誰にも知られないように努めるでしょうから』

すると私は、愛神カーマに、耳までひき絞った弓で、なさけ容赦もなく心を射貫かれ、彼女の流し目に、黒い鉄の鎖で縛られたようになりまして、召使の顔を見まもっていいました。

『私は、車輪のように腰の丸い彼女に従わないと、一瞬の間にカーマ天によって、何もいいようのない恥ずかしい状態にされてしまいそうです。この私をも、鹿の目の彼女といっしょに宮殿へ案内してください』

そして、私は羅刹鬼に運ばれて、さながら秋の雲の輝くような美しい宮殿へまいりました。

月の顔の王女にいわれて、私は宮殿の露台の一隅に降り立ったのですが、彼女の姿に、私の堅い決意も乱れました。彼女は自ら掌を当てて、眠っていた婦人たちを揺りおこし、友人たちに何ごとかを話しました。すると、婦人たちはやって来て、私の足に頭を触れて、平伏し、涙の目を見はり、華鬘にとまる蜂の群のような低い声で、申しました。

『貴いお方よ。あなたの太陽にまさる輝かしいお目にとまったればこそ、王女さまは死を免れました。のみならず、情熱の聖火を前にして、愛に目覚めました。蓮華の目をもつあなたの、宝石の山のように堅い、情熱の燃える胸を、このすばらしい珠玉のような王女さまで飾ってください』

その後、私たちの愛の絆は、王女の誠実な女友達によって、堅く締められ、守られまして、私と王女は楽しく暮らしました。

やがて、妻との別離に心のうずく、〔春の〕季節がやってきました。生い茂るケーサラ樹は欲ばりの蜜蜂が飛び回るのに疲れ、ティラカの樹は前額に描かれた標識（ティラカ）のように森の地表に輝き[注三]、陽気になったカーマ天（春の神）は、眠りをさまされたカルニカーラ[注四]の花を黄金の日傘とし、南から吹いてくるマラヤ山[注五]の風は、揺れ動くサハカーラ（マンゴー）の蕾をほころばせ、人々は情熱のこもった杜鵑の声に刺激されて、真紅の唇の女たちとの〔恋の〕戦に備え、ひかえめな女心も湧き出る欲情に羞恥を捨て、ダルドラ山[注六]の中腹に生い茂る栴檀の木々の間を通り抜けた涼しい風は、さまざまの蔓草に踊りを教える師匠のようでした。そのようなある日、カリンガ国王は女たちや、王女や、都のすべての人々といっしょに、日の光は遮られ、蜜蜂の群は唸りをたて、砂地は垂れ下がる蔓草の花に覆われ、うち寄せる波のしぶきに触れて涼しい、海にほど近い森林へ出かけて、十三日の間を楽しく遊びました。

王は歌や音楽をたのしみ、連れてきた千人の女たちと愛の戯れに興じて、ひたすら欲情の渇きをみた

しておりましたが、その隙に、アーンドラ国[注七]のジャヤシンハ王は、無数の軍勢とともに海を渡って攻め寄せ、たちまち、女たちともども王を捕えてしまいました。そして、私の愛するカナカレーカー王女も、不安な目を動かしながら、友人たちといっしょにつれ去られました。

そこで、私は身を焦がす想いに食欲も失せ、逞しい肉体も衰えて、考えこみました。

『あのカリンガ国の王女は父母もろともに敵の手に捕えられてしまった。敵王はおそらく辛抱しきれなくなって、彼女に結婚を求めるに違いない。彼女はそれに耐えられず、直ちに毒物などを用いて死ぬだろう。そして、彼女がそうなったら、カーマ天は私の希望も生命も絶ってしまうだろう。何か方法はないだろうか』

そうしたやさきに、私はアーンドラ国の都から来た、見知らぬバラモンに出会いました。彼はこのような話をしました。

『ジャヤシンハ王は多くの恥辱を受けた恨みから、カルダナ王を殺そうとしましたが、王女のカナカレーカーを見るにつけて、恋しさが増すばかりなので、生命を奪うことはいたしませんでした。ところが、王女は薬叉の悪鬼に憑かれていまして、王の前に立とうとしませんでした。そこで、王は隊商から譲りうけた魔術師を使って、薬叉を取り除こうとしたのですが、失敗いたしました』

私はこの話に希望を見いだし、シヴァ天の舞踏場（焼場）に立つ老サーラ樹の洞から、〔以前に入れておいた〕辮髪を取り出し、それを被って苦行者になりすまし、襤褸をたくさんつぎ合わせた衣を着て、幾人かの弟子をあつめました。そして、さまざまな呪術に欺かれた人々から、食物や衣服などをもらって、それを弟子たちに与えて、絶えず喜ばせました。

数日ののちに、私はアーンドラ国の都に近い、湖のように大きく、生い茂る蓮華は鷲鳥に荒らされて、色とりどりに水面に散り、鶴の群がるのも美しい池

の岸辺の森林の中に、小屋を立てて住みました。弟子たちが宣伝する、私のさまざまなとり沙汰にひかれて、大勢の都の人々がだまされてやって来ましたので、たちまちいたる所に、私の噂が知れわたりました。

『彼は池の岸の古い森林の裸の地に眠る苦行者である。彼はあらゆる奥義書や、吠陀(ヴェーダ)の六学や賛歌をはじめ、その他のことがらにも明るく、その結果、誰にも判らないことがらをも、目の前で教えてくれる。彼は不真実を語らない。彼は慈悲の化身である。彼の行なう呪法はたちどころに成就する。彼の足の埃を少し頭につけただけで、医師の扱いかねる病人が癒った。彼の足を洗った水を頭に注ぐと、ひどい悪霊に憑かれて、どのような呪術師の努力の甲斐もなかったのがたちまち駆除される。彼の威力は測り知れない。しかも彼には米粒ほどの自惚れさえない』

そして、この噂は多くの人々の口から口へと伝わり、クシャトリヤ（王）の耳に達しました。カナカレーカー王女に憑いた悪鬼薬叉の調伏を願う王は、この噂にひかれて私のところにまいりました。王は毎日やって来て、非常な熱意をもって私に敬意を表するとともに、門弟たちに財物を施してとりいった末に、折をみて私に、希望が首尾よく成就するようにと、願いました。私は熟慮するうちに、よい案を思いつきましたので、王を見まもり、丁重に告げました。

『親しいものよ、あなたの努力はこの際無駄ではありません。何故なら、あの宝石のような王女にはあらゆるめでたい相が具わっていて、彼女を得ることは、乳海を帯として飾り、恒河(ガンガー)やその他の千の河川を首飾りにして輝く大地という女を得ることになるからです。けれど、王女に憑いている薬叉にとっては、王さまのような方に、あの快く弧を描いた青蓮のような彼女の目を見つめられるのが、耐え難いのです。ですから、いま三日の間、お待ちください。その間に、私は目的を遂げるよう努めます』

王は教えられて、喜んで立ち去りました。やがて月のない夜がきました。夜の闇が穀物を積み重ねたように、あらゆる方角を包み、すべての人々が目を閉じて眠った時に、私は困難を排して、水面に隠れてはいれる穴を、池の岸の沐浴場の側から、中央まで、土掘り道具を使って掘りました。そして、穴の入口を石や瓦で隠し、池の岸辺の人々に怪しまれないのを確かめてから、夕日が、たくさんの星をつなぎ合わせた真珠の首飾りの先端につく宝石のように、暗黒の巨象を打ち破り得る唯一の獅子王のように、黄金色の山頂を舞台にして踊る舞踊家のように、天空の海原の雲の波を躍り越える海豚(いるか)のように、善悪をみそなわすインドラ天が栴檀の赤い粉を塗ったように、そのように輝くのを、紅い蓮華のように照り映える両手を合わせ、礼拝したうえ、住居へ戻りました。

三日間が過ぎ、昼の王（太陽）は西方の山頂の肌を黄金色に染めあげ、天空と呼ばれるシヴァの肉体に抱擁されて悩む山神の娘[注八]の水甕にも似た乳房に、赤い栴檀を塗ったかと紛う夕景のころに、王はまたやって来て、私に対し、私の爪の光で王冠が照り映えるほど〔低く〕平伏し、合掌いたしました。私は王に言いました。

『願望の成就を告げられるあなたは幸せです。この世においては、努力のない者に幸運は恵まれません。すべての幸運は、常に怠りをいましめる者の手に近づきます。あなたがまことに正しく、汚れのない善行と敬意を示されたことに、私は心をひかれました。いまや、あなたの願望がかなえられるように、池は浄められました。ですから、あなたは今日の夜半になったら、水におはいりなさい。そして、はいるとすぐ、水中に沈みそうになるのをこらえて、水面に、なるべく静かに浮かぶようになさい。すると、間もなく、岸辺の水が波立って蓮華をのみこみ、折れた蓮の茎の茨のような先端に身を刺された白鳥の驚く叫びと、水の音とが聞こえるでしょう。そして、水

音のやんだ時には、あなたは、身体は濡れ、目は赤らんでいても、すべての人々の目に快い姿となるでしょう。薬叉はあなたの前にいたたまれず、王女の心はあなたへの愛情の絆で堅く結ばれ、ほんの僅かな間も、あなたを見ずにはいられなくなります。そして数多いあなたの敵を、あまり骨を折らずに征服して、大地という女神も、あなたの手に帰するでしょう。ためらうことはありません。そこで、もしあなたがお望みなら、種々の学識ゆたかな賢人たちや、その他の善良な人々に告げ知らせ、百人の漁夫を呼び寄せ、百人の都の人々に、思う存分池の中を見究めさせるとよろしい。そのうえ、番兵たちを池の岸から三十ダンダ（約一八インチ）以内の距離に立てて、見張らせるといいのです。そうすれば、敵がどんな企てをし、どんなことをすることができましょう』

この話は王の心を奪いました。宰相たちもまた、それに何の不都合も見出だせませんでした。そればかりか、彼女を求める王の心は、いよいよ深まり、堅く決心しておりますので、宰相たちもそれを妨げませんでした。私は王に言いました。

『王よ。私は永い間、あなたの国に滞在しました。しかし、私たちにとって、一ヵ所に長期間留まるのは、よくありません。ですから、私はここで、為すべき事を終えましたので、この地を離れます。あなたの国に住んで、食物などに恵まれたのですから、あなたのご用をお引き受けしないのは正道に外れる、と考えたのが原因で、私は永逗留いたしました。そして、いま、それも終わりました。あなたは宮殿へお戻りください。そして、王さまにふさわしく、よい香りの水に沐浴し、白い花飾りと化粧とを身に施して、〔あなたの〕身分にふさわしい施しをバラモンたちに捧げ、千本の棒の先に胡麻油をつけて火をともし、夜の暗闇を照らして、到着なさったら、願望成就のためにお努めなさい』

すると、王は感謝しながらいいました。

『この幸福は、貴いあなたが、この地を離れるという不幸につながります。そして、あなたの離欲という善行は、罪もない召使の私を、あなたが棄てるという非行になるのです。とはいえ、貴いお方の言葉に逆らうことはできません』

こういって、彼は沐浴のため宮殿へ帰りました。

私は深夜になって、ただひとり岸辺の穴に隠れると、隙間に耳をおし当てておりました。王は教えられたとおり、すべての手はずを済ませたのちに、深更のころ、見張りの兵士たちを至る所に配置し、呼び寄せた漁夫たちに池の中の障害物をとり除かせ、安心して、楽しそうに池にはいりました。そして、彼が髪を乱し、耳と鼻とを塞ぎ、象の背たけ〔の深さ〕の水面に達して、浮かんでいるのを、私は鰐のように勢よく、水中を潜っていって、頸をとらえました。そして、死神の棍棒のような堅い拳で打ったり、激しく足で蹴ったりして、なさけ容赦なく打ち据えますと、たちまち彼の手や足の動きがとまりました。そこで、私は彼の身体を岸の穴の中へひきいれて、池から上がりました。

兵士たちが集まって来ましたが、すっかり変った姿を見て、たいへん驚きました。私は白い日傘など、王家のすべての標識を飾った象に乗って進み、護衛の兵士たちは警杖をふり回して群がる人々をおどしました。その夜、私は喜びのあまり一睡もしませんでした。やがて、東方に丸い太陽が、人々の目に、赤い塗料をぬった天界の象か、あるいは婦人の宝石のように映って、躍り出た時に、私は朝のお勤めを済ませて、宝石の光り輝く王座に着き、王らしい態度をとって眺め回しますと、傍にひかえた従者たちが驚きに身をこわばらせておりますので、声をかけました。

『聖仙の威力を見るがよい。たぐい稀な五根〔清浄〕の聖仙の浄行によって、余は蓮華の傍に蜜蜂の遊ぶ池において、いとも優美にして蓮華のごとき外見を得た。いまや、不信の者たちはすべて、恥じいって

平伏せよ。そして、それぞれの神殿において、シヴァ、ヴィシュヌ、ブラフマーなどの神々を、歌や舞によって賛えなければならぬ。まず、乞食の群を苦痛から救うために、王宮から財貨を分かち与えよ』

彼らはこの不可思議に満足し、このうえない喜びに目を見はって、

『世界の主よ、万歳。あなたの勝れた栄光によって、十方世界を征し、あなたの令名をもって、原王（マヌ）(注九)の名声をも覆い給え』

と、いく度も賛美して、命じられたとおりに、実行いたしました。

そして、ある日、私は妻の信頼する若い女の友達のシャシャーンカセーナーが、仕事の余暇にやって来た時に、ひそかに尋ねました。

『誰か私のような人を、何時かあなたは見かけませんでしたか』

すると、彼女はしばらくの間見つめた末に、感きわまって、蔓草のように光る歯を見せて（にっこり笑い）、しなやかな指を曲げて、唇を覆い、嬉し涙に目の化粧を崩し、合掌して、声を低め、

『たしかに存じております。もし、そのお姿が魔法使いの妖術のしわざでないのでしたら――。これはいったい、どういうことでございましょうか、お聞かせくださいませ』

と、懐かしさを抑えきれない風情で、静かに申しました。私は彼女にすべてを話し、彼女に伝えさせて、妻の心をこのうえなく喜ばせました。そして、私はカリンガ国王を釈放して、敬意を表わしますと、王は正規の儀式を行なって、王女を私に与えました。

アーンドラとカリンガの両国はカリンガ国王の手に帰しました。私はアンガ国王が敵に攻め寄せられましたので、救援のために、強大な軍勢をひきいて、この地へ進んでまいりまして、思いがけなく、王子のあなたさまと、友人たちに再会し、喜びに溢れました」

王子は月の光をふり撒くように（白い歯を見せて）笑い、友人たちとともに、彼を賞め賛え、

「これは驚くべき大聖仙のお手並みでした。このように厳しい苦行が報いられるのは当然です。しかし、ここには殊の外に、諧謔のおかしさや、極めてすぐれた機知の真髄が見られます」

と、述べたあとで、

「貴公が登場なさい」

と、学識豊かなヴィシュルタに、青蓮華の開くに似た目を向けると、ヴィシュルタもまた（王子を）見た。

注

一　カリンガ国　Kalinga.　南インドの古国名。西南方はアンドラ国と境を接し、東南方はベンガル湾に臨む。

二　サーラの老樹　Sāla.　沙羅樹といい、竜脳香科の大木。葉は長い楕円形、花は小さく淡黄色、幹は堅く、建築に使用される。

三　ティラカの樹は……　tilaka は美しい花の咲く樹木の名であるとともに、宗派を示す標識、あるいは化粧として前額につける赤い点をも意味する。森を女の顔にたとえ、ティラカの木を前額のティラカにたとえて、両方の意味にかけてある。

四　カルニカーラ　Karṇikāra.　葉は黄金色で、花は春開く。

五　マラヤ山の風　dakṣiṇadahanasārathi（南からの火の御者）。「火の御者」とは風のことで、「南の風」はマラヤ山から吹いてくる風のこと。

六　ダルドラ山　マラヤ山とともに春の風を送ってくるといわれる南インドの山。

七　アーンドラ国　Āndhra.　カリンガ国と東北に境を接する古国の名。現今のゴーダ

ーヴァリー Godāvarī 河とキストナー Kistnā 河の中間に位置する。アンドラ王朝発祥の地で、紀元前数世紀のころすでに強大な勢力を謳われた。

八 山神の娘 シヴァの神妃パールヴァティー、ウマー、ドゥルガーなどは、ヒマーラヤ山神の娘である。

九 原王（マヌ） Ādirāja. マヌは人類の始祖と考えられた。伝説によると、世界を覆う大洪水の時に、マヌはヒマーラヤ山に脱れ、水の引いたのち、山を下って、祭式を行なうと、イダー Idā という女が生じ、彼女とともに人類を増殖したとされている。

第八章　ヴィシュルタ物語

「王〔子〕よ。私もまた、旅の道すがらヴィンディヤ山の森林内の、とある井戸の付近にたどり着きますと、一人の少年に出会いました。彼はおよそ八歳ほどに見え、辛い思いをさせるには哀れな年ごろですのに、飢えと渇きに衰え、心配そうにどもりながら訴えました。

『立派な方よ。私の困っているのを、救ってください。たった一人の老人が私を守ってくれていたのですが、私が死ぬほどのどをかわかしているのを医そうとして、水を汲み上げている最中に、この井戸へ落ちてしまいました。私には老人を引き揚げることができないのです』

私はそこで、〔井戸に〕進み寄り、蔓草を結んで老人を救い上げました。そして、少年には竹筒を口にあてがって水を飲ませたのち、矢の届くほどの高さの樹上から五、六個の果実を、石を投げつけておとして食べさせ、元気を回復させて、樹の根方の平らな所に腰をおろし、老人に尋ねました。

『おじいさん、この少年とあなたは、いったい何者ですか。何故、このような不運に遭ったのですか』

老人は涙ながらに、語りました。

〔ナーリジャンガ老人の物語〕

『立派なご仁よ。お聞きください。ヴィダルバ（注一）という国に、ボージャ王家の誇るプニヤヴァルマンという王がおりました。王はまさに徳の権化でした。王はまた、非常に勇気があり、真実を語り、もの惜しみせず、見識をもち、臣下の師表であり、従者たちに慕われ、身心ともに高邁であることで名高く、逞しい体力と精神を具え、聖典をおのれの尺度とし、なし得る善事を力強くおし進め、賢者を敬い、従者をひきたて、味方を高揚し、敵を屈伏させ、無駄話に耳をかさず、いかなる時にもあらゆる徳を求め、さまざまな技芸に熟達し、〔人生の三願のうち〕徳と財に関するもろもろの書物に親しみ、僅かな親切に対しても返礼をより多くし、財宝と牽引・乗用の獣を大切にし、すべての役人たちを注意深く見まもり、功績に応じて褒美や賛辞を与えて励まし、神や人間によって齎された不運には、直ちに救いの手をさしのべ、六種の統率法（注二）を究め、マヌ〔の法典〕の道にそって四姓を導き、名声を博しておりました。数多くの功業を残して、人間の寿命を全うしましたが、臣下たちの不徳のために、王は神の数にいりました。

そして、アナンタヴァルマンという王子が、国の中心になりました。王子はあらゆるよい資質に富んでいましたが、政務に対しては、はなはだ不熱心だったのも天命でした。ある日のこと、父王に信任されていたヴァスラクシタという老宰相が、思いきっ

て、王子に忠言いたしました。

〃王子よ。まことにあなたには血統の正しさをはじめ、すべての長所がほとんど具わっておいでのように見受けられます。そして、生来聡明なあなたは、舞踊、歌唱、絵画、詩作、の無数の技芸を習得なさって、まったく他にぬきんでておいでになります。それと同じように、ご自分の教養を処世治国のたくさんの書物に求めなければ、ちょうど、火に鍛えられていない黄金と同じく、さほど光り輝きません。何故かと申しますと、知識を欠いた王は非常に高く聳えているつもりになって、敵方が自分たちより高くなっても、それに気がつかないからです。それに、目的と方法とを分別することもできませんし、もろもろの処置が適切でないために不満を買い、臣下からも、他国の人からも侮られます。王のご命令が軽んぜられましては臣下たちにとっても福祉と繁栄をもたらしません。臣下が命令に従わず、身勝手な意見をさしはさみ、気ままに行動するなら、すべての規律が混乱いたします。規律のない者たちは統治者をも、自分自身をも、現世・来世にわたって、破滅させます。伝統の光明に照らされた道を践み行なってこそ、あらゆる事柄が安らかに進展いたします。何故かと申しますに、その道は天眼を具えておりますから、過去、現在、未来にわたって、あるいはまた、遠近その他の地方にわたって、聖典の名の下に妨げなく行なわれます。これがなくては、人は両眼を大きく開いていても盲目なのです。それはまことの処世治国の見識を欠くからです。ですから、(不要の)知識に努めることをやめて、王族に必要な処世治国の学問にお努め下さい。そのような政治を行なってこそ、統治の力が表われ、威令は厳として重く、海をめぐらすこの世界を永く支配なさることができるのです〃

王はこのように聞くと、

〃まことに、よい教えを受けた。そのとおりにいたそう〃

と、答えて後宮へいきました。そして、王はこの話を熱心に説き聞かせますと、婦人たちは喜んで聞きましたが、傍にヴィハーラバトラという従者が控えていました。彼は王の幼少のころからお側に仕えていて、人の意を読みとるのに敏く、王のお気にいりになった人物ですが、歌や舞や楽器などをよくし、よその女(注三)に夢中になったり、言葉だくみで抜け目がなく、たくさんの隠語(二重の意味をもつ語)に通じ、他人の弱味につけこみ、巧みな冗談をとばし、批判や中傷を好み、宰相たちからさえ収賄し、あらゆる非行の師であり、色事の先達でありました。彼がほほ笑みながら、王に申しました。

〃王よ。ある人物が幸運に恵まれて栄達したといたします。すると、心の悪い者たちが、さまざまな誘惑をもってその人物を陥れ、おのれを有利にいたします。例えば、ある人たちは、その人物に、死後に測りしれない幸運が得られるという希望を起こさせて、その頭を剃らせ、ダルバ草の帯と、鹿皮の衣を着けさせ、新鮮な牛酪を(身に)塗らせ、断食をして床に横たわらせ、すべての財産を捨て、はては子供や、妻や、肉体や生命をすら捧げさせてしまいます。しかし、もし賢い人がいて、そのような蜃気楼(妄想)のために、自分の獲得したものを手放すまいとすれば、他の人々がその人を囲んで、このように申します。

〃私たちは一カーキニー貝貨(小銭)を十万カールシャーパナ金貨に変えてみせましょう。剣を用いずに、あらゆる敵を倒してみせましょう。自分の身ひとつの生身の人間を転輪王にもいたしましょう。もし、あなたが私たちの教える道に従うならば〃

すると、その人は、さらに〃道とは何ですか〃と、彼らに尋ねます。

彼らはまた答えます。

〃ご存じのとおり、王には四学というものがあって、三吠陀と、産業と、論理と、政治とがそれです。それらの中でも、吠陀と産業と論理の三学は膨大であ

るばかりか、成果も中々得られませんから、おやめなさい。そして、直ちに政治の学に心をお向けなさい。賢者ヴィシュヌグプタ(注四)は、この学をマウリヤ〔王朝のチャンドラグプタ王〕のために六〇〇〇頌にまとめました。この道を学んで、忠実に従うならば、そのとおり事ははこびます〟

その人は、〝そのとおりです〟といって、〔政治の学を〕聞き、学んで、老齢を迎えます。けれども、その書物は他の書物に関連しています。用語だけさえも知り尽くすことはできませんから、まして真意を学びとるには至らないのです。ともあれ、その人が、多かれ少なかれ歳月を費して、その学を修めたにせよ、第一に、妻や子を顧みるわけにはいきません。自分の胃袋に対してさえ、定まった量の粥を与えるにすぎないのです。のみならず、定量の粥を作るための薪をも、あらかじめ限られた量を、これで十分である、と与えられるのです。

王は、一握りあるいは半握り(注五)の粥を食して、口を漱ぎあるいは漱がずに立ち上がってから、昼間の日課八分のうちの第一として、収支のすべてを、聞かなければなりません。王が報告を聞いている間に、狡猾な役人たちは二倍も盗みとります。彼らはチャーナキヤが教えた〈横領の四十手(注六)〉をもとに、悪知恵を働かせて、千手を編み出します。〔昼の日課の〕第二分には、訴え出て、互いに言い争う臣下たちに、耳を患わされて、不快にすごします。その時にも、裁判官やその他の裁判にたずさわる役人たちは、自分たちの私欲によって勝敗の判決を下し、その罪と恥辱を王に負わせて、おのれの目的に利用いたします。第三の分には、入浴と食事をしてよろしいのです。しかし王は食物が消化するまでの間、毒殺される心配をいたします。第四分には、金貨を受けとるために、手をのばして、立ち上がるだけです。第五分には、宰相たちと会議を開いて、大いに苦労いたします。ここにおいても宰相たちは、さも公平らしくみせかけていますが、使者や間牒からの報告の是

非善悪や、可能不可能や、時と所と仕事の条件やらを、身勝手に決めて、おのれの友人仲間や、あるいは敵の友人仲間から利益を得ます。それに、内外の陰謀を、ひそかに煽動しながら、表面ではとり鎮めると見せて、意のままに、王を欺きます。第六分には、王は自由に、遊戯か、または協議をしてよろしいのです。しかし、自由な遊戯の時間は、わずか三ナーディカ(注七)に加えて四分の三ナーディカだけです。第七分には、四軍(注八)を視察する労があります。第八分には、友人として、将軍たちの士気に気を配ります。

さて、夕の礼拝をすませると、〔夜間の日課八分にはいり〕第一分においては、密使たちを引見しなければなりません。そして、彼らの報告に基づいて、非常に残忍な、刺客や放火者や毒殺者を派遣するのです。第二分には、食事をとると直ちに、学識ある人のように、低声に吠陀を誦唱いたします。第三に、楽器の〔静かな〕音とともに、寝台に臥し、第四と第五分を通して、眠ることができるのです。それはまことに、絶え間のない苦労に、心の疲れはてた憐れな男が、ようやく幸いにも、眠りにありつけたかのように見えるのです。ところが、第六分になると、またもや、法律と政務に対する気遣いが始まります。第七分には、大臣の進言と使者たちの派遣です。使者たちは、どちら側にも喜ばれそうな報告をして、財貨を手に入れます。彼らは、煩わしい税金などは払わないような方法で、商売〔の利益〕を増大させ、仕事のない時には、少しの得るところもなく歩き回るのです。第八分には、宮廷付きのバラモンやその他の人たちが伺候して、申します。

〝昨夜悪い夢を見ました。星の位置も、鳥占も不吉な兆しをみせております。凶運退散の行事を催してください。祭具はすべて純金に願います。このような行為は貴い徳となります。バラモンたちは梵天と同じですから、彼らの祝福をうけると、よりよい幸福を得られます。彼らはたいへん貧しくて、子だくさんですが、祈祷にかけては権威者です。それにも

かかわらず、彼らは今もなお布施を受けることなく、彼らに恵まれているのは、天国と長寿と無災厄とだけです〃

　といって、王がたくさんの施しをすると、彼らはこっそりと着服してしまうのです。

　このようにして、昼も夜も、ほんの僅かな慰安もなく、労のみ多く悩みは絶えず、時を過ごしながら、政治に精通した転輪王は、自分の領土さえ守り難いでしょう。と申しますのは、法律の精通者として人に知られた王が、施し、敬い、甘い言葉をかけても、すべては欺瞞ではないかと信頼されないからです。不信任は国にとって不幸のもとです。世の中が政策なしに進んでいく限り、この世は自然に成り立つのであって、そこには、法律を必要とする事柄はありません。何故なら、嬰児さえ、乳を飲むためには、あれこれとやってみて、母の胸にすがりつけるのですから。あなたさまは行きすぎた抑制を捨てて、思うままに、お楽しみなさるがいいのです。

　彼らはまたこのようにも教えます。

〃感官を征服すべし。六敵（愛欲、忿怒、貪欲、驕慢、邪見、嫉妬）を捨てよ。交渉の四法などは敵味方を問わず、用いらるべし。常に戦か和かに意を用いつつ暮らすべし。僅かな暇も、快楽に割くべからず〃

　そういう彼らが、王から瞞しとった財貨を使って、娼家遊びをいたします。シュクラ仙やアンギラサ仙、それにヴィシャーラークシャ仙やバーフダンティプトラ仙やパラーシャラ仙を始めとする、厳かな教義の創唱者たちは、六敵を征服したでしょうか。あるいは自分たちの教えた教義を実行したでしょうか。彼らの行状をみれば、その善悪がよく判ります。また学識深い人々が、無学な人たちに欺かれた例も多いのです。

　王のたどり着く結末もそれでしょう。（王のあなたは）あらゆる人々から尊敬される家柄に生まれ、元気盛んな青年であり、容姿美しく、数えきれない

富に恵まれていながら、あらゆる猜疑の源であり、快楽の妨げでもある学問によって、あるいは、あり余る悪知識によって、為すことにためらいを生じたり、自国や敵国の事件に心を患わせたりして、それらすべての（恵まれた点）を無駄にしてはなりません。あなたには一万頭の象や三十万頭の馬や、無数の兵士があるばかりでなく、さまざまな、黄金や宝石に溢れる宝庫があるのです。そしてそれらは、たとえ全世界の人たちが一千劫を費しても、使い尽くせないでしょう。

　ですから、見当外れのことを望んで、苦労なさるのは、無益ではありませんか。何故なら、まことに生を享けたものの生命は、ほんの四、五日の（ように短い）ものですし、それに、そのように（短い）人生の間においても、快楽に適する青春は極めて僅かの間だからです。愚かな人は、より多く（富を）得ようとして、年老いても、手に入れた富のほんの僅かをも、楽しむために使わないのです。多くを望むのはおやめください。信頼し得る、適任の宰相たちに、政治の責任をまかせて、天女のように美しい後宮の婦人たちと、心おきなく楽しみ、歌や音楽や酒宴を時に従って、催しながら、おからだを安楽になさるがいいのです〃

　このように語ると、彼は身を大地に平伏し、合掌の手を頭髪に触れて、しばらく、そのまま動きませんでした。後宮の美女たちは、目をみはって喜びました。すると、王はにっこり笑って、声をかけました。

〃貴公、立たれるがよい。有益な教訓を垂れたあなたは、余の師ではないか。何故、師らしからぬ態度をとられるのか〃

　と、王は彼を立ち上がらせ、以後、享楽に耽りました。

　さて、老宰相はそのころ、ことあるごとに忠言をしておりましたが、王はその言葉にうなずきながらも、内心では、見当ちがいの賢人よ、と軽蔑してお

りました。そこで、老宰相は考えました。

〝ああ、私が愚かであった。未熟な者に好まぬ事を強制したばかりに、彼の目には私が蔑むべき者と映ったのである。彼の態度は明らかに、以前のようではなくなった。何故なら、私を親しげに見ず、以前のように、にこやかには話しかけず、秘密をうち明けず、〔私の〕手にも触れず、〔私の〕困難に同情せず、数多い祝祭の時にも、親切に扱わず、結構な賜り物もくださらず、私の功績を認めず、私の家族や友人たちの近況を気遣うこともなく、私を多くの仕事に参加させず、後宮へも出入りさせなくなった。のみならず、つまらぬ仕事を私に命じ、私の椅子に他人の坐るのを許し、私の敵に信任を示し、私の言葉に答えず、私の過失をすべて咎め、私の隠そうとする弱点を茶化してからかい、自分が同じ意向の時にも、私の言うことを斥け、私の贈るたくさんの高価な品をも喜ばず、政務に明るい人々の失策を、私の面前において、愚かものたちに嘲笑させる。〔いにしえの〕チャーナキヤの言は正しい。

〝人は意にかなえば、たとえ悪事であっても、それを好み、意に添わぬ時には、善事をさえ、憎むものである〟

とはいえ、どうしたらよかろうか。たとえ、よからぬ振舞が王子にあったにもせよ、私たちのような、父祖の代から仕えてきた者にとって、王を見捨てるわけにはいかない。だがしかし、たとえ私が見捨てなくとも、私の言葉は容れられないのだから、私はなんの役にも立たないのだ。政略の道に長けたアシュマカ国[注九]のヴァサンタバーヌ王の手に、この国はおちてしまうだろう。恐らく、そのような災難に遭って、王は目覚めるであろう。しかし、とかく災難は苦痛を伴いがちで、災難に遭うと、憎しみが先に立って、正しい行ないをさせないものである。とにかく不幸になってみるがいいのだ。私としては、非難したい気持を抑えて、この地位を失わずにいることにしよう〟

宰相がこのように考え、王は享楽をこととしていた時に、アシュマカ国王の宰相インドラパーリタの息子のチャンドラパーリタという者が、素行がよくないので、父に勘当されたというふれこみで、大勢の芸人や、芸達者な踊子や、召使に変装した間諜たちを従えてやって来て、楽しい各種の遊芸によって、ヴィハーラバドラの心をとらえました。そして、彼を橋渡しにして、王に近づきました。

やがて、チャンドラパーリタは、王の悪癖の出るごとに、王を悪事にひきこみ、このように申しました。

〝王さま、狩猟ほど有益なものは他にありません。何故かと申しますに、身体のよい運動になりますから、非常の時に、長途を踏破するに適した脚力を養います。そして、痰の減少による消化の促進は唯一の健康のもとです。脂肪分が除かれて、身がひき締り、逞しくなり、すばしこくなります。寒暑や風雨や飢渇にも耐えられるようになります。さまざまな生物の気配から、その心の動きを察しられます。鹿や野牛や、牡牛などを捕えるのは作物荒しの阻止になります。狼や虎などを殺すことにより、危険な地域の道が安全になります。山や森林地帯においての行動に必要な各種の知識が得られ、また、山林部族たちの信頼を得られます。気力と能力を高めることにより、敵軍を圧倒します。以上のように、測りしれない利益があります。

賭ごとについて言えば、これもまた、大量の金貨を藁屑のように投げ出すことにより、たとえようのない雅量〔が養なわれ〕、勝敗に処して一喜一憂することがなくなります。男らしさのもとである激しい気性が増大します。盆茣蓙の上の賽のごまかしや、目にもとまらぬ手練の早わざなどの観察により、絶えず正確な観察力〔が養われます〕。一ヵ所に注目することにより、驚くべき精神の集中力が生じます。細心に考えて、大胆に断行する満足感が湧きます。いとも猛々しい男たちに混って、他に負けない自尊

心や、自信や、くよくよしない人柄（が生じます）。

美女を楽しむことにおいては、これもまた、財や徳の果が実ります。すぐれた男性としての誇りや、〔婦人の〕感情を読みとることの機敏さや、物惜しみしない態度や、あらゆる技芸に上達することや、いまだ得ていない婦人の獲得と、既に得た婦人の保持と、維持している婦人を楽しむことや、楽しむための計画や、気むずかしい婦人をなだめることなどに絶えず手段をつくすことにより、考えや言葉が洗練されて、すきのない身だしなみから世の尊敬を受け、友人たちの間に高い人望を生じ、召使たちに行き届いた配慮がなされ、にこやかに話し、誠意が溢れ、婦人に丁重であり、子をもうけて、二世（現世と来世）の安楽に役だちます。

飲酒においても、また、各種の病気を追放し、節度ある飲酒により、若さを保つことが望めます。自信が強くなり、悩みが除かれます。肉体の情欲が燃え上がりますから、婦人を楽しむ力が増大します。良心は鈍り、苦痛の矢は抜き去られます。話しにくい事も、妨げがとれて語りますから、他の信頼を強めます。ねたみがなくなり、ほがらかになります。音声を受ける器官（耳）などが絶えず楽しくなります。分ち与える習慣から、友だちの群が増大します。たとえようのない身体の快感と、言葉につくせぬ喜びが増進し、恐怖心の駆逐により、戦闘心が湧きます。

毒舌や、残酷な処罰や、数多くの暴虐においても、それらは財貨を強奪するのに有利です。何故かと申しますに、王が、聖仙でもないのに、さも聖仙であるかのように、平静な心で暮らされるならば、敵にうち勝つことも、国の秩序を保つことも、不可能だからです〟

王はまさしく重大な教訓を受けたと言わんばかりに、恭々しく、その意見に従いました。宰相たちは王の行状を見習って、気の向くままに、悪にはしりました。すべてが堕落したにひとしい有様であり、

誰の非行にせよ、探すのに苦労はまったくありませんでした。

王と宰相は同じようになり、国の役人たちは自らの職務上の公金を使い果たしました。このようにして、収入の入口は徐々にせばまり、支出の出口は、悪友まかせの王により、日ましに拡がりました。王は家臣の地方長官たちや、都の主だった人々の中の、同好の士に親しんで、彼らや、その妻たちを酒宴に招きましたから、彼らは自分たちのよい習慣を破って暮らすようになりました。王はさまざまな口実のもとに、その夫人たちと乱行に及びました。いっぽう、彼らは、つとめを忘れた後宮の女たちと、なんの心配もなく、大いに楽しみました。

そして、すべての良家の夫人たちが、卑しい隠語を話し、礼儀、道徳の束縛を破り、夫たちを麦藁ほどにも顧みず、言い寄る情夫の群に耳を傾けました。それを原因として、怒った男たちの争いが度々起こりました。弱い者たちは強い者たちに殺されました。富裕な家の財貨は盗賊などに奪われ、羞恥は失われ、罪悪の道は拡がり、親族を殺されたり、財産を奪われたり、虐殺や、投獄を気に病む者たちが、声を限りに泣き叫びました。不正な裁きは恐れと怒りをよび起こしました。貧しい家庭にはさもしい心が忍び込みました。そして、下賤な輩も自惚れを燃え立たせました。のみならず、このような、あらゆるできごとの最中に、別の叛乱が起こりました。

アシュマカ国王に雇われる毒殺家たちや、その他〔敵のまわし者〕が、アナンタヴァルマン王の、だらしのない大軍を滅ぼそうと侵入いたしました。彼らは狩人の服装をして、野獣がたくさんいると話し、〔兵士たちを〕逃げ場のない山の峡谷に誘い出し、入口の側から乾草や、竹に火をつけて投げました。虎やその他の獣をけしかけて、食い殺させました。井戸を切望するような渇きを起こさせて、非常に遠い〔水のない〕所へ誘い、飢えと渇きのあげくの果てに生命を落とさせました。草に覆われて見分け

、のつかない山腹の断崖の上の危険な道を走らせて、墜落させました。足の刺(とげ)を抜いてやるように見せかけて、先端に毒を塗った短刀で殺し、あるいは、まちまちの方向へ同伴の兵たちを四散させて、一人とり残された者を、思うままに殺しました。矢による射殺を、鹿と見誤ったと言い訳をしたり、賭けごとにかこつけて約束した末に、峻しい山頂に登ったところを、人しれず突き落としたり、山林部族と見せかけて、森林中の少数の兵士たちに襲いかかり、賭博や闘鶏や、祝祭の行列などの人の群に強引に割り込んで〔言いがかりをつけたり〕、他人に害を行なわせておいて、人しれず受けた不快な苦痛を公衆の面前に公開し、不名誉を守るのだとの名分によって決闘を行ない、他人の妻たちに交際の相手をとりもち、その情夫と夫を殺して、〔二人の男が〕喧嘩をした、と言いふらし、手ごろな女を使って、〔男を〕あらかじめ定めた場所へつれ出させ、不意に近づいて殺し、宝探しを催して穴の中へ誘いいれたり、あるいは魔術の会の最中に、失敗と見せかけて殺人を行ない、狂暴な象を怒らせて、降りるのを妨げたり、凶悪な象の上に乗せて、兵の指揮官たちの集まりに突入させ、分配金（遺産相続）などで争っている者たちをこっそり殺し、その反対者たちに汚名を被(かぶ)せ、国内いたる所の民衆の中の不都合なしわざの者たちを暗殺して、その仇の名を公表し、ある種の女たちを使って、日ごと夜ごとに男を喜ばせて腎虚で弱らせ、あるいは、衣服や装身具や華鬘や軟膏やその他に、毒をぬりこめたり、治療と見せかけて毒物を調合して、病状を悪くしたり、その他、さまざまな方法によって、王の大軍を衰微させました。

さて、〔敵王〕ヴァサンタバーヌはヴァーナヴァーシン[注10]のバータヴァルマンという王を唆かして、アナンタヴァルマン王と戦わせました。国境は侵され、アナンタヴァルマン王は彼を迎え撃つために、軍勢を増強いたしました。国のすべての大守たちの中で、アシュマカ国王がまず馳せ参じ、王との親交を深めました。その他の臣下たちは連合して、ナルマダー河の岸の付近に、宿営いたしました。

このような折にもかかわらず、アナンタヴァルマン王は、この地方の太守、すなわちクンタラ国の王アヴァンティデーヴァお抱えのクシュマータロールヴァシーという舞姫を、彼女が「チャンドラパーリタ舞」や、その他の舞踊に名高いのを幸いに、招きよせて、踊りを観賞いたしました。王はすっかり彼女に惚れこんで、酒に酔わせたうえ、彼女をものにしました。

しかし、アシュマカ国の王はクンタラ国の王に、ひそかに言いました。

〃あの、きちがい王は我々の女たちを犯す。何故、あなたはこのような侮辱を耐え忍ぶのか。余は一〇〇頭、あなたは五〇〇頭の象をもっている。我々二人は手を結んで、ムララ国のヴィーラセーナ王や、リチーカ国のエーカヴィーラ王や、コーンカナ国のクマーラグプタ王や、サーシキヤ国のナーガパーラ王たちと策を練りましょう。かれらも、きっと、あの王の乱行に辛抱がならず、我々の意見に賛成するでしょう。そして、余の親友であるヴァーナヴァーシン国の王に、あの無礼な王を正面から攪乱させて、我々は後方から攻めるのです。そして、〔分捕った〕財宝や乗りもの（象や馬や戦車）を、我々は分配するのです〃

クンタラ国の王は喜んで同意しましたので、アシュマカ国王は豪華な二十着の衣服や、二十五組の金糸の刺繍をした、クンクマ（蕃紅花(サフラン)）色の毛織の上衣を贈物として、腹心の使者を遣わし、小国の王たちを言いくるめて、その企てに加えました。翌日になって、アナンタヴァルマン王は、彼ら小国の王（太守）たちや、ヴァサンタヴァーヌ王の餌食となってしまいましたが、これも政道に対する怠慢からでした。

すると、ヴァサンタヴァーヌ王はアナンタヴァルマン王の財宝や象、馬、戦車などの乗りものを自分

の管理下において、提案いたしました。

"功労と力量に応じて、貴公たちが、それぞれに分配するがいい。余は貴公たちの決定した分け前に甘んじる"

と、老獪な彼は皆の意見に従うように見せかけて、小国の王たちの間に、餌の奪い合いを起こさせ、自滅させてしまいました。彼はヴァーナヴァーシン国の王に、いくらかの分け前を与えて引き揚げ、アナンタヴァルマン王の国のすべてを自分のものにいたしました。

このような時機に、老宰相ヴァスラクシタは宮廷に代々仕えてきた従者たちを集め、バースカラヴァルマン王子と、その十三歳になる姉のマンジュヴァーディニー王女と、その二人の母のヴァスンダラー王妃をつれて脱れる途中、不運にも熱病に罹って死にました。しかし、私たちのような味方の者が、王妃や王子、王女たちをマーヒシュマティーの都へ案内して、王の異母兄のミトラヴァルマン王のもとに預けました。

ところが、この卑しい男は上品な妃に横恋慕して、彼女に拒まれましたので、

"この品行方正な王妃は息子を王位につけようと思っているのだ"

と、想像いたしまして、無慈悲にも、少年を殺そうといたしました。けれども、妃はこれを知って、私に命じました。

"ナーリジャンガよ。この子をつれて、何処へなりと逃れて、生きのびて下さい。もし、私も生命があるようなら、跡を追います。あなたも無事だったら、近況をしらせてください"

私は、辛うじて、王子を宮廷の雑沓から連れ出し、それからヴィンディヤの森林に隠れました。疲れきったこの王子や、従者たちを回復させるために、私たちは、とある羊飼いの家に数日の間、休みましたが、そのような所をさえ、〔敵〕王の家臣に発見されるのを恐れて、遠く、旅に出たのです。このあたりまで来ますと、王子が恐ろしい渇きに苦しみましたので、水を与えようとした私は誤って井戸に落ち、あなたさまのご恩を受けたのです。あなたさまはどうぞ、この寄る辺ない王子をお守り下さい』

と、語り終えるや、老人は合掌いたしました。

私は

『王子の母君は、どのような家系の出身ですか』

と、問いますと、老人は答えました。

『王子の母上はパータリプトラの都（マガダ国首都）の商人ヴァイシュラヴァナの娘サーガラダッターと、コーサラ国[註二]のクスマダヌヴァン王との間に生まれました』

私はいいました。

『それならば、彼の母君と、私の父とは母方の祖父が同じです』

私は親しみの情が起こって、少年を抱きました。

老人が、

『あなたの父君はシンドゥダッタの子たちの中のどなたですか』

と、尋ねましたので、私は、

『スシュルタです』

と、答えますと、老人は大いに喜びました。私は、

『あの政略に自惚れたアシュマカ国王を、まさに〔同じく〕政略によって滅ぼして、この少年を父君の地位につかせたいものである』といい、『だがしかし、それはともかく彼の空腹をやわらげてやりたいものだ』と考えました。

その時、二頭の鹿が、狩人の放った三本の矢を、くぐり抜けて、現われました。私は狩人の手から残る矢を二本と、弓とを奪い取って射ました。一頭は矢羽根の根本まで突きささり、他の一頭はみごとに矢が貫通して、うしろ側に落ちました。私は一頭の鹿を狩人に与え、他の一頭の毛皮を剝ぎ、臓物を除き、切り刻んで、下肢と骨と頭などを捨てて、串刺にした肉を焚火で焼き、二人と自分との空腹を十分

に満たしました。キラータ族（山林部族）の狩人は私のすばらしい腕前を見て、感心していました。私は尋ねました。

『あなたはマーヒシュマティーの都の様子をご存知だろうか』

『私は今日、虎の皮と、革の水嚢とを売って、その都から帰って来ました。

〃チャンダヴァルマンの弟のプラチャンダヴァルマンがミトラヴァルマン王の娘（養女）のマンジュヴァーディニー王女を、妻にするために、やってくる〃

と、都中が祝祭気分になっているのを、あなたは、ご存知でしょうか』

そこで、私は老人に耳うちいたしました。

『わる賢いミトラヴァルマンは王女を手厚く待遇することによって、母君を信用させ、王子が母君に呼び寄せられたら、殺そうとしているのです。ですから、あなたは戻って、王子の無事と、私がつき添っている由を、こっそりと妃にしらせて、表向きには、

〃王子は虎に食われました〃と、公表するのです。そうすると、憎むべきあの愚かもの（ミトラヴァルマン）は、うわべは悲しむと見せて、内心では喜び、妃を慰めるでしょう。その後に、あなたは妃に語らせてこのように、王に伝えなさい。

〃あの子のために、私はあなたの意に背きました。が、私の罪であの子は他界いたしましたから、私はあなたのお心に従います〃

このように言われると、彼は大喜びして、飛びついてくるでしょう。そうしたら、妃はヴァッツアナーバ(注二)という猛毒を水に混ぜた液に、王冠を浸し、その王冠で彼の胸や顔をたたいて、

〃もし、私が貞淑な女ならば、これは、まさしく、邪悪なあなたにとって、剣の一撃となれ〃

と、呪うのです。それから、こちらの解毒薬を混ぜた水の中に、その王冠を浸して、自分の娘に与えるのです。王は死に、娘に変わりはありませんから、

人々は〃妃は貞女(サティー)である〃と言って、妃の命に従うでしょう。次に、あなたは彼女を通じて、プラチャンダヴァルマンに伝えなさい。

〃この国は王を失いました。国と、この娘とを、お受けとり下さい〃

と。その間に、私と王子とはカーパーリカ派(注三)の苦行者に身を紛して、都の外の屍体置場の付近に住み、妃に施物を乞いにいきます。次に、あなたは妃を通じて、商業組合長や都の有力者たちや、老宰相たちに、ひそかに伝えなさい。

〃ヴィンディヤ山に住む女神（シヴァ神妃ドゥルガー）が今日、私の夢枕に立ち、お恵みを垂れました。

〝プラチャンダヴァルマンは今より四日目に死ぬであろう。五日目には、レーヴァー河畔のわが祠堂において、人々が内部に誰もいないのを確かめて引きあげた直後に、あるバラモンの青年が扉を開き、王子をつれて現われるであろう。彼はこの国を護り、そなたの子を王位に推すであろう。彼は虎に化身し、私は虎に化身して、そなたの子を隠していたのである。そして、娘のマンジュヴァーディニーはバラモン青年の妻と定められている〝

と。ところで、あなた方は、このような事件が起こるまでは、この話を堅く秘密にして、守ってください』

と、教えると、老人は喜んで戻っていきまして、計画どおりに実行いたしました。そして、この噂はあらゆる方角に拡がりました。

『ああ、夫に貞節な妻たちの威力は偉大である。何故なら、王冠のひと打ちは、剣の一撃になったからである。妃の行為を欺瞞に結びつけることはできまい。王冠は王女にも与えられて、胸に飾られたのだが、彼女は死ななかったからである。あの貞節な妃の命に背く者は灰になってしまうだろう』

さて、私と王子とがマハーヴラタ（カーパーリカ僧）の衣を着て、施物を乞いに行きますと、それを見た妃は乳房を濡らし（て喜び）、立ち上がって私

たちを迎えて、申しました。
『貴いお方よ。このとおり合掌いたします。頼る人とてない私をお救いください。私はある夢をみました。それを信じてよろしいものか、あるいは間違いでございましょうか』
　私は答えて、言いました。
『あなたは、その結果を、まさしく今日、ご覧になれます』
　妃は
『もし、そのとおりでしたら、この私は少なからぬ幸せでございます。それは、この私に力添えを告げるものでございますから』
　と、いい、マンジュヴァーディニー王女に挨拶をさせました。王女は私に見まもられて、恋に陥ちたかのように、狼狽いたしました。妃は嬉しそうに、続けて、申しました。
『万が一にも、それ（夢の約束）がいつわりであったなら、私は明日、あなたがおつれになっているカーパーリカの少年を捕えて、投獄いたします』
　私はマンジュヴァーディニー王女の羞らいためらうようなまなざしを受けて、平静を失いましたが、にっこり笑って、いいました。
『それも宜しいでしょう』
　私は施物を受けると、ナーリジャンガ老人を呼んで、外へ出ました。そして、うしろから従ってくる彼に尋ねました。
『余命僅かと、人々に噂されるプラチャンダヴァルマンは何処か』
　彼は答えました。
『この王国も自分のもの、と安心しきった彼は、宮廷の庭の園亭において、芸人たちに囲まれております』
　私は、
『それならば、庭園の中でお待ちなさい』
　と、老人に命じて、そこの塀の一隅の、とある人の住んでいない小屋に、衣を脱ぎ捨て、〔老人に〕

王子の保護を命じ、芸人の衣裳に着替えてプラチャンダヴァルマンのところに行き、私の演技で彼を大いに喜ばせました。
　夕日が赤々と輝くころになりました。私は人々の好みにあうものを採り上げて、踊ったり、歌ったり、さまざまの哀調などを披露しました。それから逆立ちで走ったり、逆立ちのまま首を四方に振り回したり、片足を曲げ、片足を高くのばしたりして踊りまわりました。それからさらに、足環や、蠍（さそり）のうごめき、海豚（いるか）飛び、などや、魚の跳躍を演じ、続いて、間近に坐っている人々の中から短刀をぬきとって身につけ、鷲の降下、海鷹の襲撃など、さまざまのむずかしい芸を見せながら、二十弓（約一二〇フィート）の距離からプラチャンダヴァルマンの胸もと目がけて、『千年も生きよ。ヴァサンタバーヌ王』と叫びながら、短刀を投げつけました。一人の護衛兵が私の身に切りつけようと、剣をふりかざすのを、盛り上がった肩の腕のつけ根のあたりを、ぐっと摑んで瞬間に気絶させ、人々が驚いて見あげる中を、二人分の高さ（約十二フィート）の塀を乗り越えました。私は、
『追手のものども、この道を探すがいい』
　といいながら、タマーラ樹[注四]の道を走りますと、ナーリジャンガ老人が砂地を撫でて平らにし、足跡を消しました。そして、東方へ走り、ついで南に転じ、煉瓦を積み重ねた〔塀〕を、発見されずに跳び降りました。そして、塀をとり囲む掘割を跳び越えると、荒れた小屋にとび込み、以前の衣を着けたのち、王子を連れて、事件による騒ぎの最中の宮廷の門を通り抜けて、道なき道を通り、屍体置場へ帰り着きま

した。私は堂内の女神の像の台座の下に、前もって穴を掘り、穴の出入口は横から大きい石で塞いでおきました。

　夜半が過ぎようとするころ、宦官に運ばせた絹の衣裳と高価な宝石の装身具を身につけて、私と王子の二人は穴にはいって、静かに待ちました。いっぽう、妃は前日に、マーラヴァ国のプラチャンダヴァルマンを、型どおりに火葬に付し、彼の殺害はアシュマカ国王の奸計のしわざである、と宣伝いたしました。そして、今日の早朝、あらかじめ打ち合わせておいた都の重だった人々や、宰相たちや、太守たちの老人をつれて、堂にやってまいりまして、女神を礼拝しました。すべての人々の注視の下に、堂内に人のいないのを、よく確かめさせたのちに、一同とともに堂外に出て、合図の太鼓の音を高らかに打ち鳴らさせました。

　私は、僅かな隙間から聞こえて来たその音を合図に、頭をおし当てると、女神像もろとも、鉄の台座を押し上げましたが、その重いことは、大の男が、もがいても動かし難いほどでした。私は台座の一方の側を下に据えたまま、他方の側を両手で支えて穴からはい出し、少年をも外へ出しました。さて、ドゥルガーの女神像をもとのとおりに据え直して、私は扉を開き、人々の前に姿を現わしました。彼ら臣下たちは、信頼の喜びにみちた目で、体毛を逆立て、手を高く挙げて合わせると、驚きいって、大地に平伏いたしました。私は彼らに、いいました。

『ヴィンディヤ山におわします女神（ドゥルガー）は私を介して、貴公たちに告げる。

〃われは王子を憐れむがゆえに、虎に姿を変えて、隠しておいたのであるが、もはや、貴公たちに返すであろう。今日より以後、われは王子をわが子と思い、母として、強い加護を与えるであろう〃

　アシュマカ国の王は、並はずれた一億の奇略に通じ、欺瞞と残酷をもって、名高い器であるが、その器を倒すこの私を、貴公たちは王子の保護者（摂政）

と思うがよい。そして、女神は（王子を守る私への）代償として、眉目うるわしい王子の姉姫を私に許されたのである』

　彼らはこれを聞いて、

『ああ、ボージャ王家は、このような貴いあなたさまを保護者として恵まれ、幸いです』

と、喜びました。それに姑ぎみ（妃）の喜びは言葉に尽くせないほどでしたから、その日のうちに正式に婚礼を挙げて、私にマンジュヴァーディニー王女の手をとらせました。

　そして、私は夜になるのを待って、（堂内の）穴をもとどおりに埋めました。ですから、人々は策略の証拠を知らず、（人が確かに）いなかったこと、合掌したこと、心配したこと、などをさまざまに語り伝えて、私を神の分身と信じ、決して、私の命令に背きませんでした。そして、彼らが、『王子は女神のみ子である』と、吹聴したことは（王子の）威光の源となりました。私はめでたい日を選んで、彼の薙髪式を行ない、宮廷バラモンからは処世、治国の道を彼に学ばせ、私からは王の実務を教えました。

　そして、私は思うのでした。

『王国の統治は三力によるものである。三力とは計画力と、権力と、精力であり、これらが互いに支え合い、関連しあったときに、統治は成功する。何故なら、計画によって決定し、権力によって推進し、精力によって成就に至るからである。（三力を樹にたとえるならば）計画の五部（注五）は根であり、権力の二相（注六）は幹であり、精力の四徳（注七）は枝であり、王国の七十二要素（注八）は葉であり、防禦の六策（注九）は若芽である。そして、力は花であり、成就は果実である。この統治という樹は多くの部分から成り立っているから、協力者なしにはやっていけない。しかし、ミトラヴァルマン王の宰相であったあのアーリヤケートゥという人物はコーサラ国の出身であり、王子の母君の一門に当たり、宰相としての資質に恵まれている。彼の意見を軽視したからこそ、ミトラヴァルマン王は滅

びたのである。彼を得られると、都合がよいのだが』

そこで、私はナーリジャンガ老人に、ひそかに意を伝えました。

『親愛なる老人よ。あの立派なアーリヤケートゥに、他人を混えず、尋ねなさい。

〃この王国の栄光を担っている、あの奇怪な人物は何者でしょうか。我々の王子はその蛇（奸臣）にまきつかれているのです。王子は逃れられるでしょうか、それとも呑みこまれてしまうでしょうか〃

そして、彼が答えたことを、私に知らせなさい』

ある日、老人は私に報告いたしました。

『私は、度々、贈物をして彼に近づき、さまざまの話をしたり、手や足をさすったりいたしましたら、やがて、彼は私を深く信頼いたしました。その折に、あなたのおっしゃるとおりに、尋ねてみましたが、答えはこうでした。

〃友よ。そのようなことをいってはなりません。あの人は、由緒正しい家系の出身で、ただならぬ判断力、なみはずれた精力と体力、測り知れぬ威厳、驚くべき武芸、少なからぬ技芸の知識、慈悲深い、やさしい心、むかうところ敵なき栄光を集め具えていて、その中のどの一つをとってみても、他の誰にも見あたらない資質です。彼は敵にとっては、チラヴィルヴァ樹（毒樹）であり、味方にとっては白檀の樹です。ご覧なさい。彼こそ、あの政略に驕るアシュマカ国王を滅ぼして、王子を父王の位につけ得る人物です。それは一点の疑いもありません〃』

このように聞いた後もなお、私は幾度も彼を試みた末に、信任し、彼を計画の協力者にいたしました。その協力によって、私は心の清く誠実な宰相たちや、各種の特色を有する間諜たちを任命いたしました。私は欲ばりな金持や、非常に思い上がった者や、服従しない者たちのほとんどを、間諜たちから聞いて、貪欲を斥け、信心をすすめ、不信心を誡め、邪魔者を除き、敵の策略を粉砕し、四姓を各々その義務に

基づいて暮らさしめ、そして、金貨を、四方からかき集めました。何故なら、

『権力（三力のうち）によって推進される政治も、その根本は財貨である。およそ、（統治者にとって）無力ほどの悪はない』

と、考えたからです。私はこのような方針によって、統治をすすめました」

注

一 ヴィダルバ Vidarbha. ヴィンディヤ Vindhya 山の南にあった国。「ナラ王物語」（叙事詩「マハーバーラタ」の挿話）の美しい妃ダマヤンティーは、ヴィダルバ国王ビーマの娘であった。

二 六種の統率法 Ṣadguṇa. 戦時における王の統率法。平和・戦争・進撃・駐留・分散・強国への救援依頼。

三 よそ者の女 bāhyanārī（外部の女）。宮廷外の女の意か、外国人の女か、あるいはカースト外の女の意か不明。そういう女との色事を事とするという意。

四 ヴィシュヌグプタ Viṣṇugupta. 孔雀王朝のチャンドラグプタ王の宰相。チャーナキヤ Cāṇakya、あるいはカウティリヤ Kauṭilya とも呼ばれる。処世、治国に関する書「アルタ・シャーストラ」Artha-Śāstra は彼の作と伝えられる。

五 一握りあるいは半握り Muṣṭi（拳の意）半握り、Ardhamuṣṭi（拳の半分）。注釈はいずれも、ムシュティとアルダムシュティを財務に関する役職名として説明している。それに従えば、「王は粥を食して……立ち上がってから、ムシュティ及びアルダムシュティという役人を召して……」となる。この部分はカウティリヤの「アルタ・シャーストラ」（一・一九）を

もじったものである。

六 横領の四十手 Catvāriṁśataṁ cāna-kyopadiṣṭā=nāharaṇopāyāṅ. カウティリヤ「アルタ・シャーストラ」(二・八)参照。

七 ナーディカ Nādika. 一ナーディカは約二十四分とされるから、3¾ナーディカは九十分ということになる。

八 四軍 caturaṅgabala. 車・騎・歩・象の四軍。

九 アシュマカ国 Aśmaka. シューラセーナ国 Śūrasena の南にあった古国。首都はポータラカ Potalaka.

10 ヴァーナヴァーシン Vānavāsin. 南インドの古国。位置はガーツ Ghāts 山脈とトゥンガバドラ Tungabhdra 河の中間ともいわれる。

一一 コーサラ国 Kosala. 中インドの古国。首都はシュラーヴァスティー Śrāvastī.

一二 ヴァッツアナーバ Vatsanābha. 「牛の臍」の意であるが、植物の根から採取される強力な毒素の名である。

一三 カーパーリカ派 kapālika. ヒンドゥー教シヴァ派の一つであり、人の頭蓋骨を器として、食を乞う。マハーヴラタ mahāvrata とも呼ばれる。

一四 タマーラ樹 Tamāla. 樟科の樹木。葉が茂るので、黒色、暗黒などに譬えられる。

一五 計画の五部 Pañcāṅgamantra. ㈠協力 ㈡方法 ㈢時と所の判断 ㈣災厄の対策 ㈤成功

一六 権力の二相 Dvirūpaprabhāva. ㈠富 ㈡人力 の蓄積

一七 精力の四徳 Caturguṇotsāha. ㈠意志 ㈡言語 ㈢肉体 ㈣行為

一八 王国の七十二要素 Dvisaptatiprakṛti.

この要素は王、大臣、地方、都城、宝庫、軍隊、友邦、非友邦の八種に大別される。カウティリヤ「アルタ・シャーストラ」(六・一)参照。

一九 防禦の六策 Saṅguṇa. ㈠平和 ㈡戦争 ㈢侵略 ㈣防戦 ㈤不和 ㈥同盟

完結編（補遺）

「私は考えました。

『私の家来はみな非常に勇敢で、私のためには自分たちの生命を藁屑ほどにも思っていない。私には自分の軍隊と二つの王国が味方をしているのだから、アシュマカ国のヴァサンタバーヌ王にひけはとらないし、私は政治というものを知っている。それ故私はヴァサンタバーヌを滅ぼして、アナンタヴァルマンの王子バースカラヴァルマンを、ヴィダルバ国の王として父の位を継がせることができるのだ。そのうえ、この王子は女神の養子で、私がその補佐役だという噂は、いたる所に拡がっている。しかも、それが私の策略だということはいまだ誰も知らないのだ。ここにいる人々は、バースカラヴァルマン王子に望みを託し、〃彼はわれらの主君アナンタヴァルマンの王子で、ドゥルガー女神の加護によってこの王国を得るであろう〃と信じている。しかも、アシュマカ国王の軍隊の間では、〃女神が王子を守護している〃ということが知れ渡っているので、〃女神の力の前には、人間の力などはとうてい及ばない〃と考えて、われわれの軍と戦う意志はない。譜代の大臣たちは、最初から王子の擁立を望んでいるうえに、いまでは、私からの贈物や尊敬で、すっかり私を信頼しているので、王子を彼らの支配者にすることを強く希望している。いっぽう、私の派遣した間諜たちは、アシュマカ国王の腹心の家来たちと密接に結びついて、こういっている。〃あなた方は、われわれの友である。それ故、われわれの有利な忠告をきいてもらいたい。ドゥルガー女神は、われわれ

の王子を扶けるために、あの有名なヴィシュルタをお遣しになった。もしアシュマカ国王ヴァサンタバーヌやその味方のものが、ヴィシュルタと戦えば、彼らは死神の客となるでしょう。ですから、アシュマカ国王が、あなた方を死神の道連れにしないうちに、アナンタヴァルマンの王子バースカラヴァルマンの味方におなりなさい。そうすれば、アシュマカ国王も、なんの怖れもなく平和と繁栄のうちに、臣下とともに暮らすことができるのです。もしそうしなければ、彼は女神の三叉戟の犠牲になるでしょう。しかし、女神は私の前に現われて、このことをすべて皆のものに告げよ、といわれました。われわれとあなた方との間の友情を想って、女神が私の口から、みなさんにおしめしになったのです〃』

これを聞いて、王子が女神の恩恵をうけていることを聞いて知っていた、アシュマカ国王の腹心の家来たちは、すでに心がぐらついていました。そこへ、私の話が伝わったのですから、彼らは全く私の手中におちました。

この一部始終を知ったアシュマカ国王は、考えました。

『王子の譜代の家来たちは、王子を彼らの王にと願っているし、余の家臣どもは、遠国のものも近国のものも、みな心がぐらついている。もしも余がこのままじっとしていれば、〔敵の〕使嗾は国中に拡がって、王国を維持することもできなくなるであろう。それよりは、いっそ、心のぐらついた余の軍隊が内通して、余の内心を敵に知られないうちに、打って出て戦うほうがよい。そうすれば、彼（敵）は、余の前に一瞬だけしか立っていられなくなるのは必定である』

このように決心して、彼は無謀にも、敵国に侵入するという罪を犯し、軍を率いてわが国に進撃してきましたが、それはまさに死の口に向かうようなものでした。彼が近づくのを知って、王子はこれを迎撃しました。私は馬に乗って、やってくるアシュマ

カ国王めがけて突進しました。敵の全軍は、『たった一人で、われわれの大軍に向かってくるとは、女神の加護をうけているもの以外には考えられない』と思ったので、じっと止まって、絵のように動きませんでした。私が馬をヴァサンタバーヌに向かって乗りつけ、一騎打ちの勝負を挑みますと、彼も私に向かって力強い剣の一撃を加えました。私は、かねて習い覚えた特別の技で、彼の剣を受けとめ、返す刀で彼の首を地上に切って落とすと、敵軍に向かって叫びました。

『われと思わんものは、進んでわれと勝負せよ。然らずんば、王子の足下に伏して従え。もし従うならば、なんじらはみな、その生業を続け、各々もとの職につき、平和に暮らすことができるであろう』

私の言葉を聞き終わらないうちに、アシュマカ国王の家臣たちは、ことごとく急いで馬や象や戦車から下り、王子の前に敬意を表し、その命令を待ちました。そこで私は、アシュマカ国王の領土を王子に委ね、譜代の家臣を王国保護のために職に任じたうえ、アシュマカ国王の軍隊を率いてヴィダルバ国に赴き、都において、バースカラヴァルマン王子を即位させ、父王の王座を継がせました。

さてある日のこと、王が母君のヴァスマティー（注二）とともにおられる時に、私は申しました。

『私には、果たさなければならぬ一事がございます。それが成就いたさぬ限り、私はどこにも一ヵ所に留まっていることはできません。そこで私の妻であり、あなた様の姉上にあたるマンジュヴァーディニーを、数日の間、あなた様のもとにおいていただきたいのでございます。私はしばらくの間、私の求めている人物を探して各地を歩き、その人物が見つかり次第帰ってまいります』

王はそれを聞くと、母君の許しを得たうえで、私に申しました。

『貴公は、余がこの王国を獲得した非常な幸運の因（もと）である。貴公なしには、われらはこの王国を治めるという重荷に、一瞬も堪えられないのだ。どうして貴公はそのようなことを申し出るのか』

そこで私は答えました。

『いや、その御懸念は無用です。あなた様の御館には、宮臣の宝石ともいうべきアーリヤケートゥがおります。彼はこのような王国がいくつ集まっても、その重荷に堪えられる人物です。私は出発する前に、彼に万事を委任してまいります』

私があれやこれやと申し述べても、王はなかなか許さず、母君ともども、いろいろと理由を設けて、私の出発をしばらく延期させました。王は、ウトカラ国王プラチャンダヴァルマンの王国を私に賜わったりいたしました。私はその王国をわが手に収めると、王に別れをつげて、あなた様を探すために旅に出ましたが、たまたまアンガ国のシンハヴァルマン王から救援を求められて、この地へまいりますと、善業の報いで、旧主のあなた様にお目にかかれたのでございます」

＊　＊　＊

かくて、アパハーラヴァルマン、ウパハーラヴァルマン、アルタパーラ、プラマティ、ミトラグプタ、マントラグプタ、ヴィシュルタは、その地に集まり、使者を遣わして、パータリプトラの都で、前業によって定められた皇太子の位についている、ソーマダッタ王子を迎えにやった。王子は、ヴァーマローチャナー妃とともに、迎えの来るのを待っているところであった。一同がラージャヴァーハナ王子とともに、嬉しい会合を喜んで語り合っているところへ、プシュパプラの都から、ラージャハンサ王の書状をもって、使者が到着した。貴公子たちは、ラージャヴァーハナ王子に一礼して、「わが君、父君ラージャハンサ様よりの、この書状をお受けください」といった。王子はそれを聞くと、立ち上がって、敬意をこめて何度もお辞儀をしたのち、その書状を受け

取って、まず頭上に捧げてから、おろして封を開き、一同の面前で読み上げた。

「嘉慶、吉祥。

　プシュパプラの王宮より、高貴なるラージャハンサ王は、チャンパーの都に駐在するラージャヴァーハナをはじめ、他の諸公子に対し、祝福の勅状を呈す。

　卿らは、さきに、余のもとを辞してこの地を去り、途中において、森林中のシヴァ天の祠堂の付近に宿営せり。その地において、ラージャヴァーハナは、シヴァ天礼拝のため、祠堂において一夜を明かせるも、翌朝他の公子らは王子の姿を見ざりき。公子ら一同は、『ラージャヴァーハナとともにこそ、ラージャハンサ王に仕うべけれ。然らざれば命を絶たん』といいて、兵を返し、ラージャヴァーハナ捜索のため、各々出発せり。

　かの地より帰還せる兵士らの口より、卿らの消息を聴取して、悲嘆の海に心を沈めたる余ならびに卿の母は、『ヴァーマデーヴァ仙の庵を訪れて、この顛末を語り、然るのちに自決せん』と決心せり。然るに、余らがその庵にいたり、聖者に敬意を表して立つや立たざるに、過去、現在、未来の三世に通じたる聖者は、余らが語らんとすることを、すでに知悉しいたり。余らの決意を知れる聖者はいえり。『王よ、わが君がなさんと決意し給いしことは、わが智力によりてすでに知り得たり。公子らは、王子ラージャヴァーハナのために、しばらく不運の日を送りたるのち、運命の好転と、並びなき勇気とによりて四方を征し、多くの国々を得て、十六年ののち、勝運に恵まれたるラージャヴァーハナに従って帰還し、わが君ならびにヴァスマティー妃の足下に伏して命を待つべし。されば、ゆめゆめ早まり給うなかれ』と。聞き畢(おわ)りて、余と妃とはそを信じて堪え忍び、今日まで生命をながらえたり。

　今や、その定められたる日も近づきたれば、余らは再びヴァーマデーヴァ仙の庵を訪れて問えり。

『聖者よ、卿が定められし時は正に満たんとす。今やいかなることが起こらんとするか』と。聖者は答えたり。『王よ、ラージャヴァーハナと他の公子らは、多くの打ち勝ち難き敵に打ち勝ち、四方を征して全世界を統べ、今やチャンパーに会せり。されば速(すみや)かに使者を派遣して彼らを召し給え』

　聖者の言を聞きて、卿を迎えんため、ここに勅状を発するものなり。卿、もし一瞬だに遅滞せんか、余ならびに卿の母ヴァスマティーは、世人の口の端にのみ残るものとなるべきを知り、途上、ただ水のみを摂りて来たるべし」

　かくて、父王の令書を頭上に頂き、「われらは行こう」と一同は決心した。かれらはさらに、征服した国々を守るのに必要なだけの軍隊を残し、部下をそれぞれ必要な地位にふさわしく任命し、さらに、彼らの進軍する道を、大軍をもって安全に確保し、また宿敵たるマーラヴァ国王マーナサーラを滅ぼして、その領土を支配下においたうえ、プシュパプラの都において、ラージャヴァーハナ王と王妃ヴァスマティーの足下に敬意を表わそうと決心した。

　このように決意をかためた一同は、各々妻を伴い、精兵をすぐって、マーラヴァ国めざして進軍した。(注1)ラージャヴァーハナは、仲間の公子たちに囲まれて、まずウッジャイニーに達したが、たちまちにマーラヴァ国王マーナサーラを、さしたる力も用いず打ち破って殺害した。それから王子は、アヴァンティスンダリー王女を救出し、マーナサーラ王の大臣チャンダヴァルマンによって投獄されていたプシュポードバヴァ王子を自由にし、ともにマーラヴァ国王の領土を征服して、その守護のため若干の軍隊と大臣とを任命したのち、残った精兵を従えてプシュパプラに赴き、ラージャヴァーハナを先頭に、ラージャハンサと母君ヴァスマティーの足を拝した。二人は王子たちの帰還をこのうえなく喜んだ。

　その時、ヴァーマデーヴァ仙は、王とヴァスマティー妃の面前で、ラージャヴァーハナをはじめ十人

の王子たちの望むところを知って、彼らにいった。

「貴公らは、みなひとしく出発して、各々その領土を正しく統治しなさい。しかし望みが起こった時には、戻って親君の足を拝するがよい」

王子らは、聖者の命令を恭しく頭上に奉じ、聖者と両親に敬意を表したのち、去って四方を治め、折あって帰国の際には、各自おのおの過ぎし日のできごとを聖者の前で語った。両親もまた、王子らが自分たちの勇気を示す、いとも困難な冒険の物語を聞いて、このうえもなく喜んだ。そして王は、聖者にむかって恭しくいった。

「聖者よ、貴下の恩恵により、われらは、あらゆる人間の意志を越え、言葉と心の限界を超えた幸福に到達しました。それ故、今よりのち、われらは師の足下において林住期にはいり、魂の安静を得ようと思います。希くは、ラージャヴァーハナを、プシュパプラの都とマーナサーラ王の旧領の王位に即け、残る国々を九人の公子らに指示どおりに与え、ラージャヴァーハナを中心として一致協力し、（国を擾す）棘を除き、海を回らす大地を強く統べ治めるよう導いてください」

聖者は、王子らがみな、父王が林住の生活にはいることを、必死にとめようとするのを見て、彼らにいった。

「王子らよ、卿らの父王は、その齢にふさわしい道を行き、肉体の労苦を去って、わが庵に住むのである。森の庵に住むことを決して妨げてはならぬ。そこに住めば、父王は尊い神の恩寵をうけるのである。卿らは、父王の側にあっても、決して幸福を得ることはない」

大聖者の訓しをうけて、彼らは父王の林住期にはいるのを止めることをやめた。

かくて、公子らは、ラージャヴァーハナをプシュパプラの王位に即け、王の許しを得て各々その領土を治め、思い立っては、両親のもとへ往復した。

このようにして、すべての公子らは、ラージャヴ

ァーハナを主と仰ぎ、その命令のもとに、互いに一致して正しく大地を治め、城塞の破壊者（インドラ天）をはじめとする神々すら達しがたき、統治の喜びを味わった。

注

一　ヴァスマティー　この編の筆者の誤りで、ヴァスンダラー妃が正しい。

二　ここでも筆者は地理的知識の欠除を示している。すなわち、王子たちのいるチャンパー（現在のバーガルプル）は、プシュパプラ（花の都すなわちパータリプトラ、現今のパトナー）の東方、ガンジス河沿岸にあるが、マーラヴァ（現今のマールワー）及びウッジャイニー（現今のウッジャイン）は、はるか西南方の中部インドの町である。

解説

田中於莵弥

一、作者ダンディンについて

ダンディン Daṇḍin に関して、確実なことはほとんど知られていない。われわれは彼の作品中の断片的な記事と、後世の伝誦によって作者の輪郭を知り得るに過ぎない。伝誦によると、彼には三種の作品があったといわれるが、そのうち一般に認められているのは、伝奇小説「ダシャクマーラチャリタ」Daśakumāracarita（十王子物語）と、修辞学書「カーヴィヤーダルシャ」Kāvyādarśa（詩作の鏡）の二編で、第三の作品に関しては種々の説があり、「ムリッチャカティカー」Mṛcchakaṭikā、「チャンドーヴィチティ」Chandoviciti、「カラーパリッチェーダ」Kalāpariccheda、「ドゥヴィサンダーナ・カーヴィヤ」Dvisaṁdhānakāvya、「アヴァンティスンダリー・カター」Avantisundarikathā などが彼の作に帰せられているが、いずれも確証はない。「ダシャクマーラチャリタ」と「カーヴィヤーダルシャ」が、同一作家の手に成るということについても異論があり、修辞学者として「カーヴィヤーダルシャ」において作詩法を説いている作者が、その作品たる伝奇小説の中で作詩法の規定を犯しているのは、別人である証拠だという説もある。しかしこれに対しては、それは理論と実際の違いだと反論し、あるいは「ダシャクマーラチャリタ」は初期の作品で、修辞学書は同じダンディンの晩年の作だという説もあり、結局われわれは、伝誦に反して、両作を別人の作とする積極的な論拠をもたないのである。

ダンディンの年代に関しても正確なことはわからない。もし「カーヴィヤーダルシャ」の作者と「ダシャクマーラチャリタ」の作者を別人と考えれば、伝奇小説作家ダンディンの年代決定はさらに困難となるのである。「カーヴィヤーダルシャ」（一・三四）において、ダンディンは、マーハーラーシュトリー語で書かれた「セートゥバンダ」という作品の名を挙げているが、この作品はカーリダーサ（五世紀）の作、あるいはカーリダーサとプラヴァラセーナ Pravarasena 王の合作という伝説がある。この伝誦はあまり信用できないが、プラヴァラセーナは、他の記録によると、六世紀のカシュミールの王である。またダンディンとともに、初期の修辞学者として、その先後が論争の的となっているバーマハ Bhāmaha（七世紀）との関係も、ダンディンの年代決定に重要な役割を演じている。両者の年代はあまり距りがないようであるが、ダンディンがバーマハの説を批判しているという説に従っても、彼の年代は七世紀ごろと見てよいのであろう。「ダシャクマーラチャリタ」及び「カーヴィヤーダルシャ」の内容からみて、ダンディンは南インドの生まれで、カーヴェーリー河、アーンドラ、チョーラなど南インドの諸国のことをよく知っていたと思われる。

二、「ダシャクマーラチャリタ」のテクストと内容

インドの修辞学では、サンスクリットの散文の作品をガディヤ gadya と称し、これをカター kathā とアーキヤーイカー ākhyāyikā の二種に分類し、「ダシャクマーラチャリタ」はアーキヤーイカーに属する作品とみなされている。ただしダンディン自身は、「カーヴィヤーダルシャ」（一・二八）において、この二種の区別はないものとしている。

古代インド文学は、最古の文献たる「リグ・ヴェーダ」以来、韻文が中心であった。もちろん散文の作品がなかったわけではなく、文学作品の最も完全

な形といわれる戯曲は、散文の対話に抒情的詩句を交えたものである。しかし、古典サンスクリット文学史の上で、このような散文の伝奇小説が台頭したのは七世紀ごろで、ダンディン、スバンドゥ、バーナの三巨匠がほぼ時を同じくして現われ、ダンディンはこれら三巨匠のうちの代表的作家といわれている。しかもこれらの散文小説には、韻文の技巧が多く用いられているのである。

(1) テクスト

現存の「ダシャクマーラチャリタ」は、三編十四章の形をとっているが、そのうち最初の五章は序編または前編 Pūrvapīṭhikā とよばれ、次の八章には編名なく（本訳では後編とした）その最後の第八章（通算すれば第十三章）は未完のまま中断されている。この中断された第八章を補い、物語を完結させている一編を後編 Uttarapīṭhikā（本訳では完結編）とよんでいるが、ダンディンの原作は後編の八章だけで、前編と完結編は後世の補遺とみなされている。

題名の示すように、本書は十人の貴公子の冒険譚を内容とするものであるが、ダンディンの原作八章は八人の青年の物語である。作者が十人の話を集める計画でこの題名をつけ、八人の話だけで、しかも最後の話を中途で未完のまま中止したものか、あるいは元来十人の話が完備していたのが、前後の部分が亡失したものかは明らかでない。前編の作者とその年代は不明であるが、この作者はダンディンとあまり年代も距らず、原作者の作風を模し、十人の貴公子の生い立ちや、原作に欠けている二人の物語などを補っているが、原作と矛盾する点も少なからず認められる。冒頭のダンディンの名をよみこんだ詩句などは、明らかに後世作家の筆に成ることを示している。完結編は補遺（シェーシャ） śeṣa とよばれ、チャクラパーニ・ディークシタ Cakrapāṇi Dīkṣita の作といわれるが、この作者に関しては年代も伝記も明らかでなく、その筆致は著しく劣り、内容的にも過誤を犯している。前編に相当する別の作品として、バッタ・ナーラーヤナ Bhaṭṭa Nārāyaṇa 作、あるいはヴィナーヤカ Vināyaka 作の 'Daśakumāracarita-pūrvapīṭhikā' と称するものもあり、またこの未完成の作品を補って完結した形にしようとする企てとして、アッパヤ・マントリン Appaya Mantrin or Appayāmātya の 'Daśakumārakathāsāra' や、ゴーピーナータ Mahārājādhirāja Gopināth a の、'Daśakumārakathā' などの作品も作られた。

ダンディンの文章は比較的平明である。もちろん爛熟期サンスクリット文学の特徴であり、散文小説の特色である長大な合成語を彼も用いているが、それらは極端なものではなく、他の作品にみられるような晦渋なものではない。彼の文章はとくに措辞と音の効果に重きをおいているが、このことは彼がヴァイダルバ体の作家といわれる所以である。修辞学者としてのダンディンの面目を遺憾なく発揮しているのは、後編第七章における技巧である。すなわちこの章は、マントラグプタが恋人に下唇を嚙まれたために、唇が使えないという想定のもとに、唇音 (p, ph, b, bh, m) 及び u, ū, o, au, v 音を一つも用いない文章で綴られている。(注一) ダンディン自身が「カーヴィヤーダルシャ」(三・八三以下) において、このような音の制限のある文章を書くことのむずかしさを述べているが、短い文章ならいざ知らず、一章全部を唇音なしに書くということは、作者の非凡な詩的技巧を示すものといえよう。

(2) 物語の内容

物語の主人公ラージャヴァーハナ王子は、マガダ国王ラージャハンサの王子で、父王が、神授の武器をもつ敵マーラヴァ国王マーナサーラとの戦いに敗れて、森林に隠れている間に生まれた。マガダ国と同盟を結ぶヴィデーハ国王の二人の王子アパハーラヴァルマンとウパハーラヴァルマン、さらに七人の大臣の子らもラージャハンサ王のもとに集まり、ここで十人の貴公子たちがともに生長した。十人の青年はやがて相携えて幸福を求め、世界征覇 digvija-

yaの旅に出たが、途中ヴィンディヤ山中において、ラージャヴァーハナ王子は、一人のバラモンの求めに応じ、地下の世界 pātāloka を征するために、友達を捨てて去った。残された九人の貴公子たちは、それぞれ王子を探して諸国をさまよい、種々の事件に遭遇するが、多くの年月（十六年）ののち、ラージャヴァーハナ王子にめぐりあい、各々がその経験した冒険譚を物語る。

以上が「ダシャクマーラチャリタ」の梗概であるが、各話の内容は多彩をきわめ、古代中期インドの社会を描写して剰すところがない。とくにダンディン原作中の二章、即ち「後編」の第二章アパハーラヴァルマン物語と第三章ウパハーラヴァルマン物語は、内容も文章も全編中の白眉というべきであろう。

文化史あるいは社会史の上からみて、本書はまことに興味深い内容をもっている。七世紀といえば、カニャークブジャ Kanyākubja（曲女城）のハルシャ王 Harṣa（六〇六—六四七）が国威を四方に発揚した時代であり、多くの国家は互いに勢力を争いつつも、各都市（国家）は商業がさかんで繁栄し、各種の文化が発達した。「ダシャクマーラチャリタ」の中心はマガダ国であるが、その同盟国としてはヴィデーハとアンガがあり、マーラヴァが敵国であった。これら諸国の国家機構はマウリヤ王朝のそれを継承し、政治、外交、戦争などの各方面にその機能を発揮した。ダンディンは好んでこれら都市の商人を題材とし、富豪や隊商などがしばしば登場するが、また詐欺師、盗賊、手品師、賭博師、遊女など、社会の裏道を行くような人物も登場し、窃盗の方法、賭博場の情景、毒薬の作り方、闘鶏場、遊女の心得、情事の媒介をする女、詳細な毬遊びのやり方、ジャイナ教僧院の生活などについて興味ある描写がなされ、また人生の三願（徳・財・愛）の優劣を論じ、悪妻の見本のような女があるかと思えば、理想の妻の条件を述べ、カウティリヤの「アルタ・シャーストラ」（処世・統治の書）に対する批判的な見方な

ども示されている。

ある学者は、本書を評してアルタ（処世・統治）の書 Lehrbuch der Politik とよび、教訓的意義を認めているが、全体からみれば、むしろ本書は諷刺とユーモアに富んだ娯楽を主としたもので、悪党小説 Schelmenroman or Picaresque Romance とか、風俗小説 Sittenroman というようなよび方が当たっているであろう。作者はしばしば神や聖仙を破廉恥な行為をなすものといい、仏教やジャイナ教の尼僧を情事の仲介者として扱い、またバラモンや王侯の行動を揶揄するなど、社会道徳に対する反骨的態度すら示している。

(3) 物語の起源と同類の説話

「ダシャクマーラチャリタ」の物語がすべてダンディンの創作によるものとは考えられない。従来多くの学者によって、この物語の構想は亡失したグナーディヤの大説話集「ブリハットカター」から採ったものであろうといわれている。「ブリハットカター」は現存しないが、これを要約した数種の説話集が伝わり、その中でとくに有名なソーマデーヴァ（十一世紀）の「カターサリットサーガラ」（六九一—一〇三）において、ムリガーンカダッタ王子は、十人の大臣の子らとともに都を逐われ、王子は森林の中で苦行者の求めに応じて同行の人々と別れ、各自は種種の事件に遭遇したのち、再会して各々経験した冒険譚を物語るのである。「ダシャクマーラーチャリタ」の梗概とこの物語とは、人数が一人違うだけで、その構成はすこぶる似ている。「カターサリットサーガラ」との類似は梗概だけではない。個々の物語においても、両者の間には共通あるいは同類の話が少なからず見出される。(註1)

「ダシャクマーチャリタ」に含まれる物語は、「ブリハットカター」を基にしたものばかりとは思われない。仏教説話集「ジャータカ」と同類の話も少なくない。

「聖者を誘惑する遊女」の話（「後編」第二章の中の

挿話）は「ジャータカ」（五二三及び五三六）に類型が認められる。「不思議な革財布」の話（「後編」第二章の挿話）も、「ジャータカ」（二九一及び五四三）に壺や宝石として同じモティーフが見られ、また「忘恩の悪女」の話（「後編」第六章ミトラグプタ物語の中の四つの挿話の第一、ドゥーミニーの物語）は、「ジャータカ」（一九三）のみならず、「パンチャタントラ」（五・八）、「カターサリットサーガラ」（一〇・六一及び六五）にも類話があり、さらに「今昔物語集」（本朝編二九・二三）とも類似している。同じミトラグプタ物語の第二の挿話、ゴーミニーの物語は、「理想の妻」の典型として「ジャータカ」（五四六）に、さらに「デカメロン」（一〇・一〇）のサルッツォ侯爵の嫁選びにも類型が見られる。同じく第四の挿話「鬼神の四つの質問」のテーマも、「ジャータカ」（三五五・五四六）に類型が認められる。

本書は古代インド研究にとって多くの興味ある問題を含んでいる。本訳が面白い読物としてだけでなく、研究者にとっても多くの資料を提供するものであることを疑わない。

注

一　ただし最後の数行はこの制限に従っていない。

二　個々の物語との対比については、他の説話集との比較を含めて、W. Ruben, Die Erlebnisse der zehn Prinzen, eine Erzählung Dandins. Berlin. 1952. s. 52f. 参照。

三、出版と翻訳

(1) 出版

H. H. Wilson, The Daśa kumára charita, or Adventures of ten princes. A series of tales, in the original sanscrit, by Srí Daṅḍi. London 1846.

G. Bühler and P. Peterson, Daśakumāracharita of Daṇḍin. Revised in one volume by G. J. Agashe. (Bombay Sanskrit and Prakrit Series, No. X & XLII) Second ed. Bombay 1919.

ビューラー、ピーターソン、アガーシェの英文の注は親切である。

M. R. Kale, The Daśakumāracarita of Daṇḍin with commentary, notes and an introduction. Bombay, Oriental Publishing Co., 1917.

Daśakumāracaritam (Pūrvottarapīṭhikāsamalaṅkṛtam), with four commentaries: Padadipikā, Padacandrikā, Bhūṣaṇā and Laghudīpikā and various readings. Śrīmadindirākānta= tīrthacaraṇāntevāsibhiḥ Nārāyaṇa Rāma

Bombay, Nirṇaya Sāgar Press, 15th ed. 1951.

従来のニルナヤ・サーガル版には、第二番目以下の三種の注釈だけであったが、この版には前編 Pūrvapīṭhikā に対する注 Padadipikā が付加され、本文にも、他の出版にない完結編 Uttarapīṭhikā が付加されている。

(2) 翻訳

P. W. Jacob, Hindu Tales, translated by P. W. Jacob, Edited and Revised and with an Introduction by C. A. Rylands. London,1928.

ジェーコブの初版（一八七三）の序文に、'Freely translated' とあるように、省略が多くほとんど参考にならない。

J. J. Meyer, Daṇḍins Daçakumâracaritam, die Abenteuer der zehn Prinzen, Ein altindischer Schelmenroman. Zum ersten Male aus dem Sanskrit ins Deutsche übersetzt, nebst einer

Einleitung und Anmerkungen. Leipzig, Lotus-Verlag, 1902.

底本としてはニルナヤ・サーガル版の改訂第三版（一八九八）を用い、ウィルソン及びカルカッタ版のテクストのほか、とくにビューラーとピーターソンの版本を参照したという。完結編Uttarapīṭhikā の訳はない。ヘルテルも指摘しているように、訳文はあまりにも原文に忠実ならんとして、かえってドイツ語として難解な文章となっている。一三九ページにわたる序文は本書の研究として極めて価値の高い論文である。

J. Hertel, Die zehn Prinzen. Ein indischer Roman von Dandin. Vollständig verdeutscht. 3 Bde. (Indische Erzähler, 1—3). Leipzig, H. Haessel-Verlag. 1922.

底本としては、マイヤーと同じく、K. P. Parab のニルナヤ・サーガル版（二版、一八八九）を用いているが、従来出版された各種のテクストを参照し、長をとり短をすてたという。マイヤーの独訳の欠点を補う意味で、直訳を避け、注釈などを参考にして理解し易い文章としたが、そのため原文にない辞句がかなり多い。完結編の訳もあり、第三巻は本書に関する研究論文、十王子の系図、索引などである。

A. W. Ryder, Dandin's Dasha-Kumara-charita, The Ten Princes. Translated from the Sanskrit. Chicago, University of Chicago Press, 1927. (also published in JAICO Books, J-59 JAICO Publishing House, 1956.)

英語の翻訳にしばしば見られる傾向で、意訳しすぎている感じがする。底本は示されていないが、完結編も訳されている。

以上のほか J. N. Bhattacharyya (Calcutta, 1889) の英訳、M. Haberlandt (München, 1903) の独訳、H. Fauche (Paris, 1862) の仏訳があるが、参照できず、ヘルテルによればいずれもあまり良い訳ではないらしい。

部分訳としては、J. A. B. Van Buitenen, Tales of Ancient India. Chicago, The University of Chicago Press, 1959, Second Impression 1965. (also Published as a Bantam classics, 1961) に、R. Kale のボンベイ版（一九一七）から 'The Perfect Bride', Tale of Gomini（「後編」第六章）と 'Two Kingdoms Won'（「後編」第二、三章）が英訳されているが、この訳は原文にも忠実である。

日本語の部分訳は、辻直四郎編、南方民俗誌叢書5「印度」（昭一八、偕成社）に、辻博士がゴーミニー女の話（ゴータミー女は誤り。「後編」第六章）を訳出している。

新しい研究としては W. Ruben, Die Erlebnisse der zehn Prinzen. Eine Erzählung Dandins. (Deutsche Akad. d. Wiss. zu Berlin Institut für Orientforschung, Veröffentlichung Nr. 11) Berlin 1952. があり、本書を社会史的に、また物質主義、理想主義の面から観察し、さらに他のインド説話との比較、対照によって本書のインド文学史上に占める地位を明らかにしている。

あとがき

「ダシャクマーラチャリタ」を「十王子物語」と訳すことは、あるいは正確ではないかもしれない。登場する十人の貴公子のうち、王子は三人で、他は大臣、宰相の息子であるから、むしろ「十公子行状記」とでもするほうが原意を伝えるであろう。さらにまた、現存のこの伝奇小説（アーキヤーイカー）を、ダンディン作とすることも正しくないかもしれない。解説に述べたように、現存のテクストのうち、一般にダンディンの原作は、本訳の「後編」八章だけで、「前編」と「完結編」は後世の補遺と考えられているからである。本訳では「前編」「後編」「完結編」と分けたが、あるいは「序編」「本編」「後編」としてもよかったかもしれない。

　共訳者の指田が、ウィルソンのテクストを底本として翻訳を完了したのは、昭和三十五年ごろであった。その訳稿は擬古文調の未定稿だったので、ついそのままになっていたところ、平凡社の「東洋文庫」からインド関係のものを、との話があって、指田はもう一度、全文を現代向きに書き改めた。

　しかし、ウィルソンのテクストは出版も古く、誤植もあり、脱落、省略も少なくないので、田中がビューラーとピーターソン共編のボンベイ・サンスクリット・シリーズ（B・S・P・S）本と、ニルナヤ・サーガル出版の注釈つきテクストを参照して不足を補い、注釈を参考して、結果的にはむしろ、ニルナヤ・サーガル本を底本とした形になってしまった。

　元来本書は、「後編」第八章の中途で中断されたものとされ、「完結編」は一般に「シェーシャ」（補遺）とよばれているように、のちに補ったことは明

らかであり、したがってウィルソン本にもB・S・P・S本にも欠けているから、指田もこれを訳出しなかった。しかし、たとえ後世の補遺であり、文章も内容も著しく劣っているとはいえ、全体としてはこの部分のあったほうが形が整い、読者にも親切だと思ったので、つけ加えることにした。

　最後に、平凡社「東洋文庫」の永畑恭典氏の終始変わらぬ熱心な督励と、福岡多恵さんの訳稿に対する行き届いた配慮に対し、深く感謝の意を表するものである。

一九六五・一二・二五

田中於菟弥